

1995年阪神・淡路大震災調査報告

- 1 -

平成8年3月

東京大学社会情報研究所
「災害と情報」研究会

目 次

兵庫県南部地震の地震像と災害の概要	1
（伊藤和明）	
阪神・淡路大震災と災害情報	9
（廣井脩）	
阪神・淡路大震災と住民の行動	35
（廣井脩）	
阪神・淡路大震災と芦屋市職員の参集行動	57
（黒田洋司・廣井脩）	
阪神・淡路大震災と災害弱者対策	99
（田中淳・廣井脩）	
兵庫県南部地震時の携帯電話の役割と問題点	121
（中村功・廣井脩）	
阪神・淡路大震災と初動情報	145
（中森広道・廣井脩）	
阪神・淡路大震災とラジオ放送	157
（川端信正・廣井脩）	

兵庫県南部地震の地震像と災害の概要

伊藤 和明

I t o h K a z u a k i

1. 初めて適用された震度 7

阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震（M7. 2）は、1995年1月17日5時46分、明石海峡付近を震源として発生、神戸～芦屋～西宮～宝塚と連なる都市部および淡路島の北淡町・一宮町・津名町などに大きな災害をもたらした。

この地震による死者は6000余名、ビルや家屋の全半壊、一部損壊および焼失は、20万棟にも及ぶとされており、高速道路の横転、鉄道や道路の橋梁部での橋桁の落下、大規模な液状化災害、さらには都市機能を支えるライフラインの断絶など、近きまれに見る大都市複合災害の様相を呈した。

1月20日、気象庁は、神戸市の中央部や淡路島の一部地区では、震度7の激震だったと発表した。7という震度階は、1948年福井地震を契機にして、家屋の全壊率が30%をこえた場合に適用することにしたものだが、それ以後震度7を記録する地震は発生していなかった。したがって、阪神・淡路大震災において初めて震度7が適用されたことになる。

さらに気象庁は2月7日、震災地域の調査結果を発表し、そのなかで、震度7の激震域は、神戸市須磨区から西宮市にかけて、長さ約20キロ、幅約1キロの帯状に分布しており、このほか、宝塚市の一部や、淡路島の北淡町などでも震度7であったことを明らかにした。神戸市灘区では、家屋の倒壊率が100%近くに達した地区さえあった。

2. 活断層が動いた

神戸から西宮、宝塚にかけての市街地の背後には、六甲の山なみが迫っている。いいかえれば、前は瀬戸内海、後ろは六甲山地という狭い平野部に、大都市が発達してきたのである。この海と山とがかもしれだす美しい風景は、それ自身が観光の対象となっていたのだが、そこには恐ろしい自然の牙が潜んでいた。“活断層”である。

“活断層”とは、最近数10万～200万年のうちに活動して地震を起こした形跡があり、将来も繰り返し動いては地震を発生させる可能性のある断層を指す。「活断層研究会」によってまとめられた『新編・日本の活断層』を見ると、六甲山地の東から南側にかけて何本もの活断層が走っており、それぞれ伊丹断層・甲陽断層・芦屋断層・五助橋断層・布引断層・諏訪山断層・会下山断層などの名がつけられている。これらの活断層は、地形や地質の調査からその存在が明らかになったもので、淡路島の野島断層も含

めて「六甲断層系」とも総称されている。

帯状に分布している震度7の激震域は、内陸の直下で六甲断層系の活断層が動いて地震を引き起こしたことを示唆している。余震活動も、淡路島北西岸から本土側に向け、ほぼ六甲断層系の伸長方向に沿って分布しており、震源の深さも5 kmから20 kmと浅い。

これら活断層群が、最初に明石海峡付近（震源地）で破壊を起こし、そこから北東と南西へ、それぞれ秒速3 km前後で破壊域を広げていったものと推定されている。こうして、淡路島と本州側とを合わせれば、45キロにわたって断層破壊が生じ、その範囲全体が兵庫県南部地震の震源域となったのである。

地震のあと、淡路島の北西岸に沿って走る野島断層上に、地盤の食い違いの生じていることが明らかになった。つまり、野島断層の活動による食い違いが、“地震断層”として直接地表に姿を現したのである。

その後の調査によれば、地震断層は、淡路島の北西岸に沿い長さ約9 kmに及んでおり、すべて右横ずれで、最大変位量は、北淡町の野島平林で横ずれ170 cm、縦ずれ140 cmに達していることがわかった。淡路島では、この地震断層に沿って、木造家屋の倒壊が著しいことも、断層周辺での激しい揺れを物語っている。

地表に地震断層として活断層の姿が現れた淡路島側に対して、本土側では、地震断層と認められる地盤の食い違いは見つかっていない。しかも、震度7の激震域として発表された地域、いわば“震災の帯”のうち、その主要部を占め、最も被害の大きかった神戸市須磨区から西宮市夙川かけての帯状部分には、既存の活断層の存在は知られていなかった。この“震災の帯”の中心は、既知の諏訪山断層や会下山断層の位置からは南へ1～2キロほどずれているのである。

この事実をどのように解釈するのか。

- (1) “震災の帯”の直下には、厚い堆積物の下に活断層が伏在していて、それが動いた。
- (2) 表層の地盤が、扇状地の堆積物や湿地の埋め立てなどにより軟弱なため、それが地震の波を増幅させた。
- (3) 地震波が、六甲山の硬い岩盤反射する地形効果によって増幅された。

以上のような説が挙げられている。余震活動が、諏訪山断層など既知の断層系にほぼ沿うかたちで分布しており、“震災の帯”の真下にはほとんど余震が起きていないことから、(1)説は不利なようにも見られるが、本震の震源つまり断層の割れ始めとなった明石海峡付近では、余震活動が活発でないことも考えあわせると、一概に(1)説を否定することもできない。むしろ、異常に狭い帯状の地域に、異常に大きな被害が集中した事実は、伏在断層の活動を示唆しているようにもみられるが、これについては今後の研究にまたねばなるまい。

3. 活断層上の大都市

神戸地域は、幅の狭い平野に過密な大都市が発展し、しかも日本の大動脈の主要な一部を形成してきた。しかしこの地域は、前述のように、六甲断層系という活断層群の真上であったために、いつかは大地震に見舞われる宿命を背負っていたともいえよう。

にもかかわらず、この地域の人びとは、今回の地震が起きるまで、大震災に遭遇するとは夢にも思っていなかったにちがいない。「東京は地震が怖いから」といって、神戸に移り住んで、今回の地震に遭遇した人もいるほどである。

神戸地域一六甲山麓の自然災害といえば、1938年阪神大水害のような豪雨災害・土砂災害であって、大地震を想定した防災対策は、けっして充分であったとはいえない。兵庫県や神戸市の地域防災計画でも、地震が発生した場合、最大震度5を想定しているにすぎなかった。これは、兵庫県から岡山県にかけて伸びている山崎断層の活動を前提としたものであった。

そんな人間側の思いとはうらはらに、六甲の活断層群は、着々と歪みエネルギーを蓄積し続けていた。六甲断層系が、いつかは動いて大地震を起こすであろうことは、専門家の間では常識であったし、これまでも機会あるごとに警告されてもいた。

現実に、今回の大震災が起きるちょうど6年前、神戸市消防局の機関誌『雪』（1989年1月号）に、筆者（伊藤）は次のような小文を載せたことがある。

～地震対策も忘れずに～

神戸には大きな地震は来ないものと、おおかたの人は思っているにちがいない。しかし、神戸をめぐる地形の生成過程を振り返ってみると、この地域がけっして地震とは無縁でないことがわかる。

神戸市の背後にそびえる六甲山地は、いったいなぜ「山」になったのだろうか。この山地は、花崗岩で構成されているが、そもそも花崗岩というのは、地下深い所で生まれた岩石である。それが1000m近い山になるには、それだけの隆起をしなければならない。そうした隆起は、大地震の繰り返しによって生じたものなのである。その証拠に、六甲山と神戸の市街地との間には、山系に平行して数本の活断層が走っている。

つまり、大昔から活断層が動いては地震を起こすたびに、山の側が隆起して、現在のような姿になったのである。

しかも、歴史時代になってからこれらの活断層が動いたと思われる地震は発生していない。ということは、次の地震の起きる時が確実に近づいていると考えるべきであろう。

地震への備えも、神戸市にとっては大切であることを、地形ははっきりと物語っている。

このような指摘は、地震学者や地質学者によってもなされていたのだが、残念なこと

に、それらが地震に備えるための「声」として受けとめられることはなかったのである。

近年の研究によれば、六甲断層系のようなA級活断層は、平均1000年に1～10メートル変位する、あるいは、いちどに1～10メートル変位するような地震を、平均1000年に1回起こすと考えられている。

したがって、歴史時代に大地震を起こしたらしい記録が見当たらないとすれば、少なくとも過去1400年ほどは、六甲断層系は活動していないことを意味しており、それ自体が、次の活断層に近づいていることを物語っていると考えねばならなかったはずなのである。

六甲山地が山となったのは、長大な自然の時間のなかで積み重ねられてきた地震活動の結果なのだが、それに対して、人間の体験した時間があまりにも短かったために、自然の発する警告を見落としていたともいえよう。

4・震度7の衝撃

阪神・淡路大震災は、大都市直下の浅い所を震源として、活断層が活動したときの災害の凄まじさをはっきりと物語っている。地震時に想定されるあらゆるタイプの災害が、津波災害を除いて発生したといってもいい。

都市の生命線であるライフラインの断絶、木造家屋や鉄筋コンクリート造りのビルの倒壊や崩壊、広域火災の発生、土木構造物の被害、液状化災害の発生、斜面崩壊や地すべりの発生など、壊滅的ともいえる都市型複合災害を現出した。

6000人あまりの死者の大部分は、“震災の帯”つまり震度7のベルト地帯に集中しており、一瞬の家屋の倒壊が悲劇を招いたのである。兵庫県警の分析によれば、死因のほぼ90%が圧死であったという。地震の発生が5時46分という早朝であったため、ほとんどの人が家庭内で被災した。地震計の記録を見ると、強烈な揺れが襲った時間は、わずか10秒あまりである。「10秒ですべてが終わった」ともいわれている。まさに瞬発的な激震によって、家屋がたちまち倒壊し、多数の人命を奪ったのである。

とりわけ木造家屋の破壊は想像を絶するもので、1階部分が2階に押しつぶされて2階だけが残ったもの、その2階が横すべりして道路をふさいでしまったもの、2階もろとも破壊され、屋根だけがかろうじて残ったものなどが目立った。そのためか、ふだんは生活上の安全や便利さを考えて1階に寝ていた高齢者が、多数犠牲になっている。

木造の家屋は、粘りがあって地震に強いとされていたが、今回の災害は、その常識を根底からくつがえす結果となった。倒壊したもののなかには、戦後すぐ建築された老朽家屋が多い。筋かいの入っていないもの、木質部がシロアリに蚕食されていたものも少なくなかった。そのうえ、台風災害にしばしば見舞われてきた関西では、台風で屋根が飛ばされないよう瓦葺きにし、しかも瓦の下には土を敷きつめてあるため、屋根全体がたいへん重い構造になっていた。あらゆる面で、地震の激しい揺れに対しては、きわめて脆い性質を備えていたといえよう。

鉄筋コンクリート造りのビルも、多数倒壊あるいは損壊した。とくに10階建て前後

のオフィスビルやマンションなどで、5～6階あたりの中間部が押し潰されてしまう“層破壊”と呼ばれる現象が目立った。また、1階部分が挫屈したビルも多く、その多くは、1階が駐車場や店舗に利用されていて、壁が少ないため、支える柱が耐えきれずにせん断破壊を起こして潰れてしまったものも少なくない。

これら建築物の耐震規準は、建築規準法の施行令で定められており、1950年に法律が施行されてから、1968年十勝沖地震、1978年宮城県沖地震による被害を経験し、それぞれ地震後の1971年と1981年の2度にわたり改正されてきた。

現在の規準は“新耐震”とも呼ばれており、主筋のまわりに巻きつける帯筋を密にして柱の耐震性を強化したり、壁の量を増すなど、建物全体の強度を高めるよう、さまざまな条件が設定され、それにもとづいた設計・施工が義務づけられている。

現実に阪神・淡路大震災では、新耐震で設計・施工されたビルの被害は、柱や梁などにひび割れを生じたものもあるが、大破または中破したものは全体の0.1～0.2%程度にとどまっており、ほとんどが人的被害を免れている。

被害が集中したのは、耐震規準が改正される前、とくに1971年以前に造られたビルで、現在の耐震規準つまり新耐震には適合していないが、建築当時の規準には叶っていたいわゆる“既存不適格”の建物であった。現在、日本の建物の約60%が“既存不適格”と推定されており、これらの建物について、いかに耐震診断を進め、補強を施していくかが今後の大きな課題であろう。

5. 広域火災の発生

阪神・淡路大震災では、神戸市を中心に広域的な火災が発生、災害の規模を拡大した。最近では都市の不燃化も進んだうえ、鉄筋のビルなどが焼け止まりの役を呆果たすであろうから、広域火災は起きにくいのではないかと楽観視されていたのだが、その期待をくつがえす大火災となってしまった。

地震と同時に各所で火災が発生、木造家屋の密集地でたちまち燃えひろがった。わずか10秒前後で家が潰れたのだから、「地震だ、火を消せ」という合言葉など思い出さずともなかったにちがいない。とりわけ、老朽化した家屋や店舗、工場などが密集する神戸市長田区は、たちまち猛火に包まれてしまった。

同時多発型の出火だったため、既存の消防力では対応できず、しかも地震動による水道管の損傷などで断水したため、消火用の水を確保できなかったことが、延燃を食い止められなかった主な原因である。

焼失面積が最大となった長田区では、ケミカルシューズなどゴム関連の製造工場が、古い木造家屋群と混在しており、しかも人口の高齢化率が高く、こうした市街地の環境が、延焼を拡大する要素になっていたことも否定できない。また、地震の翌日以後に発生した火災も多く、なかには復旧の過程で、電力会社が通電を開始すると同時に出火したというケースも、目撃者の証言などから得られている。無人となった建物内で、破損した電線や電気器具がショートしたり、ガスが漏れて充満していたところへ、通電とともに何かの火が引火した可能性も指摘されている。

出火件数は、293件（消防庁調べ）に達しており、焼失面積は約100haといわれている。1993年度に国内で発生した火災による焼失面積は167haだから、全国の年間火災の約60%の面積が数日で焼失したことになる。防災関係者の楽観的な意識に水をさしたかたちになった今回の都市広域火災は、日本の他の都市についても大きな警鐘になったはずである。

南関東直下の地震の切迫性が指摘されている首都圏でも、古い木造家屋が密集し、高齢化率も高く、初期消火能力の低い地区も少なくない。

過去に数々の震災に見舞われてきた京都市も、1830年の京都大地震以来、顕著な被害地震にあっていない。市民の地震防災意識の低さも、しばしば指摘されてきたところである。とくに京都は戦災を受けず、それだけに50年以上を経て老朽化した木造家屋が町並みを構成し、しかも近年は、そこに雑多な都市開発が進められてきたため、地震に対してはきわめて脆弱な都市構造になっているといえることができる。

阪神・淡路大震災を契機に、都市の耐震化・不燃化をいかに進めていくのか、防災都市計画の視点から、あらためて日本の各都市で検討を試みる必要があるのではないだろうか。

6. 大規模な液状化災害

沿岸地域を中心に、地盤の液状化災害も発生した。とくに、古い埋立地での被害が大きく、ライフライン施設も破壊された。ポートアイランドや六甲アイランドなどの人工島でも、激しい液状化で港湾の施設に大きな被害を生じた。

ポートアイランドでは、地震の直後に大量の水と砂を噴き出して地表が水びたしとなり、まるで水害に襲われたかのような状況になった。水が引いてからは、噴き出した砂が地表を覆い、風に舞って視界をさえきるほどであった。液状化により地盤が沈下したため、建物と地表との間に段差を生じた所が多い。三宮とを結ぶポートライナーの橋脚も、周辺の地盤が沈下したため、相対的に抜け上がってしまった。地盤の沈下量は平均50cm前後、最大1m以上に達している。

ポートアイランドには、高層のホテルや国際会議場、マンションなどが建設されているが、激しい液状化にもかかわらず、これら建造物には一見して顕著な被害は見られない。建物の支持杭が、深さ40mの洪積世砂礫層にまで打ちこまれていたためであろう。しかし、液状化によって地盤そのものが流動したとすれば、一部の支持杭が折れていたり、地下の埋設管などに被害の出ている可能性もある。今後調査が進めば、被害の全貌も明らかになるであろう。

液状化による港湾施設の被害も大きく、岸壁が海側にはみ出したり、エプロン部で地盤の沈下や陥没が発生、港湾の機能に大きな支障をきたした。神戸港全体で約80%の岸壁が全半壊し、日本最大の貿易港としての機能が麻痺した。

そもそもポートアイランドは、マサ土と呼ばれる花崗岩の風化した砂質土を六甲山地から削り取り、大規模に海を埋め立てて造成された人工島で、強い地震が襲えば、たち

まち液状化を発生させる候補地であったといってもいい。

液状化災害は、1964年新潟地震のときに注目されたが、その後も、1983年日本海中部地震、1993年釧路沖地震、同年北海道南西沖地震のさいにも発生して大きな被害をもたらした。なかでも、大河川の下流部や海岸での埋め立て地盤に被害が目立つことから、港湾施設の液状化対策をいかに進めるかが今後の課題である。現実には、阪神・淡路大震災でも、地盤の締め固めなどの対策を講じてあった所では、液状化被害はほとんど発生しなかったという。

7. 二次的土砂災害の危険

地震にともなう崖崩れ災害も発生した。西宮市仁川地区では、浄水場わきの斜面が崩壊、住宅12戸が土砂の下敷きとなり、34人の犠牲者がでた。

住吉川の上流にあたる神戸市東灘区の西岡本地区では、地震のあと地すべりが発生、住宅10数戸が全半壊して住民が避難した。

さらに今後は長期間にわたって、二次的な土砂災害の発生が懸念されている。強い地震の衝撃で、六甲山地の山腹では、各所で斜面崩壊や地すべり、地表面の亀裂などが発生した。地震直後に行われた緊急調査によれば、約450カ所で地割れや地すべり、崩壊箇所が見つかった。また、人家などがすぐ近くにあつて、緊急に対策を施す必要のある箇所は、70カ所以上もあったという。

そもそも六甲山地は、“マサ土”と呼ばれる花崗岩の風化した土壌が地表を被覆していて、大雨とともに崩れやすく、昔からしばしば大規模な土砂災害を発生させてきた。1938年、1961年、1967年など、いずれも集中的な豪雨による災害が知られているが、なかでも1938年7月の阪神大水害は、神戸市が壊滅するほどの災害で、家屋の埋没・流失・全壊は5000戸あまり、死者・行方不明者695人に達した。その惨状は、谷崎潤一郎の小説『細雪』にも詳しく描写されている。

このように、ただでさえ土砂災害の危険を内在させている六甲山地の地盤が、地震の衝撃でゆるんでしまっている。今後毎年訪れる多雨の季節に、新たな土砂災害の発生する危険性は否定できない。

歴史を振り返ると、1891年濃尾地震や1923年関東大地震、1948年福井地震のあとなど、少なくとも数年間は、大雨とともに二次的な土砂災害が発生している。

濃尾地震のときには、地震から4年を経た1895年8月、岐阜県川上村（現・坂内村）のナンノ坂で、豪雨とともに大規模な斜面崩壊が発生、土砂が川を堰き止めて湖が形成されたあと決壊して、下流に大洪水をもたらした。

関東大地震のさいにも、地震の揺れで丹沢山地や箱根山地で無数の斜面崩壊が発生し、地震から2週間後の大雨で大規模な土砂災害に見舞われている。

六甲山地の南斜面では、都市周辺開発の進展とともに、住宅地が上へ上へと山腹を這い上がっていった。その状況を歴史的にみると、1936年ごろは標高40mまでが居住地域だったが、1955年には標高230mまで宅地化され、現在は340mに達し

ているという。

この実態は、時を追って人間が危険に近づいてきたことを、はっきりと物語っている。まさに危険と隣合わせの住環境が、経済成長とともに形成されてきたといってもいい。関東大地震や福井地震のころに比べれば、はるかに深刻な事態に陥っていると見なければならぬ。

こうした災害環境をふまえて、応急的な対策はもちろん、周辺住民に対する早期警報体制の確立や、さらに恒久的には、危険地域での砂防施設の整備などか早急に望まれるところである。

8. 発生時刻を変えたシミュレーションを

兵庫県南部地震は、朝6時前で大多数の人がまだ活動を始める前に発生した地震だった。そのため、おおかたの家庭では家族が揃っていて、互いの安否を確かめあえる環境にあったと思われる。その一方で、地震の直撃により潰れた家では、家族全員が犠牲になったという悲しい現実もある。

だが、もしこの地震の発生が1時間後、2時間後であったならば、災害のパターンはまったく異なった姿になっていたにちがいない。通勤・通学ラッシュの時間帯ならば、電車は満員、高速道路には車がひしめいていたであろう。8カ所で橋桁が落下した山陽新幹線も、被災現場に列車がさしかかっていた可能性が高い。家庭でも、日中ならば家族はばらばらで、互いに連絡もとれない状態であったろう。

地震災害は、つねに季節の運、時刻の運、気象の運に左右されるものである。兵庫県南部地震は、真冬の夜明け前で、天候は穏やかだが乾燥期に発生した地震であった。もし六甲おろしの吹きまくる日であったなら、火災による被害はさらに拡大していたにちがいない。

このようなことを考えあわせると、この大地震が、もし通勤・通学時間に起きていたならば、日中のオフィス・アワーに起きていたならば、あるいは夕方から夜にかけてであったならばなど、地震の発生時刻や気象状況をさまざまに変えたシミュレーションを試みることも重要ではないだろうか。

阪神・淡路大震災と災害情報

Some Problems in the Great Hanshin -Awaji Earthquake in Japan

廣井 脩
Osamu Hiroi

1. 行政の対応と情報システムの障害

(1) 震災被害の特徴

1月17日午前5時46分に突然発生した兵庫県南部地震は、死者5500人、負傷者4万1000人にのぼり、大正12年の関東大震災以来最大の被害になってしまった。ほどなくして「阪神・淡路大震災」と呼ばれるようになったこの地震は、戦後50年のなかでも最大の事件だったので、その数分後から全放送局が地震報道をスタートさせて以来、マスコミ各社は長期間にわたって洪水のように大量の情報を流し続けた。そして震災から数日のあいだ、多くの視聴者は、無残に倒壊した木造家屋、異様に歪んだビル群、横倒しになった巨大な高速道路、手の施しようもなく広がっていく火災など、テレビ画面から次々に流れる映像に釘付けになり、その惨状のなかで、かけがえのない数千の生命が一举に失われたという現実、多くの視聴者は愕然とし、また慄然としたのである。戦後このかた、この震災ほどわれわれに多くの問題を投げかけた出来事はなかったのではないだろうか。

生きながらす術もなく紅蓮の炎に包まれていく人たちに思いをいたし、国家とはそもそも何だろうかという根本的な問いを発した人たちもいた。日本の最も進んだ都市の一つといわれるあの神戸が、わずか十数秒の揺れによって壊滅してしまった様子を目撃して、われわれが享受してきた繁栄は砂上の楼閣だったのではないかと自らの生き方に疑念を感じた人たちもいた。そして、テレビ画面に映し出される被災者のじっと苦難に耐え忍んでいる姿にうたれ、あらためて日本人とは何かを深く考えさせられた人たちも少なくなかったはずである。

すでにいろいろなところでいわれているように、この阪神・淡路大震災の被害の特徴はまず第一に、10万棟にも達する多数の家屋の倒壊である。なかでもおびただしかったのは木造家屋の倒壊で、筆者も、倒壊家屋が多かった神戸市の東灘区で何人かの被災者から話を聞いたが、揺れはじめてからわずか数秒のあいだに一举に倒壊したものが少

★東京大学社会情報研究所

キーワード；阪神・淡路大震災、災害情報、防災行政無線、電話、生活情報、余震、流言

なかったということであり、老朽化した木造アパートの一階の住人などを中心に多くの犠牲者を出してしまった。ある新聞記事によれば、震災による死者のほぼ9割は家屋倒壊による圧死、またその6割が即死だったといわれる。

被害の特徴の第二は、300件近くにのぼる火災の発生である。そんなに多くの家庭で火気を使用していたとは思われない時刻に地震が発生したにもかかわらず、関東大震災のときの東京市の火災発生件数（135とも150ともいわれる）を大きく上回ってしまった。しかも、水道管の破壊によって消防活動がほとんど不可能になったため、そのいくつかは延焼火災となってただ自然鎮火を待つだけという状況になり、結局44万平方メートルを焼失した神戸市長田区を中心に、およそ7000棟が焼失してしまった。死者のうちほぼ1割は焼死だったともいう。

第三の特徴は、高速道路、新幹線、地下鉄など、わが国の土木技術の粋をつくした近代施設があっけなく崩壊してしまったことである。芦屋市内や湊川インター付近の阪神高速道路の破壊、尼崎付近での新幹線の高架の落橋、神戸高速鉄道大開駅での地下鉄破壊など数えあげればきりが無い。とくに注目されたのは、神戸市東灘区深江南町付近の高速道路であり、筆者も、大の男が2、3人かかっても抱えきれないほど太い橋脚が、20本近く折れてちぎれているのをこの目で確かめたとき、技術者が言い続けてきた土木施設の「安全神話」とはいったい何だったのか、という疑念を禁じえなかったのである。

そして第四の特徴は、今回の震災では、被災者の救出や消火活動において政府や地方自治体の初動態勢と被害情報の収集が大幅に遅れ、そのことが被害の増幅につながっていった、ということである。ソフト面がらみたとき、おそらくこれがもっとも大きな特徴だったといえるだろう。

（2）防災機関の被害

では、どうしてこのような事態が生じたのだろうか。

その第一点は、応急対策にあたるべき防災機関自体が地震によって甚大な被害を受け、そのため初動態勢が決定的に遅れたということである。以下、その一例として神戸市や兵庫県の場合をとりあげてみたい。

今回の地震が発生したのは1月17日午前5時46分だった。地震前の「神戸市地域防災計画」では、震度5以上の地震が発生すると、すべての職員がただちに登庁して災害対策にあたることになっていた。しかし、今回の地震では職員自身、あるいは職員の家族や自宅が大被害を受けたため、市が災害対策本部を設置した午前7時時点で、わずか10人しか職員が集まらなかったという。結局、災害当日に持ち場に付けた職員は4割にすぎず、建物の一部が倒壊したり、書類が散乱する市庁舎において、半減した戦力で山のような仕事に直面することになった。

また、実際に救出活動や消火活動にあたる警察、消防でも地震のため多くの障害が発生してしまった。たとえば兵庫県警は、本来ポートアイランドにある港島に災害対策本部を置くことになっていた。しかし、液状化の被害がひどくて設置できず、急きょ生田署に本部を設けることにしたが、災害対策用の電話回線の設置などにとまどったというし、神戸市消防局でも、ポートアイランドに設置してあった高所監視カメラが地震の振

動により作動せず、ヘリコプターで状況を把握しようとしたが、ヘリポートまでの道路が寸断されたため、ようやく9時20分に歩いて到達するありさまだったという。このヘリコプターからの情報が決め手となって神戸市長は、他の自治体の応援要請に踏み切るようになった。

要するに、地震対策にあたるべき機関もまた甚大な被害を受けてしまったのである。筆者の知るかぎり、現在の市町村地域防災計画の多くは、災害が起こったとき自治体・警察・消防・病院などの機関、あるいは道路・鉄道といった施設が災害によって大きな被害を受けるとは想定されていない。多少の制約があっても機能できるとみなされており、初動態勢に決定的な影響を与えるほど防災機関がダメージを受けるのは想定の外にあった。そのため、神戸市の場合も初動態勢が決定的に遅れたわけだが、もう一つ、災害の初期段階で被害の全貌が的確に把握できなかったということも、震災の被害を増幅した要因になっている。被害状況の把握こそ災害対策の基本であり、災害の被害がどのくらい大きいか、あるいはどこにどのくらいの被害が出ているかをおおまかにでも迅速に把握することが重要であり、そのためには、災害情報を収集し、避難の勧告・指示など必要な情報を住民に伝達するためのメディアを事前に備えていることが必要になる。さらに付け加えれば、今回のように停電が長期間続くような災害では、自家発電装置やバッテリーなどの電源問題が重要になる。そうした配慮もまた不可欠であろう。その点で、被災地域はどうだったろうか。

(3) 防災行政無線の問題点

東京都や静岡県など、以前から巨大地震の発生が懸念されている地域では、災害情報の収集・伝達用のメディアがかなり整備されているが、残念ながら兵庫県各市町村はそうでなかった。たとえば甚大な被害を受けた神戸市、西宮市、芦屋市、尼崎市、宝塚市のうち、被害情報の収集用に使われる移動系の防災行政無線をもっていたのは神戸市、尼

図1 市町村防災行政無線関連記事（毎日新聞1月19日朝刊）

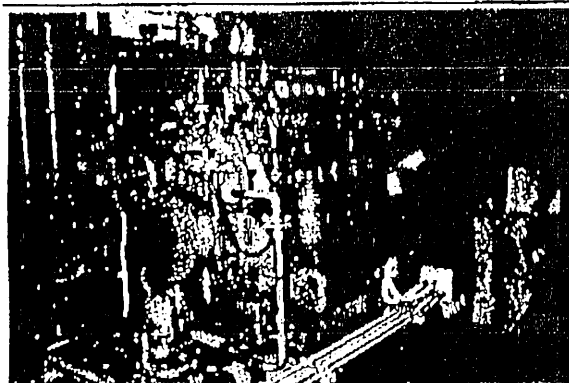
なかつた防災行政無線	避難誘導に支障も 情報対策に課題残す	阪神大震災は、大規模災害が生じて電話などが使えない時に、被害情報の収集や避難情報を提供する防災行政無線が頼りにされているが、被災地の状況を的確に把握し、避難の勧告・指示など必要な情報を住民に伝達するためのメディアを事前に備えていることが必要になる。今回のように停電が長期間続くような災害では、自家発電装置やバッテリーなどの電源問題が重要になる。そうした配慮もまた不可欠であろう。その点で、被災地域はどうだったろうか。
-------------------	-------------------------------	---

崎市、宝塚市、住民への広報に使われる固定系の防災行政無線（同報無線）があったのは尼崎市だけという状況だった。しかも、尼崎市の同報無線（拡声子局）は今回の災害では当初一回も使用されておらず、各市の移動系無線もあまり有効に使われていなかったようである。おそらく、このように事前の準備が必ずしも十分でなかったのは、被災地域の住民ばかりでなく行政機関も、東京や静岡は大地震が怖いけれども、関西には大地震はやってこないという安心感があったためと思われる（図1）。

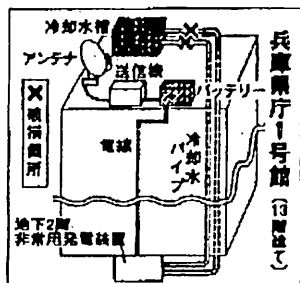
こうした無線網の欠如に加えて、今回の震災ではほかにも深刻な事態が起こった。それは、都道府県防災行政無線の障害である。

地震が発生したとき、兵庫県庁には平成3年に80億円の巨費を投じて導入した、衛星通信による防災情報システムがあった。これは県下の市町村から被害情報を収集し、それをまとめて自治省消防庁に伝達するシステムであり、災害情報の収集・伝達の中心的位置を占めているが、地震のために県庁の12階にあったこのシステムの端末パソコン

図2 兵庫県防災行政無線関連記事（読売新聞1月28日夕刊）



阪神大震災でダウンした兵庫県庁の非常用発電機



この地震後、この地震後、自治省が設立した自治体衛星通信機が九一年十二月、運用を開始。

阪神大震災（兵庫県南部地震）で、兵庫県庁を基盤とする衛星通信の地域間通信ネットワークが機能しなかったのは二十八日までの時間差の調査で、構造的欠陥により、システムを動かす非常用発電機が停止したためとわかった。地下に設置した非常用発電機（冷却水ポンプ）は、地震のため冷却水ポンプが停止し、双方を約四十分のパイプが地震で切断され、システム全体がダウンしてしまった。今回の地震災害では、行政機関の初動体制の立ち遅れが指摘されているが、緊急システムそのものの欠陥も浮上したことになる。

非常発電機と冷却水槽 連結40メートル、地震折損

兵庫県

設置方法に欠陥

最新鋭「衛星通信ネット」ダウン

通信衛星 日本 切迫 県庁 総務 約八十 男子 が導 電機 いた 強い

やファクシミリが床に落下するなど、足の踏み場もないほど部屋中が散乱してしまった。また、停電しても稼働するように自家発電装置がついていたが、冷却用の水槽が地震で破壊されてしまい発電装置が自動的に停止したうえ、バックアップ用の蓄電池も容量を使い果たしてしまったため、10時23分から12時5分までの約2時間まったく動かなくなってしまった。また、市町村のあいだの情報連絡はある程度可能だったようであるが、西宮市などいくつかの市でも、パラボラアンテナの方向がずれたり、自家発電装置が故障したりしたため、このシステムを通じての情報収集・伝達がきわめて難しくなったのである。このことは、防災情報システムの整備にあたってはシステム本体ばかりでなく、端末パソコンや自家発電装置・冷却用水槽・パラボラアンテナなど周辺装置も含めた、システム全体の総合的な耐震化が必要だということを示すものといえよう(図2)。

今回の震災における防災情報システムの被害はまだあり、神戸市消防局でも、ポートアイランドに設置してあった高所監視カメラが地震の振動により作動しなかったとか、神戸海洋気象台と大阪管区気象台をむすんで震度などの地震情報を伝えるＬ－アデス(ローカル・アデス)という専用回線にも一時支障が生じ、震度の速報が遅れたという事態も生じた。しかしここで注目しなければならないのは、Ｌ－アデスにはバックアップとしてVHFの無線回線があり、そのため震度の情報は神戸海洋気象台からは地震の約20分後、洲本測候所からは1時間40分後には届いている。けれども残念ながら、兵庫県の都道府県防災行政無線にはバックアップがなかった。つまり、ある情報システムが途絶しても、バックアップ体制が整っていれば必要最小限の情報は伝えられるということであり、災害情報システムの回線にはいざというときに備えて二重化が必要だということを示すものでもある。阪神・淡路大震災をきっかけに各地で災害情報システムを見直したり新規に構築したりする動向が見られるが、その中心はコンピューターや衛星回線を使ってもっと高度化しようというものが圧倒的に多い。システムの高度化はもちろん必要なこととはいえ、しかしもっと重要なのはシステムが機能しなくなるような不測の事態に備えて、そのバックアップ体制をしっかりとしておくことではないか、というのが筆者の意見である。

(4) 電話の障害と異常輻輳

次に、電話である。

震災の被災地域に144万加入あったといわれる電話も、交換機の故障(商用電源の停止とバックアップ電源の損壊)によって地震当日は約28万5000回線が不通になり、さらに19万3000回線の加入者系ケーブルが家屋の全半壊にともなう切断と火災による焼失のために、これは長いところで1月末まで使えなくなった。なかでも神戸市内のトラブルが多く、2月1日付け毎日新聞によれば、市内7ヶ所計12台の予備電池のバッテリー液がこぼれ、また渋滞によって職員や移動電源車の到着が遅れたり、停電が長期化したため復旧にたいへんとまどったという。なお、重要回線としては、神戸海洋気象台と大阪管区気象台とをむすんで震度などの地震情報を伝えるＬ－アデス(ローカル・アデス)にも一時支障が生じた。

一方、物理的障害を受けなかった電話も異常輻輳などによって不通になったため、一般回線はほとんど使用不能になってしまった。神戸市内へのアクセス件数と市内からの

発信件数の合計は、通常時が4万なのに、ピーク時には200万にのぼったというから、およそ50倍になった計算である。さらに、ほとんどすべての防災機関には、災害時に優先的に通話が確保される災害時優先電話が配備されていたが、多くの電話機のうちどれが災害時優先電話なのかを知らなかった防災機関さえあり、十分活用できなかったと聞いている。こうした電話事情のために、防災機関自体が被害状況を把握することが困難になったのである。

自治体の防災対策にとって、電話の被害はとくに深刻だった。というのは現行の体制では、消防には消防無線、警察には警察無線、自治体には防災行政無線というように、それぞれ独自の災害情報システムがあって、組織内部の情報伝達は電話に依存しないでもある程度可能であるが、たとえば警察と消防、消防と病院など組織と組織のあいだの連絡は電話に頼らざるを得ないというのが現状である。そして電話が大きな障害を受けてしまったために、この組織間連絡がほとんど不可能になってしまった。今回の震災では被災地域内の2600もの病院が被害を受け、負傷者の治療にも大きな困難があったが、重傷患者を設備の整った病院に転送するなどというとき、病院と消防、あるいは病院と病院などの連絡は電話に頼らざるを得ず、その電話が故障や輻輳のためほとんど使用できなかったという事態が生じている。

電話の不通は、被災者にとっても大きな障害になった。今回の震災は家族と一緒にいた早朝に発生したから、家族同士の安否情報ニーズはそれほど高くなかったとはいえ、会社や親戚・知人に安否を伝えたり、親しい人の安否を問い合わせるために、あるいはもっと深刻だが、家族に負傷者が出て消防や病院に連絡するために、地震直後から電話を使おうとした人は少なくなかった。しかし前述のように、電話の障害や異常輻輳のためになかなか電話がかからなかった。たとえば、筆者が8月下旬に神戸市と西宮市で行ったアンケート調査（神戸市；700人、西宮市；500人）では、「地震当日に自宅から電話した」という人が神戸市34%、西宮市48%だったが、そのうち「一つも通じなかった」人が神戸市47%、西宮市24%、「一部しか通じなかった」人が神戸市41%、西宮市59%ときわめて多く、逆に「すべて相手に通じた」人は神戸市で10%、西宮市で17%にすぎなかったのである。その結果、電話への評価は非常に低く、「地震当日電話が役立った」という人は神戸市で6%、西宮市で18%しかなく、逆に「役立たなかった」という人が神戸市58%、西宮市60%と圧倒的多数にのぼっていたのである（表1）。

（5）電話の他の問題点

しかも電話については、交換機の故障や異常輻輳のほか、応急対策の支障になるような出来事がいくつか起こっている。

その一つは、地震当初に119番に殺到した無言電話の問題である。報道によれば、地震発生直後から、神戸市消防局には火災通報や救急要請のために119番通報が殺到したが、そのなかに署員が受話器を取りあげてもまったく何の応答もない無言の通報が数多くまぎっていた。消防が原因を調べても容易にわからず、そうこうするうちに無言電話の数は2000以上にものぼって、初期の消防の対応を大きく阻害することになったのである。

表1 地震当日の電話疎通状況とその評価

地震当日の電話使用

	神戸市	西宮市
すべて相手に通じた	10.1	16.6
一部しか通じなかった	40.9	59.3
一つも通じなかった	47.3	23.7
無回答	1.7	0.4
合計	237	241

家庭の電話は通じたか

	神戸市	西宮市
自宅から電話	33.9	48
自宅の電話が通じず公衆電話	24.6	19.1
自宅の電話が壊れ公衆電話	7.2	9.6
公衆電話が壊れて使えなかった	3.7	1.4
公衆電話が混雑していてあきらめた	5.9	1.2
電話しようとしなかった	18.9	17.3
その他	5.9	3.4
合計	699	502

家庭の電話の評価

	神戸市	西宮市
大変役立った	2.6	8.2
かなり役立った	3.7	9.4
多少役立った	6.9	12
あまり役立たなかった	9.2	10.8
まったく役立たなかった	48.5	38
使っていない	29.2	21.7
合計	699	502

なぜ、こんなことが発生したかといえば、119番の電話接続の仕組みは一般加入電話とちがっており、たとえば一般加入電話から別の一般加入電話に電話するときは、一般回線から電話局を経由しふたたび一般回線を通してつながることになっている。ところが、119番の緊急電話は、一般加入電話から一般回線を伝わり電話局にいくまでは同じだが、その後、電話局から専用回線を通じて消防の受付台までつながるのである。そして電話局内の装置のなかに伝送装置があって、交換機に支障が起きたときそのことを消防に知らせるために、消防署の受付台の電話が鳴るようになっている。しかも現在のところ、その呼び出し音は一般の通報と全く同じなのである。今回の震災では、激しい揺れのため交換機に支障が生じ、そのため受付台の呼び出し音が鳴ってしまい、消防署が大いに混乱したのであった。

実は、1993年の7月12日の北海道南西沖地震によって大きな津波被害を受けた奥尻島でも、これと全く同じことが起こっている。今後の震災対策を考えると、早急な

対応が必要であり、もし災害時に無言電話がくり返しかかるようであれば、消防署は回線の故障を念頭において電話局に問い合わせるとか、電話局は回線の故障を伝えるのに普通の通報と区別がつかない呼び出し音を鳴らすのがはたして適切なのか、を検討するなどの措置をとる必要があるのではないだろうか。

問題点の第二は、「災害時優先電話」にかかわることである。災害時優先電話は一般加入電話が異常輻輳によって通話不能になっても優先的に確保される電話であり、また電話会社が行う通話規制（今回の震災では、NTTは95%規制をかけたという）からも自由な電話であるから、これを有効に活用すれば災害時の通信連絡はある程度可能になる。しかし震災の時点では、この災害時優先電話の措置は新電々会社にも移動電話会社にも適用されていなかった。つまり、災害時優先電話の措置はNTTが電電公社時代に実施したものであり、電気通信が自由化され新電々会社が営業を開始したときも、また移動電話会社が設立されたときも、その措置が及んでいなかったのである。たとえば、ある防災機関が災害時優先電話に指定されている電話で市外に通話したとする。このとき、NTT回線を使って通話すれば災害時優先電話の機能は生きるが、もし料金的に安価な新電々会社の回線を使えば、NTT市内回線→新電々会社の専用回線→NTT市内回線という伝送の過程で、災害時優先電話の措置が消滅してしまい、一般加入電話並みの疎通率になってしまうというわけである。今回もこうした事態が発生しており、これも早急な対応を必要とするが、NTT関係者の話では、少なくとも新電々会社とのあいだには災害時優先電話が生きるような措置を1995年中にもとると決定した。また移動電話会社のNTTドコモとのあいだでも、95年度末を目途に検討中とのことである。

電話に関する第三の問題点は公衆電話にかかわっている。公衆電話は一般加入電話と異なって災害時優先電話の扱いを受けており、地震当時神戸市内に3400台あったといわれる公衆電話は、いわば市民の唯一の情報連絡手段となった。筆者はたまたま地震当日大阪市内にいたため、被害が大きくなった午前9時半頃被災地に向けて出発したが、神戸市内の公衆電話設置場所には多くの被災者が列をつくって電話を使っていた。東京や大阪など被災地の外から電話しても輻輳や通話規制によってほとんど疎通しなかったが、被災地の中から、しかも公衆電話を使えば電話は比較的通じたのである。

前述のアンケート調査でも、「公衆電話から電話した」人が神戸市で32%、西宮市で29%いたが、そのうち、「電話をかけてすべて相手に通じた人」が神戸市で27%、西宮市で29%と、疎通率は一般加入電話のほぼ2倍になっており、また「1つも通じなかった」人は神戸市で11%、西宮市で7%と、こちらは一般加入電話の4分の1程度に減っているのである（表2）。もちろん不要不急の電話は自粛すべきだが、死傷者や事故が発生するなど、どうしても連絡しなければならないときには、公衆電話に走るのがいいということである。

しかし、ここでネックになったのは、停電地域におけるカード公衆電話だった。通話に必要な電力は電話会社が提供する電力で動くから、商用電源が断になっても使えるが、カードの磁気記録の読み取り部分は商用電源によって動いているから、停電になればカードが使えず、10円硬貨を使って電話するしかなくなってしまう。今回も神戸市内を中心に広範囲に停電があったので、カードが使えない公衆電話も少なくなかった。そのため、多く的人是は10円硬貨を使ったが、これも硬貨が1000枚ほどたまるといっばい

表2 公衆電話の疎通状況とその評価

地震当日の電話体験

	神戸市	西宮市
公衆電話を利用しようと長時間並んだ	35.1	25.7
公衆電話を探しに遠くまで歩いた	16.7	11
公衆電話が壊れていて困った	15.9	9.2
公衆電話のカードが使えなくて困った	11.7	12
公衆電話の硬貨が詰まって使えなかった	9.2	2.8
自宅の電話が使えなかった	44.6	30.9
自宅の電話がつながりにくかった	19.5	33.3
その他	6.9	6
電話しなかった	14	20.5
合計	699	502

公衆電話の評価

公衆電話は通じたか

	神戸市	西宮市
すべて相手に通じた	27	28.5
一部しか通じなかった	59.9	64.6
一つも通じなかった	11.3	6.9
無回答	1.8	0
合計	222	144

	神戸市	西宮市
大変役立った	7.9	5
かなり役立った	10.6	18.5
多少役立った	14.7	16.3
あまり役立たなかった	9.7	6.8
まったく役立たなかった	15.9	5.2
使っていない	41.2	48.2
合計	699	502

になって投入不能になり、公衆電話そのものが使えなくなってしまうのである。しかも道路の渋滞や職員の不足によって硬貨の回収作業もはかどらなかつたため、長いあいだ使用不能のままにおかれた公衆電話も少なくなかつたという。停電時にも一定時間は使えるよう公衆電話にバッテリー（あるいは太陽電池）を内蔵するような工夫が必要だ、とわたしは以前から訴えてきたが、震災後、NTTは大規模な停電をとまなう大災害時には中継局から特殊な信号を電話交換機に発進し、交換機がそれをキャッチして、公衆電話が自動的に無料になるような措置をとることを決めた。早急な実現を期待するものである。

（6）災害情報システムの改善（地域防災無線等の導入）

以上、阪神大震災において顕在化した情報問題のいくつかについて述べてきた。最後に、阪神大震災のような痛ましい被害を二度と繰り返さないためにも、大都市震災時に必要な情報システムのイメージについて触れておきたい。もちろん、いままで述べてきた問題点の改善がもっとも大事であるが、それに加えて以下のことがらが必要だということである。これは、三年前にあるところに執筆した内容をほとんどそのままなぞったものでやや気が引けるが、今回の震災の経験をふまえ、ここでもう一度くり返す価値があると思っている。

まず、大都市震災における情報収集システムからはじめると、阪神大震災でもそうだったが、現在の情報収集の基本型は、警察・消防など防災関係者が電話を利用するか、あるいはせいぜい携帯に便利な無線機を使うということであった。しかし、きわめて膨大な被害が予想される大都市震災では、こうしたシステムだけで防災対策に必要な各種の情報を収集することは、ほとんど不可能といってもいい。大都市震災時には、こうした膨大な被害に加えて、電話の不通や交通の途絶など悪条件が重なるから、いままでのシステムだけでは情報収集に相当の時間を要するにちがいない。

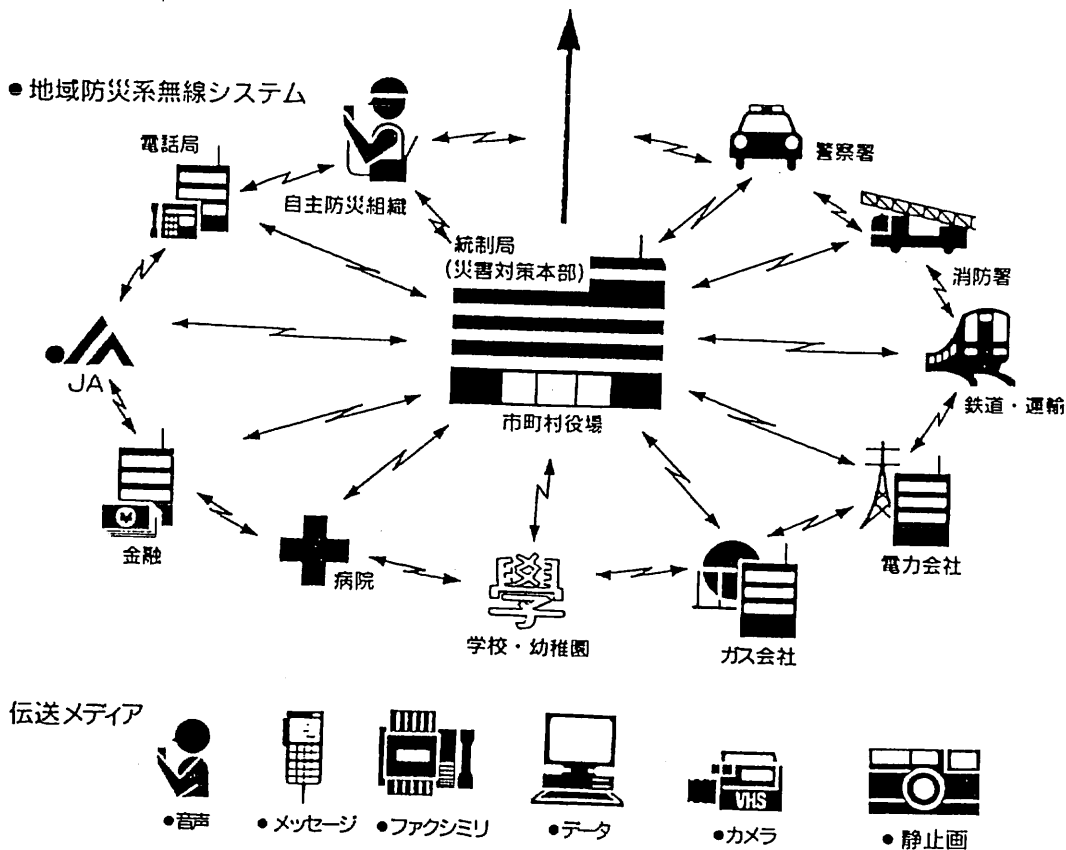
そこで、大都市震災では新たな情報収集システムが必要になる。そのようなシステムとして、たとえばヘリコプターによる包括的・機動的な情報収集（今回の震災ではこのことが大いに議論された）や、高所監視カメラなどニューメディアの導入（その耐震性の強化も必要）、受持ち区域を決めて消防団員や自主防災組織に情報収集を分担させること（その前提として自主防災組織の強化が必要）などがおそらく有効であろう。さらに、基本的には警察・消防などの防災機関がそれぞれ独自の情報収集システムを構築することが重要だが、防災機関同士の横の連絡も災害時には不可欠であり、こうした連絡用として、たとえば地域防災無線の導入なども考える必要がある。この地域防災無線は、市町村・警察・消防などの防災機関と、医療・電気・ガス・水道・交通・デパート・劇場などの機関を結ぶ無線網であり、いままでせいぜい電話に頼りしかなかったこれら機関のあいだの相互連絡を可能にする、という意味で画期的なものである（図3）。現在これを導入している市町村は決して多くなく、東京23区で10区程度、静岡県で7～8市町村程度の普及率だというが、このシステムは、適切な運用マニュアルが整備されれば、大都市災害時における情報収集システムとしてきわめて有望なものである。

（7）災害情報システムの改善（避難戦略と情報戦略の統合）

最後に、大都市震災における情報伝達システムについて触れると、情報伝達システムを大都市震災とのかかわりで考えるとき、地震火災と住民避難の問題がとりわけ重要になる。しかし、それを可能にするためには、的確な情報収集に加えて、住民への迅速な情報伝達が不可欠である。現在、ほとんどの大都市では、こうした事態での情報メディアとして同報無線を使う計画（今回の震災被災地には同報無線がほとんどなかった）であり、これをどう活用するかが震災対策の一つの鍵になる。たとえば、最近の大都市では急速にビル群が増えてきているので、いままで同報無線が聞こえていた地域も、ビル影になって聞こえなくなってしまうというケースは非常に多い。そのため、こうした同報無線の難聴地域の解消ということが大きな問題だし、またもっと大きな問題としては、同報無線を利用するとき、「情報伝達戦略」と「避難誘導戦略」を関連させて考えるという視点が重要だと、わたしは考えている。

わが国の大都市の震災避難システムは、ふつう二段階避難ということになっている。つまり、多くの大都市では、小公園や学校の校庭などが一時集合場所に指定されており、地震火災が発生したとき住民はまず一時集合場所に集まり、次いで、一時集合場所から広域避難場所に向かうことになっている。一時集合場所は、地震火災後まず住民が集まる場所であり、その意味で「避難の拠点」なのである。しかし、この一時集合場所を避難

図3. 地域防災無線の概念



拠点ばかりでなく「情報の拠点」にもしたらどうだろうか、というのがわたしのかねてからの主張なのである。すなわち、避難の途上にある住民のすべてに情報を伝えることはなかなか難しいとしても、少なくとも住民がまず集まることになっている一時集合場所にいけば、災害情報を聞くことができるシステムを整備すべきだ、ということである。一時集合場所は、本来の意味での避難拠点であるとともに、集合してきた住民に行動を指示するための情報拠点でもあるべきであろう。そこで、大都市震災時の情報メディアとしての同報無線の強化や増設をはかるとしたら、避難システムと情報システムは相互関連するという立場にたって、すべての一時集合場所にこれを設置するという方策が必要になるのではないだろうか。

(8) 被害状況の推測（震度の改訂）

ところで、一般に防災機関の初動態勢が適切に発動するためには、前述のように実際の被害情報を迅速に収集することが不可欠であるが、もう一つ、被害がまだわからない時点で入手可能な断片的情報からおおよその被害状況を予測する、ということも重要である。そうした被害予測の主要な目安は、気象庁が発表する「震度」である。しかし阪神・淡路大震災では、この震度情報がむしろ被害を過小評価させることになってしまった側面があるのではないか。

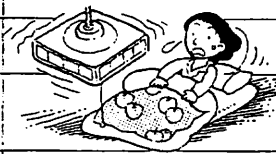
今回の地震では当初、神戸と洲本の震度が6と発表された。震度6といえどももちろん大地震であり、相当な被害が予想されることはいうまでもない。しかし、最近の地震では震度6が発表されることがけっして少なくなく、この2年間に釧路沖地震（釧路市が震度6）、北海道東方沖地震（釧路市震度6）、三陸はるか沖地震（八戸市震度6）と、震度6の地震が連続していた。これらの地震ではたしかに被害は小さくなかったものの、今回の地震のように壊滅的な被害には至らなかった。そこで多くの防災関係者は、震度6という情報を聞いたとき、最近の地震の経験から、神戸市や洲本市の被害状況を釧路沖地震の釧路市や三陸はるか沖地震の八戸市とほぼ同じ程度だろう、と誤って推測してしまったのではないだろうか。つまり「震度6慣れの心理」であり、これが、今回の震災で防災機関や報道機関の初動体制の遅れにつながった一つの原因になったと思われる。

地震の3日後、気象庁は被災地域の一部の震度を7と発表したが、実は、これまでの体制では速報される震度は6が上限であり、震度7は後日の調査を経て発表されるから、どんなに強い地震でも速報値は震度6としか発表されないのである。もし地震の前に震度7が速報震度として発表されていたら、あるいは防災機関などの対応は変わっていたかもしれない。そこで今回の震災をきっかけに、気象庁では震度計で震度7を計測できるようにあらため、しかもこれを速報することにした。

また、いままでも気象庁の内部資料では震度は少数点第二位までわかる仕組みになっており、たとえば震度5.50から6.49までを震度6として公表していたが、これをもっと細分化して、5.50から5.99までを「震度6弱」、6.00から6.49までを「震度6強」として発表することになり、適当な周知期間を設けて、1996年秋にも実現することになった。なお、同時に、震度の解説表も時代の趨勢を踏まえて改訂したり、計測震度計を増設してきめの細かい発表をすることになった（表3）。

震度の細分化・精緻化と並んで、もう一つ重要なことがある。それは、震源・マグニチュード・震度などの情報から、その地震の被害状況を迅速に推測するシステムの開発ということである。すでにJ R 東海では、地震発生時にその地震の規模を推測して新幹線を緊急停止させる「ユレダス・システム」を整備しているし、東京ガスでも三〇〇ヶ所以上の地点に震度計を設置したり、二〇ヶ所に地盤液状化センサーを設置したりして、各地の震度や、液状化の分布、ガス管などの被害状況を推定する「シグナル」というシステムを稼働させている。また川崎市でも、七つの区役所に地震計を設置して震源とマグニチュードを推測し、また市内を五〇〇メートルメッシュに区分して震度や被害を推定するシステムを昨年四月から稼働させている。東京消防庁でも昨年一二月、J R 総研や東京ガスなどから地震計の情報をオンラインで入手し、管内を五〇メートルメッシュに分けて、各地の震度や火災、人的被害などを推測するシステムを実用化した（以上、朝

表3. 改訂された震度解説表（抜粋）

計測震度	等級	人 間	屋 内 の 状 況	屋 外 の 状 況
-0.5	0	人は揺れを感じない。		
-1.5	1	屋内にいる人の一部がわずかな揺れを感じる。		
-2.5	2	屋内にいる人の多くが、揺れを感じる。眠っている人の一部が目覚めます。	電灯などのつり下げ物がわずかに揺れる。	
-3.5	3	屋内にいる人のほとんどが揺れを感じる。	棚にある食器類が音を立てることがある。	電線が少し揺れる。
-4.5	4	かなりの恐怖感があり、一部の人は身の安全を図ろうとする。眠っている人のほとんどが目覚めます。	つり下げ物は大きく揺れ、棚にある食器類は音を立てる。座りの悪い置物が倒れることがある。	電線が大きく揺れる。歩いている人も揺れを感じる。自動車を運転していて、揺れに気付く人がいる。
-5.0	5弱	多くの人が身の安全を図ろうとする。一部の人は行動に支障を感じる。	つり下げ物は激しく揺れ、棚の食器類、書棚の本が落ちることがある。家具が移動することがある。	窓ガラスが割れて落ちることがある。補強されないブロック塀が崩れることがある。
-5.5	5強	非常な恐怖を感じる。多くの人が行動に支障を感じる。	棚にある食器類、書棚の本の多くが落ちる。テレビが台から落ちることがある。タンスなど重い家具が倒れることがある。	補強されていないブロック塀の多くが崩れる。自動販売機が倒れることがある。自動車の運転は困難となる。
-6.0	6弱	立っていることが困難になる。	固定していない重い家具の多くが移動、転倒する。開かなくなるドアが多い。	かなりの建物で、壁のタイルや窓ガラスが破損、落下。
-6.5	6強	立っていることができず、はわないと動くことができない。	固定していない重い家具のほとんどが移動、転倒する。戸がはずれて飛ぶことがある。	多くの建物で壁のタイルや窓ガラスが破損、落下。補強されているブロック塀がほとんど崩れる。
-7.0	7	揺れにほんろうされ、自分の意思で行動できない。	ほとんどの家具が大きく移動し、飛ぶものもある。	ほとんどの建物の壁のタイルや窓ガラスが破損、落下。補強されているブロック塀も破損するものがある。

日新聞七月二六日付け記事より）。

これは、一般に被害推定システム（GIS）と総称されることが多いが、国土庁や、通産省、郵政省でもこうしたシステムの開発に着手するようになった。被害予測の正確さは事前にインプットする情報の質に依存しているし、また大地震後このシステムがいつでも正常に稼働するかどうか保証のかぎりでもないが、もし建物被害や火災ばかりでなく、道路・港湾・病院の状況や初動態勢の確立に必要な人員や機材の適性配置までが即座に表示されるようになれば、災害対策にきわめて有効な役割を果たすと期待されるのである。

2. 生活情報と余震への不安

(1) 被災者は多様な生活情報を求めた

ところで、今回の震災では、災害情報についてももう一つ重要な問題がクローズアップされた。それは、大量の避難者をふくむ被災者に対する生活情報の提供をどうするか、という問題である。そこで、この章では、震災後の被災者に対する生活情報の問題について考えてみたい。

前述のように、今回の震災では、関東大震災以来最大の人的被害が発生してしまったが、もう一方で、地震の当夜から、大被害を受けた神戸市・西宮市・芦屋市・宝塚市を中心に、30万人以上の人々が1000を超える避難所で、長期間にわたって不自由な生活を強いられることにもなった。また、自宅は全壊しなかったが、電気・ガス・水道などのライフラインはおろか、食料や水に事欠く暮らしを余儀なくされた人々も数十万人にのぼった。おそらくこれは、戦後の災害史上初めての膨大な被災者数といえるだろう。今までの大量避難といえば、昭和61年の伊豆大島噴火のときで1万人が1カ月の避難生活、平成3年の雲仙岳噴火のときが1万数千人。このときは長い人で避難生活が3か月ほど続いたが、今回は、30万人というけた違いの人々が避難生活を送ることになったのである。

当然ながら、これらの被災者たちは、余震はいつまで続くのか、また大きな地震が来るのではないかと、食料や水や毛布はどこに行けば手に入るか、怪我やインフルエンザなどの医療体制はどうなっているのか、不自由な避難生活をいつどのように改善してくれるのか、電気・ガス・水道・交通はいつ復旧する見通しなのかなど、震災直後に被災者が必要とする情報はきわめて多かったはずである。またしばらく時が経過した時点では、仮設住宅にいつ入居できるのか、生活再建のための資金はどこにいけば融資してもらえるのか、子供の学校はいつから再開するのか、倒壊家屋の瓦礫の撤去はいつ可能になるのかなど、知りたい情報はそれこそ山ほどあったはずである。

ちなみに、筆者らが8月に神戸市と西宮市で実施したアンケート調査（回収数；神戸市699人、西宮市500人）によれば、地震の当日被災者が知りたかった情報は、「余震の今後の見通しについて」が飛び抜けて多く神戸市63%、西宮市65%にのぼっており、「家族や知人の安否について」（神戸市48%、西宮市47%）、「地震の規模や発生場所について」（神戸市37%、西宮市28%）、「水道・ガス・電気・電話の復旧見通しについて」（神戸市32%、西宮市40%）をはるかに上回っていた。また、余震への情報ニーズはかなり持続しており、地震一週間後に知りたかった情報としても、「余震の今後の見通し」（神戸市65%、西宮市73%）がトップで、以下、「ライフラインの復旧の見通し」（神戸市59%、西宮市67%）、「交通機関や道路の開通状況」（神戸市37%、西宮市52%）、「食料や生活物資の状況」（神戸市33%、西宮市34%）などとなっていた（表1、表2）。

これらの情報は、被災者の最低限の生活を維持するために重要な「生活情報」であり、市町村など地方自治体は、本来の災害対策業務に加えて、これらの生活情報を被災者に提供しなければならない義務をもっている。

表1 地震当日の情報ニーズ

地震当日の情報ニーズ

	神戸市	西宮市
地震の規模や発生場所	37.1	28.1
余震の今後の見通し	63.1	65.1
地震の被害	34	31.9
家族や知人の安否	47.8	46.8
火災の状況	23.6	8
けが人の救急や病院の受け入れ	9.7	5.2
電気・ガス・水道などの復旧見通し	31.6	40
交通機関や道路の開通状況	21.7	33.1
渋滞情報	6.6	7.6
食料や生活物資の状況	19.9	25.5
ガソリンスタンドの状況	4.9	7.2
開店している店の情報	12.7	14.9
医薬品の関する情報	2.7	3.2
公衆電話の設置場所	9.6	6.6
自宅の安全性	25.3	32.9
どこに避難すればよいかといった情報	20.2	15.1
危険な場所の情報	12.7	13.5
公衆トイレの場所	4.4	6.4
銀行・金融関係の情報	4.6	6.8
保険の情報	2	4.2
職場・学校の情報	5.7	12
水・食料の配給場所	16.2	26.5
入浴に関する情報	13.3	18.1
流言に関する情報	2.9	2.2
宿泊施設に関する情報	0.9	2.8
その他	2.4	2.6
知りたい情報はなかった	5.6	6.4
合計	699	502

表2 地震一週間後の情報ニーズ

地震一週間後の情報ニーズ

	神戸市	西宮市
地震の規模や発生場所	17.9	12
津波の状況	2.6	2.2
余震の今後の見通し	65.2	72.5
地震の被害	29	29.9
家族や知人の安否	28.2	29.3
火災の状況	14.6	3.2
けが人の救急や病院の受け入れ	8.9	5.6
遺体安置や葬儀について	8	14.7
電気・ガス・水道などの復旧見通し	58.5	66.9
交通機関や道路の開通状況	36.9	51.4
渋滞情報	10.3	13.1
食料や生活物資の状況	33.2	33.9
ガソリンスタンドの状況	7.9	6.6
開店している店の情報	19.9	22.9
医薬品のに関する情報	5.6	2.2
公衆電話の設置場所	7.3	2.2
自宅の安全性	30.6	34.9
どこに避難すればよいかといった情報	11.2	8.6
危険な場所の情報	11.4	11.2
公衆トイレの場所	6	5
ペットの餌や医療について	3	3
ゴミや瓦礫の処理について	8.2	10.2
銀行・金融関係の情報	9.4	8
入学試験の情報	1.6	2.2
職場・学校の情報	9.6	14.1
水・食料の配給場所	30.8	30.9
入浴に関する情報	32.9	32.9
流言に関する情報	1.7	1.2
宿泊施設に関する情報	1.4	4
神戸市、西宮市以外の状況	4.7	6.4
神戸市、西宮市の対応	17.2	26.1
兵庫県の対応	12.6	20.3
国や他の都道府県の対応	8.6	18.1
全国や海外での報道のされ方	2.1	2.4
その他	2	3
知りたい情報はなかった	4	1.6
合計	699	502

いずれにせよ、膨大な数の避難者たちは、地震直後からさまざまな情報ニーズを持っていた。しかし残念ながら、被害が大きかった兵庫県内の自治体のなかで、住民広報用の市町村防災行政無線（同報無線）を整備していたのは尼崎市だけだったという事実が示しているように、多くの自治体では住民への広報メディアが決定的に不足していた。また、自治体職員の多くも被災したり、地震対策業務に追われたりしたため、震災直後からはほぼ1週間のあいだは、自治体から住民への情報提供がほとんど行われないという状態になった。しかも、停電によってテレビは視られずラジオを持って避難した人も少なかったのも、電気が復旧するまでマスコミ情報からも遮断された人が多く、これらの人々はまさに情報飢餓の状態に置かれてしまったのである。

ようやく地震の2、3日後から、NHKをはじめとする放送局が電気が復旧した地域に数千台のテレビ・ラジオを配ったため、被災者の情報飢餓はしだいに解消していったが、それでも行政からの生活情報はなかなか伝えられなかった。そのため、地震の一週間目あたりから神戸市、西宮市などが避難所に広報紙を配布するようになるまでは、被災者はもっぱらマスコミ情報に頼るだけという状態になってしまった。

（2）マスコミが流した生活情報

では、この時期にマスコミはどのような生活情報を流したのであろうか。その一例としてNHKをあげると、NHKでは地震の3日後の1月20日午後6時30分から、ラジオ第一放送で被災者向けの生活情報放送をスタートさせている。そして翌日の21日から、ほぼ1時間おきに各時間の30分から55分までの25分間、全国放送でいろいろな生活情報を流し続けた。

放送した生活情報の内容は、日が経過するとともにしだいに変化していき、震災当初は、避難勧告地域の説明や、診療を再開した医院の紹介、生活物資や飲料水の供給場所などの情報が中心だったが、続いて浴場の情報、バス路線など交通の復旧情報、ペットの一時預かりの紹介などとなり、次に仮設住宅の申し込みやインフルエンザの予防接種、心の相談窓口、融資などの法律相談となっている。簡単にいうと、生存のための情報から、当座の生活のための情報へ、そして元の生活に戻るための情報へ、ということになる。ここでは、NHKが流した生活情報の事例として、震災5日後の1月22日に放送された生活情報を図1にあげておく。

なお、こうした生活情報はNHKばかりでなく、MBS毎日放送、ABC朝日放送、ラジオ大阪など地元の民放からも放送されたし、多くの一般紙にも掲載された。とくに毎日新聞は「希望新聞」というタイトルの紙面をつくり、各種の生活情報を掲載している。また、それ以外にも各種のボランティア団体、被災した大学の学生新聞などに生活情報が掲載された。図2には、震災から1ヶ月が経過した2月18日付けの希望新聞の記事をあげておく。災害直後の生活情報とその内容がかなり変わっていることに注目してほしい。

前述のように、今回の震災では、少なくとも震災直後は、行政機関から被災者に向けてほとんど生活情報が提供されなかった。その穴をマスコミやミニコミが埋めていたものであり、生活情報の提供に関して、この時期のマスコミ・ミニコミの活動は特筆すべきものがある。いままでも、雲仙普賢岳噴火後の島原市においてNHKは島原放送局を設

置していろいろな生活情報を流しているが、今回のように大量かつ長期間にわたって生活情報を流したことはなかった。これは、大規模災害時におけるマスコミ・ミニコミの重要性をあらためて示したものだといえよう。

図1 NHKが流した生活情報の例（1月22日分）

1. 屋外避難テントが設置されるのは次の10ヵ所ですが、人数は推定人数です（神戸市内）。
 - 東灘区 本庄中央公園（青木五丁目）400人
野寄公園（西岡寺三丁目）300人
 - 灘区 浜田公園（浜田町二丁目）300人
 - 中央区 生田川一帯と宮本公園300人
 - 兵庫区 門口公園300人、本町公園100人、
 - 長田区 駒ヶ林公園100人、真野公園1,500人
梅ヶ香公園300人
 - 須磨区 旧須磨警察跡200人
 以上、10ヵ所で推定3,800人が対象です。垂水区、西区、北区では屋外避難テントの設置はありません。
2. また、神戸市の災害対策本部では、防水シート10,000枚を必要な市民に配布する予定で、とりあえず5,000枚を準備しています。
配布場所は、
 - 東灘区 御影北山、渦ヶ森小、住吉小、区役所
 - 灘区 福住公園、篠原公園、寿公園、区役所
 - 中央区 区役所
 - 兵庫区 中部土木事務所、環境兵庫事務所、南淀川公園北側
 - 長田区 丸山コミュニティセンター、新長田ジョイプラザ前、
高速長田さくら銀行前
 - 須磨区 大黒小、太田小、若宮小、月見山さくら銀行前、区役所
 - 垂水区 区役所区内は広報車で送迎

図2 毎日新聞の「希望新聞」（2月18日）

- 8ヵ国語で電話相談
外国人地震情報センター（大阪市中央区常盤町1）は英語、タガログ語、スペイン語など8ヵ国語に対応できる電話ホットラインを設置し、被災した在日外国人への情報提供や生活相談を行っている。相談者の秘密は厳守。
ビザ、滞在資格は一切問わない。
電話（06-941-4793、10時-21時）。
土・日も。
- 被災就学生に生活費
神戸学生青年センター（神戸市灘区山田町3の1の1）は被災した留学生に生活費を支給しているが、14日から、被災就学性にも当面の生活費3万円を支給している。市区役所発行のり災証明書と学生証を持参。受け付けは9-18時。問い合わせは、078-851-2760。

(3) 行政機関と生活情報

しかし、こうした生活情報は本来は行政機関が住民に伝えるものである。また、マスコミ情報はサービスエリアが広くかつ不特定多数の人々を対象にするので、被災者の情報ニーズにきめ細かく対応することは難しい。しかも、マスコミの関心はどうしても被害の大きい地域に集中することから、すべての地域の被災者の情報ニーズを配慮するのも困難である。今回も、NHKは神戸市を中心に多くの生活情報を提供してそれなりの成果をあげたが、芦屋市や宝塚市の情報はほとんどとりあげられなかった。生活情報の提供に大きな疎密が生じてしまったのである。そして一部地域では、こうした情報不足の穴を埋めるかのように、「〇月〇日に大きな地震が来る」「〇〇に行けば食料がもらえる」「今日から仮設住宅の申し込み受け付けが始まる」「この避難所はもう閉鎖される」など、さまざま流言が広がり、被災者を右往左往させたり、不安を増幅したりした。これは、行政からの生活情報が不足していたことにその一因があったといえよう。

もし、災害前に行政機関が市民に情報を伝えるシステムを事前に持っていたら、つまり生活情報を伝えるシステムを事前に持っていたら、事態はもっと変わっていたかもしれない。結局、一週間ほどしてから兵庫県や芦屋市など被災自治体は自らの広報紙を発行するようになった。図3には、芦屋市災害対策本部が発行している「広報あしや 地震災害情報」(第4号1月29日発行)の中から生活情報の見本を一つあげておく。

ところで、被災者への情報提供について一般論をいえば、災害直後に余震の情報や緊急の広報、あるいは避難の勧告・指示などを伝えるには、速報性・同時性のある電波メディアが適している。具体的には、同報無線や有線放送がこれにあたるだろう。今回の震災でも、神戸市東灘区御影浜町にあったLPGタンクのバルブが破損してガスが漏れ、爆発の危険が生じた。そのため、東灘区の災害対策本部では18日午前6時、一部地域の避難住民に対して避難の勧告を発することになった。しかし、この緊急情報を住民に伝える手段としては広報車が2台しかなく、それも地震によって道路が損壊していて十分に広報ができなかったという事態が起こっている。もし同報無線などのメディアが整備されていたら、もっと上手に緊急情報が伝えられたかもしれない。

このように、災害直後には緊急情報を伝える手段が整備されている必要がある。しかし一方、ここで問題としているような生活情報は、同報無線などで流してもあまり意味がないように思われる。生活情報として、非常にきめ細かい情報を流さなければならないし、電波メディアは一度聞き漏らすと情報にアクセスできないという一過性のメディアであり、生活情報はむしろ住民が繰り返し確認できるような形式のほうがいいからである。つまり生活情報の提供には、記録性があるといつでも見られるような印刷メディアが適しているのである。

以上を要約すると、被災者に十分情報を伝えるためには、緊急情報用のメディアと生活情報をよりくわしく伝えるメディアの両方が整備されていなければならない、ということである。いままで地方自治体がつくっていた地域防災計画をみると、災害が発生する以前の広報、たとえば住民に防災意識を持ってもらうといった啓発広報はかなり行われていたと思われる。また、災害直前の大雨洪水警報や津波警報など、緊急情報の広報計画を整備している自治体も少なくない。しかし大規模災害が起こって、大量の避難者が出る、そしてその避難者が長期間にわたって避難所生活をする、そういう人たちにど

ういう情報をどういう手段で流すかということ、つまり各種生活情報の提供をどうするかということは、今回はじめてクローズアップされた問題点ではないだろうか。

阪神大震災では、被災者はきわめて不自由な生活を強いられた。そのとき、かれらにさまざまな生活情報を提供し、かれらの不安や心労を少しでも軽減することの重要性を、今回の災害は教えてくれたのである。これを機会に、行政機関ができるだけきめの細かい生活情報を被災者に提供する制度的仕組みを確立することが必要であろう。

図3. 芦屋市役所の生活情報（第4号1月29日）

○無料法律相談の設置

神戸弁護士会、大阪弁護士会のご協力により、無料の法律相談（面談）を開設します。

(1)期 間：1月30日(月)～2月10日(金)

2月4日(土)・5日(日)も開設

(2)相談時間：午後1時～4時（1人30分以内）

(3)相談方法：2人の弁護士による面談

(4)場 所：商工会館1階集会室（公光町4-28）

(5)申し込み：当日の午前9時から1日12人分の整理券を生活文化課（市役所南館玄関入って右側）で発行

(6)問い合わせ：芦屋市生活文化課0797-38-2007

また、次のところでも無料の電話相談などをおこなっています。

(1)電話相談：2月10日まで（日曜日を除く）

午前10時～午後5時まで

京都075-241-9752

大阪06-365-9939

(2)電話相談：平日午前10時～午後5時

土曜午前10時～正午（日曜はなし）

神戸078-362-5158・362-5171・362-5178

(3)面談相談：2月1日から開設（土・日を除く）

午前11時～午後3時

神戸市弁護士会館（神戸市中央区橘通1-4-3、
078-341-1717）

（4）余震への不安と流言の発生

前述のように、今回の震災では、被災者は地震当初からいろいろな情報ニーズを持っていたが、なかでも飛び抜けて関心が高かったのは、「余震情報」であった。

今回の震災では、地震直後からしばしば余震が続き、九死に一生を得て着のみ着のまま避難した人々を脅かすことになった。気象庁の資料によれば、地震当日の1月17日だけでも有感地震回数は61回に及び、そのうち震度4の地震が4回（5時49分神戸、5時52分神戸、7時38分奈良、8時58分神戸）もあった。筆者はたまたま地震の当日大阪に滞在していたため、午前9時頃から被災地に向けて出発したが、その途上でもたびたび揺れを感じたし、なかでも12時25分と13時4分に震度3の余震が起こったとき、多くの人が路上に出て不安そうに周囲を見回しているシーンを目撃している。

そして翌18日、地震予知連絡会は今後の地震に関する見解を発表した。朝日新聞夕刊は、これを次のように書いている。

「西日本まだ警戒必要（予知連会長）

地震予知連絡会の茂木清夫会長は『西日本に大きな被害を出した南海地震（1946年）から51年近くになり、瀬戸内地方などで地震活動が盛んになる時期に入るとみられていた。今後も注意が必要だ』と指摘する。

南海地震は、南海トラフが震源で、マグニチュード（M）8.0の巨大地震だった。この地震によって静岡県から九州まで津波が起き死者は1330人に上った。

茂木会長によると、南海トラフでは約100年の周期で、M8クラスの地震が発生している。この周期のうち前半の約50年間は地震活動が静穏な時期が続くが、その後は、瀬戸内海側や西日本の日本海側といった『周辺部』で、中規模の地震が頻発する傾向が見られるという。茂木会長は『最近、北海道・東北地方で大地震が相次いで起こっていたが、西日本も今後は地震活動が活発になるとみられる。次の巨大地震に向けた備えを急ぐべきだ』と指摘している」（朝日新聞1月18日夕刊）

これは西日本に巨大地震が発生する可能性に触れたものだが、さらに地震予知連絡会は、兵庫県南部地震の余震の見通しについても、次のような見解を述べた。

「M6級余震起きる恐れ

地震学者や研究機関で作る地震予知連絡会（茂木清夫会長）は18日、臨時会合を開き、兵庫県南部地震についての見解をまとめた。余震活動は減衰しているが、今後もマグニチュード（M）6級の余震が起きる可能性があるとして、注意を呼びかけている」（朝日新聞1月19日朝刊）

実際、有感地震は18日17回、19日13回、20日6回としだいに少なくなってきたがその後も続き、本震によって倒壊しかけた建物や亀裂が入ったガケ地などが余震で崩れる危険があったため、防災機関は余震に対する警戒を弛めなかった。またこの時期には、余震がいつまで続くか、どのくらいの最大余震があるかということは、多くの住民の関心事でもあった。

先に示したアンケート調査でも、余震への不安は極めて高くなっているが、最近の地震のなかでこんなに多くの被災者が余震に関心を持った例はなく、かれらがいかに余震を心配していたかを如実に示す数字といえよう。

おそらくそれは、過去数十年間さほど有感地震が多くなかった阪神地域に誰も予想しなかった激震が突然発生し、なおかつしばしば大きな余震が続いたので、人々の恐怖と不安が高まったためと考えられる。そして、こうした心理を背景に、地震のはぼ一週間後から「また大きな地震がやってくる」、「震度6の大地震がやってくる」という流言が被災地とその周辺に広がっていった。1月23日頃から、大阪管区气象台に50件、京都地方气象台に50件、彦根地方气象台に40件などの電話問い合わせが殺到し、その内容は、流言の内容は「20時に大地震が来ると、銀行員が言っている」（大阪）「震度6の地震が来るとテレビで言っている」（和歌山）「大津で地震が起こるので、皆車で逃げています」（彦根）「伏見で20時に、神戸並みの地震が起きると学者がテレビで言っていた」（京都）などというものであった（気象庁資料より）。こうした問い合わせに対し、気象庁では、1993年1月の釧路沖地震後の流言を否定したときに使ったのとほぼ同じ内容の、以下のような「打ち消し案文例」を大阪管区气象台に送り、气象台にファックスして報道機関に伝えるよう指示した。

「〇月〇日頃から地方気象台に『今月〇日にA市でマグニチュード8クラスの大地震が発生すると予言者が言ったのを聞いたが本当か』という問い合わせが数多く寄せられています。

現在の科学技術では、東海地震の直前予知を除いて、日時や場所を特定した地震の発生を予知することはできない。したがって、何月何日にマグニチュード8クラスの大地震が襲うといった話は、根拠のないデマであるので、惑わされないように」

この種の流言は、相当広範囲に広がったようである。先に紹介した筆者らのアンケート調査でも、「また大きな地震が来る」とか「震度6の余震が来る」という話を聞いた人が、神戸市66%、西宮市53%と過半数にのぼっていた。その話の内容はさまざまだったが、たとえば「今後マグニチュード8の（地震）がくる」「1ヶ月間は震度6の余震がくる」「満月の時に地震があったので次の満月の2月15日にまた地震がくる」「1週間後に大きな地震がくる」「震度6の余震がくる」「震度6が60日目にくる」「3日以内に再び大きな地震がある」「1ヶ月たったらくる。専門家がTVで言っていた」「神戸市は多くの活断層があるので次は神戸市から有馬に向かって震度8の大地震がある」「近日に震度6クラスの余震がくる」「今回よりもっと大きな地震が24時間以内に来る。又は3ヶ月以内にある。3年位は余震が続く」「1週間以内にどこかの町に今回よりも大きい地震がくる」「インドのサイババの予言で必ずまた大きい地震がくる」「地震学者が、もう一度大きい震度6のがくるとTVで言っていた」「M6でなく震度6の地震がくると聞いた」「テレビで震度6の余震がまた来ると報道していた」「2月17日の8時に同じくらい大きい地震が来るので避難した方が良い」「震度6がもう一度くる、大阪にも震度6がくる、病院は行っても手当てしてもらえない」「テレビで1ヶ月以内に大きな地震がくると言っていた。震度6と聞いた」「震度8の地震がくるかもしれないと6チャンネルのTVで言っていた」「1月27日に震度6の余震がくる。満月の夜に震度6の余震がくる」「1月の25～26日に震度6の大きなのが来ると仕事場の人から聞かされた」「1ヶ月以内に今と同じものが来るというのでふとんを敷かず服のまま寝ていた」などがあつた。また、これらの話の情報源として最も多かったのが「近所の人から」（神戸市74%、西宮市66%）で、以下、「親戚・知人から」（神戸市17%、西宮市21%）、「家族から」（神戸市9%、西宮市8%）と続いていた。さらにこの種の話の多少疑問を持ちながらもある程度信用した人（「本当だと思った」+「もしかしたら本当かもしれないと思った」）が、神戸市88%、西宮市83%となっており、余震に脅える人々にはかなり信憑性をもって受けとめられたようである（表3）。

ところで、問題はどのようにこうした流言が発生し、広範囲に広がっていったか、である。もちろん、流言の出所が一つだったとは思われないし、その発生理由も単一ではないと思われる。「また大地震があると怖いね」などというさりげない会話が、人から人に伝えられ「大地震がくる」という断定に変わったこともあつただろう。しかし、今回の流言の発生と伝播に関して、テレビ・ラジオなどマスコミが果たした役割もけっして無視できない。先に紹介したアンケートへの回答のなかでも、「専門家がTVで言っていた」「ラジオで東大の先生が言っていた」「地震学者がTVで言っていた」「テレビで震度6の余震がまた来ると報道していた」「テレビで1ヶ月以内に大きな地震がくると言っていた」など、マスコミを情報源とするものが少なくなかつたし、表3の情報源の「その他」は

ほとんどが「テレビ・ラジオ」なのである。

表3 震災時に広がった流言について

耳にしたうわさ

	神戸市	西宮市
今後の余震の話	66.1	52.6
泥棒に関する話	61.5	41.2
避難所に関する話	22.5	17.9
生活情報に関する話	17.6	15.7
その他	5.2	2.2
何も耳にしなかった	17.7	31.1
合計	699	502

うわさの入手先一表

	神戸市	西宮市
家族から	9	7.8
近所の人から	74.3	66.2
親戚・知人から	16.7	20.5
職場の人から	3.3	7.8
警察や消防から	0.7	1.2
知らない人から	18.8	5.8
その他	8.9	7.8
無回答	0.2	3.2
合計	575	346

うわさを信じたか一表

	神戸市	西宮市
本当だと思った	45.2	39.9
もしかしたら本当かもしれないと思った	42.4	43.9
信じられなかった	10.1	11.1
その他	1	0.9
無回答	1.2	4.3
合計	575	346

(5) 流言はどうして発生したか

この流言が関西を席卷している頃、大阪の消防関係者から筆者のところに電話があった。大阪では地震再来の流言がいろいろと飛び交い、消防にも問い合わせが殺到して応対に窮しているとのことで、どうも地震予知連絡会が余震の見通しとして「マグニチュード6クラスのものもあり得る」と発表したことに関係があるらしいという。つまり、地震の規模を表わすマグニチュードと、揺れの程度を示す震度の区別が出来ない人が少なくないため、地震予知連絡会が発表した「マグニチュード6」を「震度6」と誤解して、それが人から人へと伝わっていったというわけである。震度6といえば、1月17日の本震のときの神戸海洋気象台や洲本測候所の揺れと同じだから、これを伝え聞いた人はびっくりもしたし、大きな不安を持ったりもしたであろう。そこで、筆者はすぐに気象庁の知人に電話して、事情を話すとともに、今後余震情報の放送をするときマグニチュー

ドと震度のちがいが同時に視聴者に伝えるよう、報道関係者に対して要請してほしいと頼んでおいた。くわしくは確認していないが、その後、報道各社は要請に応じてこうした放送を実施したようである。時間が経って流言が自然に消滅したのか、あるいはマスコミの報道が効を奏したのか定かではないが、この出来事から2週間ほど経て筆者が大阪に行き、先の消防関係者に会ったとき、彼はおかげで最近流言を聞かなくなりましたといったものである。

実は、これとまったく同じケースが、昭和53年1月の伊豆大島近海地震後にも発生している。いわゆる「余震情報パニック」である。これは、伊豆大島近海地震の4日後に静岡県が発表した「余震情報」に端を発したもののだが、このとき、静岡県が発表した余震情報は、「今回の伊豆大島近海の地震の余震は、可能性としては最悪の場合はM（マグニチュード）6程度の発生もあり得る。その場合は、M6の地震としては、被害は大きくなることもあり得る」という内容であった。しかしこの余震情報が、人々のコミュニケーション・ネットワークを伝わるうち、「伊豆方面に震度6の地震がある」とか「今日の午後6時に大地震が起こる」などさまざまなかたちに変容していった。余震情報がこのように流言化していった最大の原因は、余震情報になかの「M6」という用語にあった。多くの住民は、地震の規模を表わすこの用語の意味が理解できず、そのために伝達過程で、ある場合には「震度6」、ある場合には「午後6時」（PM6と混同したものとされる）などと変容し、余震情報が流言化したのであった。

この2つの事実は、次のことを示唆している。つまり、地震に関して一般の人にわかりにくい専門用語が何の解説もなく報道されたり、行政機関の発表する情報が一般の人に難解だったりする場合には、その情報が誤解され流言化していくことを示しているといえよう。こうして流言化した情報は、一般市民に過度の不安を与える。今回の地震では流言が社会的混乱を引き起こすまでにはいたらなかったが、先の余震情報パニックでは伊豆半島を中心にあわてて避難する人々が少なかった。つまり、こうした流言が無秩序な避難行動を引き起こしたりすることも稀ではないのである。情報パニックの引き金は、多くの場合、また大地震が来るとか、また噴火が起こるとか、まもなく津波がやってくるとかいう、「大災害再来」の流言だといえよう。

一般に、災害時の流言は人々の恐怖や不安など過剰な心理的興奮に陥った人々の中で発生し、それに接した人々の感情的興奮をいっそう高めていく。恐怖や不安から生まれた流言が恐怖と不安をいっそう強化するという、いわば感情の増幅作用が流言の本質の一つであるが、その多くは自然発生的に生じるものであり、この点で、故意の情報操作である「デマ」とは異なっている。しかし、もっと子細にみると、流言は

- (1) 住民のなかから自然発生的に生じる本来の意味での流言と、
- (2) 行政機関の発表が人から人へと伝えられるうちに流言化するものとの2つに分類できる。つまり、こうした流言は住民の中から自然発生的に発生する場合と、マスコミや行政からの情報が誤解されて流言化する場合の2通りあるわけで、とくに、大災害直後に多くの被災者が不安を持っているときは、行政機関の情報の伝え方に慎重な配慮が必要だといえよう。

たとえば上にあげたケースは、マグニチュードという一般市民に対して解説が必要と思われる情報がそのまま伝えられた結果、これが震度が変わってしまったケースである。

ちなみに、最近NHKが行った全国意識調査では、マグニチュードという用語の意味を知っていた人はわずかに3割にすぎなかったということであり、そうであれば、わかりやすい解説が不可欠だったのであろう。

しかし、かといって、住民に誤解されるのを恐れて情報を伝えなければいいというものでもない。つい最近でも、必要な情報が住民に伝えられなかったために混乱が起こったケースがある。それは、1993年7月12日の北海道南西沖地震のことであり、10メートルに達する津波のためにほぼ壊滅状態となった奥尻島青苗地区において、地震2週間後の7月25日朝、「また大津波が来る」という流言がまたたくまに広がり、かなりの数の住民が高台に避難するとともに、地元消防団なども住民の避難誘導にあたるといふ出来事が起こった。これは、当日午前8時37分と39分の2度にわたって震度4の地震が発生したが、この揺れが、大災害の直後に札幌管区気象台が奥尻島に設置していた臨時観測点だけで記録され、他の気象官署では記録されなかったこと、そして気象台ではこの地震による津波の心配がないと判断したことなどから、震度に関する地震情報も、津波なしという津波情報も発表しなかったため、不安にかられた人々のあいだに「また津波が来るのではないか」という憶測が発生し、これが伝達の過程で「また津波が来る」と変容して、かなりの数の人たちが避難行動をとったものと考えられる。

一般に、「また大地震が来る」という流言の場合には、多くの人々はたとえそれを信じたとしても、せいぜい防災用品を整えとか、枕元に服をおいて寝るとかする程度で、流言が心理的な不安や動揺は招いても、それが社会的混乱を生み出すことは少ない。けれども、津波の流言は別である。過去にも、1855年の安政江戸地震や1913年の桜島噴火の後に「大津波来襲」の流言が広がり、人々がいっせいに高台に向かって避難するという出来事が起こっており、大津波の流言は避難行動をとまなうことが少なくないので、場合によってはパニックの引き金にもなりかねない。したがって、こうした流言の場合には、情報の取り扱いにとりわけ慎重な配慮が必要であるとともに、流言をキャッチしたならば出来るだけ迅速な打ち消し情報を提供することが必要になるのである。

阪神・淡路大震災と住民の行動

廣井 脩

1. 人的被害はなぜ大きくなったか

1-1. 木造家屋の倒壊

1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震は、死者6300人、負傷者4万数千人という関東大震災以来最大の被害を生じてしまった。ほどなくして阪神・淡路大震災と呼ばれるようになったこの災害は、われわれに多くの問題を投げかけることになった。

震災の被害は、10万棟以上に達した家屋の倒壊、300件に近い火災の発生、高速道路や新幹線の橋脚の崩壊、西宮市仁川地区における大規模土砂災害、ポートアイランドをはじめとする液状化による被害など、きわめて多岐にのぼった。しかし、なかでも今回の震災を象徴するものを一つだけ指摘せよといわれたら、多数の家屋の倒壊をあげるのが普通であろう。被災地では、全半壊したマンションやビルも少なくなかったが、おびただしかったのは木造家屋の倒壊であった。主要な地震動はわずか10秒程度続いただけだったのに、想像を絶する強い揺れのため、風水害対策には有効な屋根の重い家や、老朽化した二階建ての家を中心に、多くの木造家屋が倒壊してしまったのである。ある報告によれば、地震の犠牲者のうち、およそ9割が家屋倒壊によるものであり、またその6割が即死だったといわれる。大正12年の関東大震災や、昭和23年の福井地震でも多くの木造家屋が倒壊したが、今回の被害はそれらをはるかに上回るものであった。

震災の約1ヶ月後、筆者らは、被災地の神戸市東灘区本山中町2丁目を何度か訪れ、住民の方々に話をうかがった。ここは、家屋の倒壊がもっともいちじるしかった地域の一つであり、ほぼすべての家屋が全壊してしまったブロックさえあった。

その住民の話を2つだけ紹介しておこう。木造二階建てアパートの一階に住んでいた主婦の話では、全身を突きあげる激しい衝撃を感じた後、ほんの2、3秒で天井が落下してきたという。布団の中でまどろんでいた彼女は、とっさにすぐ横のテーブルの下に転がり込んだので打撲傷を受けただけだったが、そのまま倒壊家屋に閉じ込められ、数時間後に近所の人に救助された。また、別の木造二階建てアパートの一階に住み、受験勉強のため徹夜して寝入りばなを地震に襲われた女子学生は、激しい揺れで目覚めると同時に転がるように外に飛び出したが、外に出た瞬間、轟音とともにアパートが崩壊したという。どちらも、揺れがいかにすさまじかったかを如実に示す話である。

ちなみに、次々ページの図は、この元山中町2丁目における家屋の被害を示したもので、全壊家屋は赤、半壊家屋は黄色、一部損壊家屋は緑で示してあるが、あるブロックはほとんどすべての家屋が全壊しており、あまりの全壊率の高さに驚きを禁じえない。

今回の震災では火災の被害もいちじるしかった。そんなに多くの家庭で火気を使用していたとは思われない時刻に地震が発生したにもかかわらず、関東大震災のときの東京

市の火災発生件数（135とも150ともいわれる）を大きく上回ってしまった。しかも、水道管の破裂によって消防活動がほとんど不可能になったため、そのいくつかは延焼火災になり、結局44万平方メートルを焼失した神戸市長田区を中心に、およそ7000棟が焼失してしまった。死者のうちほぼ1割は焼死だったともいう。なお、次図に示した本山中町2丁目でも、地震の翌日に火災が起こって数戸が焼失している。橙色で示したのがその焼失場所である。

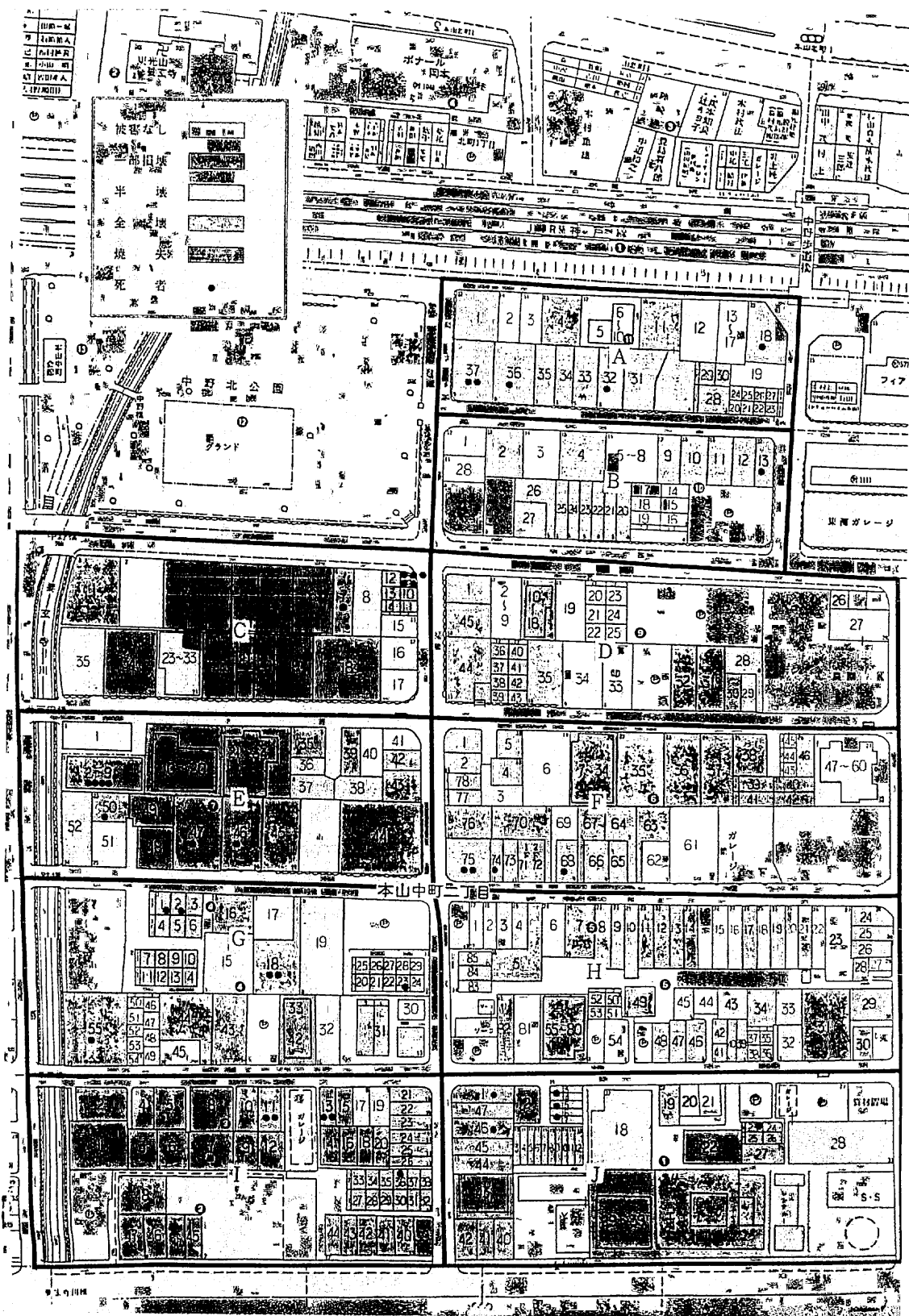
前述のように、関東大震災でも福井地震でも、家屋（とくに木造家屋）の倒壊はいちじるしかった。しかし、それから数十年、わが国の耐震技術は当時とはくらべものにならないほど進歩したため、最近の大地震では、地震とともに地盤が崩れて家屋が横倒しになるケースは少なくないが、地震動そのものによって家屋が壊れたケースは、それほどみられなくなった。だからこそ、家屋が脆弱だった昔は「地震がきたら外に飛び出せ」といわれてきたが、最近は逆に「外に飛び出すな」というのが地震時のノウハウになっていた。今回の地震によって崩壊したのは、ほとんど古い家屋だったという話もあるが、それにしても、こんなに多くの家屋が倒壊するとは、震災前はほとんど誰も予想していなかったのである。

地震学者の話では、今回の地震のように活断層が地表面に現われてきた直下型地震は、過去110年間に10回あったという。そのうち1000人以上の死者が生じた地震が5回あり、なかでも明治24年の濃尾地震は、マグニチュード8（今回はマグニチュード7.2）という桁はずれの大きさであった。こうした統計をみると、今回のような地震はけっしてめったに起こらない珍しいものではなく、過去にも何度か起こってきたし、今後またどこかを襲うかもしれない地震と考えたほうがいい。また、こうした地震は比較的短い期間にまとまって発生する、という地震学者もいる。とすれば、日本列島の地震活動が活発化してきたといわれる現在、地震防災対策の充実はまさに急務の課題だといえるだろう。

震災以来、全国の人たちの地震防災意識は急速に高まっており、各地のデパートの防災用品売り場は大盛況だという。しかし、阪神・淡路大震災で示されたように、浅い地表面で発生し都市を直撃する地震では、家屋（とくに古い木造家屋）の倒壊が一番被害を大きくする。そこで、必要なのはこうした家屋の耐震診断と、危ないと診断されたときのその補強対策である。いままで、一般市民の防災対策といえば、非常持ちだし袋のなかに食料・水・医薬品・懐中電灯などを用意するというパターンであり、それだけしか対策をしていない人も相当数にのぼっていた。家庭に防災用品をそろえるのもけっこうだが、それと同時に、広報活動による意識の啓発と、税制面での優遇措置や補助金・助成金の検討までふくめて、一般家庭における家屋の耐震診断と補強対策の推進をはかることが重要であろう。すでに、東京都や神奈川県の一部の市区町村では、住宅の耐震診断に関する経費に補助金を出す措置を講じている。

また震災当日、筆者は多くのブロック塀や自動販売機が倒壊しているのを各地で目にした。今回の地震は往来に人がいない時刻に発生したためあまり注目されなかったが、地震発生時間によってはこうした危険物の倒壊によって多くの人的被害が出る可能性がある。ブロック塀や自動販売機の危険性は以前からも指摘されており、ある程度対策もたてられているが、この種の危険物の倒壊防止策も、今後いっそうの充実をはかるべき

神戸市東灘区本山中町二丁目の住宅被害



であろう。

1-2. 家具の転倒と危険物の落下

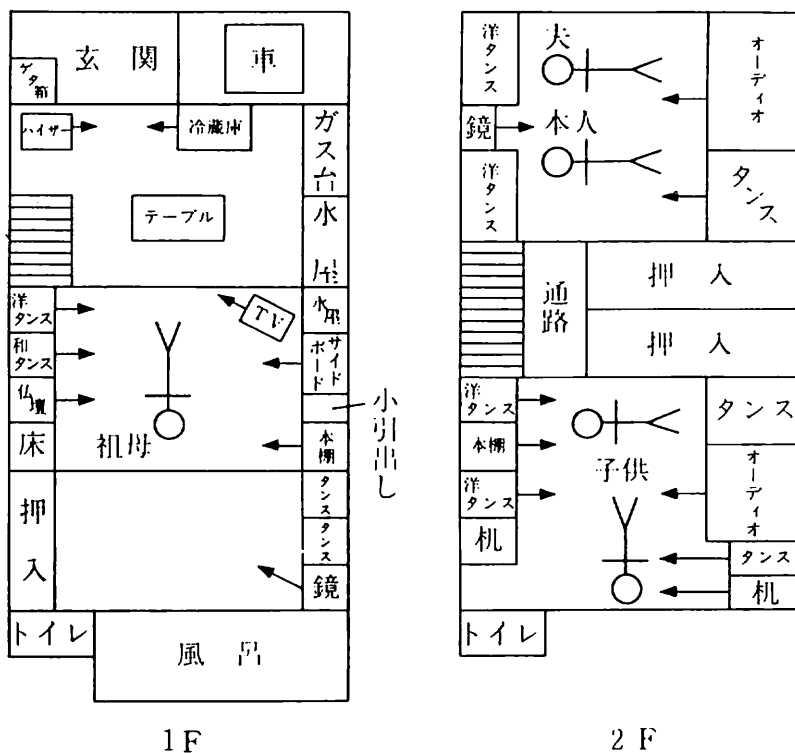
もう一つ、家庭における家具の倒壊も非常に危険である。被災地では、ベッドに寝ていたのに地震の衝撃で顔が天井についたという信じられない話も聞いたし、テレビが居間を横切って台所まで飛んでいったとか、重いピアノが飛び上がったなどという話もたびたび聞いた。先に紹介した筆者の調査では、神戸市東灘区で地震に遭遇した約140人の住民に話を聞いたが、その人たちの平均的行動は次のようなものであり、家具の倒壊が地震被害をいかに大きくするかをうかがうことができる。

今回の地震の発生時刻は早朝の午前5時46分だったため、多くの人はまだ就寝中だった。そこに突然激しい衝撃が襲い、次の瞬間、テレビ・本棚・食器棚・ステレオ・タンスなどありとあらゆる家具が倒れてきた。直下型地震の常として家具類はさまざまな方向に転倒し、テレビや電子レンジは部屋のなかを対角線上にジャンプした。倒壊家屋はもちろん、建物被害が少ない世帯でも家具は凶器と化し、とくにピアノや重いタンスは大きな人的被害を与えた。ほとんどの人は動くに動けず、せいぜい布団の上に座るとか布団を頭からかぶってうつ伏せになり身を守るといった行動しかとれなかった。さして広くない居住スペースに大型化した家具類が所狭しと並んでいる生活習慣が被害を増幅したといえるし、関西には大地震が来ないという意識のため家具類をほとんど固定していなかったことも被害を大きくしてしまった。揺れが収まったあと、多くの方は停電の暗やみのなかで、家族の名を互いに呼び合い、その安否を確認するとともに、散乱した家具類やガラス片を慎重に避けながら、手探りで家具の下敷きになった家族を助け出した。なかには地震と怪我のショックで気絶した人もいたし、二重三重に家具の下敷きになり救出に相当手間取ったケースもあった。その後、着のみ着のまいったん屋外に出た人々が眼にしたのは、様子がまるで違うほど変わり果てた周囲の状況であった。あちこちの倒壊家屋の下からは救いを求める声がしきりに聞こえてきた。そして、多くはわが身をかまわず、そのままこれらの人たちの救出・救助に奔走したという。

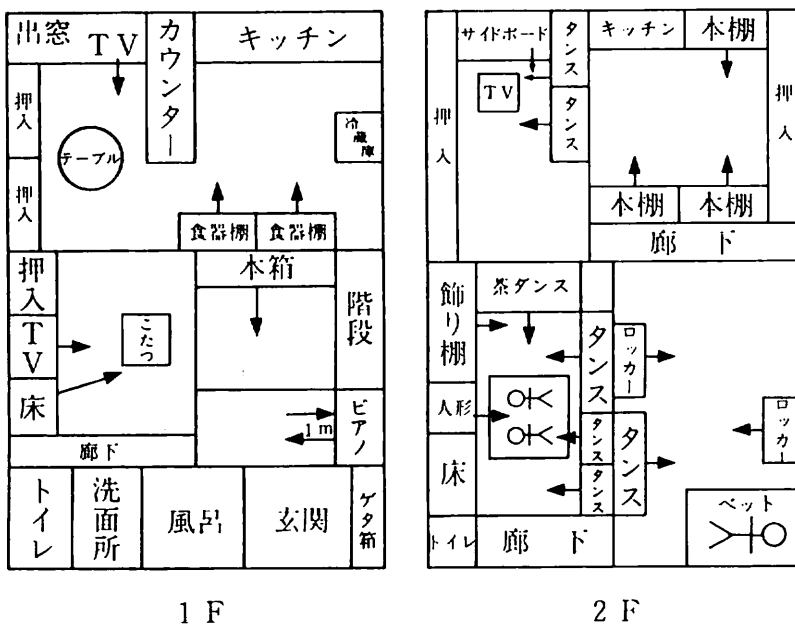
この調査では、被災者のお宅の家具が地震時にどのようなになったかを図示してもらった。図1、図2はその結果の一部である。あるお宅では、地震のとき祖母がすでに起床して一階の仏壇の前で着替えの最中だったが、地震によって洋ダンス、和ダンス、仏壇がいっせいに倒れて頭にあたり負傷してしまった。また家族は2階でまだ布団の中にいたが、ほぼすべての家具が倒壊した。奇跡的にだれも負傷しなかったが、子供の一人が倒れてきた本棚の下敷きになったため、家族で本棚をとりよけて救出したという(図-1)。別のお宅では、地震のとき家族3人が2階で就寝中であつたが、子供の寝室にはさほど家具はなく、また倒壊したタンスやロッカーがベッドに寝ていた子供を直撃しなかった。しかし、隣の両親の寝室には周囲の壁を埋め尽くすほど多くの家具が並び、それらがすべて就寝中の2人を襲ったため、母親のほうで茶ダンスの下敷きになって足に2ヶ月の怪我をしてしまったという(図-2)。

これは、ほんの一例にすぎない。たとえ家屋の倒壊を免れても、かなり多くの方が倒れてきた家具や、その結果として割れたガラス片などによって負傷しているのである。そしてそれは、被害甚大地域の東灘区だけで起こった現象ではない。

図一 1 神戸市東灘区における家具の倒壊状況①



図一 2 神戸市東灘区における家具の倒壊状況②



表－１．阪神・淡路大震災における住宅の被害と人的被害（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
自分自身けがをした	8.6	10.2
家族の中にけがをした者がいた	9.2	7.4
家族の中に亡くなったものがいた	1.4	0.6
亡くなった者やけがをした者はいなかった	82.3	83.3
その他	0.4	1
合計（N）	699	502

	神戸市（％）	西宮市（％）
柱の一部が壊れた	9.9	8.1
壁や天井が壊れた	32.3	30.9
屋根がわらが落ちた	26.5	22.5
ブロック塀、石塀が壊れた	16.8	22.8
ブロック塀、石塀にひびが入った	12.1	19.9
自動販売機が壊れた	1.3	0.6
壁にひびが入った	63.4	60.7
ストーブが倒れた	5.4	5.6
家具が倒れた	83.6	85.4
窓ガラスにひびが入ったり、割れたりした	32.6	25.6
食器棚から食器が落ちて壊れた	84.1	83.4
キッチン、トイレ、風呂などの設備の具合が悪くなった	47.9	40.7
照明器具が破損した	50.9	42.4
棚などからものが落ちて破損した	68.8	73.6
ドアやふすまの開閉が難しくなった	43.8	46.6
その他	6.9	10.2
無回答	0.6	2.2
合計（N）	536	356

	神戸市（％）	西宮市（％）
家屋が全壊した	22.5	28.1
全壊はしなかったが、半壊するなど そのままでは住むことが難しい	29.3	21.9
一部損壊した	41.2	31.5
家屋に被害はなかった	6.2	17.5
その他	0.9	1
合計（N）	699	502

たとえば表1は、筆者が95年8月中旬に兵庫県神戸市と西宮市の被害が大きかった地域の住民（神戸市700人・西宮市500人）に対して行ったアンケート調査の結果である。調査対象者のうち、家屋が全壊した世帯が神戸市で23%、西宮市で28%もあったが、それ以外の家庭でも被害は大きく、たとえば「家具が倒れた」（神戸市84%・西宮市85%）、「食器棚から食器が落ちて壊れた」（神戸市84%・西宮市83%）、「棚などからものが落ちて破損した」（神戸市69%・西宮市74%）などが多くっており、ほとんどの家庭でこうした被害がでたとさえいえる状況である。そして負傷者も、ケガをしたと答えた人が神戸市で9%、西宮市で10%とほぼ10人に1人の割合だったが、そのケガの中身は、「ピアノの足に自分の足をはさまれ足の甲を七針縫った」「食器棚の引き戸のガラスが割れて背中に刺さった」「人形ケースが落ちてきて顔にあたり頭を切った」「台所で皿が落ちて頭をケガした」「棚から落ちてきたもので頭に切傷」「冷蔵庫で額にケガ」など、家具関連のものが圧倒的に多かったのである（以上、表-1）。

いままでの地震でも、家具や棚の上の重量物はしばしば大きな人的被害を与えてきた。とくに昭和53年の宮城県沖地震では仙台市で9000人を越えるけが人が発生したが、その大半は家具の倒壊や落下物による打ち身と打撲、そしてガラスの破片による切り傷だったという。阪神・淡路大震災クラスの地震はまたいつ発生するかもしれないが、最近毎年のように発生している震度5ないし震度6の地震に比べれば、その発生確率はかなり低いといえよう。そして震度5-6クラスの地震では、家具と落下物による被害がほとんど大半を占めているといってもけっして過言ではない。そこで、われわれは家屋を倒壊させる大地震に備えるとともに、家具と落下物が人的被害を生み出すような地震にも備えなければならない。家具の固定や落下危険物の整理こそ、一般家庭における重要な地震対策であることをあらためて強調しておきたい。

2. 住民の情報行動

2-1. 初動態勢と情報の遅れ

今回の震災では、災害情報の収集や伝達についても、少なからぬ問題が発生している。なかでも大きかったのは、国や地方自治体、警察、消防など防災機関の初動態勢が迅速に立ち上がりず、災害の初期段階で被害の全貌がなかなかわからなかった、ということであろう。もちろん、大災害であればあるほど被害状況の迅速な把握は困難になるから、これはある程度やむをえなかったともいえるが、一方、今回ほど行政機関の情報収集体制が乱れたことはなく、その情報収集体制の混乱によって被害状況の把握が非常に困難になってしまった、という事情もあった。

地震は午前6時前の早朝に発生した。都道府県や市町村の地域防災計画では、この時間帯に災害が起これば、職員が自宅から役所に自主参集して、被害情報の収集と伝達にあたることになっているが、今回は職員自身、あるいは職員の家族や自宅も大被害を受け、たとえば神戸市では災害当日に勤務に付けた職員は4割にすぎなかったなど、人員が決定的に不足してしまった。また、被害情報収集用に使われる移動系の防災行政無線を配備していなかった市もあり、電話回線も加入者系ケーブルの切断や異常輻輳などに

よって、多くの電話が不通になってしまったため、防災機関が被害状況を把握することが困難になったのである。

とりわけ、電話被害のいちじるしかったことが、大きな阻害要因になっている。被災地に144万加入あった電話は、交換機の故障によって28万5000回線が不通になり、さらに19万3000回線の加入者系ケーブルが、家屋の全半壊にともなう切断と火災による焼失のため、使用不能になった。一方、物理的障害を受けなかった電話も異常輻輳によって不通になったため、一般回線はほとんど使えない状態になってしまった。たとえば、神戸市内へのアクセス件数と市内からの発信件数の合計は、通常が4万なのに、ピーク時には200万にのぼったというから、通話ニーズは50倍になった計算である。こうした電話事情のために、防災機関が被害状況を把握することが困難になったのである。

現在の防災体制では警察は警察無線、消防は消防無線、自治体は防災行政無線などをもっているため、電話が不通でも必要最低限の情報連絡は可能であるが、災害対策上不可欠な組織と組織のあいだの連絡は、ほとんど電話に頼るしかない。しかも、大災害になればなるほど、一つの組織だけで被害状況を把握することは難しくなるから、組織間の情報連絡が必要になるわけだが、電話が不通だとそれが不可能になってしまう。こういう事情で、被害情報の収集がきわめて遅れてしまったわけである。

2-2. 被災者の電話行動

電話の不通は、被災者にとっても大きな障害になった。今回の震災は家族と一緒にいた早朝に発生したから、家族同士の安否情報ニーズはそれほど高くなかったとはいえ、会社や親戚・知人に安否を伝えたり、親しい人の安否を問い合わせるために、あるいはもっと深刻だが、家族に負傷者が出て消防や病院に連絡するために、地震直後から電話を使おうとした人は少なくなかった。しかし前述のように、電話の障害や異常輻輳のためになかなか電話がかからなかったのである。

たとえば、筆者が神戸市と西宮市で行った前述のアンケート調査（神戸市；700人、西宮市；500人）では、「地震当日に自宅から電話した」という人が神戸市34%、西宮市48%だったが、そのうち「一つも通じなかった」人が神戸市47%、西宮市24%、「一部しか通じなかった」人が神戸市41%、西宮市59%ときわめて多く、逆に「すべて相手に通じた」人は神戸市で10%、西宮市で17%にすぎなかったのである。その結果、電話への評価は非常に低く、「地震当日電話が役立った」という人は神戸市で6%、西宮市で18%しかなく、逆に「役立たなかった」という人が神戸市58%、西宮市60%と圧倒的多数にのぼっていたのである（表-2）。また、こうした人たちが電話を使おうとした目的を見ると、第一は「自分や家族の安否の伝達」（67%）であった。次いで、「親戚・知人の安否の確認」（39%）、「自宅の被害状況」（30%）、「職場や学校の状況の確認」（10%）となっており、地震発生時刻から見て安否ニーズは比較的低かったと思われるものの、やはりこの種のものがトップであった（表-3）。

このように、電話の不通は被災者にとって大変な不便だったが、こうしたとき公衆電話を使えば比較的にかかりやすいのである。これは、災害時の電話利用のノウハウの一つ

表－２．地震当日の電話使用とその評価（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市 (%)	西宮市 (%)
自宅から電話した	33.9	48
自宅の電話が通じなかったので 公衆電話から電話した	24.6	19.1
自宅の電話が使用不可能だったため 公衆電話から電話した	7.2	9.6
公衆電話が壊れていたりして使えな かった	3.7	1.4
公衆電話を使おうとしたが混雑 していたので、あきらめた	5.9	1.2
電話しようとしなかった	18.9	17.3
その他（携帯電話）	5.9	3.4
合計（N）	699	502

家庭の電話は通じたか

	神戸市	西宮市
すべて相手に通じた	10.1	16.6
一部しか通じなかった	40.9	59.3
一つも通じなかった	47.3	23.7
無回答	1.7	0.4
合計	237	241

家庭の電話の評価

	神戸市	西宮市
大変役立った	2.6	8.2
かなり役立った	3.7	9.4
多少役立った	6.9	12
あまり役立たなかった	9.2	10.8
まったく役立たなかった	48.5	38
使っていない	29.2	21.7
合計	699	502

表－３．地震当日に電話を使った目的（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
自分や家族の安否の伝達	67.4	68.3
自宅の被害状況	30.2	28.1
親戚・知人の安否確認	39.3	40.6
医療・救助・救援の要請	1.3	3.2
行政への問い合わせ	0.9	2
水道・ガス・電気・電話の復旧などの問い合わせ	1.7	3.4
交通機関への問い合わせ	0.3	3.4
職場や学校の状況の確認	9.9	15.5
放送局への放送依頼や問い合わせ	0.3	-
商店・企業への問い合わせ	0.6	0.4
その他	1.4	1.8
電話はしなかった	24.5	20.3
合計（N）	699	502

であろう。

公衆電話は、家庭や会社の一般加入電話とちがって、災害時にもかかりやすい「災害時優先電話」の扱いを受けており、当時神戸市内に３４００台あったといわれる公衆電話は、市民の唯一の情報連絡手段になった。筆者はたまたま地震当日大阪市内にいたため、被害の状況がわかってきた午前９時半頃被災地に向けて出発したが、神戸市内の公衆電話設置場所には多くの被災者が列をつくって電話を使っていた。東京や大阪など被災地の外から電話しても、輻輳や通話規制によってほとんど疎通しなかったが、被災地の中から、しかも公衆電話を使えば電話は比較的疎通したのである。前述のアンケート調査でも、「公衆電話から電話した」人が神戸市で３２％、西宮市で２９％いたが、そのうち、「電話をかけてすべて相手に通じた人」が神戸市で２７％、西宮市で２９％と、疎通率は一般加入電話のほぼ２倍になっており、また「１つも通じなかった」人は神戸市で１１％、西宮市で７％と、こちらは一般加入電話の４分の１程度に減っているのである。そしてその結果、公衆電話が役だったという人は神戸市で１８％、また西宮市で２４％になっており、絶対数からすれば多いとはいえないが、一般加入電話にくらべればかなり評価が高くなっている（表－４）。もちろん不要不急の電話は自粛すべきだが、死傷者や事故が発生するなど、どうしても連絡しなければならないときには、公衆電話を使うのがいいということである。

しかし、ここでネックになったのは、停電地域におけるカード公衆電話であった。通話に必要な電力は電話会社が提供する電力で動くから、商用電源が断になっても使えるが、カードの磁気記録の読み取り部分は商用電源によって動いているから、停電になれば

表－４．地震当日の公衆電話の疎通率とその評価（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
電話をかけてすべて相手に通じた	27	28.5
電話をかけたが、1部しか通じなかった	59.9	64.6
電話をかけたが、一つも通じなかった	11.3	6.9
無回答	1.8	-
合計（N）	222	144

	神戸市（％）	西宮市（％）
大変役だった	7.9	5
かなり役だった	10.6	18.5
多少役だった	14.7	16.3
あまり役立たなかった	9.7	6.8
全く役立たなかった	15.9	5.2
使っていない	41.2	48.2
合計（N）	699	502

表－５．公衆電話の問題点（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市	西宮市
公衆電話を利用しようと長時間並んだ	35.1	25.7
公衆電話を探しに遠くまで歩いた	16.7	11
公衆電話が壊れていて困った	15.9	9.2
公衆電話のカードが使えなくて困った	11.7	12
公衆電話の硬貨が詰まって使えなかった	9.2	2.8
自宅の電話が使えなかった	44.6	30.9
自宅の電話がつながりにくかった	19.5	33.3
その他	6.9	6
電話しなかった	14	20.5
合計	699	502

ばカードが使えず、10円硬貨を使って電話するしかなくなってしまう。今回も神戸市内を中心に広範囲に停電があったから、カードがつかえない公衆電話も少なくなかった。そのため、多くの人は10円硬貨を使ったが、これも硬貨が1000枚ほどたまるといっばいになって投入不能になり、公衆電話そのものが使えなくなってしまうのである。しかも道路の渋滞や職員の不足によって硬貨の回収作業もはかどらなかったため、長いあいだ使用不能のままにおかれた公衆電話も少なくなかったという。筆者のアンケート調査を見ると、「公衆電話のカードが使えなくて困った」人が神戸市・西宮市ともに12%、「公衆電話の硬貨が詰まって使えなかった」人が神戸市で9%、西宮市で3%の割合で存在していた（表－5）。

このことは、何も今回の震災ではじめてクローズアップされた問題ではない。過去のいくつかの災害でも起こっており、筆者は以前から、停電時にも一定時間は使用できるよう電話機に乾電池を内蔵するような工夫が必要だと訴えてきたが、今回の震災をきっかけに、NTTは、大災害時には中継局から特殊な信号を電話交換機に発進し、交換機がそれをキャッチして、公衆電話が自動的に無料になるような措置を検討し、近い将来これを実施に移すということである。

2－3. 「関西地震安全神話」の存在

ところで、災害と情報という点からもう一つ大きな問題を提起したのは、京阪神には震災以前、関西は地震に安全だという、いわば「関西地震安全神話」があり、それが被害を大きくしたのではないか、ということである。筆者はすでに十数回被災地を回っているが、お会いした自治体職員や住民の方々から、関西に大地震が来るとはまったく予想もしなかった、という話をしばしば耳にしている。また今回の震災では、4万人を超える負傷者が生じてしまったが、前述のように、そのほとんどが家庭内での負傷であり、主な原因は家具類の転倒や落下によるものであった。

このように多数の負傷者が生じてしまった理由の一つは、「自分のところに大地震は来ない」とか「地震のことなど考えてもみなかった」という人がきわめて多く、そのため家具の固定をしていた人がまったくないというに等しい状況だったからである。先に触れた筆者らのアンケート調査でも、今回の震災以前に関西にも大きな地震がくると思っていたかどうかという質問に対して、「いつかは大きな地震がくると思っていた」人が神戸市で5%、西宮市で6%ときわめて少なく、逆に「被害が出るような地震は来ないと思っていた」人が神戸市21%、西宮市15%、「地震のことなど考えたことはなかった」人が神戸市61%、西宮市65%と、ほぼ8割の住民が地震に無警戒であった（表－6）。

そしてその結果、かれらの家庭内防災対策は必ずしも十分とはいえず、すでに行っていた防災対策は、「家の中の家具やあぶない品物を固定・整理していた」（神戸市2%、西宮市3%）、「非常持ち出し品を用意していた」（神戸市4%、西宮市3%）、「いざという時に備えて食料や水を用意していた」（神戸市3%、西宮市2%）、「災害時に家族が落ち合う先を決めていた」（神戸市1%、西宮市1%）など軒並み低く、一方、「何も（防災対策を）していなかった」という人が、神戸市で68%、西宮市で67%と、いずれも3人に2人の割合にのぼっていた（表－7）。

表－６．関西に大地震が来ると思っていたか（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
いつかは大きな地震が来ると思っていた	4.9	5.8
小さな被害が出る地震ならくるが大きな地震はこないと思っていた	13	13.5
被害が出るような地震はこないと思っていた	20.6	15.3
地震のことなど考えたことはなかった	61.2	64.7
その他	0.3	0.4
無回答	-	0.2
合計（N）	699	502

表－７．地震以前の家庭内防災対策（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
何もしていなかった	68.2	66.9
家の中の家具やあぶない品物を固定・整理していた	1.9	2.6
建物・塀などを補強・改修していた	0.6	1.2
救急医薬品を用意していた	4.1	3.2
消火用の水を汲みおきしていた	2	1.6
消火器を購入していた	5.3	5.6
スコップ・ノコギリ・かなづちなどの修理・工作用具を用意していた	2	2.6
非常持ち出し品を用意していた	4.4	3.4
いざという時に備えて食料や水を用意していた	2.9	2.2
災害時に家族が落ち合う先を決めていた	1.1	1.4
防災訓練にできるだけ参加するようにしていた	0.4	1.4
地震保険に加入していた	0.1	1
避難所を確認したり実際に行ってみたりしていた	0.4	-
ガラスに破碎防止のカバーを張っていた	0.1	0.2
室内用の靴やスリッパを用意していた	0.9	1
懐中電灯を用意していた	25	27.5
その他	4.1	3.6
合計（N）	699	502

要するに、阪神・淡路大震災以前には、東京や静岡では地震対策は重要な問題にちがいないが、関西には大地震は来ないから安心だという地震安全神話を、多くの人が信じていたのである。

しかし筆者の知るかぎり、今回の地震以前に、地震学者をはじめ防災研究者のなかで、神戸もふくめた関西地方は地震の安全地帯だ、などと主張していた人は皆無であった。むしろ、関西は地震危険地帯の一つだと警告していた研究者も少なくなかったし、そこまで強くいわなくても関西がけっして安全でないというのは、防災研究者のいわば常識であった。ところが、市民レベルでは関西には大地震は来ないというのが常識だったわけで、こうした防災研究者と市民の常識のズレが、被害を拡大した一つの要因だったといえよう。

では、関西は地震に安全だという根拠のない神話は、いったいどうして市民のあいだに定着したのだろうか。

その理由の一端は、もともと関西は有感地震が少ないうえ、たまたま最近30～40年のあいだは大きな地震がなかった、ということであろう。気象庁の資料をみると、昭和38年から平成4年までの30年間に、神戸海洋気象台で観測された有感地震の回数は92回（年平均3回）、うち震度3以上の地震が9回（同0.3回）となっている。一方、東京の有感地震回数は1034回（同35回）、震度3以上の地震181回（同6回）だから、これはもうはつきり違っている。大阪も神戸より回数が若干多いとはいえ、大同小異といっていい。この有感地震の少なさが、関西は大地震がないという誤解につながったのであろう。

しかし、関西には直下型地震の原因となる活断層が中部地方に続いて多く分布しているし、地震の歴史をひもとけば明らかなように、昭和初期から20年代にかけて関西とその周辺はしばしば大地震に見舞われてきた。関西在住のある郷土史家によれば、昭和2年の北丹後地震では関西も大揺れで、子供の頃よく母親から聞かされたというし、13年の紀伊水道地震、18年の鳥取地震、19年の東南海地震、21年の南海地震、23年の福井地震、27年の吉野地震などでも神戸は震度4を記録している。だから、その頃までは関西は地震に安全だと思っていた人はそんなに多くなかったはずだという。だとすれば、関西安全神話はたかだかここ40年ほどのあいだに定着したことになる。40年といえば、自然の時間からするとほんの一瞬にすぎないが、個々の人間にとっては、赤ん坊が成人して親になるほどの大きな時の流れであり、地震経験と地震意識が風化するのに十分な時間だったといえよう。

関西安全神話が形成されたもう一つの理由は、地震学者や防災研究者の警告が住民のレベルまで浸透していなかったことにあると思われる。たしかに警告はしていたが、学者の関心が東海地震や首都圏直下型地震にずっと多く注がれていたこと、そしてマスコミの関心もこれらの地震に集中していたこともあって、その警告があまり徹底しなかったということである。東海地震や首都圏直下型地震にあまりにも関心を注ぎ、結果として関西の危険をさほど強調しなかったという意味では、われわれ防災研究者やマスコミ関係者もけっして免責されないであろう。

このことは、筆者らのアンケート調査にも現れている。すなわち、関西には大地震が来ないとか、地震のことなど考えていなかったという人に対して、どうしてそう思って

表－８．なぜ関西に大地震は来ないと思ったか（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
これまで地震がほとんどこなかったから	74.3	59.5
地震がくるとは聞いていなかったから	24.7	11.9
いままでマスコミでほとんど取り上げてこなかったから	20.8	12.4
地震学者が言っていなかったから	9.1	6.2
大きな地震は関東や東海などだけ起こると思っていたから	44.4	58.7
その他	2.8	4
無回答	-	0.5
合計（N）	572	402

いたかをたずねたところ、自分の体験から「これまで地震がほとんどなかったから」と判断していた人が神戸市で74％、西宮市で60％と最も多く、また「いままでマスコミでほとんど取りあげられてこなかったから」（神戸市21％、西宮市12％）、「地震学者が言っていなかったから」（神戸市9％、西宮市6％）など、マスコミや地震学者に責任の一端があると思わせる回答も少なくなかった（表－８）。

いずれにせよ、防災研究者がけっして安全ではないと指摘しているのに、市民の側は安全だと思っている地域は日本には数多くある。極言すれば、大地震に対して危機意識を持っているのは東京、神奈川、静岡などごく一部地域の住民だけだといえよう。阪神・淡路大震災以来、全国各地の防災意識は急速に高まっているのは認めるが、それがどこまで続くか保証のかぎりではない。震災を契機にして顕在化した課題の一つは、こうした地震安全神話を打破して、住民が不断に地震意識を維持するためには果たしてどうすればいいのか、ということである。

２－４．地域住民とボランティアの活躍

ところで、今回の地震で痛感したのは、観測史上はじめてといわれる震度7の激震に遭遇すれば、警察や消防などの防災機関がどんなに努力しても限界があり、住民の一人一人が自分で自分の身を守らざるを得ない、ということであった。また筆者は、震災の被災地において、周囲の倒壊家屋の下から聞こえてくる「助けてくれー」という声に、多くの方が必死になって瓦礫を取り除けたとしばしば聞いたし、また、一般家庭から出た火災を地域の方が必死に消火したと聞いている。

こうした話は、ほかにもいろいろなところで聞くことができた。ある報告によれば、神戸市東灘区では神戸商船大学の学生自治会250人が、付近の住民の人命救助活動を行って100人以上を救出したり、灘区でも高德1丁目付近の多くの住民が家屋の下敷きになった人を救出しているし、長田区西代市場付近の火災に対しては、戸崎通2丁目

の住民200人が自治会長の指揮のもとにバケツリレーによる消火活動を行ったり、東灘区御影西町の火災でも、子供をふくめた300人の住民が学校のプールの水などを使って、近くから出た火災の延焼を防いでいる。こうした地域住民の献身的な活動がなければ人的被害はもっと大きくなっただろうし、火災の延焼ももっと拡大していたであろう。われわれは、被災地の人々のこうした活動が被害を少なくしたということを忘れてはならない。阪神・淡路大震災は、きわめて手痛い代償を払って全国民に多くのことを教えたが、そのもっとも大きな教訓が、大災害時には自分で自分の身を守ること、そして地域の人々が地域社会を守ることがいかに大切であるかということであった。

そのことは、アンケート調査をみても明らかである。先にも触れたように神戸市東灘区では、地震の揺れが収まったあと、多く的人是、着のみ着のまま屋外に出た直後からわが身をかまわず、家屋の下敷きになった近所の人たちの救出・救助に奔走した。筆者らのアンケート調査でも、地震直後に「建物が壊れて下敷きになった」人が神戸市3%、西宮市8%、「建物が壊れて部屋などに閉じ込められた」人が神戸市3%、西宮市3%もあった。次に、こうした倒壊家屋からどうやって脱出したかについては、「自力で外へ出た」人が神戸市8%、西宮市9%、「家族に助け出された」人が神戸市1%、西宮市2%だったが、一方、「近所の人に助け出された」人が神戸市2%、西宮市3%となっていた。パーセンテージはあまり多くないが、これを絶対数にすればけっして小さい数字とはいえない。

また、回答者のなかで「家族を助けたり近所の人を助けるなど救助活動をした」人が神戸市で11%、西宮市で13%もあり、さらに、家屋の下敷きになった人々が救助されて外に出た時間をみると、「1時間以下」がもっとも多く神戸市40%、西宮市61%、次いで「1-2時間」（神戸市15%、西宮市26%）、「2-3時間」（神戸市20%、西宮市9%）となっており、比較的短時間で救出されたことがわかる。これは、近隣での救助・救出活動が活発に行なわれ、しかもそれが非常に有効だったことを示すものである。なお、「警察・消防・自衛隊など救助活動の人に助け出された」人が神戸市でゼロ、西宮市でも0.2%にすぎなかったが、このことは、大都市震災において、少なくとも初期の段階では家屋の下敷きになった人たちの救助活動や消火活動においては、防災機関よりも近隣住民の力を活用すべきであることを示唆するものであろう（表-9）。

もう一つ、阪神・淡路大震災で顕著だったのは、ボランティアの活動であった。今回の震災では、地震直後から全国各地のボランティアが被災地に駆けつけ、さまざまな活動に従事したのである。ある記録によれば、阪神・淡路大震災において1カ月間に活動した一般ボランティアは兵庫県内で延べ62万人。活動区分別にみると、一日あたりのボランティアは避難所が1万2000人、物資の搬入搬出が3700人、炊き出しや地域活動などで4300人と推定され、一日平均のボランティア数は2万人にものぼったという。しかも、こうした一般ボランティアの過半数は大学生、高校生などの若い世代であった。

おそらく、こんなに多くの災害ボランティアに従事したことはかつてなかった現象であり、以前筆者は、わが国では被災者に義捐金を寄付するボランティアは古くから定着しているが、労働奉仕型のボランティアはよほど振興策を講じなければ、それほど定着

表－９．地震直後の状況、救助活動の有無、救助時間（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市(%)	西宮市 (%)
建物が壊れて下敷きになった	3.1	7.8
建物が壊れて部屋などに閉じ込められた	3	3.4
建物は壊れなかったが、家具が倒れて閉じ込められた	9.9	13.1
すばやく外に避難した	7.2	5.8
建物の中にいたが特に何もなかった	15.5	12.2
けがをした	47.5	44.4
外にいた	1.7	2.8
その他	4.4	4.2
無回答	7.6	6.2
合計（N）	0.1	0.2
	699	502

	神戸市 (%)	西宮市 (%)
倒壊した建物から自力で外へ出た	7.9	9
倒壊した建物から家族に助け出された	1.1	2.2
近所の人に助け出された	2	3.2
誰かわからないが助け出された	0.4	0.2
警察・消防・自衛隊など救助活動の人に助け出された	-	0.2
家族を助けたり近所の人を助けるなど救助活動をした	11.2	13.1
自分の家の消火活動をした	0.6	-
近所の家の消火活動をした	2	1.2
特に何もしなかった	7.6	9.2
覚えていない、忘れた	0.9	1
家具などの下から自力で外に出た	11.6	11.4
家の中の片付けをした	11.4	10.4
家族の安否を確認した	35.8	34.5
とりあえず外に出た	46.2	40.4
その他	8.9	11
合計(N)	699	502

	神戸市 (%)	西宮市 (%)
1時間以下	40	60.9
2時間	15	26.1
3時間	20	8.7
4時間	-	-
5時間	5	4.3
6時間	5	-
それ以上	10	-
無回答	5	-
合計（N）	20	23

しないのではないか、と書いたことがある。しかし今回の震災ではその予想が見事にはずれ、筆者の周辺でも、地震の数日後から寝袋だけをもって被災地に出向き、数週間ボランティア活動をした学生が少なくなかった。

もちろん、一口にボランティア活動といっても、赤十字や社会福祉協議会などいわば半官半民の団体が行うものから、民間企業や宗教団体などが行う活動や近所の主婦の炊き出しなどまったくの個人が行うものまで種々雑多であるし、またその活動内容も多種多様である。

今回も社会福祉協議会が1月23日から大阪府に救援合同対策本部を設置するとともに、西宮市に現地事務所を設置して活動を開始したが、ここでは大阪府の社協職員を常駐させ、洗濯サービスや入浴サービス、被災者の世話などを行ったほか、ボランティア活動中の事故に対応するため、新しい保険を創設したりしている。また、日本赤十字社も、地震当日の1月17日に職員や救護班を現地に派遣するとともに、災害義捐金の受け付けを開始した。救護班は救護所の設置や避難所への巡回診療を実施し、21日からは効果的な救護活動を行うため、神戸市、西宮市、芦屋市などの12個所に拠点救護所を設置することにした。一般ボランティアについても、兵庫県支部内の赤十字ボランティアセンターで救護班の補助、救援物資の積み降ろし、ゴミの収集運搬、安否調査業務など多様な仕事を行っている。一方、西宮ボランティアネットワークのように、西宮市の災害対策本部と各種のボランティア団体とのパイプ役になって、ボランティアの活動と行政の仕事を調整した組織もあり、さらには、いくつかの宗教団体や学生団体、地域の自治会組織、防火団体などがボランティア活動を行った事例も数えきれない。いままでみられなかったケースとして、「被災ベトナム人救援連絡会議」のように、外国人を対象としたボランティア組織も数多く結成された。

こうしたさまざまなボランティアが行った活動内容も多種多様であった。ある文献（桜井猛『ボランティア活動のすすめ』けやき出版）によれば、今回の震災で行われたボランティア活動は非常に多岐にわたったが、その主なものは、「炊き出し・弁当の配付」（ボランティア団体が材料を購入し、地域や避難所で実施。松本市は大型バスと給水車を仕立てて支援した）、「家の片づけ」（被災した家の中の片付けや家屋の補修の手伝い）、「生活支援」（主婦団体が避難所の人々の洗濯を行う。買い物手伝いや御用聞き活動など）、「支援拠点・避難所・ボランティアセンターでの手伝い」（ボランティアセンターの受付、事務。避難所の館内整理、清掃。市役所などでの救援物資の仕分け）、「安否確認・ニーズ調査・高齢者等の巡回訪問」（ひとり暮らしや高齢者、障害者などへのサービス）、「介護」（洗髪、通院補助、歩行補助、マッサージなどを避難所や在宅で行う）、「救護所の開設」（医療団体によるサービス。カトリック医療施設協会はおよそ30の病院が協力して灘区、長田区で活動した）、「心のケア」（24時間電話相談、被災者の話し相手、子供の遊び相手など）、「情報提供」（避難所でのニュースの発行。ピースボートの「デイリーニュース」は配付数1万部）、「医療ボランティア」（外科、内科、精神科などの医師や看護婦が被害の大きかった地域で活動）、「建築・土木ボランティア」（建築や土木の専門家が被災した建物や土木構造物の診断や応急措置を行う）などであった。

このうち、情報に関するボランティア活動をもう少し詳しく紹介すると、関東大震

表－１０．被災者が受けたボランティア活動（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市（％）	西宮市（％）
自宅周辺のあとかたづけ	9.9	5.6
けがや病気の手当	5.6	2
炊事・洗濯の手伝い	20.6	7.2
義援物資の仕分け・運搬	29.5	19.3
宅配便関係	0.9	0.8
掃除	2.1	0.6
引越の手伝い	1.7	1.2
話し相手	2.7	1.4
水の運搬・給水	18	17.3
風呂・入浴サービス	9.4	2.2
その他	3.7	3.4
特にしてもらったことはない	44.6	61.6
合計（N）	699	502

災当時とちがって、今回の震災では、新聞や放送が生きていたため震災直後からおびた
だしい量の情報が流れたが、それらはたいい震災の状況を全国の視聴者に伝えるもの
であって、被災地のなかで被災者が求めるきめ細かい情報となると、なかなか提供され
なかったのが実状である。こうした地域密着情報をもっぱら提供したのが情報ボラン
ティアであり、たとえば非政府組織（NGO）のピースポートでは、東京から印刷機と発電
機を持ち込んで、１月２５日から神戸市長田区に向けて生活情報かわら版「デイリーニ
ュース」の発行を始めた。これは連日８００部を発行するほど大規模なものだったが、
そのほかにも隔日発行の「なんでも・かわら版」（中央区内の避難所などに約２００部
発行）、「ひなん新聞」（避難者自身が仲間の人たちとともに週１回発行した手書きスタ
イルの新聞）などさまざまなものがあって、こうした足で集めた情報が一般紙や行政広
報紙ではカバーしきれないようなきめ細かい情報を、被災者に提供したのである。

おびただしい数のボランティアが従事したこれらの活動は、被災者からも高く評価さ
れている。しばしば触れてきた筆者のアンケート調査によれば、今回の震災において被
災者が受けたボランティア活動の内容は、表－１０のようになっていた。これをみると、
「炊事・洗濯の手伝い」（神戸市３３％；西宮市１７％）、「義捐物資の仕分け・運搬」（神
戸市４３％；西宮市３７％）、「自宅周辺のあとかたづけ」（神戸市１５％；西宮市１１％）
などが比較的多くなっている。とくに神戸市では「ボランティアの世話になったことは
ない」という人が半数以下であり、このことはいかに神戸市でボランティア活動が活発
に行なわれたかを示すものであるが、一方、西宮市では世話にならなかった人が６２％
もあり、また筆者らが１９９５年３月に芦屋市と宝塚市で行った同種の調査では、世話
にならなかったという人が芦屋市で５３％、宝塚市で８２％にものぼっていた。これを
みると、「災害ボランティア元年」とマスコミにとりあげられるほど、多くのボランテ

ボランティア活動が行われた割には少ない数字とも思われるし、とくに宝塚市ではそれがいえる。このことは、マスコミの震災報道が神戸市に集中していたため、ボランティアの関心が宝塚市まで及ばなかったことを示しているのであろう。

けれども、こうしたボランティア活動に対する被災者の評価は非常に高く、表－１１に示すように、「(今回の) ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う」という人が神戸市で９２％、西宮市で９０％もあったし、また芦屋市でも９３％、宝塚市でも８７％にのぼっており、また「(今回の経験から) ボランティア活動は必要だ」という人は、いずれの市でも９割を大きく越えていた。ほとんどすべての人がボランティアを高く評価しているということである。

このように、今回の震災では、ボランティア活動はきわめて有効に機能したといえよう。しかし、まったく問題がなかったかというわけではなかった。たとえば、全国各地にはボランティアをしたいという意志はあるが、仕事や学業の都合でできないという人も少なくなかったはずである。現に、今回のボランティア活動の主体であった大学生たちは、４月の新学期を前にして、３月末にはその多くが撤退してしまったのである。もし、大学のカリキュラムの一つとしてボランティア活動自体を教科として認め、

表－１１． ボランティア活動の評価（東京大学社会情報研究所調査より）

	神戸市 (%)	西宮市 (%)
ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う	91.8	89.6
ボランティア活動はあまり役に立たなかったと思う	3.4	2.8
ボランティア活動はかえって迷惑だったと思う	-	0.6
ボランティア活動はみたことがないのでわからない	3	5.8
その他	1.4	1.2
無回答	0.3	-
合計 (N)	699	502

	神戸市 (%)	西宮市 (%)
絶対必要だと思う	66.2	65.1
必要だと思う	30.9	29.1
ボランティアはあまり必要ない	1.4	3.4
ボランティアはまったく必要ない	-	0.6
その他	1.1	1.8
無回答	0.3	-
合計 (N)	699	502

ボランティアに従事する学生を出席扱いするとか単位を与える制度があれば、こうした事態は避けられたのではないだろうか。事情は企業も同じであり、災害ボランティアに従事する社員にボランティア休暇を与えるなどという制度があったらよかったと思われる。今回の震災では、北海道旭川市などにおいて特例として設けられたが、こうした制度をもっと広く普及していくことが必要であろう。

そして第2は、「災害ボランティア共済制度」あるいは「災害ボランティア保険」の確立ということである。幸い今回は不幸な事例がなかったようだが、ボランティアに事故が起こったときその補償をどうするかという問題であり、そのため行政機関はボランティア活動に依存しにくいという事情があった。しかし、すでに災害以外にはボランティア補償制度が存在しているし、静岡県や神奈川県などいくつかの自治体では、独自に防災ボランティア補償制度を設けてもいる。また新聞記事によれば、大蔵省でも今回の震災を機に災害ボランティア保険の創設を検討しているともいう。ボランティア習慣にとほしいわが国に防災ボランティアを定着させるには、このように、いざというときの補償を事前に考えておくことが望ましいと考えられる。

第3の問題は、防災ボランティアの組織化と訓練の実施ということである。今回の震災では、震災直後に神戸市や西宮市がボランティア窓口をつくってボランティアを募集したが、すぐに申し込みが殺到して神戸市ではその数が7000にものぼり、医療関係者を除いてはこれを謝絶するという事態が起こった。また、ボランティア活動を有効に行うためには個人や団体に関するコーディネーションが不可欠であるが、とくに初期にはそれが必ずしも円滑に行われたとはいえず、ある地域では山のような仕事を抱えたボランティアがいたり、別の地域ではほとんど仕事が見つからない人もいたようである。緊急時に殺到するボランティアを迅速に組織化するためには、防災ボランティアとして活動する可能性のある集団を、事前に日頃から組織化しておくことが望ましい。これも新聞によれば、自治省では防災ボランティアに対する各種講習会の開催のため講師を派遣したり、一定の課程を修了した人が希望すればあらかじめ災害ボランティアの登録を受け付けたりするプログラムを検討中ということである。今回の震災を契機に、以上のような問題をクリアして、さらに効率的なボランティア活動を促進することが必要だと思う。

阪神・淡路大震災と芦屋市職員の参集行動

The Emergency Response of Staffs in Ashiya City Government at the
Great Hanshin - Awaji Earthquake

黒田 洋司*
Hiroji Kuroda
廣井 脩
Osamu Hiroi

1. 調査の概要

(1) 調査目的

戦後最大の自然災害による被害をもたらした阪神・淡路大震災、その応急対策の最前線に立ったのは被災地を管轄する市町村（今回の震災で激甚な被害を受けた地域には「村」は存在しないが、ここでは基礎的な地方自治体の総称として「市町村」という用語を用いる。）である。災害対策基本法及び防災基本計画において市町村は、災害応急対策の一次的な責務を負うことを規定され、庁舎の被災、ライフラインの途絶といった劣悪な活動環境においてもその責務を果たすための最大限の活動を求められるのである。

さて、今回の大震災では、特に初動期において十分な数の職員を確保できず、市町村の応急対策業務の円滑な遂行を妨げる大きな要因のひとつとなったと指摘されている。平成7年1月17日、この日被災地では、死者、負傷者、生き埋め者、避難者が同時に多数発生し、一方で、電気、ガス、水道の停止、電話の不通・輻輳、道路の寸断・渋滞等により平常時の社会システムが機能不能に近い状態に陥っていた。そのような中で、市町村には被害情報の収集・伝達、避難所の開設、食料や水、生活必需品の確保及び配付、遺体の処置など多種・大量の応急対策業務の遂行が求められたのであるが、職員が十分確保できないことは市町村の責務を果たすにあたって大きな制約となったのである。

では、その時、市町村の職員は「職場へ向かう」（参集する）ということについて、ど

* 黒田洋司：（財）消防科学総合センター 廣井脩：東京大学社会情報研究所

キーワード：阪神・淡路大震災、芦屋市、参集、居住地、家族、性差、地位

のような意識を持ち、どのように行動したのであろうか。1月17日は連休明けの火曜日、地震の発生は午前5時46分、大部分の職員は何もなければやがて目覚め、いつものように出勤していったはずである。激震は、このようないつもの行動をどのように変えたのであろうか。本調査は、これを芦屋市職員へのアンケート調査を通じて明らかにすることを目的とするものである。なお、本報告では、特に地震当日の参集状況を中心に記述していくこととし、他の視点からの分析は別の機会に譲りたい。

（２）調査の概要

本調査の概要と調査項目は、以下のとおりである。なお、単純集計の結果は本文中に示し、職員の参集に関する意見等（イ－３）－㉔）として130名余から寄せられた回答は本文中に適宜記載した。

ア 調査の概要

- １）調査対象地域：兵庫県芦屋市
- ２）調査対象者：芦屋市職員（消防、病院医師等を除く。）680人
- ３）調査方法：アンケート調査（市において配付、回収は郵送）
- ４）調査期間：平成7年8月下旬～9月上旬
- ５）回収数及び回収率：342票（50.3％）

イ 調査項目

１）基本属性

- ①所属（震災前）＜問1＞
- ②職場での地位（震災前）＜問2＞
- ③性別＜問3＞
- ④年齢（震災時点）＜問4＞
- ⑤通常の通勤手段（震災前）＜問5＞
- ⑥通常の通勤時間（震災前）＜問6＞
- ⑦居住地（震災前）＜問7＞
- ⑧所属職員の男女比（震災前）＜問8＞
- ⑨身体の状態（震災前）＜問9＞
- ⑩同居家族数（震災前）＜問10＞
- ⑪同居家族内における乳幼児、高齢者、障害者等の弱者の有無（震災前）＜問11＞
- ⑫共働きの状況（震災前）＜問12、付問1＞
- ⑬住居形態（震災前）＜問13＞
- ⑭家庭での地震への備え（震災前）＜問14＞

2) 震災による被災状況及び行動（参集に関するものを除く。）

- ①地震発生時の居場所＜問15＞
- ②自分自身の負傷状況（1月17日時点）＜問16＞
- ③同居家族の負傷状況（1月17日時点）＜問17＞
- ④家財道具の被害状況（1月17日時点）＜問18＞
- ⑤家屋の被害状況（1月17日時点）＜問19＞
- ⑥死亡者、安否未確認者の有無（同居家族以外、1月17日時点）＜問20＞
- ⑦1月17日の一夜を明かした場所（自分自身）＜問21＞
- ⑧1月17日の一夜を明かした場所（同居家族）＜問22＞
- ⑨1月中の主な生活の場所（自分自身）＜問23＞
- ⑩⑨での家族との生活状況＜問24＞

3) 参集に関する意識、行動

- ①地震後はじめて公務につく前に行った行動＜問25＞
- ②家庭を離れて職場に向かうことへのためらいの程度についての意識
（はじめて公務につく前の時点）＜問26＞
- ③自分自身の参集が職場にもたらす影響についての意識
（はじめて公務につく前の時点）＜問27＞
- ④参集のため自宅を出た時期＜問28＞
- ⑤はじめて公務についた時期＜問29＞
- ⑥参集を判断した主なきっかけ＜問30、付問1＞
- ⑦はじめて公務についた場所＜問31＞
- ⑧はじめて公務についた場所の状況＜問32＞
- ⑨はじめて公務についた場所に向かった際の参集手段＜問33＞
- ⑩はじめて公務についた場所に向かった際の所要時間＜問34＞
- ⑪はじめて公務についた場所に向かった際の他人からの協力の有無等
＜問35、付問1＞
- ⑫はじめて公務についた場所に向かう途上での被災現場での活動の有無等
＜問36、付問1、付問2、付問3＞
- ⑬はじめて公務についた場所に向かった際の障害＜問37＞
- ⑭はじめて公務についた場所に向かった際の家族内弱者への措置＜問38、付問1＞
- ⑮1月17日に参集できなかった理由＜問39＞
- ⑯災害時の職員の参集に関する意見等（自由回答）＜問40＞

(3) 芦屋市の概況及び被害状況

ア 芦屋市の概況

- 1) 面積：17.31km²
- 2) 人口：87,366人（平成7年1月1日現在、住民基本台帳人口＋外国人登録人口）
- 3) 世帯数：34,680世帯（平成7年1月17日現在）

イ 被害状況

- 1) 死者：433人（平成7年12月25日現在）
（芦屋市内での死亡者数（他市市民13人を含む。））
- 2) 火災：発生件数；13件（1月17日～19日）
：焼損棟数；23棟（1月17日～19日）
：焼損床面積；3,645m²
- 3) 建物被害（平成7年9月30日現在）
：全壊 4,722棟 7,588世帯 17,663人
：半壊 4,060棟 9,926世帯 26,784人
：一部損壊 4,757棟 14,478世帯 37,160人
- 4) 避難所数、避難者数、避難世帯数（1月19日 ピーク時）
：52箇所 20,960人 8,188世帯
- 5) ライフライン
：水道；地震直後市内全域で断水状態
：ガス；地震直後市内全域で供給停止
：電気；地震直後市内全域で停電

出典資料：『阪神・淡路大震災における被害状況及び復旧状況等の概要について』
平成7年12月 芦屋市

(4) 回答者の属性

本調査の回答者の属性（震災での被災状況及び行動を含む。）は以下のとおりである。

ア 基本属性

①所属（震災前）

防災主管課（本庁）	0.9%	3人
土木・建設関係課（本庁）	15.2	52
保健医療福祉関係課（本庁）	11.4	39
水道部局（本庁）	5.8	20
広報主管課（本庁）	0.3	1
その他の課（本庁）	36.0	123
出張所などの出先機関	28.1	96
不明	2.3	8
計（N）	100.0	342

②職場での地位（震災前）

係員	42.7%	146人
係長相当職	25.1	86
課長補佐相当職	8.5	29
課長相当職以上	21.6	74
不明	2.0	7
計（N）	100.0	342

③性別

男	74.3%	254人
女	24.9	85
不明	0.9	3
計（N）	100.0	342

④年齢（震災時点）

29歳以下	11.4%	39人
30～39歳	17.3	59
40～49歳	42.7	146
50～59歳	26.3	90
不明	2.3	8
計（N）	100.0	342

⑤通常の通勤手段（震災前）（複数回答）

徒歩	23.7%	81人
自転車	10.5	36
バイク	14.9	51
自家用車	19.9	68
バス	14.3	49
電車（地下鉄を含む。）	54.1	185
その他	0.3	1
不明	1.2	4
計（N）	100.0	342

⑥通常の通勤時間（震災前）

15分未満	21.6%	74人
15分以上30分未満	23.1	79
30分以上60分未満	29.8	102
60分以上	24.3	83
不明	1.2	4
計（N）	100.0	342

⑦居住地（震災前）

市内	27.8%	95人
市外	70.8	242
不明	1.5	5
計（N）	100.0	342

⑧身体状況（震災前）

健常	92.1%	315人
病弱又は身体に障害有	7.0	24
不明	0.9	3
計（N）	100.0	342

⑨同居家族数（震災前）

0人	5.0%	17人
1人	12.0	41
2人	17.3	59
3人以上	64.9	222
不明	0.9	3
計（N）	100.0	342

⑩家族内の乳幼児、高齢者、障害者等の弱者の有無（震災前）（複数回答）

乳幼児（小学生未満）	14.3%	46人
小学生	28.0	90
65歳以上の高齢者	22.7	73
身体障害者	4.7	15
その他自力での行動が困難な人	2.5	8
不明	46.0	148
計（N）	100.0	322

*弱者のいずれかがいる人は 174人（54.0%）

⑪共働きの状況（震災前）

共働きである	44.4%	152人
共働きではない	39.2	134
不明	16.4	56
計（N）	100.0	342

⑫共働きの相手の職業（震災前）

警察職員	-%	0人
消防職員	1.3	2
幼稚園、小、中、高校職員	5.3	8
老人ホーム、保育所などの社会福祉施設職員（法人職員を含む。）	4.6	7
医者、看護婦等の医療関係者（公立、民間を問わない。）	9.2	14
上記に該当するもの以外の公務員	35.5	54
会社員（パートタイムを含む。）	34.2	52
自営業	3.3	5
その他	5.9	9
不明	0.7	1
計（N）	100.0	152

⑬住居形態（震災前）

持ち家（一戸建て）	54.1%	185人
持ち家（マンション等集合住宅）	28.1	96
民間賃貸（一戸建て）	2.0	7
民間賃貸（アパート、マンション等集合住宅）	9.4	32
公務員宿舎	0.6	2
その他	4.1	14
不明	1.8	6
計（N）	100.0	342

⑭家庭での地震への備え（震災前）（複数回答）

家具の転倒防止策の実施（固定等）	3.8%	13人
非常持ち出し品の準備	1.8	6
消火器の準備	15.2	52
災害時の家族の役割分担、連絡方法等の確認	0.9	3
家屋の耐震補強	0.9	3
その他	1.5	5
特に行っていなかった	82.2	281
不明	2.0	7
計（N）	100.0	342

イ 震災による被災状況及び行動（参集行動を除く。）

①地震発生時の居場所

自宅	95.6%	327人
職場	-	0
その他	2.9	10
不明	1.5	5
計（N）	100.0	342

②自分自身の負傷状況（1月17日時点）

特にケガはなかった	83.6%	286人
軽傷を負った（自宅等での応急 処置程度）	12.0	41
中程度の傷を負った（医療機関 での通院治療程度）	2.0	7
重傷を負った（医療機関入院）	0.3	1
不明	2.0	7
計（N）	100.0	342

③同居家族の負傷状況（1月17日時点）

だれも特にケガはなかった	68.9%	222人
軽傷を負った（自宅等での応急 処置程度）者がいた	15.2	49
中程度の傷を負った（医療機関 での通院治療程度）者がいた	2.5	8
重傷を負った（医療機関入院） 者がいた	0.3	1
死亡した者がいた	0.3	1
不明	12.7	41
計（N）	100.0	322

④家屋の被害状況（1月17日時点）

特に被害はなかった	16.4%	56人
一部損壊	45.6	156
半壊	21.1	72
全壊	15.8	54
不明	1.2	4
計（N）	100.0	342

⑤死亡者、安否未確認者の有無（同居家族以外、1月17日時点）

死亡者、安否未確認者がいた	15.8%	54人
いなかった	81.3	278
不明	2.9	10
計（N）	100.0	342

⑥ 1 月中の主な生活の場所（自分自身）

自宅	34.8%	119人
避難所	7.3	25
実家・親戚宅	5.0	17
友人・知人宅	0.6	2
職場	46.5	159
その他	3.5	12
不明	2.3	8
計（N）	100.0	342

2. 調査結果

以下、調査結果について記していく。記述にあたっては、まず、単純集計結果を基に参集行動の概要を把握する。次に、地震当日の参集状況を中心に以下の観点から分析した結果を記述する。

- ①市內居住者と市外居住者の参集行動の比較
- ②家族の状況の相違による参集行動の比較
- ③居住地の近辺又は参集途上で公務とは別に救助活動等に携わった職員の参集行動
- ④男性と女性の参集行動の比較
- ⑤職場での地位による参集行動の比較
- ⑥自分自身が負傷したり、病弱等のハンディキャップのある職員の参集行動

（1）参集行動の概要（単純集計）

ア 地震後はじめて公務につく前に行った行動

まず、地震発生から参集にいたるまで、どのような行動をとったのかについて尋ねた。その結果、「身内（同居している家族以外）の安否確認」が50.6%と最も多く、次いで、「自宅の整理・補強」41.8%、「友人・知人の安否確認」20.8%などとなっている。「近隣の救出・消火・応急手当等」に携わったと答えた人は17.5%であった（表1）。

表1 地震後はじめて公務につく前に行った行動（複数回答）

同居している家族の救出	13.5%	46人
被災した家族の手当	5.6	19
自宅の消火	0.6	2
同居している家族の居場所の確保（避難所への避難等）	19.6	67
身内（同居している家族以外）の安否確認	50.6	173
友人・知人の安否確認	20.8	71
近隣の救出・消火・応急手当等	17.5	60
自宅の整理・補強	41.8	143
その他特に行ったこと	9.6	33
不明	12.0	41
計（N）	100.0	342

イ 家庭を離れて職場に向かうことへのためらいの程度

（はじめて公務につく前の時点）

はじめて公務につく際に、家庭を離れて職場に向かうことについてためらいをどの程度感じていたかを尋ねたところ、「特に感じていなかった」という人が35.4%と最も多く、「強く感じていた」、「強くではないが感じていた」という人はそれぞれ27.6%であった（表2）。

表2 家庭を離れて職場に向かうことへのためらいの程度

（はじめて公務につく前の時点）

強く感じていた	27.6%	89人
上記ほどではないが感じていた	27.6	89
特に感じていなかった	35.4	114
覚えていない	1.9	6
不明	7.5	24
計（N）	100.0	322

ウ 自分自身の参集が職場にもたらす影響についての意識

（はじめて公務につく前の時点）

自分自身の参集が職場にもたらす影響についての意識について尋ねたところ、「自分が

いなくては応急対策の成果に重大な支障をきたすだろうと感じていた」人が最も多く31.6%、次いで「覚えていない」23.1%、「自分がいなくても応急対策の成果に大きな違いはないだろうと感じていた」20.8%などとなっている（表3）。

表3 自分自身の参集が職場にもたらす影響についての意識
（はじめて公務につく前の時点）

自分がいなくても応急対策の成果に大きな違いはないだろうと感じていた	20.8%	71人
自分がいなくては応急対策の成果に重大な支障をきたすだろうと感じていた	31.6	108
覚えていない	23.1	79
その他	16.7	57
不明	7.9	27
計（N）	100.0	342

エ 参集のため自宅を出た時期

参集のため自宅を離れた時期については、「1月19日以降」が最も多く24.9%、次いで「17日午前中」（30分以内、1時間以内、2時間以内を除く。）19.0%、「1月18日」16.4%、「地震発生から2時間以内」（30分以内、1時間以内を除く。）15.5%などとなっている。1時間以内に参集のため自宅を出たという人は「地震発生から30分以内」を含め17.8%であった（表4）。

表4 参集のため自宅を出た時期

地震発生から30分以内	7.9%	27人
地震発生から1時間以内 （上記を除く。）	9.9	34
地震発生から2時間以内 （上記を除く。）	15.5	53
1月17日午前中	19.0	65
1月17日午後	4.1	14
1月18日	16.4	56
1月19日以降	24.9	85
覚えていない	0.3	1
不明	2.0	7
計（N）	100.0	342

オ はじめて公務についた時期

職場等に到着し、はじめて公務に従事した時期について尋ねたところ「1月19日以降」という人が最も多く28.9%、次いで「1月17日午前（2時間以内を除く。）」24.9%、「1月18日」17.8%、「地震発生から2時間以内」14.6%などとなっている。17日中に公務に従事した人は50.6%である（表5）。

表5 はじめて公務についた時期

地震発生から2時間以内	14.6%	50人
1月17日午前（上記を除く。）	24.9	85
1月17日午後	11.1	38
1月18日	17.8	61
1月19日以降	28.9	99
覚えていない	0.3	1
不明	2.3	8
計（N）	100.0	342

カ 参集を判断した主なきっかけ

参集を判断した主なきっかけについて尋ねたところ、「ラジオやテレビの報道で震度や被害の情報を得て参集した」と答えた人が27.8%、「大きな揺れで被害が出ているだろうと判断し参集した」と答えた人が26.0%で同程度となっている（表6）。

「市からの指示を受けて参集した」と答えた人（7.9%、27人）に対して、どのような形で指示を受けたかを尋ねたところ、「電話で指示があった」が70.4%と最も多く、「市に電話をかけて指示を受けた」という人は18.5%であった（表7）。

表6 参集を判断した主なきっかけ

大きな揺れで被害が出ているだろうと判断し参集した	26.0%	89人
近隣の災害の状況を見て参集した	15.8	54
ラジオやテレビの報道で震度や被害の情報を得て参集した	27.8	95
同僚と相談して参集した	4.4	15
市からの指示を受けて参集した	7.9	27
覚えていない	1.8	6
その他	11.7	40
不明	4.7	16
計（N）	100.0	342

表7 「市からの指示を受けて参集した」人の指示の伝達形態

直接口頭で指示を受けた	7.4%	2人
電話で指示があった	70.4	19
市に電話をかけて指示を受けた	18.5	5
その他	3.7	1
不明	-	0
計 (N)	100.0	27

キ はじめて公務についた場所の状況

参集してはじめて従事した場所については、「所属」が50.9%で約半数を占め、次いで「所属以外の市の施設」が32.5%となっている（表8）。

従事した場所に到着した際の状況について尋ねたところ、「すぐに業務に着手できた」と「物が散乱し、すぐには業務に着手できなかった」と答えた人がそれぞれ36.5%、35.7%とほぼ同数となっている（表9）。

表8 はじめて公務についた場所

所属	50.9%	174人
所属以外の市の施設	32.5	111
その他	12.9	44
不明	3.8	13
計 (N)	100.0	342

表9 はじめて公務についた場所の状況

物が散乱し、すぐには業務に着手できない状況だった	35.7%	122人
避難者や報道機関が殺到し、すぐには業務に着手できない状況だった	14.3	49
既に職員は業務に奔走し、何をすべきかの指示が得られない状況だった	23.7	81
すぐに業務に着手できた	36.5	125
その他	5.8	20
不明	3.8	13
計 (N)	100.0	342

ク はじめて公務についた場所に向かった際の参集手段

はじめて公務に従事した場所に向かった際の交通手段は、「自家用車」が32.7%で最も多く、次いで「徒歩」30.1%、「自転車」19.0%、「バイク」18.1%などとなっており、平常時の手段とは大きく異なっている（表10）。

表10 はじめて公務についた場所に向かった際の参集手段（複数回答）

徒歩	30.1%	103人
自転車	19.0	65
バイク	18.1	62
自家用車	32.7	112
バス	1.2	4
電車（地下鉄を含む。）	6.7	23
その他	3.5	12
覚えていない	-	0
不明	1.8	6
計（N）	100.0	342

ケ はじめて公務についた場所に向かった際の所要時間

参集時間については、「30分未満」と「1～3時間未満」がそれぞれ27.5%、26.9%とほぼ同数となっている。「3時間以上」要したという人は23.1%であった（表11）。

表11 はじめて公務についた場所に向かった際の所要時間

30分未満	27.5%	94人
30分以上60分未満	19.9	68
1時間以上3時間未満	26.9	92
3時間以上	23.1	79
覚えていない	0.9	3
不明	1.8	6
計（N）	100.0	342

コ はじめて公務についた場所に向かった際の他者からの協力の有無等

参集時に他者から協力を受けたかどうかを尋ねたところ、8割以上の人が「受けなかった」と回答している（表12）。

協力を受けた人（12.6%、43人）に対して、誰に協力を受けたのかを尋ねたところ「市職員」が65.1%で最も多くなっている（表13）。

表12 はじめて公務についた場所に向かった際の他者からの協力の有無等

協力を受けた	12.6%	43人
協力は受けなかった	80.4	275
不明	7.0	24
計（N）	100.0	342

表13 「協力を受けた」人の協力を受けた相手（複数回答）

市職員	65.1%	28人
家族・親戚（市職員を除く。）	20.9	9
友人・知人（市職員を除く。）	9.3	4
見知らぬ他人	7.0	3
その他	-	-
不明	2.3	1
計（N）	100.0	43

サ 参集途上における被災現場での活動の有無等

参集途上で救出や消火活動を行ったかどうかについて尋ねたところ、「活動は行わなかった」と答えた人が9割を占めている（表14）。そのうち、「協力を求められたことがあった」という人は4.2%であった（表15）。

また、「活動を行った」と回答した人（5.3%、18人）に対し、協力の経緯を尋ねたところ「現場を見て協力を申し出た」は44.4%、「協力を求められた」は33.3%であった（表16）。さらに、その活動中に参集についてはどのように考えていたかについては、「被災現場での活動を優先して当然と感じていた」という人が44.4%と「早く参集しなければとは感じていたが止むを得ないと感じていた」の22.2%よりも多くなっている（表17）。

表14 参集途上における被災現場での活動

活動を行った	5.3%	18人
活動は行わなかった	90.6	310
その他	1.2	4
不明	2.9	10
計 (N)	100.0	342

表15 「活動は行わなかった」人の協力を求められたことの有無

協力を求められたことがあった	4.2%	13人
協力を求められたことはなかった	93.5	290
覚えていない	1.6	5
不明	0.6	2
計 (N)	100.0	310

表16 「活動を行った人」の活動に携わった経緯

協力を求められた	33.3%	6人
現場を見て協力を申し出た	44.4	8
その他	16.7	3
覚えていない	-	0
不明	5.6	1
計 (N)	100.0	18

表17 「活動を行った人」の活動中の参集に関する意識

被災現場での活動を優先して当然と感じていた	44.4%	8人
早く参集しなければとは感じていたが止むを得ないと感じていた	22.2	4
その他	5.6	1
覚えていない	-	
不明	27.8	5
計 (N)	100.0	18

シ はじめて公務についた場所に向かった際の障害

参集にあたっての障害については、「参集（通勤）手段」を挙げた人が51.5%と半数を超えている。そのほか、「参集指示に関する情報の入手手段」、「自分から市への参集に関する情報の伝達手段」を挙げた人は、それぞれ31.0%、28.4%であった（表18）。

表18 はじめて公務についた場所に向かった際の障害（複数回答）

参集（通勤）手段	51.5%	176人
参集指示に関する情報の入手手段	31.0	106
自分から市への参集に関する情報の伝達手段	28.4	97
その他	10.5	36
不明	14.9	51
計（N）	100.0	342

ス はじめて公務についた場所に向かった際の家族内弱者への措置

同居家族に乳幼児、高齢者等の弱者のいる人に対して、参集にあたって弱者を家族以外のだれかに託したかどうかについて尋ねたところ、「託した」と答えた人は30.5%であった（表19）。

また、「託した」と答えた人に対してだれに託したのかを尋ねたところ「親類」が50.9%、「実家」30.2%、「友人・知人」及び「その他」15.1%となっている（表20）。

表19 はじめて公務についた場所に向かった際の家族内弱者への措置

託した	30.5%	53人
託さなかった	65.5	114
不明	4.0	7
計（N）	100.0	174

表20 「家族以外に託した」人の託した相手（複数回答）

実家	30.2%	16人
親類	50.9	27
友人・知人	15.1	8
その他	15.1	8
不明	1.9	1
計（N）	100.0	53

セ 1月17日に参集できなかった理由

1月17日に参集できなかった人（「はじめて公務についた時期が「1月18日」又は「1月19日以降」の人）に対してその理由を尋ねたところ、「参集手段が確保できなかった」を挙げた人が50.6%で最も多い。そのほか、「家屋等財産に被害があった」、「家族の安全確保ができなかった」という人がそれぞれ41.9%、33.1%と比較的多くなっている（表21）。

表21 1月17日に参集できなかった理由（複数回答）

自分自身が負傷した	7.5%	12人
家族が死亡した	2.5	4
家族が負傷した	8.1	13
家屋等財産に被害があった	41.9	67
親類や友人等が死亡、負傷等の被害を受けた	5.6	9
家族や親類、友人の安否が確認できなかった	14.4	23
参集手段が確保できなかった	50.6	81
家族の安全確保ができなかった	33.1	53
自宅近辺の被災現場での活動を行った	8.8	14
市から参集の指示がなかった	10.6	17
その他	16.9	27
不明	2.5	4
計（N）	100.0	160

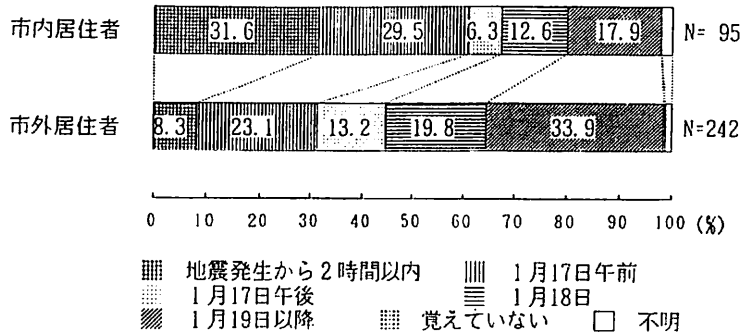
（2）居住地と参集行動

公共交通機関の発達、自家用車の普及、市街地における土地・建物の急騰などによって仕事の間と居住地が大きく離れる傾向にある。今回の調査の回答者である芦屋市職員においても、市内に在住している人は3割にも達していない（1－（4）参照）。こうした職住分離は、今回の災害において職員の参集行動にどのような影響を与えたのだろうか。

ア 震災後はじめて公務に従事した時期の居住地別の比較

回答者を市内居住者、市外居住者に分けて、震災後はじめて公務に従事した時期を比較すると、市内居住者では「2時間以内」が31.6%、「17日午前中（2時間以内を除く）」が29.5%と震災当日の午前中の時点で6割以上の人が参集しているのに対し、市外居住者のそれは3割程度となっている（図－1）。これを見ると、居住地が市内であるか市外であるかは、震災初期の参集行動に大きな影響を与えたことがわかる。

図-1 はじめて公務についた時期（居住地別）



イ 市外居住者の参集上の障害

では、市内居住者と市外居住者の間でなぜこのような相違が現れたのか。調査の結果では2つの参集上の障害を指摘できる。

○参集手段

ひとつは、参集手段の問題である。市外居住者の約7割が参集時の障害として「参集手段」を挙げている（表22）。市外居住者の場合、電車や地下鉄を利用して通勤している人は73.1%と高い割合を示していたが、これらの交通機関が震災により機能麻痺に陥り通常の参集の手段を失ったのである（表23）。

自由回答の結果をみると、通常の手段を失った人の中には、自家用車やバイク等別の手段を確保して参集しようとした人もいたが、そこでも道路網の寸断や渋滞等でかなりの困難があったことが示されている。

表22 参集時の障害（居住地別）（複数回答）

	参集（通勤）手段	参集指示に関する情報の入手手段	自分から市への参集に関する情報の伝達手段	その他	不 明	合計
市 内 居住者	7 (7.4)	40 (42.1)	19 (20.0)	17 (17.9)	25 (26.3)	95 (100.0)
市 外 居住者	168 (69.4)	66 (27.3)	77 (31.8)	19 (7.9)	23 (9.5)	242 (100.0)

表23 通常の通勤手段（居住地別）（複数回答）

	徒 歩	自転車	バイク	自家用車	バ ス	電車 (地下鉄を含む)	その他	不 明	合計
市 内 居住者	36 (37.9)	21 (22.1)	19 (20.0)	19 (20.0)	11 (11.6)	6 (6.3)	0 (-)	0 (-)	95 (100.0)
市 外 居住者	44 (18.2)	15 (6.2)	32 (13.2)	49 (20.2)	37 (15.3)	177 (73.1)	1 (0.4)	1 (0.4)	242 (100.0)

255 今まで通勤手段として電車で1時間10分程かかっていたが、震災ですべて不通になり、片道50km程の通勤手段をなくした。翌日家族のミニバイクを借り、役所まで行こうとしたが、途中道が大渋滞し、道路が寸断されたりして、片道4時間程かかった。その後役所で1週間程泊まったが、今度帰宅する時も、道路状況は混乱しており、非常に危険な状況であった。その後、勤務体制が24時間体制になり毎日自宅との片道通勤になった。ミニバイクで悪状況の中で通勤するのが、非常に危険だった。職員の中では事故を起こした人も何人かいたが、震災後業務と同様通勤も大変だったという思いが強い。

（40代、男、18日）

258 ①勤務地と自宅とが遠距離でJR通勤している場合（私など）、自家用車、バイクもなし、自転車くらいで34.5kmの距離で、しかも途中、火災やビル、家屋の倒壊があって交通止め、JR、阪神、阪急電車も交通ストップなどがあって、公務員としてまず参集しようという意志があっても参集できる足がなかった。そこで考えたこと。地域をいくつかのブロックに分けて、こういった交通機関が全面運休するといった大事変の場合に備え、公の交通手段・・・例えば公用車、特別契約のバス、タクシーの集合場所をいくつか決めておいて、そこへ行けば利用できるというシステムになっていれば・・・と痛切に思った。また、職員間のグループを作っておいて、自家用車のある職員に便乗させてもらうとか・・・しかし、前者のほうがシステム的にはよいと思います。

②災害時用の特別の連絡方法はないか。自宅の電話で役所へかけても通じず、公衆からかけても話し中、まる1日イライラする、夜中1時頃にやっと通じる。しかも公衆で並んで・・・。特別電話番号あるいは無線の利用など考えてみれば・・・と思う。

（50代、女、19日以降）

*文頭の番号は、回答者のコード番号、文末の（）内は年齢、性別、はじめて公務についた時期を示す。以下同じ。

○情報

居住地が市外にあることに伴うもうひとつの問題は情報である。

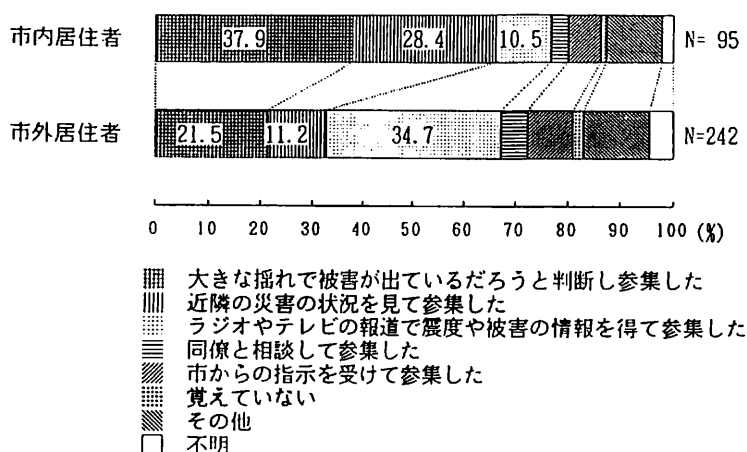
参集を判断した主なきっかけを市内居住者、市外居住者に分けてみると、市内居住者では、「大きな揺れで被害が出ているだろうと判断し参集した」、「近隣の災害の状況を見て参集した」という自分自身の直接の体感や視覚によるものがおのおの37.9%、28.4%と大きな割合を示しているのに対し、市外居住者では「ラジオやテレビの報道で震度や被害の情報を得て参集した」と答えた人が34.7%で最も多くなっている（図-2）。このことは、直接、体感や視覚によって芦屋市の状況を把握できない市外居住者にとって、第3者からの情報が参集を判断する重要な要因となっていたことを意味する。

では、市外居住の職員は参集のためにどのような情報を欲し、どのような行動をとったのか。この点については自由回答の中にさまざまな記述が見受けられるが、求められた情報の種類について整理すると次のとおりである。

- a 芦屋市の被害の状況
- b 道路交通情報
- c 市からの動員指令に関する情報
- d 職場の状況（どのような仕事待ち受けていて、どの程度の人手がいるのか等）

これらの情報を得ることは、職場に電話をしても不通であったり、ラジオ・テレビからの情報も「芦屋市」に絞ったものでないことからかなり困難だったようである。そして、十分な情報を持たない市外居住者は、「何もわからず通れる道を考え」て職場に向かったり、「1人でも多くの人手がすぐに必要と感じず」参集をあきらめるなどといった行動をとったのである。

図-2 参集を判断した主なきっかけ（居住地別）



001 被害状況が把握できなかった。テレビなどで動員指名があれば駆けつけた。

(40代、男、18日)

036 情報が届かないため被害の状況がわからず、弟の家(県外)へ公衆電話をかけて初めて芦屋市が大きな被害を受け、幸い六甲山の北側(神戸市北区)だったため、少しの被害ですんでいた。電気、電話などは不通のため、どこが震源かもわからず電車などの交通機関も止まっていた。情報を得るべく弟の家へ電話して初めて急いで市役所へ行く必要を感じた。

(40代、男、17日午前)

095 道路情報の正確なものが、欲しかった。道を電柱がふさいで通れない、道が割れて危ない、車が渋滞して進まないなど、いろいろ聞いて車で行くのはあきらめた。単車を急遽整備して(バッテリーがあがっていた)翌日出勤したが、道があちこちで通れなくなって戻ったり迷ったりして通常の3倍を要した。また、乗りなれていなかったので転倒して道沿いの家のガラスを割ってしまった。

(40代、女、18日)

120 参集手段として考えられた交通機関が寸断されており、何を利用すればよいのか判断できなかった。道路状況を知るにも電話などが通じず、情報が得られなかった。何もわからず通れる道をと考え、六甲山の北回りの道を選んで出発したが、自宅から職場まで6時間あまりを要した。

(50代、男、18日)

194 職場と住まいが遠いため、職場の状況が想像できなかった。

(20代、男、17日午前)

280 今回、私は4日目の朝出勤しましたが、いろいろな点を考えると、もう1日か2日早く出勤することも可能だったと思います。震災を機に防災体制が具体性を増しました。私(灘区在住)は震度4以上の地震が起これば、60分以内に交通遮断の際は自転車で集合場所へ行き、物資の仕事をせよという指示を受けた。

震災前といえば、プリントで1枚連絡網が渡され、私は物資班第3(最後尾)配備とあるだけ。でも実際出勤したことはなく、訓練や具体的にどうするのか知る機会もなかった。

最大の被害を目の当たりにしたので、当然芦屋もと思ったが、JRも阪神も駅ごと落ちている。国道2号線もダメ、自転車はきっとガラスでパンクするだろう。残るは徒歩しかない状態で、参集を妨げたのは①17日中は近所の火事、家族の救出、避難などで手間どった、②行けば力仕事がある。でも、腰痛の持病があるのに、すでに家族の救出のために重い家具をたくさん動かして腰をいためかけており、出勤も足手まとい

になるだけだと思った、③家族の精神状態が普通でなく、何をしてもかすかわからないという感じで、落ち着くのを確かめるまで家を後にできなかった。

自宅の電話が壊れたので、こちらから連絡するしかなく、2日目役所に電話数回、通じるはずもなく、その日は家のことをして、3日目に上司宅に電話をすると今日から出勤しましたとのこと（体が不自由なのに）。これはよっぽど人手が足りていないのだと思い、次に友人に電話すると、2日目に行ったが、女の人あまりすることがなく待機だった、今日は休んだが明日は一緒に行こう、山手幹線は被害が少なく自転車で行けると教えられ、翌日出勤した。

ところが行ってみると、2日目、3日目で何百件もの死亡届にたった数人の職員で対応しており、皆疲れてもうろうとしていた。力仕事ばかり想像し、役に立たないなどと考えていたのは大間違いで電話番号で十分、とにかく行かなければならないとやっと気づいた次第です。だから最初に挙げた60分以内出勤命令とか、徒歩出勤訓練とか、そういう備えは非常に重要だと思います。私が行った日、遠方の職員はもちろん、市内や近くに住んでいる人でもまだ来ていない人もわりとおられたのは意外でしたが、日頃の指示が十分でなかったせいもあると思います。

（20代、女、19日以降）

304 とにかく出勤しようと家を出るが、電車は動かず車で送ってもらおうとするが、大渋滞で高速道路も落ちて危険なので、動けなかった。電話をするが、全然通じず情報がテレビ、ラジオしかなく、それも芦屋市に関するものが何もなく。ただ高速道路が落ちているのやら、駅がつぶれているとか、どこも同じような情報が繰り返し出るだけで、今現在どうなっているのか、まるっきりわからなかった。1人でも多くの手手がすぐに必要と感じず、交通手段がないので、仕方がないとあきらめた。自転車で何時間かかってでも行くべきだったと思っている。

（40代、女、19日以降）

ウ 参集しなかった人の行動・意識

自由回答の中には、参集するにも参集できなかった人の葛藤と利他的な行動が散見される。「芦屋のために何もできないなら、せめて今日1日は団地のためにという思いで」安全確認に回ったり、「自宅近所で水くみの手伝い」をしたりと参集に代えて地域で利他的な活動を行った人や「自転車でも何時間かかっても行くべきだった」と自分の参集に関する判断を悔いる人たちである。

077 電話が全く通じないため、情報を得られるのはテレビ、ラジオだけであり、それらから阪神間の惨状は容易に想像できたが、できれば芦屋市に関する詳細な情報、指示を得られれば精神的な負担は少しは軽くなったのではないかという気がする。

詳細な情報、指示といっても大変な惨情（状）であり、直ちに集結という内容ぐらいということも容易に推測できるが、当日行くに行けなかった者にとって、何の情報もなく1日を過ごさねばならない精神的苦痛は大変なものである。

交通事情等で、当日はやむなく家に引き返したがテレビ等で阪神間の惨状を見るにつけ、いても立ってもおられない心理状態に陥った。幸いというか、団地の初代理事長をしていたため、芦屋のためにも何もできないなら、せめて今日1日は団地のためにとの思いで、160戸全戸の安全確認をして回ることにより、自分自身の気持ちを静めようとしたものです（何かをせずにはいられない心理状態になりました）。

一方、私自身は転居して神戸市に住んでいましたが、ここでも想像を絶する揺れがあり、テレビは台からずれ落ち、本棚は倒れるなどの状態で、妻子の動揺も相当のものでした。

その中で、不安でそばにいてほしいという妻子（特に妻の方が不安がっていた）を説得し、万が一の場合の居場所を確認し、今度はいつ帰ってこれるかもわからないということを話した上で、家族を残して出勤することにも不安はありました。

まとまりない文章になりましたが、要は公務員という立場を改めて実感するとともに情報の伝達手段を確保することが是非とも必要という思いを訴えたいと思います。

（40代、男、18日）

110 市外に住んでいる者にとって「公務員」とは、と考えさせられた大震災であった。交通手段が途絶えたこともあり、自宅近所で水くみの手伝い等しかできなかった。行ける所まで行って、ただり着いた所ですこしでも協力しようとしたが、常日頃の認識も改めてもらって、動きやすい体制を県、市、町、村等の段階で考えていけないのか。

（30代、女、19日以降）

*その他、前掲 304の回答。

（3）家族と参集行動

今回の回答者の大部分（94.2%）は同居家族のいる人であり、そのうち自分以外に3人以上の家族のいる人が68.9%と最も多くなっている（1-（4）参照）。また、家族の中に弱者（乳幼児、小学生、65歳以上の高齢者、身体障害者、その他自力での行動が困難な

人) がいる人は 174人と同居家族のいる人の54.0%に達している。今回の地震は早朝発生し、大部分は家族と同じ場所で激震に遭遇したはずである。では、この条件下で、参集に関してどのような意識と行動がみられたのだろうか。

ここでは、同居家族の中に弱者がいる人、同居家族に負傷者が出た人、身内に安否の確認のできない人・亡くなった身内がいた人(別居者)について、参集の時期に着目して分析する。

ア 家族の中に弱者がいる人

同居している家族の中に弱者(乳幼児、小学生、65歳以上の高齢者、身体障害者、その他自力での行動が困難な人)がいる人とそれ以外の人に分けて、震災後はじめて公務に従事した時期をみると特に大きな違いはみられない(表24)。一方、公務につく際の家族から離れることへのためらいについてみると、弱者のいる人の方がためらいを感じていた割合が高い(表25)。自由回答では、「共働きなので、小、中学生の子供を市役所内の避難所に子供だけを残し」勤務についた、病人を抱えていたが親戚に預ける手配もできずに勤務についたという回答があった。

一方、弱者の保護のために発災初期の段階で参集できなかった人も多い。その中には、参集できなかったことに対して自責や後悔の気持ちを自由回答の中で示した人がいた。ある人は、親の面倒をみる人がおらず、市内に居住しているにも関わらず直ぐに参集できなかったことを申し訳なく悔やみ、またある人は、身内に死者がいたこと、家が全壊したことも重なった状況の中で「全部を捨てて公務員として任務につけなかった自分が腹立たしく思う」と答えている。

表24 はじめて公務についた時期(同居家族中弱者の有無別)

	地震発生から 2時間以内	1月17 日午前	1月17 日午後	1月18 日	1月19 日以降	覚えて いない	不 明	合計
弱者有	28 (16.1)	43 (24.7)	19 (10.9)	30 (17.2)	52 (29.9)	- (-)	2 (1.1)	174 (100.0)
弱者無	22 (13.1)	42 (25.0)	19 (11.3)	31 (18.5)	47 (28.0)	1 (0.6)	6 (3.6)	168 (100.0)
合 計	50 (14.6)	85 (24.9)	38 (11.1)	61 (17.8)	99 (28.9)	1 (0.3)	8 (0.3)	342 (100.0)

表25 家庭を離れて職場に向かうことについてのためらいの程度
(はじめて公務につく前の時点) (同居家族中弱者の有無別)

	強く感じていた	左記ほどではないが感じていた	特に感じていなかった	覚えていない	不明	合計
弱者有	61 (35.1)	53 (30.5)	52 (29.9)	2 (1.1)	6 (3.4)	174 (100.0)
弱者無	28 (18.9)	36 (24.3)	62 (41.9)	4 (2.7)	18 (12.2)	148 (100.0)
合 計	89 (27.6)	89 (27.6)	114 (35.4)	6 (1.9)	24 (7.5)	322 (100.0)

136 自宅のマンションが半壊状態で、家具が倒れたまま出勤し、自宅に戻る時間すらなかった。とりあえず家族を連れて勤務につく形となった。共働きなので、小、中学生の子供を市役所内の避難所に子供だけ残し、勤務につかなければならなかった。この状況が1週間ほど続き、西宮市の身内に預かってもらうことになった。両親も芦屋に近い東灘区に住んでいたが、私のいる市役所の避難所に避難してきた。親の家の被害も大きく、勤務のため何もしてやることができなかった。自分自身の健康、子供、両親すべてを切り捨てて、仕事に従事せざるを得なかった。屋根にかけるブルーシートの配布方法について市民が詰め寄り、ハサミで脅された。命があるだけ良かったと思う。

(40代、男、2時間以内)

139 私の場合は、住・職が近いため、すぐに仕事となった。病人をかかえていたが、全くかまうことができず、親戚に預ける手配もできなかった。ボランティアとかたくさん出入りされたが、職員が個人のお願いができなかったため大変だった。割り当てられた休暇も通院やらで6月まで休日らしい休日はなく、家の片付けもままならなかった。一度ボランティアをお願いしたが、かえって病状を悪化させてしまい、長く緊張感の中で過ごしていたため精神的にもいい状態ではないことがよくわかった。職員のための相談窓口が欲しかった。

(40代、女、2時間以内)

167 問27で答えましたが、身内で死者がいること、高齢者がいること、家が全壊して普通の状態ではないこと等々が重なった時、全部を捨てて公務員として任務につけなかった自分が腹立たしく思う。

(40代、女、19日以降)

171 市内在住であるのにすぐに役所に行けなかったことが申し訳なく悔やまれる。親と2

人で暮らしているため、親の面倒をみれる者がいなかったため、震災前から入院中で震災翌日再手術となったため、1人ではどうすることもできない親を残して仕事には行けなかった。親も公務員でたまたま入院でこんな結果となってしまう職場に迷惑をかけたことをいまだに悔やんでいる。母も同じ気持ちであろう。

（20代、女、19日以降）

176 余震が続く中、子供だけを残して仕事に出なければならない不安。近所の方に声をかけようにも皆さん避難されておられない。預けようにも預ける所もない。そんな状態で職場に出れば、行政は何をしているんだの声。私たちも被災者なんだと叫びたくなるのをこらえ、仕事をするストレス。仕事はしないといけない、子供のことは心配だ、水、食料の確保すべて子供まかせ。子供のストレスも大変だっただろうなと思います。

（不明、女、19日以降）

242 早く出勤しなければとの思いと、動けない老母をかかえて兄に連絡がつかず、やっと次の日に県外の兄宅へ預けることができて出勤できた。公務員としてはすぐに出勤しなければならぬと心がせかされました。歩いて迎えに来てくれた時には、ほっとしました。余震におびえ、壊れた寒い家で一晩すごしたこわさが忘れられず、隣近所で死者が多数でて辛かったこと。でも近所が助けあえたことは嬉しく思いました。

（50代、女、18日）

306 ガス、水道が止まった自宅に高齢者がいるので不安だったが、子供が高校生になっていたので、任せることができたので、すぐに出勤し、職務に専念できた。妻の実家が全壊し、父が死亡、母が入院したが、それにもかかわらず、すぐ参集しなければならなかったことは非常に辛い思いがした。

（40代、男、17日午前）

イ 家族に負傷者がいる人

家族に負傷者（軽傷者）がいた人とそれ以外の人に分けて、震災後はじめて公務に従事した時期をみると特に大きな違いはみられない（図-3）。一方、公務につく際の家族から離れることへのためらいについてみると、負傷者（軽傷）のいた人の方がためらいを感じていた割合が高くなっている（表26）。なお、家族に重傷者・死者がいた人は2人であるが、いずれも1月19日以降に参集している。

図-3 はじめて公務についた時期（同居家族の負傷状況別）

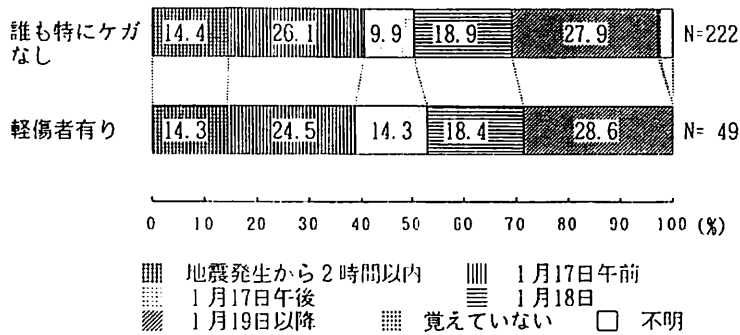


表26 家庭を離れて職場に向かうことについてのためらいの程度
（はじめて公務につく前の時点）（同居家族中負傷者・死者有無別）

	強く感じていた	左記ほどではないが感じていた	特に感じていなかった	覚えていない	不明	合計
だれも特にケガはなかった	57 (25.7)	62 (27.9)	91 (41.0)	2 (0.9)	10 (4.5)	222 (100.0)
軽傷を負った者がいた	20 (40.8)	16 (32.7)	9 (18.4)	2 (4.1)	2 (4.1)	49 (100.0)
中程度の傷を負った者がいた	1 (12.5)	5 (62.5)	1 (12.5)	0 (-)	1 (12.5)	8 (100.0)
重傷を負った者がいた	1 (100.0)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	1 (100.0)
死亡した者がいた	1 (100.0)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	1 (100.0)
全 体 (家族有り)	89 (27.6)	89 (27.6)	114 (35.4)	6 (1.9)	24 (7.5)	322 (100.0)

*軽傷：自宅等での応急処置程度
中程度の傷：医療機関で通院治療程度
重傷：医療機関に入院

ウ 身内に安否の確認のできない人・亡くなった身内がいる人（別居者）

別居している身内に安否の確認ができない人・亡くなった人がある人とそれ以外の人に分けて、震災後はじめて公務に従事した時期をみると、前者において19日以降に参集した人の割合が高くなっている（表27）。

表27 はじめて公務についた時期（別居の身内の安否確認の有無別）

	地震発生から 2時間以内	1月17 日午前	1月17 日午後	1月18 日	1月19 日以降	覚えて いない	不 明	合計
安否未確認 者有り	7 (13.0)	14 (25.9)	2 (3.7)	7 (13.0)	24 (44.4)	0 (-)	0 (-)	54 (100.0)
安否未確認 者無し	43 (15.5)	68 (24.5)	36 (12.9)	52 (18.7)	73 (26.3)	1 (0.4)	5 (1.8)	278 (100.0)
全 体	50 (14.6)	85 (24.9)	38 (11.1)	61 (17.8)	99 (28.9)	1 (0.3)	8 (2.3)	342 (100.0)

（４）被災現場と参集行動

地震の後、自宅の外に出て生き埋めや火災の現場に遭遇した場合、職員は、どのような行動をとったのであろうか。また、自宅から職場に向かおうとした職員が、その途上で生き埋めや火災の現場に遭遇した場合、どのような行動をとったのであろうか。

前者については、地震後に自分の居住地周辺で救出や消火などに携わった人は17.5%であった（（１）参照）。携わったという人の年齢構成をみると、40歳代、50歳代の人が多くなっている（表28）。地域での活動を行った人（「近隣の救出・消火・応急手当等」を行った人）とそれ以外の人に分けて、震災後はじめて公務に従事した時期をみると、前者の方が早く参集している割合が高かった。（表29）。

後者については、参集途上で救出や消火活動に携わった人は 5.3%と少数である。また救出や消火活動を行わなかった人のうち、参集途上で協力を求められた人も 4.3%と少数であった。（（１）参照）

一方、自由回答では、「もっと近所で救出作業を手伝うべきではなかったのかと悔いが残っている」、「救出を求められながらも、それを振り切り災害対策本部に出向かなければならないという心の葛藤があった」など被災現場と職務との葛藤を示すものがあった。

表28 地震後公務につく前に近隣の救出・消火活動・応急手当等を行った人の年齢構成

29歳以下	6(10.0)
30～39歳	12(20.0)
40～49歳	21(35.0)
50～59歳	20(33.3)
不明	1(1.7)
合計	60(100.0)

表29 はじめて公務についた時期（地域での活動の有無別）

	地震発生から 2時間以内	1月17 日午前	1月17 日午後	1月18 日	1月19 日以降	覚えて いない	不 明	合計
地域活動を行 った人	16 (26.7)	19 (31.7)	5 (8.3)	5 (8.3)	14 (23.3)	0 (-)	1 (1.7)	60 (100.0)
上記以外の人	34 (12.1)	66 (23.4)	33 (11.7)	56 (19.9)	85 (30.1)	1 (0.4)	7 (2.5)	282 (100.0)
合 計	50 (14.6)	85 (24.9)	38 (11.1)	61 (17.8)	99 (28.9)	1 (0.3)	8 (2.3)	342 (100.0)

056 家は半壊程度で家族も無事であったので、すぐに役所に出勤しようとして行動した。

近所で家屋の下敷きになっている人が救助を求めているので、放って出勤すれば公務員倫理が問われると思い救助活動を近所の人と行った。

とりあえず救助を何人かした後に出勤したが、

- ・家や家族を放って出勤する者
- ・自分の周りをきっちりしてから出勤する者（家の修理の手配、家族の避難先の手配など）
- ・特別休暇を制度いっぱい利用する者

これらの職員がいる。どれが一番正しいか結論が出しかねる。

結局、この町はおれが守るという信念、責任感の違いが出勤状況にもあらわれるのではないか。

そういう信念、責任感の求められる業務を日常から行っている部署の職員は自ずと参集も早くなる結果が出ている。

参集率を上げるためには、公務員倫理についての日常的な研修、災害に対する訓練、出勤への意識づけが必要と思う。

（50代、男、17日午前）

091 私は当日の朝10時に出勤したが、もっと近所で救出作業を手伝うべきではなかったのかと悔いが残っている。自分の住んでいる地域を最優先にするのか、公務員として広く住民のために働くべきなのか議論の分かれるところだと思う。

（20代、男、17日午前）

173 ①参集途上、救出を求められながらも、それを振り切り災害対策本部に出向かなければならないという心の葛藤があった。

②震災直後からのマスコミ報道において、ボランティアが称賛されたこととは対照的に市の対応のまずさ、不十分さが強調されていたように思う。

しかし、私たちの行動は、自らの命をかけたものであり、公務員なのだから当たり前ではないかといわんばかりの報道には憤りすら感じた。「ボランティア」活動のすばらしさを否定するものではありませんが、なかには（特に学生）ふざけている場面も目にし、再三注意を促すこともありました。マスコミ報道のあり方はできるだけの事実を！絵になるところだけを報道しているように思えてならない。

（40代、男、2時間以内）

（5）性別と参集行動

参集行動を男女別に比較すると、次のような点が指摘できる。

まず、震災後はじめて公務に従事した時期をみると、17日中に参集したのは男性が57.5%であるのに対して、女性は31.8%と男性の方が高い割合を示している（図－4）。その背景にあるものを、地震当日に参集できなかった理由から探ると、女性の方が家族に関わる理由（「家屋等財産に被害があった」、「家族の安全確保ができなかった」）を挙げている割合が高い（図－5）。また、家族から離れることについてのためらいの程度について比較すると、女性の方がためらいを感じていたという人の割合が高くなっている（図－6）。

図－4 はじめて公務についた時期（性別）

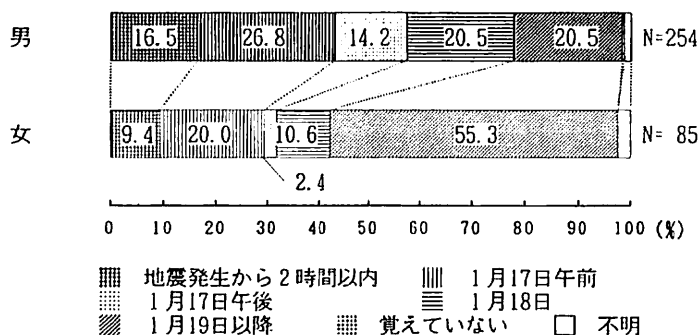


図-5 地震当日参集できなかった理由（性別）

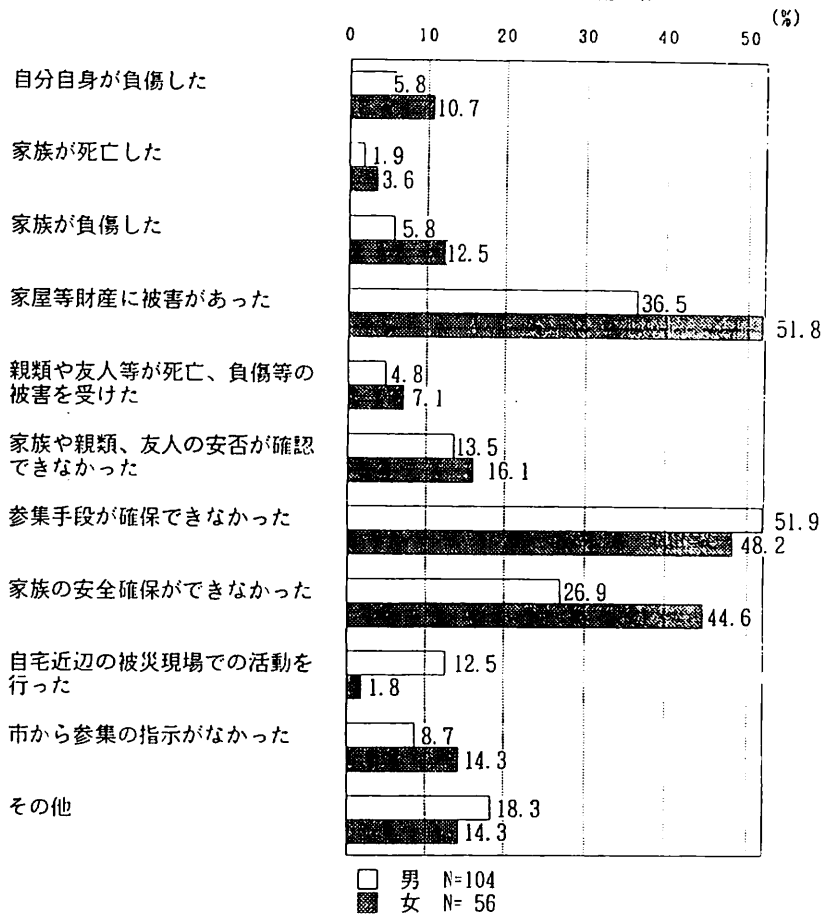
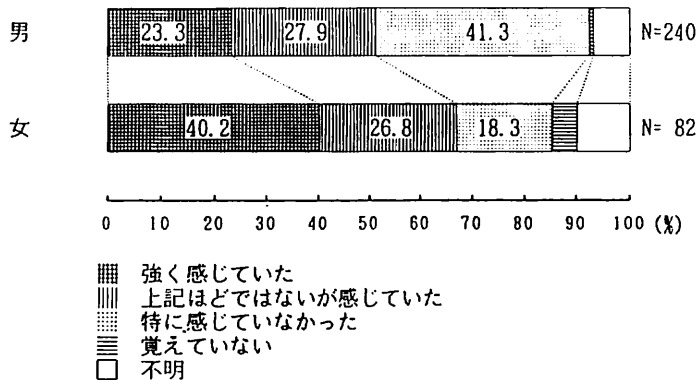


図-6 家族から離れることについてのためらいの程度（はじめて公務につく前の時点）（性別）



(6) 職場での地位と参集行動

職場でどのような地位にあるのかという点は参集行動に強く影響する要因ではないと思われる。つまり、地位の高い人ほど自分が参集しなければ大きな支障をきたすという意識が強く働くのではないかと考えられるのである。

今回の調査結果を、地位別に震災後はじめて公務に従事した時期についてみると、地位が高いほど地震後公務に従事した時期が早い傾向にある(図-7)。特に、課長以上では75.7%の人が17日中に参集している。また、地位別に自分が参集することによる応急対策への効果に関する意識をみると、地位が高いほど、自分がいなければ重大な支障をきたすと考えていた割合が高くなっている(図-8)。

図-7 はじめて公務についた時期(職場での地位別)

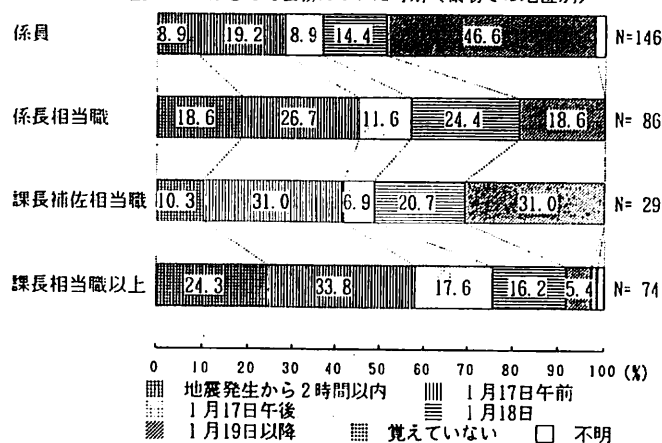
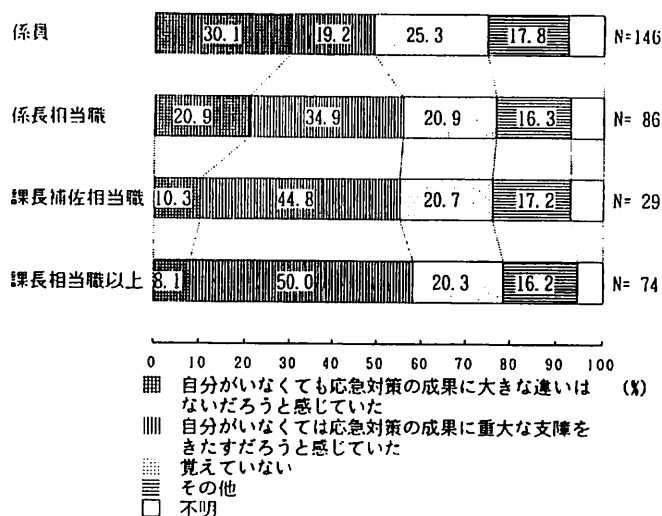


図-8 自分自身の参集が職場にもたらす影響についての意識
(はじめて公務につく前の時点)(職場での地位別)



(7) 自分自身の負傷や身体状況と参集行動

災害によって自分自身が負傷したり、身体にハンディキャップのある人にとって、参集は困難な問題だろう。自由回答の中には、こうした人たちがどのような意識を持っていたのかを示すものがある。つまり、災害により負傷し迅速に参集できなかったことについての後悔、もっと大きな被害を受けている人がいることに気づかず自分自身の負傷のことしか考えられなかったことについての後悔、少しでも役に立つことはやりたいという心理、参集したくともできないもどかしさを表すものである。

088 私の場合、平常時であれば、徒歩で25分くらいで出勤することができるのですが、17日当日、震災で足に打撲を負い、ショックのあまりの大きさに、職場でも同じ、あるいはそれ以上の被害を受けているという考えも及ばず、少し落ち着いて職場へ出たのは20日の昼でした。

直後に参集していた人達は、少ない人員で不眠不休で災害業務に奔走していたと聞き、自分のことしか考えられなかったことを申し訳ないと思いました。

その後も長い災害業務は続いたのですが、何よりも1人でも人手のいる時に、役に立てなかったことは悔やまれました。

(40代、女、19日以降)

186 私は、週3回病院に行かなくてはならない体なので、病院へ行くのに市外へ出てしまった後にマイカー規制で市内に戻れなくなってしまったので、出勤したくてもできない状況になってしまったので、すごくもどかしい気持ちでした。

(20代、女、19日以降)

206 自分自身が負傷し、すぐに参集できなかったことを、今でも後悔して仕方ありません。足の負傷のため動くことができず、公務員としての自覚のなさに改めて考えることが多い震災でした。

(30代、女、19日以降)

3. まとめと防災の観点からの提言

(1) 調査結果のまとめ

本研究では、阪神・淡路大震災時の芦屋市職員の参集行動について調査した。その主な結果を整理すれば次のとおりである。

ア 居住地

参集の時期を市内居住者と市外居住者で比べると、前者の方が早く参集した割合が高かった。

市外居住者においては、参集手段の確保の問題を参集上の障害として挙げる割合が高かった。また、市外居住者は参集の判断のきっかけとして、自分自身の直接の体感や視覚によるものよりも「ラジオやテレビの報道で震度や被害の情報を得て参集した」と情報を挙げた人が多かったが、電話やラジオ、テレビで必要な情報を得ることも困難な状況があった。

参集したくともできなかった人の中には、参集する代わりに地域で利他的な活動を行った人や、何時間かかっても行くべきだったと自分の参集に関する判断を悔いる人がいた。

イ 家族

参集の時期を同居家族の中の弱者の有無別、負傷者（軽傷）の有無別にみると、参集時期に特に大きな違いはみられなかった。また、身内に安否の確認ができない人・亡くなった身内のいる人（別居者）とそれ以外の人に分けて比べると、前者において19日以降に参集した人の割合が高かった。

一方、家族と離れて職場に向かうことへのためらいについて、同居家族の中の弱者の有無別にみると、弱者のいる人の方がためらいを感じていたという割合（「強く感じていた」＋「強くではないが感じていた」）が高かった。また、同居家族の中の負傷者（軽傷）の有無別にみると、負傷者の出た人の方がためらいを感じていたという割合が高かった。

家族のために発災初期の段階で参集できなかった人の中には、参集できなかったことに対して自責や後悔の気持ちを自由回答の中で表した人がいた。

また、参集した人の中には、職員自身が家族を抱える被災者でありながらも勤務につかなければならなかったことについて苦悩を訴える人もいた。

ウ 被災現場

地震後居住地周辺で、「近隣の救出・消火・応急手当等」を行ったという人は17.5%で

あった。また、参集の途上で救出や消火活動に携わったという人は 5.3%であった。これらの人の中には、「もっと近所で救出作業を手伝うべきではなかったのか」と後悔を表す人や、救出を求められながらも、それを振り切り災害対策本部に出向かなければならなかったことに葛藤を感じていたという人がいた。

エ 性別

参集の時期を性別でみると、男性の方が早く参集した人の割合が高かった。

1月17日中に参集できなかった理由を性別にみると、女性の方が「家屋等財産に被害があった」、「家族の安全確保ができなかった」といった家族に係わる理由を挙げている割合が高かった。また、家族と離れて職場に向かうことへのためらいについて、女性の方がためらいを感じていたという割合が高かった。

オ 職場での地位

参集の時期を職場での地位別にみると、地位が高いほど早く参集している人の割合が高い傾向にあった。自分自身の参集が職場にもたらす影響についての意識では、地位が高いほど自分がいなければ重大な支障をきたすと考えていた割合が高かった。

カ 自分自身の負傷や身体状況

今回の回答者で震災により負傷したという人は49人（14.3%）であった。この中には、災害により負傷し迅速に参集できなかったことについての後悔、もっと大きな被害を受けている人がいることに気づかず自分自身の負傷のことしか考えられなかったことについての後悔を表す人がいた。また、負傷はしなかったが自分自身の身体状況により参集が困難だった人の中には、少しでも役に立つことはやりたいという心理、参集したくともできないもどかしさをうかがわせるものがあった。

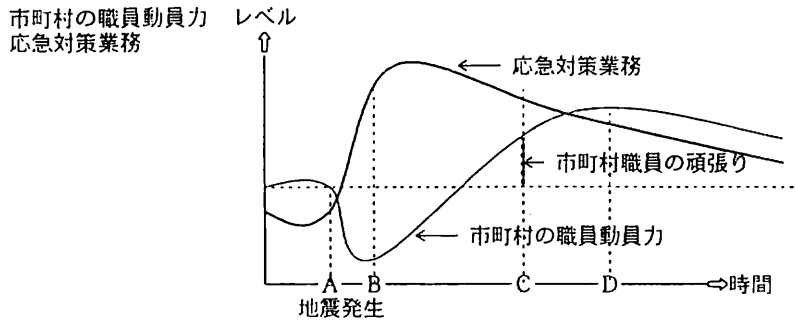
（２）防災の観点からの提言

次に、調査結果を基に、防災の観点（市町村職員の動員力をどのように高めるべきか、市町村の動員力を勘案したときにどのような防災体制を検討すべきか）から、いくつかの提言を試みる。

ア 大規模地震時の市町村の職員動員力（勤務時間外）と応急対策業務との関係

勤務時間外に大規模地震が発生した場合の、市町村における職員の動員力と市町村に課せられる応急対策業務との関係をイメージすると、図－9のように表すことができる。

図－9 大規模地震時の市町村の職員動員力（勤務時間外）と
 応急対策業務との関係



(注) Hass, J. E. and Drabek, T. E., 1973 "Complex Organizations : A Sociological Perspective " The Macmillan Company, New York の「ストレス-ストレイン」モデルを参考に作成。

すなわち、

勤務時間外に大規模地震が発生すると、

- 1) 職員自身の負傷、職員の家庭（別居している家族も含む。）の被災、有効な参集手段の不足、参集に必要な情報（道路情報等）の不足といった参集を妨げる条件が同時にあらわれ、市町村の職員動員力は一時的に低下する（図のA－B 細実線）。
- 2) 被災者の大量発生、建築物や構造物の損壊、ライフラインの機能麻痺等により、市町村に大量の、そして平常時のタスク（業務）とは異なる応急対策業務が生じる（図のA－B 太実線）。

時間の経過とともに、

- 3) 参集職員の増加、他自治体等からの応援職員等の受け入れ、さらには、職員自身の「頑張りの」によって市町村の職員動員力は上昇していく（図のB－C 細実線）。
- 4) 応急対策業務は、時間の経過とともに減少の傾向に移るが、市町村の職員動員力を超える状態は継続している（図のB－C 太実線）。

さらに時間が経過すると、

- 5) 他自治体等からの応援職員の受け入れ等により、さらにマンパワーが確保され、市町村の職員動員力は上昇していく（図のC－D 細実線）。
- 6) 応急対策業務は次第に低下し、市町村の職員動員力で対応可能なレベルになる（図のC－D 太実線）。

大規模地震時の市町村の職員動員力（勤務時間外）と市町村に課せられる応急対策業務との関係が、以上のような経過をたどるとすれば、防災の観点からは次の2つの方向から対策を考える必要がある。

- I 市町村の職員動員力を高める方向（図の細実線の軌跡を上方にシフトさせる方向）
- II 市町村に課せられる応急対策業務のレベルを低下させる方向（図の太実線の軌跡を下方にシフトさせる方向）

イ 防災の観点からの提言

アで導いた方向にしたがって防災の観点からの提言を試みれば、次のとおりである。

I 市町村の職員動員力を高める方向

① 職員の家庭における安全（防災）対策の徹底

職員の家庭における安全（防災）対策が不十分であると、職員自身の負傷、家族の負傷など職員自身が災害によって被害を被る可能性が高くなり、参集を妨げる要因となる。職員自身の被災、職員の家族の被災によって市町村の職員動員力を低下させないためには、職員の家庭の安全（防災）対策を徹底すべきである。

② 参集判断に資する情報の伝達

今回の調査結果では、市外居住職員にとって、情報の不足が参集を妨げる要因の一つとなっていた。特に、他市町村に在住する職員の多い大都市圏の市町村では、発災初期の段階から例えば次のような情報を、ラジオやテレビ等マスメディアの利用も考慮しながら職員へ伝達する方策を検討すべきではないかと考える。

- a. 市町村からの動員指令に関する情報
- b. 参集のための交通手段に関する情報（通行可能な道路、交通規制、代替参集手段等の情報）
- c. 参集時の服装等の情報（服装、靴、その他必携品）

③ 職員及び職員の家庭が被災した場合の行動指針の明確化

今回の調査結果を職員自身や家庭の被災との関係でみると、次のような結果が出ている。

- a. 災害で負傷した職員の中には、災害により負傷し迅速に参集できなかったことについての後悔、もっと大きな被害を受けている人がいることに気づかず自分自身の負傷のことしか考えられなかったことについての後悔を表す人がいた。
- b. 同居家族に負傷者（軽傷）が出た人とそれ以外の人では参集時期に大きな違いがなかった。
- c. 同居家族に負傷者（軽傷）が出た人では、家族と離れて職場に向かう際のためらひを感じた割合が、それ以外の人よりも高かった。

d. 家族のために発災初期の段階で参集できなかった人の中には、参集できなかったことに対して自責や後悔の気持ちを表す人がいた。

e. 女性職員では、地震当日に参集できなかった理由として「家屋等財産に被害があった」、「家族の安全確保ができなかった」といった家族に係わる理由を挙げている割合が男性職員よりも高く、家族と離れて職場に向かう際のためらいを感じた割合も高かった。

こうした結果を踏まえれば、職員や職員の家庭が被災した場合の行動指針を、子供や高齢者など保護を必要とする家族に対する措置等職員の負担の軽減策も含めて明確にしていくことが、職員自身の意識を高め、市町村の職員動員力を維持することにつながると考える。

④ 自宅周辺や参集途上に要救出・消火現場に遭遇した場合の行動指針の明確化

大規模な地震の場合は、各所に被害が発生し、自宅周辺や参集途上で要救出・消火現場に遭遇する可能性がある。こうした場合、公務員として参集を優先すべきかどうか職員は葛藤を感じるだろう。今回の調査結果でも、自宅周辺や参集途上で要救出・消火現場に遭遇し参集した人の中には、「もっと近所で救出作業を手伝うべきではなかったのか」と後悔を表す人や、救出を求められながらも、それを振り切り災害対策本部に出向かなければならなかったことに葛藤を感じていたという人がいた。

市町村が災害時の職員の参集を考える場合、このような場合の行動を職員自身の判断に委ねるのでは、確実な動員が担保されない。さまざまなケースを想定して、自宅周辺や参集途上で要救出・消火現場に遭遇した場合の行動指針を可能な限り明確に職員に示していくことが必要と考える。

⑤ 市町村の枠を超えた広域的な初動動員体制の検討

特に大都市圏の場合、自分の勤務する市町村以外から職場に向かう人が多くなる。公共交通機関の途絶や道路の麻痺等が重なると、当然、参集に要する時間もかかり、しばらくの間は地元に住居する職員を中心に応急対策業務に従事せざるを得ないことになる。一方、初動期においては、被害情報の把握、避難所の開設等さまざまな応急対策業務が噴出し、マンパワーはいくらでも必要な状態になる。

こうした事態が想定される市町村においては、できるだけ居住地に近い自治体に職員が参集し、活動できるような市町村間の取決めも検討することが必要ではないかと考える。取決めにあたっては、通常の行政システムをはみ出すことになり、身分の問題等さまざまな問題をクリアしていかなければならないと思われるが、災害対策基本法第2条では複数の市町村が合同で地域防災計画を定めることのできる規定（「指定地域市町村防災計画」）もあり、検討の余地があると考ええる。

Ⅱ 市町村に課せられる応急対策業務のレベルを低下させる方向

① 震度Ⅶクラスの激甚な地震に見舞われた市町村の責務の限定

震度Ⅶクラスの激甚な地震に見舞われた場合、市町村に一次的な応急対策の全ての責務を負わせることには無理があると考ええる。今回の調査結果を踏まえると、特に初動期においては、全職員が迅速に参集することを前提とした防災計画の策定は現実的なものではなく、また、仮に全員が参集できたとしてもその能力を上回る応急対策業務が発生する可能性が高いと考えるからである。そこで、震度Ⅶクラスの地震の場合は、あらかじめ市町村の責務をその能力（職員の動員力等）に見合ったものに限定し、その他の分野については、都道府県その他の機関が「市町村からの要請を待たずに」即座に集結して応急対策にあたることにすれば、市町村はその範囲で集中的な活動が可能となり、一方、外部からの救援も迅速化が図られることになるものと考ええる。

② 少数の職員で処理可能な形での応急対策活動の合理化

限られた職員で膨大な応急対策業務に対処せざるを得ないことを前提に考えると、少数の職員で処理可能な形での応急対策活動の合理化も検討する必要があるものと考ええる。例えば、避難誘導、避難所の開設、被害情報や被災者のニーズの把握、備蓄物資の開放などについては、自主防災組織（町内会・自治会）や企業等への委任（地域防災計画での位置づけ）を行うことによって、より効率的な応急対策を行えるようになるのではないだろうか。

おわりに

今回の震災は、大都市圏で平日の早朝に発生したものだった。しかし、災害はいつ、どのような形態で起こるか予想しにくいものである。職員の参集について考えれば、今後、以下のような場合について検討していく必要がある。

① 勤務時間中に発生した場合

今回の震災は、家族と一緒にいる時間帯でのものだったが、勤務時間中に同様の規模の災害が発生した場合の参集行動について検討する必要がある。

② 地震以外の災害の場合

今回は地震であったが、風水害、火山災害、原子力災害など災害の種類別の参集行動について検討する必要がある。

③ 10年後、20年後の災害の場合

10年後、20年後には、職員の意識や家庭環境等も現在とは異なっているだろう。過去の災害事例も含め、時系列的な参集行動の比較についても考察していく必要がある。

なお、今回の震災については、消防職員、警察職員といった今回の調査対象とは別の職種の公務員も活躍した。職種毎の参集行動の比較も興味深い点である。

阪神・淡路大震災と災害弱者対策－情報補償を中心として
Disabilities under The Great Hanshin-Awaji Earthquake
: the necessity of providing full information

田 中 淳* 廣 井 脩**
Athushi Tanaka Osamu Hiroi

1. はじめに

阪神・淡路大震災は、災害弱者対策を防災対策の中に明示した災害といえる。標題の意味するところは、ひとつにこの点にある。実際、地方公共団体において地域防災計画の見直しが進められているが、災害弱者対策の具体化を図っているところも多い。災害弱者対策は、震災前からその必要性が指摘されもし、また検討のそ上にのりもしていた。しかし、残念ながら災害下に災害弱者がどのような状況におかれるのか必ずしも十分な情報はなかった。また、弱者の側としても災害時以前に日常生活段階の問題に注力せざるを得なかったようにも思われる。

このような状況に対して、阪神・淡路大震災は、災害というものがいかに高齢者や障害者など弱者に大きな被害を与え、過酷な状況を強いるかを具体的に示したのである。その意味において、災害弱者の被災状況や問題点を記述し、分析することは、長期的な復興を考える上でも、また今後の防災対策を考える上でも重要な作業となる。

もちろん、ここでの分析をもって災害弱者に関わる問題の一般化を主張するつもりはない。阪神・淡路大震災自体も地震災害のひとつのタイプであり、災害におけるすべての問題を示したとも思われない。標題に阪神・淡路大震災とあげたもうひとつの理由でもある。さらに、今回の震災は被害規模が大きく問題も多岐にわたっているため、その全体像を把握することには極めて困難を感じる。ことに、災害弱者には高齢者、幼児・児童、障害者、外国人など多様な対象群が含まれ、また同一の対象群の中にも極めて多様性を呈する。そもそもが多様性があり、住民の平均像に依拠する防災対策では不十分であるからこそ、弱者とみなされたのだからである。

したがって、本論では災害弱者のうち情報障害者を中心とし、情報補償の面から阪神・淡路大震災による被災状況や問題点を記述、分析することを主とした。これには、データ制約があることは言うまでもないが、同時に災害弱者問題を情報補償の面から捉える視点に欠けていたと思われるからでもある。今までが災害弱者対策というと、あまりに発災直後の避難支援にのみに終始するくらいがあったといえよう。

以下、聴覚障害者を対象としたアンケート調査¹⁾（以下、聴覚障害者調査と記す）、情報障害とされる聴覚障害や視覚障害を持つ被災者への聞き取り調査、支援団体への聞き取り調査、ならびに行政への聞き取り調査にもとづき、問題の多様性を示しつつ、災害弱者対策の枠組みの構築を試論していきたい。

* 文教大学情報学部

** 東京大学社会情報研究所

2. 兵庫県の身体障害者

地震当時の兵庫県には、約16万人の身体障害者、約1万8千人の知的障害者が暮らしていた（平成5年度末）。表1に示したように、今回の震災で人的被害の特に激しかった神戸市、西宮市、芦屋市、淡路郡に限っても、身体障害者および知的障害者の人数は7万人を超える。これほど多くの障害者が激震の地にいたのである。

表1 被災地域における身体障害者数および知的障害者数

市町村名	身体障害者数	管内人口	手帳所持率	知的障害者数
県合計	159,731	5,429,032*	2.94%	17,719
神戸市	48,726	1,468,208*	3.32%	5,209
尼崎市	16,303	493,118	3.31%	1,954
西宮市	9,955	422,224	2.36%	1,099
芦屋市	1,630	86,341	1.89%	201
伊丹市	4,187	188,054	2.23%	632
宝塚市	3,825	204,947	1.87%	502
明石市	8,051	281,968	2.86%	911
淡路郡	5,146	120,830	4.26%	400

注） 兵庫県資料より作成。平成5年度末の数値（*印は、1993.3.31現在）

もちろん、ひとくちに障害者16万人といっても、障害の種別ならびに程度は多様である。表2に、兵庫県全体の障害種別・級別毎の実数と比率を示した。

肢体不自由者が最も多く、10万人弱であり、全体の6割を占める。全国平均とほぼ同様の比率を示し、兵庫県は障害種別でみると平均的な構成比であることがわかる。肢体不自由者は、上肢や下肢の一部に障害を持つものから、座位がとれない、あるいは全身が動かせない重度のものまで様々である。

次に多いのは内部障害者であり、約3万人で全体の17%を占める。内部障害には、心臓、腎臓、呼吸器の機能、膀胱又は直腸、あるいは小腸の機能障害が含まれる。人工透析や薬物療法、導尿・洗腸など継続的なケアを必要とする。外観では識別できない。

視覚障害者は、2万人弱で、11%を占めている。視力、視野、色覚、暗順応、眼球運動調整等の視機能が永続的に低下している状態で、眼鏡による矯正をしても視力や視野が回復困難な視機能の低下を意味する。同じ視覚障害でも、ある程度輪郭をつかめるもの、明暗を識別できるもの、明暗も識別できないものまで幅がある。

聴覚障害は、聴力が低下あるいは失われた状態をさす。言語獲得前に失聴した高度難聴の場合には、発音の歪みも大きくなり、聴くことだけではなく、話すことにも支障が

生じやすい。言語障害は、言語の符号化や伝達、解読等の機能に支障がある状態である。難聴によるもの、脳性麻痺等器質性のもの、失語症、心因性のものなど、原因も障害の状況も様々である。コミュニケーション障害として聴覚障害と言語障害は合わせて分類されることも多い。両障害合わせると、12%に当たる2万人弱が県内にいたことになる。

同じ障害でも程度に大きな差が認められる。表2に示したとおり、障害の程度についてみると、1級および2級の重度の障害者が4割を占めていることがわかる。とくに視覚障害と内部障害では重度の占める比率が高い。つまり、重度の障害者だけで兵庫県に6万4千人、神戸市だけで約2万人に達していたのである。

表2 兵庫県内の障害種別・級別身体障害者数

		1 級	2 級	3 級	4 級	5 級	6 級	計
視覚障害 [11.3]	県	3,774	2,462	1,039	1,268	1,443	1,718	11,704
	神戸市	2,268	1,520	570	645	676	694	6,373
	計	6,042 (33.4)	3,982 (22.0)	1,609 (8.9)	1,913 (10.6)	2,119 (11.7)	2,412 (13.3)	18,077 (100.0)
聴覚障害 [10.4]	県	746	3,202	1,637	2,126	90	3,493	11,294
	神戸市	347	1,303	791	1,036	69	1,706	5,252
	計	1,093 (6.6)	4,505 (27.2)	2,428 (14.7)	3,162 (19.1)	159 (1.0)	5,199 (31.4)	16,546 (100.0)
言語障害 [1.4]	県		6	926	495			1,427
	神戸市		33	671	167			871
	計	(-)	39 (1.7)	1,597 (69.5)	662 (28.8)	(-)	(-)	2,298 (100.0)
肢体障害 [59.8]	県	9,984	14,522	11,772	15,765	11,331	4,752	68,126
	神戸市	3,460	6,238	4,968	6,613	4,270	1,815	27,364
	計	13,444 (14.1)	20,760 (21.7)	16,740 (17.5)	22,378 (23.4)	15,601 (16.3)	6,567 (6.9)	95,490 (100.0)
内部障害 [17.1]	県	9,997	59	4,235	4,163			18,454
	神戸市	4,356	44	2,348	2,118			8,866
	計	14,353 (52.5)	103 (0.4)	6,583 (24.1)	6,281 (23.0)	(-)	(-)	27,320 (100.0)
県		24,501	20,251	19,609	23,817	12,864	9,963	111,005
神戸市		10,431	9,138	9,348	10,579	5,015	4,215	48,726
計		34,932 (21.9)	29,389 (18.4)	28,957 (18.1)	34,396 (21.5)	17,879 (11.2)	14,178 (8.9)	159,731 (100.0)

注1) 兵庫県資料により作成

注2) 表中の()は級別の、また[]は障害種別の構成比

このように障害は、その種別や程度によって多様である。2つ以上の障害を併せ持つ

重複障害も4%いる。さらに、機能的には同等の障害であっても対応能力には個人差が見られる。障害の原因や時期、教育環境や生活環境、意識や価値観による差が影響するからである。たとえば、同じ聴力であっても補聴器の利用と話し手の口の動きとを利用して話を聞き取るもの、補聴器を使わずに手話を用いるもの、補聴器も手話も使わず筆記に頼るもの、話す方でも健聴者と同じように話せるもの、発音は悪いが話せるもの、まったく話せないものなど、個人によって大きく異なる。なお、手話についても知らない聴覚障害者の方が多い²⁾。同様に、視覚障害者でも、点字をできないものも多いとされている。したがって、単一の障害者イメージでは不適切であり、単一の対策ではことたれりとすることはできない。

また、災害時の対応行動や応急対策という面で見ると、障害者には高齢者が多いという点も指摘しておく必要がある。厚生省の調べでは、障害者の中に65歳以上の占める比率は48.8%と過半数近い³⁾。60歳以上で分けると62.7%に達する。ちなみに聴覚障害者調査でも、70歳以上が29.4%と一番多く、60歳から70歳未満が23.5%となっており、60歳以上で過半数を占める。これは、聴力障害では老人性難聴、視力障害では緑内障など、また内部障害者にも疾病を原因とする人がいることを反映している。逆に言えば、高齢者の中には程度の差はあれなんらかの障害を持つ人も多い。70歳以上になると千人あたり90人が障害を持っている⁴⁾。しかも、この数値は基本的には身体障害者手帳の保持者を対象としており、実際にはもっと多いという指摘もある。つまり、障害者は同時に高齢者であることも多く、逆に高齢者はなんらかの障害をもつ割合が高いことになる。障害者対策と高齢者対策とは整合性を持たせるべきということになる。

災害時の障害者を考える上で、単身者が多い点にも留意が必要である。聴覚障害者調査では、30.5%が独りで暮らしていた。また、兵庫県を対象とした調査ではないが、日本点字図書館の調べによると、27.6%が晴眼者と同居していないと回答している⁵⁾。平常時では自立可能であっても、災害時には単身では対応できない危険性も高い。災害によって環境が大きく変化し、非日常的な対応行動を求められる環境下では、自立の条件が失われてしまう可能性が高いからである。また、介護者がいる場合でも、介護者自身が高齢であり、災害下では対応できない状況も懸念される。

3. 震災下の身体障害者

(1)被害状況

地震により大きな人的被害、物的被害を受けている。幾つかの障害者関連支援団体の中間集計によると、死亡率は0.6%から1.3%程度となっている(表3参照)。今回の震災による県全体の死亡率は0.1%程度であり、この数字からみると障害者の死亡率は高いことになる⁶⁾。ただし、支援団体の数値は激甚地域で調査した結果であり、その結果死亡率は高くなっていると考えられる。比率はともかく多くの障害者が被害を被ったことは確かであり、また障害者自身が難を免れても、家族が死亡し自立不可能となった者も多いことも確かである。

表3 支援団体による被害状況調査結果

	安否確認数	死亡者数	死亡者率	全半壊数
聴覚障害者現地救援対策本部 ^{*1}	1,548名	10名	0.6%	142世帯
兵庫県難聴者福祉協会 ^{*2}	301名	4名	1.3%	87世帯
視覚障害被災者支援対策本部 ^{*3}	1,630名	21名	1.3%	300世帯
日本ホストミ協会兵庫県センター ^{*4}	333名	2名	0.6%	36世帯

*1 出典) 聴覚障害者現地救援対策本部、「負けへんで!」より

*2 出典) 兵庫県難聴者福祉協会、「兵庫ひびき」、第40号より

*3 視覚障害被災者支援対策本部の資料より

*4 出典) 日本ホストミ協会兵庫県センター

聴覚障害者調査では、全体の7.0%が家具等の下敷きになっている。揺れの強かった神戸市、芦屋市、西宮市、淡路に限ると16.7%に達する。また、落下したものに当たりけがをした人が7.4%、ガラスや食器を踏みけがをした人は7.8%と、負傷した人は多い。また、家族を亡くした人も1人いる。家や家具等の下敷きになった人も家族や近隣、消防職員等の手で助けられている。しかし、高齢の女性ほど自力では脱出できなかった割合が高く⁷⁾、救出体制を考慮しておく必要がある。また聴覚障害や言語障害のある人では声を出せず、救出隊に自分の存在を知らせることができなかったとの指摘もある。救出するか否かを声の有無によった捜索方法の見直しも必要となる。

住宅の被害についてみると、同調査では自宅が全壊した人は全体の18.0%、神戸市、芦屋市、西宮市、淡路に限ると26.8%に達する。全壊に加え半壊が17.2%と、合わせて3人に1人は大きな被害を受けている。なお、一部損壊は30.5%、家具が倒れたり、皿などが壊れた程度が17.2%となっている。

また、障害者特有の物的被害もある。補装具を壊したり、薬をなくした例である。就寝中の人が多かったため、日常生活に不可欠な補装具の被害も目立った。聴覚障害者の補聴器、視覚障害者の白杖や目薬、内部障害者の薬やパウチ等の装具などである⁸⁾。聴覚障害者調査では、1割の人が補聴器が壊れたり電池切れて苦労したとしている。命に関わるケースもあり、また今まで比較的注意されていなかった被害である。

(2)異常覚知と初期対応

一般に視覚障害者や聴覚障害者では異常覚知が遅れやすいとされる。視覚ないしは聴覚を通した情報が入りにくいためである。特に聴覚障害者の場合には、サイレン、防災行政無線、広報車、館内放送、車内放送、ハンドマイクなど異常や緊急を伝える情報は基本的に音声であり、入手には困難が伴う。しかし、今回の災害は揺れが強く、また津波もなかったため異常覚知面では問題は少なかったようである⁹⁾。ただし今回の震災で問題が少なかったゆえに、警戒宣言や津波警報、避難命令等の伝達に重大な問題があるということが、見過ごされがちである。

さて、地震の発生が早朝でありまだ寝ている人も多かったが、大きな揺れで即座に地震に気付いている。聴覚障害者調査では、地震発生時に70.7%が自宅で寝ていたが、ほぼ全員が揺れで目が覚めている。しかし、地震で揺れている間、42.6%が動けなかった

と答えている。そのまま寝ていた人、布団をかぶった人、家族をとっさにかばった人などいるが、いずれにせよあまりの激しい揺れにそれ以上の対応行動はほとんどとれなかった。さらに表4に示したように、揺れが収まってからも33.7%が「しばらく動けなかった」と答えている。今回の地震の揺れの衝撃の強さを感じさせる数値である。

揺れが収まって、身の安全確保や情報収集が開始されている。聴覚障害者調査では、43.1%の人が「テレビやラジオをつけた」、38.0%の人が「外へ出た」としている。ただし、今回の震災ではいずれの行動の難しさも想像を絶するものがあった。

建物に被害を受け、家具が倒れ、ガラスや皿が散乱している中で、まず家族の安否を確認し、助けることが先決だった。暗闇の中、のしかかっている物を自力で押しのけ、あるいは家族を助け出した¹⁰⁾。身の安全を確保してからも、外に出ること自体が極めて大変だった。階段が崩れ、壁や家具に塞がれ、ドアは歪んで開かない¹¹⁾。

表4 揺れが収まってからの行動

	全 体	全 壊	半 壊	一部損壊	什器被害
しばらく動けなかった	33.7	31.8	34.1	34.2	40.9
外へ出た	38.0	47.7	61.0	48.7	18.2
自宅に向かった	2.0	4.5	2.4	0.0	2.3
避難した	10.6	31.8	19.5	2.6	6.8
火の始末をした	14.9	11.4	19.5	15.8	15.9
テレビやラジオをつけた	43.1	31.8	26.8	51.3	45.5
電話をかけた	22.0	20.5	17.1	32.9	15.9
FAXをした	9.4	4.5	2.4	13.2	11.4
けがの手当をした	3.9	4.5	0.0	7.9	0.0
病院へ行った	2.4	4.5	4.9	1.3	0.0
その他	19.3	18.2	26.8	17.1	27.3

注) 聴覚障害者調査による。その他の中で多い行動は、被害確認

肢体不自由者や視覚障害者は難を逃れても、まずこの段階で対応行動に制約を受けてしまっている。とくに単身でいた人は対応行動にも困難があったようである。ひとつに、家具や物が部屋中に散乱し、部屋の様子が一変して歩けないという制約がある。視覚障害者の場合には、部屋の中も時間をかけて作り上げてきた<頭の中の地図>を頼りに移動している。揺れで方向がつかめなくなったり、どこが通れるか分からなかったという例があった¹²⁾。一旦屋外に出ても、町の状況が一変し、道路に落下物があふれ、瓦礫が散乱している中、頭の中に作り上げてきた地図がまったく役に立たず動けなかったという¹³⁾。

また、車椅子の人や下肢障害の人ではまったく移動できない。エレベータが停電で止まり、降りれなかった車椅子の人の例など、も報告されている¹⁴⁾。

このように移動の困難さは、地震災害からの緊急避難に加えて、障害者の自立を妨げる長期的な課題でもある¹⁵⁾。

(3)情報空白

その後の情報空白も深刻であった。揺れが収まってからテレビやラジオをつけたり（表4参照）、電話をかけたり、近所の人と話したり、いろいろな情報行動を行っている。しかし、テレビは停電したり、地震で壊れたりしており、被災地域では見られなかった人が多い。聴覚障害者調査では、42%の人がテレビや新聞がなくて状況がつかめなかったという。テレビを見ることができた地域の人でも、アナウンサーが原稿を読み上げるだけで聞き取れない、字幕がついていない、聴覚障害者ニュースが特集番組のため中止となったなど、状況がつかめず困ったという声があった。同様に、聴覚障害者にとって重要な連絡手段であるファクシミリも停電や回線のふくそうから使えず、20.0%の人が連絡が取れずに困り、不安だったとしている。

地震の後に知りたかった情報をどの程度入手できたかを表5に示した。参考までに平成5年釧路沖地震時の結果もつけたが、今回の調査結果の方が評価は厳しい。被害に差があることもあるが、健聴者と難聴者の違いも原因と考えられる。今回の調査では6割が、情報入手は不十分だったと評価している。自宅の被害別に見ると、全壊被害を受けた人では8割にも及ぶ。差し迫った情報ニーズがありながら、情報入手できなかったのである。

表5 地震後の情報入手程度

(単位：%)

	今回の調査	釧路沖地震 ¹⁾
非常によく知ることができた	4.7	8.2
かなりよく知ることができた	27.7	40.4
あまりよく知ることができなかった	43.4	37.6
ほとんど知ることができなかった	15.6	7.0

(n=256)

(n=873)

注) 東京大学社会情報研究所「災害と情報」研究会、平成5年7月
「平成5年釧路沖地震における住民の対応と災害情報の伝達」による

これらの情報不足は、健常者でも同じ状況にあったといえよう。神戸でこれだけ揺れた位だから東京は壊滅だろうと思った、という人もいた。震源や被害の状況がわからず、神戸に地震がくるとは思いもしなかったからだという。災害の下では、想像以上に情報収集や状況把握が難しいもののようである。しかし、聴覚障害や視覚障害といった情報障害を持つ人々ではその程度は著しく、特にひとりでのいた人は、暗闇のなか音も聞こえずあるいは周囲の状況がわからない。不安は強かったであろう。情報を入手することができず何かなんだかわからない¹⁶⁾、健常者は皆知らされているのに自分だけ情報入手できていないのではないか、周囲の人の行動がわからず手がかりがない、という状況を見て取れる。

広報や避難命令がわからずが、不安を感じている人も多い。長田区に住む聴覚障害者は、火や煙は見えるが、火事がどこまで広がってきているのか、どちらの方向に避難して良いのか分からなかった。広報車が通るが不安が増すばかりだった。ガス漏れの広報がわからず、道ばたでタバコを吸おうとして近所の人にひどく怒られた、あるいは、ガスが漏れているかも知れないと気づき、もし気がつかなかったらと冷や汗をかけた、と

いう人もいた。このように情報空白は、被災者を不安に陥れたであろうし、また生命に関わる事例もあったのである。

(4)避難行動と避難先

一部の肢体不自由者や視覚障害者では、避難行動が困難であったものもいるが、長期的には自宅に被害を受け、ライフラインが機能停止して、あるいは余震に脅えて多くの人が避難をしている。聴覚障害者調査では、避難をした人は、31.3%であった。当然被害が大きいほど避難する率は高い。住宅被害が一部損壊の人のうち避難したのは11.5%であるのに対して、半壊では56.8%、全壊になると87.0%に達している。

避難先を見ると、知人・親戚の家にずっと避難していた人が多い。親や兄弟が迎えに来ている例が多いが、同障の仲間や隣人の支援を受けている人も多い。図1に示したように、避難した人の40.0%にのぼっている。これに対して、ずっと避難所にいた人は少なく、17.5%にとどまる。当初避難所にいたが、避難所から自宅に戻った人も多く15.0%に、また、避難所から知人・親戚宅に移った人は13.8%となっている。この3者を合わせて最初は避難所に行った人は計46.3%ということになり、半分以上のそのうち28.8%は避難所を出て自宅なり知人・親戚宅に移ったことになる。調査時点は地震から5カ月経過しており、自宅に戻れた人も多く含まれていることは想像に難くないが、避難所生活を避けて無理に移った人もいる。

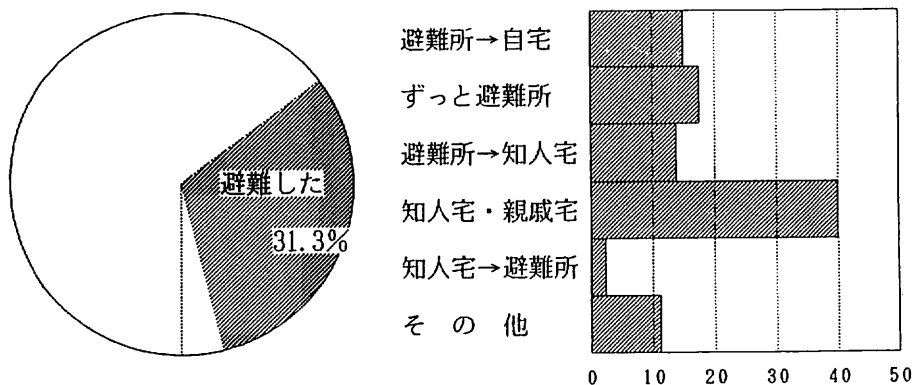


図1 避難の有無と避難先

他方、避難せずに自宅にいた人は64.8%である。その71.1%が自宅に被害がなかったためとしている。しかし、10.2%の人は自宅が幾分被害を受けたが、どこに行けばいいかわからなかったと答えている。前述したように避難率は31.3%であり、全半壊率の35.2%と比べて低い。つまり、大きな被害を受けても避難しなかった人がいることになる。支援活動を行った団体によると、むしろ自宅にいる障害者に厳しい状況の人が多かったともいう¹⁷⁾。

(5)避難所生活

今回の震災では、32万人に迫る被災者が避難所生活を強いられた¹⁹⁾。しかも、行政主導のもとに避難所を開設、運営するという従来の形態が当初はとれず、環境整備面、状況把握面とも困難を窮めた。行政に加えて、1日平均2万人と推定されるボランティアの活躍にもかかわらず、避難所生活には厳しいものがあった。この厳しい避難所生活に耐えられない弱者の存在に、今回の震災を通じて災害弱者対策が問われた原因をみることもできる。

長期にわたった被災生活で、多くの人が生活上の不便や不満を抱えていた。聴覚障害者調査によると、不便・不満の中で一番多かったのは風呂で53.7%の人があげている。ついで洗濯が43.1%、トイレ42.7%、交通の便39.6%、電話・FAX35.7%と続いていく。この傾向は、避難した人においても、避難しなかった人においても見て取れる。また、障害者だけではなく、さらに既往災害においても類似の結果となっている。

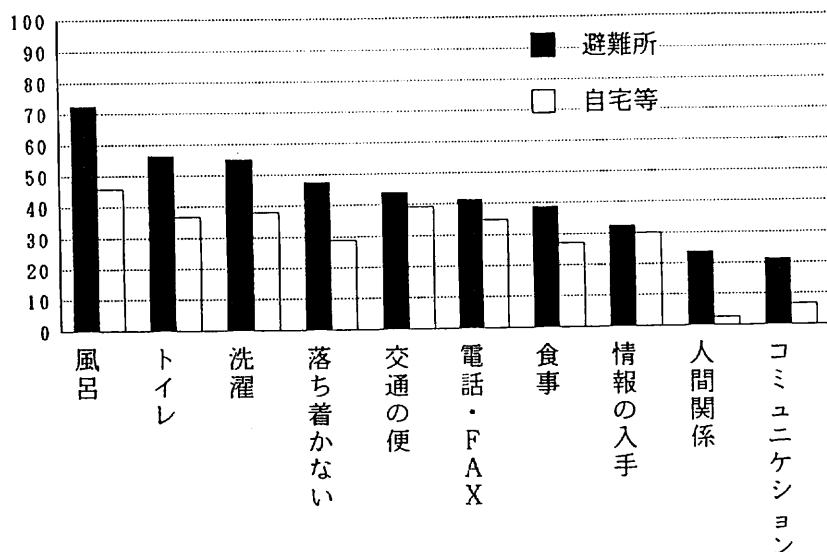


図2 主な生活上の不便や不満

しかし、障害者の場合には、避難所生活を困難にするいくつかの原因がある。第1に、機能の喪失あるいは低下そのものを原因とする事例である。たとえば、呼吸器系の内部障害者の場合にはホコリの多い環境では健康の維持は難しくなる。このため、避難所に連れてこられたペットの毛に困ったという。人工肛門で洗腸をしている人は、そのための設備や環境が必要となる¹⁹⁾。また少し質は異なるが、集団生活そのものに困難を感じた人もいる。ある障害者は地震後よく発作を起こし、意識不明となることが多くなったという。このため、避難所で隣の人に倒れかかり迷惑をかけたのでそれ以降、父親と車の中で暮らすようになった。あるいは、ある老人性痴呆症の人が、避難所で他人の分の

布団まで畳んでしまうので、避難所生活をあきらめた、といった例がある。自閉症の場合には集団生活そのものが過度なストレスとなりうる。

第2に、同じ設備面、施設面の問題ではあるが、避難所の多くが学校等公共施設であったことを考えれば本来整備されているべき性質の設備、施設の不足が原因となっている事例である。車椅子用のスロープや障害者用のトイレ、誘導ブロックや手すりなどをあげられよう。機能喪失・低下を補償する、いわゆるバリアフリーとなっていなかったため、避難所に入れなかった、トイレに行けず避難所をあきらめた障害者がいたのである。福祉面での事前対策の水準が問われる部分といえよう。災害弱者対策が、防災対策の範囲だけではない、日頃の福祉サービスに依存する面を端的に示している。

第3に、応急対策面で配慮がなされれば改善されたであろう問題もある。特に、情報提供の仕方は予想外に避難所生活を難しいものとしていた。聴覚障害者では、連絡事項が聞きとれないことが切実だった。放送等音声で通知されることが多く、気が付かなかったり、内容を理解できなかった。人が並んだので並ぶ、何だかわからないがとにかく並ぶ、並ばないと損をする、という感じだったようだ。出遅れるため物資が尽き入手できなかったり、まったく関係のない列であったこともあったようだ²⁰⁾。聴覚障害者調査では25.5%が情報を入手できず必要なものの入手や手続きができなかった体験があると回答している。

視覚障害者にとっても情報制約の問題は同様であった。放送で、「運動場で〇〇を配付」といわれても、どこに運動場があるのかわからない、動けずに取りに行けないということは多かった。さらに、体育館では一度動いてしまうと自分の居た場所を見つけないのが困難だったという人もいた。初めての場所では、頭の中に地図ができるまで他人に連れて行って貰わざるを得ない。なかでも、トイレで大変苦勞している。どこにトイレがあるか分からない上、大勢の被災者で混んでいたもので、行く途中で他の人の手や足を踏み、どなられて避難所を出た人もいた。また、広い空間があると方向がわからなくなるため、手がかりのまったくない校庭に設置された仮設トイレには行けないという。

避難所の運営においては、このような情報の制約を補償する必要がある。聴覚障害者のために連絡事項は掲示するか、メモにして渡す、仮設電話の代わりにFAXも設置する、といった文字での情報補償が求められる。視覚障害者のために、具体的な方向や誘導のための目印を用意する。たとえば、仮設トイレは校庭の真ん中に設置せずに、壁沿いに設置する、あるいはロープを張って誘導するなどの配慮が必要となる。

また、1階が遺体安置所、2階が避難所となったところもあった。この設置形態も肢体不自由者や視覚障害者には大きな障害となっている。

第4に、対人面での問題があった。差別的な行動を受けた例も見られる。ある視覚障害者は地震当日から3日間運動場にいたが、その間に「メクラがなぜ来た」、「ヘルパーがついてるはずだ」、「メクラのくせにリング喰ってる」といった声が聞こえ心底恐かったという²¹⁾。避難所ではないが、役所の窓口で手続きが間違っているとされた聴覚障害者がいる。前来たときに指示されたとおりにしたのに、耳が聞こえないから間違ったと言われたという。聴覚障害者調査では、6%の人が「差別的な発言や行動を受けた」としている。

それらの事例は例外的であったと信じたい。実際、多くの障害者が地震後人の優しさ

に触れることができたとも言う。しかし、障害を持つ側は非常に気兼ねしていたのも事実である。誰かに聞こうにも周りの人がイライラしているようで聞けなかったという聴覚障害者、トイレに連れていってもらただけでも気がひけて、毛布の配給まで頼めず寒さを我慢せざるを得なかった視覚障害者、避難所で子供が騒ぐと迷惑と思い毎日外に連れ出し夕方疲れ果てさせてから連れ帰った知的障害者の親、トイレにいけなため水や食べ物を我慢していた肢体不自由者、ストーマの身で共同のお風呂では一般の方が気持ち悪いのではと風呂にいけなかった内部障害者、など枚挙の暇はない。高齢者にも同じ様な、気兼ねと呼ぶにはあまりにも犠牲の大きい行動傾向が見られる。

他方このような気兼ねがあったことが、避難所の管理者やリーダーに障害による生活支障を気付きにくくさせていたともいえる。とくに、聴覚障害者や内部障害者のように外見からは判断つかない障害の場合には、障害の有無すらわからない。このため、後述するように支援団体が避難所を回っていても、障害者がいるかどうか把握できていない避難所が多かったという。

もちろん、避難所によって、対応や支援の程度はまったく違ったようだ。たとえば、避難当初はストーマの処理に困ったが、保健室の先生の配慮で身障者用のトイレを使わせて貰った、あるいは難聴学級がある小学校では聴覚障害の内容を理解しているため、行き届いた配慮がなされた、などの事例もある。医療チームが果たした役割も大きかったようだ。視覚障害者の団体の話では、医療チームを通して状況把握ができた事例も多いという。また思い余って避難先の小学校にボランティアとして来ていた埼玉医療チームに相談を持ち掛け、装具を数日後に取り寄せて貰ったという事例もあった。さらに、宝塚市では聾啞者が集まっている避難所もあった。そこには、手話通訳者もおり情報の入手や伝達は円滑だったようだ。周囲の配慮や障害者の自衛で孤立、ひいては生活支障を防ぎ得た例と言えよう。

ただし、避難所生活は多くの障害者には厳しい環境であった。結局、避難所生活を諦めた障害者も少なくはない。「迷惑になる。危険でも慣れたところで生活したい」という表現が、障害を持つ人々の偽らざる気持ちを代弁しているのであろう。

(5)施設への収容と仮設住宅

避難所とある意味で対極にあったのが福祉施設での生活だった。避難所生活が弱者に厳しいものであり、長期化するにしたがって、高齢の重度の障害者や介護を要する障害者を中心に専門施設に移った人もいる。とくに、行政やボランティアが障害者の支援に動き出してから、避難所あるいは知人宅を出て専門施設に収容された数は多くなっている。

専門施設では、施設構造や設備面で整っているためである。日常生活における自立を補償する設備、たとえばトイレや風呂の様態、あるいは誘導ブロックや手すりの設置がそれぞれの障害に合わせて設計・設置されている。また、周囲も障害や障害を持つ人間の心を理解しており、適切な配慮がなされることも大きい。それ以上に、同障者が集まっているので、気兼ねせずにすむし、孤立感も少ない。また同障者と被災体験を語り合い、情報を入手し、励まし合うことによって精神的な落ちつきを取り戻している。まさに、心の傷を負った人にとって、施設での生活は「天国のようだ」という。

しかし、専門の福祉施設にも問題は山積している。第1に、当然、これらの施設でも地震の被害を受けている。そのため、受け入れ体制や環境整備に大変な努力を払っている。建物に被害を免れても、ライフラインの機能低下ゆえに、施設としての活動の維持にも困難がある²²⁾。第2に、職員の中にも家族を亡くした人や、自宅に被害を受けた人も多い。加えて、通常よりも多くの人数を受け入れたため、職員の疲労は激しかった。第3に、施設面や人員面で受け入れ可能数は制約されてしまう。被災した類似施設からも受け入れているケースも当然ある。まして長期的には一部の人しか受け入れることはできない。第4に、収容されている障害者としても、仕事のことを考えるといつまでも居るわけにはいかない。比較的市街地から離れた場所に立地している施設では、仕事の継続や再開に不利となる。

現在、災害弱者対策の中核として福祉施設が期待される動きもある。しかし、ライフライン機能の代替や人員面の応援態勢、受け入れ可能な量といった面で、事前からの整備がなされない限り、施設に過度な負荷を課すだけに成りかねない。しかも、その後の仕事等自立面で見ても、課題も残る。そういう面では、自立までの支援措置であって、他の恒久的措置が求められることになる。

そのひとつが仮設住宅である。今回は、災害弱者は仮設住宅に優先的に入れるよう配慮もなされた。この仮設住宅については、離れた場所に移りたくないという被災者共通の思いもあるが、障害者特有の問題もある。

仮設住宅の構造や環境が障害者対応となっていなかった点である。1年なりの期間を生活する場として考えると、仮設住宅は無理と判断する障害者も多い。仮設住宅は、肢体不自由者にとっては段差解消がなされておらず、視覚障害者にとっては点字ブロックも手すりもないうえ、同じ建物が並び、自分の家を見つけることすら難しいという。一人で移動できない場所で生活することは、買い物ひとつとっても成立しないのである。結局、仮設住宅に入ることに躊躇する人もでている。

そういう面で神戸市の「ライフ・サポート・アドバイザー」制度（地域型仮設住宅における生活支援員派遣事業）は注目される。これは、身体障害者対応の2階建て寮形式の施設を整備し、50戸に1人の生活支援員を派遣することによって、障害者等の生活改善を図るものである。画期的な施設であり、障害者側からの期待も大きかった。

4. 支援団体の活動

(1)組織化と初動体制

視覚障害者の支援活動の中心となったのは、阪神大震災視覚障害被災者支援対策本部、通称ハビー（H A B I E : Headquarters to Assist Blind Injured in Hyogo Earthquake）である。関連7団体と1協力団体から構成され、本部を大阪駅近くのJBS日本福祉放送内に、また現地対策本部を兵庫県点字図書館（神戸市中央区）に置いている。当初考えた

代表を務める川越氏は、地震翌日の18日に水や食料を持って現地に入り、被害の広がりや大きさから組織化に向けて動き出している。その時点で、最低1カ月は支援が必要

となり、そのためには組織化が不可欠と判断したためである。翌19日から関連団体と連絡を取り協力を取り付けている。個人的にも日頃から緊密な関係にあることから、比較的順調に協力体制は確立できたようである。この際、経費面は二の次とし、協力の確保を第一としたという。しかし、当初は電話が通じず、また組織化の作業と現場での支援の作業の両方を、少ない人手で実施することは大変だったという。行政活動が軌道に乗るは1週間程度たってからで、21日には神戸市と交渉してボランティアを回してもらったり、NHKラジオを通じて呼びかけをしたりした結果、このころには応援やボランティアを徐々に確保できたという。

聴覚障害者では、日本ろうあ連盟系と全日本難聴者・中途失調者団体連合会（以下全難聴と略す）系の両団体で別個に設置され、その後の救援活動も両団体で独自に行っている。兵庫県聴覚障害者協会（日本ろうあ連盟系）は、1月22日にJR西日本・兵庫駅近くの神戸ろうあハウスに「兵庫県聴覚障害者救援対策本部」を設置した。他方、兵庫県難聴者福祉協会（全難聴系）は、会長が宝塚市におり、神戸市向けのファクシミリはほとんどつながりながら、状況把握や連絡が極めて困難であった。このため、1月26日に、兵庫県宝塚市に「兵庫県難聴者福祉協会地震対策本部」を設置することにしたという。東京の本部と連絡を取り統一する話もあったが、それぞれの障害に応じた救援活動をきめ細かく実施するため、ならびに現実問題としてライフラインの低下から連絡が物理的に難しかったことも原因となり別個の設置となったようだ。

しかし、当初から情報補償を求める統一活動を行っている。具体的には、NHKに対して平常時に放送されていた聴覚障害者向けの番組枠を確保するとともに²³⁾緊急放送にテロップや文字板等をつけるよう要望した。災害時には緊急を要する重要な情報が放送されるが、原稿を読み上げるアナウンサーの映像も多い。テレビ音声は軽度の難聴でも聞き取りにくく、情報を推測する手がかりすら奪われてしまうからである。また、文字放送テレビやファクシミリを避難所へ設置するよう、NTTやメーカーに要望している。聴覚障害者は電話が使えずFAXを利用する人が多く、文字放送を通じて文字情報として情報を入手しているためである。

両団体とも、状況把握は困難を窮めたようである。電話回線が輻輳しているうえに、聴覚障害者の主要連絡手段であるFAXは電話とは異なり停電地域では使えなかったこともある。たとえば、兵庫県難聴者福祉協会では、当日は、会報「ささやき」の印刷の日だったが、中止し食事を持って被害調査に着手したが、東京の連合会本部からの連絡はつくが、西宮や芦屋とは通じず、また交通がひどくて状況はつかめない。そのため、状況把握は地域内に限られることになり、それぞれの地域会長が地域内の会員の安否に走ることになる。

内部障害である日本オストミー協会の兵庫地域センターでは、交通網の途絶や電話の輻輳から幹部間で連絡がとれず、状況把握や善後策の検討は困難を窮めたという。連絡が取れたしたのは、地震から2日経た1月19日以降だったという。とりあえず、会員の安否確認を第1に、あわせて装具の状況等を確認することとした。オストメイトの場合には、パウチは生活に不可欠なためである。しかも、肌に直接、長期間つけるために個々人で使用する種類が異なり、病院でも確保は難しいためである。その活動を行う上で、救護活動の拠点は相談室におき、装具については県最大手の販売会社を中心に対応する

ことにしている。また、近畿ブロックも組織的な救援対策をとるものとし、連日往復8時間をかけて相談室を訪問、対策打ち合わせをしている。

いずれの団体においても、まず支部間や幹部間の連絡がなかなかつかずに、状況把握や組織化に苦慮している。ここでも、災害時の共通の問題である連絡手段の確保が大きな課題となっている。また、本部は多くは団体関連の場所に設置されたが、会員・非会員を問わずよく知られている場所であることが望まれる。事前からの検討やPRについて一考の余地があろう。

(2) 安否確認と緊急支援

各支援団体とも多様な活動を行っているが、まず組織的に会員の安否確認と緊急支援を行っている。

視覚障害者の支援を行ったハビーは、地震2日後の20日から主婦のボランティアも含め、避難所を見て歩き安否確認と緊急支援を開始している。しかし、当時は避難所の場所そのものがどこかつかめず、まずインターネットを利用して情報収集に努めたという。その情報をもとに避難所をまわり、安否確認をするとともに、状況が悪い人は本人の希望に応じて救出し、大阪本部や施設に連れて行っている。

ハビーの安否確認行動で特徴的であるのは、電子化を試みた点である。具体的には、JBSの視聴者リストや関連団体から名簿を集め、パソコンを使ってデータベースを作成している。安否確認状況や現在の所在場所を更新しながら効率化を図っていた。3月末の時点では、被災地域内の視覚障害者1、2級の半分位に当たる1900人程度となっている²⁴⁾。これらの安否確認情報は、各種の要望と併せてマスコミに提供している。

聴覚障害者の2団体も、地震直後から避難所を巡回するなどして会員の安否確認に着手している。なお確認作業を行う上で、日本ろうあ連盟では兵庫県や神戸市を通して全国から手話通訳者の応援を得ている。全日本難聴者・中途失調者団体連合会も、鳥取、岡山、奈良、京都、滋賀の隣接県から現地に入り、要約筆記者の協力も受けている。

たとえば、兵庫県難聴者福祉協会地震対策本部は、第1次支援行動として2月3日から7日にかけて神戸市の避難所を訪問し、安否確認、要望の把握、対応の周知等を行っている。また、同時に避難所で保健担当の責任者や情報紙の発行者等に、難聴者のきこへの説明をしたり、配慮を要請している。さらに、2月12日～17日にかけて第2次支援行動として、非会員も含めた調査を行っている。神戸市内避難所298カ所、西宮市等8市町463避難所を巡回し、聴覚障害者すべてに補聴器の紛失や修理等救援が行われている旨を広報したり、避難所運営者へのお願いを配布している。障害者手帳を持たない高齢者から補聴器の問い合わせを受けることも多かったという。また、地震による外傷から難聴になっている人やショックで難聴が進んだという人もいたという。

日本オストミー協会兵庫センターでは、葉書を用いた調査を都合2回実施している。まず、緊急調査として1月26日に会員へ350通発送した。内容は、安否確認に加えて、装具の手持ち状況と避難先住所である。2月8日現在で50通しか回答を得られなかったため、幹事が自宅から電話で確認している。その結果、避難者は60名で、うち8名は避難所にいることが確認されている。また、i)体調不良、ii)洗腸ができず馴れぬ自然排便のため排便がスムーズにいかず便秘症や腸閉塞になりかけた、iii)装具の交換やトイレの問題等で避難したくても避難できなかった、等の問題も浮かび上がったという。

さらに、4月25日の回収で第2次の調査を行っている。内容は、家族構成や障害の内容、罹災当時の住所と現住所、家屋の被害、装具の状況と入手方法、避難所での処理方法や震災後に困ったこと、今後の課題や協会・行政等への要望など包括的である。

このほか、てんかん関連の団体も、1月22日に「JAE支援センター（救護所）」を設置し、専門家の協力の下に診療や抗てんかん薬の確保を行っている²⁶⁾。

全般に、安否確認においては会員以外の情報がまったくない点が最大の問題であった。しかも、障害関連の各団体ともその会員は一部分でしかない。このため、非会員へも支援を拡大しようとしても、対象者がわからない。避難所を巡回したり、掲示をしたり、マスコミを通じて周知を図ったり、あるいは装具販売店に協力を求めたりと、把握に努めている。もちろん、行政には障害者手帳の原簿等があるが、プライバシーの問題から公表には制約があったためである。

(3) 物資調達と生活支援

安否確認も落ちついたことから物資調達や相談に支援活動の中心は移行していく。物資調達に関しては、水や食料といった一般の被災者と同様の要望もあるが、やはり、障害に起因する要望も出てきている。補装具や薬で、たとえば視覚障害者では、緑内障や白内障の目薬、歩行時の白杖、情報入手のためのラジオ、あるいはメモ代わりのテープ・レコーダーなどがあがってきた。また、聴覚障害者では、補聴器そのものや、その電池、筆談用の紙と筆記具、肢体不自由者の車椅子、内部障害者の薬や酸素吸入器、ストーマ等装具である。それぞれの障害に応じて、メーカーや販売店に協力を求め、提供している。

しかし、物資を確保するうえで、一番困ったのは運搬手段と周知方法だったようである。支援団体の車は緊急車両扱いではないため、迅速な移送ができなかった²⁶⁾。物品の輸送はバイクに乗れる人が当たったが、緊急車両の交付面で行政に配慮をしてほしかったという指摘があった。ボランティアグループのひとつ形態である限り、支援団体への緊急車両交付は難しい。その反面、これら支援団体が安否確認や救護など行政の補完をしたことも事実であり、また平生から福祉行政の面で一定の役割を担っている既存組織でもある。災害弱者対策の中で位置づけを明確にしておく必要があるだろう。

配布対象者が避難所に散在しているため、届けることと同様に知らせる手段もなかった。とくに非会員については、安否確認のところでも触れたが網羅できないため、避難所への掲示やマスコミを通じて周知を図るしかなかった。そういう意味では、各団体ともマスコミ対応を活発に行っている。マスコミ側もかなり取り上げメリットは大きかったが、問題もあったようである²⁷⁾。ただし、マスコミは継続的な情報提供手段とはならない。神戸ミニFM局に期待した団体もあったが、番組枠を認められなかった。この例も、行政の中で支援団体の位置づけが不明確であったことを示すと考えられる。

物的支援に加えて、人的な支援もなされた。第1に、様々な障害者の生活支援である。たとえば、在宅の視覚障害者では、水や食糧等の配給を単独で受けるのは難しいため、ガイドヘルパーを実施したり、地震による部屋の片づけができないため手伝ったりしている²⁸⁾。晴眼者とは違ってどの店が開いているのか視認できないため、日常の買い物や食事に困っている人もいる。人工透析が必要な視覚障害者から病院まで連れて行ってほ

しいとの要請もあった。また、専門的な人的支援も実施された。たとえば、兵庫県と大阪府の言語訓練士が避難所を巡回し、補聴器の調整や相談を受けている。オストミー協会やてんかん協会でも専門家の協力を受けて、現地に派遣し相談や診療をおこなっている。

第2に、罹災証明や仮設住宅の手続き等の支援である。視覚障害者は、町が様子変化してしまったために移動できなかったし、手続き書類も書けない。同様に、聴覚障害者でも、手続き等に手話通訳者や要約筆記者が同行している。聴覚障害者調査では、17.6%の人が「市役所や区役所、町役場での手続き」に困ったとしていた。

第3に、各種情報提供や相談業務も行っている。たとえば、開業している眼科医や避難受け入れ先などの生活情報提供を提供したり、住宅や職業の斡旋などである。また、各団体とも義援金を配分し、経済的な支援も行っている。

5. 災害弱者対策の課題

以上、阪神・淡路大震災における障害者の状況と支援団体の活動を紹介し、かつ幾つかの問題点を指摘してきた。そのうち、災害弱者自身の自衛が求められる点もある。災害下で発生が予想される問題について個々の状況に合わせて必要な措置の確保を考慮しておくべきであり、近隣・関連団体との関係を密とし災害下でコミュニケーション・ネットワークからこぼれないようにするべきである。

それとともに、行政に求められる災害弱者対策の課題も多い。以下、それらをとりまとめ、行政の対策の観点から再整理しておきたい。

第1に、災害対策機能に障害者や高齢者といった弱者それぞれの専管体制をひくべきである。本論では述べなかったが、阪神・淡路大震災における弱者対策のひとつの教訓は、専従スタッフを確保する必要があるという点である。災害弱者は多様であるが故に弱者となっているという前提を考えれば、災害弱者対策は単一の規定の運用では限界がある。しかも、柔軟かつ迅速な対応が求められる。障害者等の状況を理解しており、ネットワークも持っている職員が窓口となる必要がある。しかし、防災計画上、福祉関連の職員は避難所の運営などに配属されていたため、障害者や高齢者等で状況の悪い人のことを心配しながらも、割り当てられていた仕事に忙殺されてしまった。このことは情報収集や対策実施に遅れが生ずる原因ともなるし、内容的にも障害を理解していない表面的なものにしてしまう恐れもある。このような体制は、県の災害対策本部や市区町村の災害対策本部から現場に至るまで類似の構造であった。また、兵庫県や神戸市に限ったものではなく、全国に共通と言っても良からう。防災計画の中に災害弱者対策が位置づけられていなかったのである。情報収集や対応震災後、災害弱者対策を検討している地方公共団体も多いが、まず本部から現場まで通じた災害弱者の専管体制を確立するべきである。

第2に、災害弱者対策を考える上で対策領域を広げて考えるべきである。具体的には、発災直後だけではなく長期的な視野での計画策定が求められること、および情報提供や

被災生活の問題に対策領域を広げた計画策定が求められること、の2点であろう。もちろん、災害直後の避難・救出は生命に関わるものであり、重要性は極めて高い。しかし、今まで、発災直後の避難対策にややもすると目をとられがちだったといえよう。

表6に、4つの対策領域に分けて災害弱者対策の項目整理を試みた。この表だけでは網羅できてはおらずこれから埋めるべきものも多く落ちていると思われるが、少なくとも対策領域の広がりを示すことはできると思われる。大きくは、生存そのものに関わる要件を補償する項目群と他者に可能な限り依存せず自立を可能とするための要件を補償する項目群とに分けられる。

生存の補償では、地震による1次的な被害から弱者を守り避難を確保し、被災生活で生命が危険にさらされる人工透析患者等の継続的な医療または介護を提供するものである。その確保は生命に関わる問題であり、広域的な対応も含めたシステム作りが必要である。

自立の補償では、情報面や移動面の制約から被災生活にかなりの支障が生じることを防ぎ、長期的にも自立できる条件を補償するものである。自立は障害者の権利であり、また周囲の不必要な負担も軽減する。たとえば、視聴覚障害者や聴覚障害者は基本的には情報障害であり、その補完が必要になる。今まで見落とされがちだったが、災害放送での字幕や文字の多用、避難所等での重要情報の掲示、ロープを張るなど避難所等でトイレや配給場所等までの道を示す標識の設置、ガイドヘルパーや手話通訳者・要約筆者等の確保など、実施可能なものも多い。

表6 災害弱者対策の領域と項目

	事前対策	応急対策	復興対策
I. 生存の補償	・ 専門施設の把握と広域応援体制 ・ 建築物のバリアフリー化 ・ 要介護者の把握	・ 避難誘導・救出 ・ 人工透析等医療の確保と周知 ・ 薬や装具の調達 ・ 専門施設への収容	・ 重度障害者の介護
II. 自立の補償			
II-1 情報補償	・ 防災知識の啓発 ・ 手話通訳、ガイドヘルパー等の充実 ・ 字幕つきテレビの普及	・ 警報等情報提供手段の多様化 ・ 避難場所における情報提供手段や内容面での配慮	・ 広報手段や相談窓口における配慮
II-2 移動補償	・ 避難場所のバリアフリー化 ・ 仮設トイレの設置 ・ 配給場所の設置 ・ エレベーターの停電対策	・ 避難路の確保や誘導体制 ・ 肢体不自由者の車利用	・ 仮設構造物に関する配慮 ・ 弱者適合仮設住宅利用
II-3 経済補償	・ 住宅の耐震化補助		・ 就労の斡旋

第3に、これらの弱者対策の実行面を考えると、支援団体の役割を位置づけておく必要がある。行政としてはボランティア等外部組織に委ねることには抵抗もあろうし、またすべてを委ねるには問題もある。たとえば、団体によっては質的にも量的にも活動する力に大きな差があるためである。障害の種類や程度、原因によって団体は細分化されている。活動の伝統や地域的な広がりにも差が見られる。それ以上に、団体への加入率は低いという問題もある。非会員への救援を保証できない点は大きな課題である。安否確認ひとつとっても、団体では非会員についての情報を知り得ない。かといって、個人情報情報を安易に公表することはプライバシーの面からもできない。この点ひとつとっても、団体にすべてを依存することはできない。

しかし、災害規模が大きくなれば、行政は個々の状況に対応することは現実的には難しくなる。他方、支援団体は同障であるが故の細かい配慮や日頃から形成・蓄積してきたネットワークの持つ力も大きい。また、組織的に活動しうる能力を有する。地域のネットワークによる自主防災組織に対して、地域を越えた横のネットワークとしての新たな可能性を持つ。今回浮き彫りとなった被災障害者の生活支援の改善などの面では、団体の持つ人員や同障故の配慮が有効となろう。いずれにせよ事前から協議をはかり、地域に応じた体制を想像していくことが求められる。

第4に、最終的には防災対策と福祉対策との関連も問題となる。事前対策や長期的対策になるにつれ、防災対策と福祉対策との関わりは深くなっていく。今回の震災で指摘された避難所生活での問題は、たぶんに避難所のバリアフリー化の遅れにある。日頃の福祉サービスの水準が問われるといわれる由縁である。他方、長期化すれば福祉制度との整合性が当然のこと求められる。

おそらく、ここで防災対策における災害弱者問題をどのように考えるべきかが根本的に問われることとなろう。少なくとも余力に基づく高度サービスとの捉え方はもはや許されない。4人に一人が高齢者となると想定される高齢化社会に向かいかつ世界的な障害者等の人権を守ろうとする潮流の中で、一人の災害弱者を救うか、それとも100人の健常者を救うのかという議論は成立しない。その面で災害弱者対策は、防災対策のシステム自体の変更を求める契機を意味すると考えられる。大規模災害においては、過度な行政依存、地域主義の限界があると考えられるのである。

注

1)対象者は、兵庫県難聴者福祉協会のうち周辺地域も含めた10支部および神戸市難聴者協会の会員である。調査は、郵送法を用いた全数調査である。調査期間は、6月13日から6月30日までである。対象者は全体で、323人、回収数256通、有効回収率79.3%である。詳しくは、田中、「阪神・淡路大震災と身体障害者－聴覚障害者を中心として」、1995年地域安全学会論文報告集を参考のこと。

調査票配布数と回収数

配 布 地 域 名		配 布 数	回 収 数	有効回答率
兵 庫 県 難 聴 者 福 祉 協 会	芦 屋 市	1 5	1 3	86.7%
	西 宮 市	5 5	5 0	90.9%
	宝 塚 市	4 1	3 2	78.1%
	伊 丹 市	1 0	9	90.0%
	尼 崎 市	5	3	60.0%
	川 西 市	7	6	85.7%
	三 田 市	1 0	7	70.0%
	三 木 市	2 0	1 4	70.0%
	明 石 市	1 8	1 3	72.2%
	津名郡・三原郡	3 9	3 5	89.7%
そ の 他		3	0	0.0%
神戸難聴者協会		1 0 0	7 4	74.0%
合 計		3 2 3	2 5 6	79.3%

2)聴覚障害者調査では、「手話ができる」人は11.4%にとどまる。「簡単な話ならできる」という人でも29.4%にとどまり、「ほとんどできない」人が18.4%、「まったくできない」人が38.8%に達している。調査対象は手話を使うろうあ連盟加入者ではなく、難聴者・中途失聴者が多いという偏りはある。しかし、聴覚障害者全体の分布から見ると、実状をより反映していると考えられる。

3)厚生省社会・援護局、「日本の身体障害者－平成3年身体障害者実態調査報告書」、1994年3月

4)同上

5)日本点字図書館、朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査（要約編）、1993年10月

6)関沢 愛(1995)「高齢化社会と防火安全」、平成6年度火災学会講演討論会テキストによると住宅火災では身体障害者の死亡率は平均の5倍となる。

7)老年行動科学研究会阪神・淡路大震災高齢者調査発表会で発表された筑波大学の高齢者を対象とした調査では、自力で脱出した人は男性が60%に対して、女性は27%にとどまる。逆に、近所の人に救出は男性が26%、女性が47%、家族に救出は男性8%、女性20%と、女性の方が他者に救出されている割合が高い。なお、救助隊による救出は男女ともほぼ6%となっている。

8)「そうだバウチのスペアを！」と思ったが、思わぬ方向に部屋中のものが飛び交い容易に見つからず大変焦ったというオストメイトもいた。

9)もちろん、異常覚知に遅れ、あるいは対応できなかった人もいる。たとえば、顔にタオルがのっても払いのけられないという重い心身障害を持つ人の例では、地震の後、父親が顔をさわったら濡れている。そばの花瓶がたおれ濡れたのかと思い拭いてやろうとしたら、血だったという。

10)「ようやく揺れがおさまってから急いで起きあがり子供の部屋へ助けに行きましたが、重い家財が倒れてとてもとれない状態でした。神の加護を祈りつつ力一杯家財を押上げて手探りで娘達を救助しました。」「大きく揺れ逃げ出そうとしましたが、タンスが倒れ天井が崩れ、足の上にロッカー倒れてきました。ロッカーは重くてどかせません。身動きができず何も見えない聞こえない。ガスの匂いもしているし死ぬかもしれないと思いました。本箱をたたき自分の存在を知らせました。」 出典) 阪神・淡路大震災聴覚障害者現地救援対策本部、1996年1月、「負けへんで!」

11)「大きく天井が崩れ棚から物が落ちてきました。顔の上、こたつの上にも落ちてきました。テレビも倒れ危ないので逃げ出そうとしたが手探りで戸を開けようとしたが開きません。もうひとつの戸もだめなので、窓から逃げ出そうとしたが、いがんでいて開きません。しょうがないから窓ガラスを割って飛び出しました。」「家から外へ出るにも暗くて見えません。いろいろな所にぶつかり、本棚などが倒れていて前に進めないのので山登りのようにして、天井近くまで上がって乗り越えました。・・・ドアを開けようとしてもなかなか開かず、やっと開きました。いつもは2階なのに開いたときは1階になっていたのでびっくりしました。 出典) 阪神・淡路大震災聴覚障害者現地救援対策本部、1996年1月、「負けへんで!」

12)最初の日に隣人が部屋をノックしてくれたが、部屋の中がひどくてたどり着けずそのままになってしまったという。また、外に飛び出す声が聞こえたので、自分も外に出ようとしたが、戸が開かない。そのうち誰も居なくなったので、また元に戻り、座布団を裏返し座っていた。もうダメかと思ったという人もいた。

13)外に出たが、路地にヒビがあって動けない。壁にもたれて座っていた。また、もうダメだと思った。通りがかりの大阪の女性が「何してるの。ここにいてはダメ」ということで小学校の運動場まで連れて行って貰った、という視覚障害者もいた。

14)ある肢体不自由の人は、ポートアイランドは段差も少なく車椅子の人には住みやすい街だったいつもは動き回っていた。しかし、地震で停電となりエレベータが止まり10階から降りれなかった。あるいは、階段を家族に背負われて上り下りしていた人もいた。

15)長期的にも、移動が困難となった視覚障害者は多い。長年かかってちょっとした段差やでこぼこ、さらには風で路地を見分けたり、コーヒー屋の香りで場所を確認したりしていたのが、一瞬にして役に立たなくなってしまうためである。落下物やがれきが道においてあり、恐くて歩けない、路上駐車が増え困った、駅などに仮設箇所が増え、場所が変わってしまったので、どこから入るのかわからない、といった声も聞かれた。信号が点滅となった交差点では、車の切れ目がつかめずに立ち往生していた人もいた。

16)父親に着る物とか大事なものをまとめてついてこいといわれ、何がなんだかわからなかったが、とにかく我慢して学校まで行った。そこで、母親に地震が来て避難をしたと聞かされ初めてわかったという聴覚障害者もいた。

17)3日間ミックスジュースだけで過ごし、4日目に水が欲しくなって避難所(15分位)まで水を買いに行った。しかし、バケツ2つを持ってマンションの8階まで上り背筋を痛めてしまった。1週間目に警察がきて避難した方がいいと説得したが、「迷惑になる。慣れたところで生活したい」とうことで、食料を届けてもらったという。

18)阪神・淡路大震災兵庫県災害対策本部、阪神・淡路大震災－兵庫県の1カ月の記録、平成7年7月

19)湯を使って強制的に排便、洗腸する人では設備が必要となる。人によっては腸閉塞の危険もある。「私は“洗腸派”。しかも毎日しています。でも避難所ではそうはゆきません。腹がはってきます。牛乳も飲みました。緩下剤もののみました。そしてやっと3日目にできました。その3日間の苦しかったこと。」「2日半体育館でお世話になりました。その間背に腹はかえられず、ときどき家のトイレに恐る恐る帰りました」。 出典) 日本オストメイト 兵庫県センター、

20)「学校へ行きましたが誰も情報をくれません。並べば食べ物を貰えるとは知りませんでした。娘と息子が退屈だから遊びに出ると、皆が並んでます。何かなと思って見るとおでんをもらう行列でした。あわてて並びましたが、もう終わりと打ち切られました。がっかりしました。そういうことが何度もありました。」 出典 阪神・淡路大震災聴覚障害者現地救援対策本部、1996年1月、「負けへんで!」

21)この人は、周囲で見舞い客の声が聞こえ、食べ物や飲物を手渡すのが聞こえたりしたが、誰も声を掛けてくれなかったという。家から持ってきたパンとグレープフルーツとだけ食べて、運動場で我慢をしていたという。

22)神戸市灘区にある盲老人施設の千山荘では、建物に被害はなかったものの、水道の復旧に1月一杯かかり、ガスは1カ月停止し熱源の確保に苦慮したという。また、職員21名中13名が自宅に全半壊の被害を受け、家族を亡くした職員も1名いた。その中で、長期50名、短期5名の収容定員に対して、20名を地震後受け入れている。

23)手話および字幕を付けた番組であり、聴覚障害者にとって有効な情報源となっているが、地震の特別番組のため放映中止になり、逆に聴覚障害者は地震情報が入手できなかったためである。

24)メキシコ地震でも安否情報やニーズ情報、提供情報をデータベース化していた。

25)出典 てんかん協会、波、第19巻第4号、110頁

26)東灘区の避難所から“避難中のオストメイトのパウチがなくなった。緊急を要するので救急車でとりにいく”との電話があり、搬送した例もある。それだけ緊急性を要する場合があることを示す例である。

27)マスコミはかなり積極的に取り上げ、活動の円滑化や障害理解に効果があった一方で、飛び込み取材が多い、多忙の中時間を割いたのに取り上げてくれたかどうかわからない、などの不満もあった。情報提供手段として継続性がないため、活用しづらい面もある。

28)視覚障害者は視認できないため、砂糖が右、塩が左、包丁は右下の戸の内側に、といったように日常生活品の位置を厳密に決めたうえで覚えている。それが揺れで崩れてしまい、どこに何があるのかわからず、またガラス等危険物も落ちているため、単独では片づけが困難となる。

兵庫県南部地震時の 携帯電話の役割と問題点

Function and Disfunction of Cellular Telephone on the Hyogoken-Nanbu Earthquake

中村 功*

Isao Nakamura

廣井 脩

Osamu Hiroi

近年日本でも携帯電話は急速な発展をとげ、1995年11月には700万加入を突破した。阪神・淡路大震災時、固定系の電話が、輻輳で使えなくなったとき、もう一つの電話である携帯電話はどのような役割をはたし、またそこにはどのような問題があったのだろうか。NTTドコモに対する聞き取り、および被災地域の携帯電話加入者に対するアンケートをもとに考える。

1. 設備面の状況

まず設備面の被害だが、NTTドコモ関西では百数十ある被災地域内の基地局のうち37局に障害が発生した。おもな原因は電源の問題で、ほとんどはリセットをかけることで数時間から十数時間のうちに回復した。これは、おそらく地震の揺れで一時的に機能が停止したものだだろう。比較的長い時間の障害を受けたのは長田区内の基地局1局だけであった。それでもアナログで翌日、デジタルでは翌々日には復旧している。NTTの固定網では交換器の故障で28万5000回線、加入者系ケーブルの切断で19万3000回線と、最大で被災地域全加入者の1/3近くが設備被害で影響を受け、復旧に1月いっぱいかかったことを考えると、きわめて対症的である。

移動電話では固定系にある加入者系のケーブルがないので、そのぶん設備的には確かに固定系より強いといえる。だが、移動電話の施設は災害時に絶対に安全か、といえそうではない。郵政省の資料によれば、現に今回の震災で一時的にせよ、最大時145局の携帯電話の基地局で障害が発生しているのである。その原因は、揺れによる基地局の損傷や中継ケーブルの障害にある。高速道路の落下や新幹線高架部分の落下でNCC系の中継ケーブ

*中村功：松山大学人文学部 廣井脩：東京大学社会情報研究所

キーワード：災害情報、兵庫県南部地震、通信、携帯電話、利用と満足

ルが切断され、N T T以外の携帯電話が障害を受けたといわれている。中継系の光ケーブルは、北海道南西沖地震や北海道東方沖地震のときにも切断されており、一般に地震ととくに強いとは言えない。今回、N T Tドコモの利用していたケーブルが切れず、被害が軽微だったのは好運に支えられた部分もあったといえる。

2. 加入者アンケート

N T Tドコモでは以上のように設備面の被害は比較的軽微だったが、ではまったく問題がなかったのであろうか。今回被災地の携帯電話加入者を対象にアンケート調査を行い、利用者からみた問題点や評価、および震災時の利用状況をさぐった(1)。

調査方法

- | | |
|--|----------------------|
| ①調査対象：神戸市・芦屋市・西宮市・宝塚市および淡路島に在住のN T Tドコモ関西携帯電話加入者 | |
| ②標本抽出方法：携帯電話加入者名簿から無作為抽出 | |
| ③調査方法： 自記式 郵送配布・郵送回収 | |
| ④調査対象数および標本回収数・率： | 調査対象数 1500 |
| | 有効標本回収数・率 683(45.5%) |
| ⑤調査期間 1995年5月13日－5月28日 | |

3. 疎通状況

3.1 全体状況

N T Tドコモによると、地震直後は平均で通常時の3倍、最大で約7倍の通話があったという。これはだいたい2回に1回かかる程度の輻輳状況である。N T Tでは最高50倍もの通話が殺到したというから、それに比べると軽微な輻輳であったといえる（ただしいずれの場合も被災地への市外通話の倍率）。しかし、利用者に話を聞くと直後は携帯電話

表1 当日の疎通状況
(Tab.1 Connectivity on the day)

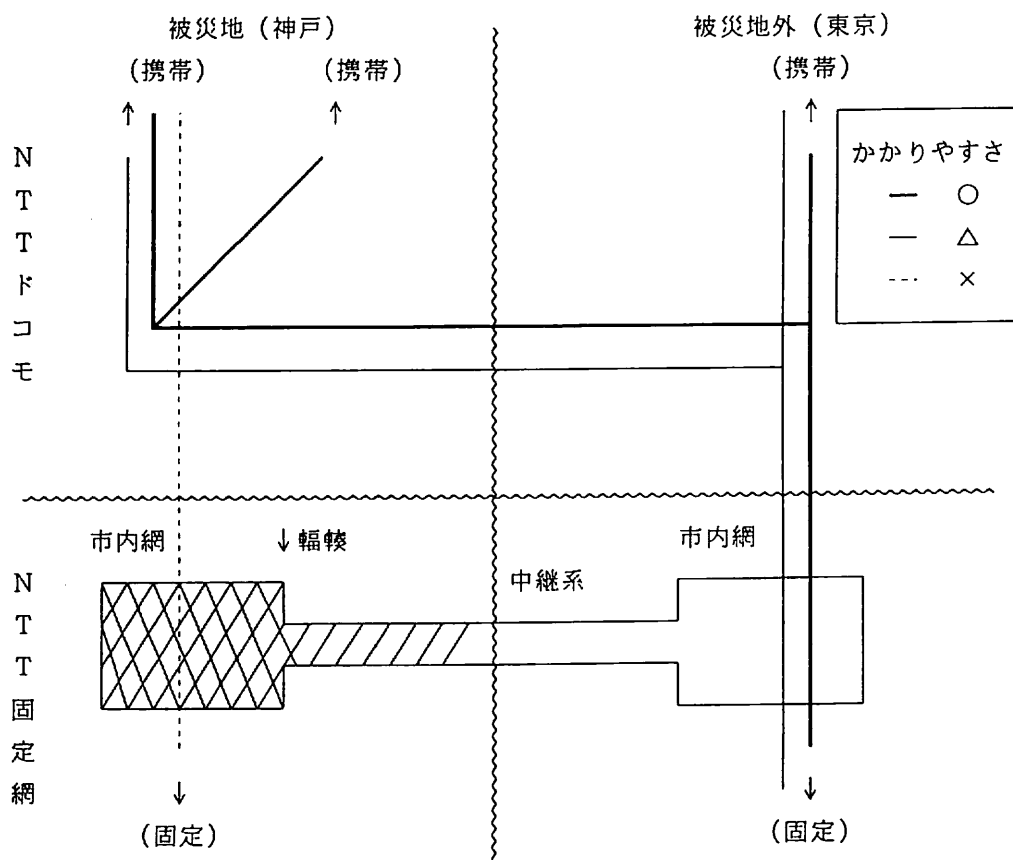
	全体	かけた人
1.携帯電話から電話をかけて、すべて相手に通じた	7.8	8.9
2.携帯電話からかけたが、一部しか通じなかった	48.0	55.0
3.携帯電話からかけたが、一つも通じなかった	31.5	36.1
4.携帯電話は持っていたがかけなかった	6.4	-
5.当日携帯電話を持っていなかった	6.4	-

も全くかからなかったという人も多い。アンケートの結果を見てもやはり通じにくかった

ようで、当日電話をしてすべて通じた人はわずか8.9%、逆に一つもかからなかったという人は36.1%にまで達した。半分以上を占める一部通じた人も、平均すると13.5回かけてやっと1回通じる程度であった。

最も大きな問題点はなんといっても携帯電話が通じにくかったということだ。その原因は、通話相手のN T T固定網側の輻輳が激しかったため、最大95%という規制に巻き込まれてしまったことにある。その仕組みを通話ボタンごとにみておこう。第一に被災地の携帯電話から被災地の固定電話にかける場合、通話は基地局から移動網側の交換機、関門交換機を経てN T T固定網にはいる。関門交換機まではN T Tドコモのものでありそれほど込み合っていないが、被災地のN T T固定網では各地からかかるおびただしい通話をさばききれないために輻輳しており、この段階でかかりにくくなる。第二に被災地の携帯電話から被災地の携帯電話にかける場合、基地局－交換機－基地局と市内のN T Tドコモの通

図1 相手別のかかりやすさ
(Fig.1 Mechanism of connectability)



被災地の携帯電話からのかかりやすさ		被災地の携帯電話へのかかりやすさ	
相 手	被災地内の携帯電話 ○	発 信 元	被災地内の携帯電話 ○
	被災地外の携帯電話 ○		被災地外の携帯電話 △
	被災地外の固定電話 ○		被災地外の固定電話 △
	被災地内の固定電話 ×		被災地内の固定電話 ×

信路のみを使って通話が成立する。ここでは、N T T固定網の輻輳の影響は受けない。第三に被災地の携帯電話から被災地外の携帯電話に通話する場合、基地局－交換機－関門交換機（被災地内）－自社線－関門交換機（被災地外）－交換機－基地局と経由する。ここでもN T Tドコモ側の施設だけで通話が成立し、固定網の輻輳の影響は受けない。第四に被災地内の携帯電話から被災地外の固定電話に通話する場合、基地局－交換機－自社線－関門交換機（被災地外・ドコモ）－関門交換機（被災地外・N T T）－市外交換機－市内交換機をへて通話が成立する。N T T固定網に入るのは輻輳のない被災地外であるから、この場合もN T T側の輻輳に巻き込まれることはない。

一方、被災地外からの被災地の携帯電話への通話は前述のように最高で通常ピークの7倍となり、多少かかりにくい程度であったものと見られる。ただ被災地内の固定網からの呼は、固定網側の輻輳に巻き込まれて疎通が困難であったはずだ。かかりやすさを図示すると図1ようになる。

利用者に対するアンケートの結果は、このように携帯電話同士やN T T側の規制の少ないところへはかかりやすい、という仕組みを裏付けている。以下に自由回答からいくつかの声を抜き出してみた。なお、なかには朝早くはかかりやすかったという声が見られるが、これは、N T T固定網の輻輳がテレビで被害の大きさが明らかになった17日の朝9時以降から本格化したため、と見られる。

（自由回答から）

- ・携帯同士はいいが、自宅には通じにくかった。（運輸業・30代）
- ・回線の混雑でつながることが多かった。特に阪神間。遠方にはつながった。
（卸売り小売業・50代）
- ・震災時、関西地方は全くかからなかった。逆に地方（松山、広島）などは一回で通話できた。松山にいる家族とも連絡が取れ、携帯電話の便利さがより一層わかった。1/17は一般電話も携帯電話も、関西ではほぼかからなかった。

（電気ガス熱供給水道業・20代）

・一般の電話が不通のなかで、携帯電話での長距離はほぼ100%通じた。この為、地方の親戚、友人との安否の連絡が確保できた。また、携帯から一度地方の友人に連絡し、その友人から阪神間にいる携帯をもつ友人に連絡してもらうことで、近距離の友人の安否の

確認も出来た。又は、一度東京の友人に連絡し、その友人から都内にすむ友人に連絡してもらうことで、通信時間の節約もした。いずれにしても、今回の震災で携帯がとてとても役立った。ただし阪神間は、一般の電話と同じくほとんど通じなかった。

(製造業・30代)

・1月17日地震後すぐ北海道の札幌に電話したが、すぐでしたので娘と話が出来て、大変よかった。時間が経つと通じなかった。(221・不動産業・50代)

・当日の朝、2～3時間のみ通話可能。はっきりいって、公衆電話の方がいい。

(不動産業・40代)

3.2 地域別状況

次に地域別の疎通状況を見ると、神戸市内ではとくにかかりにくかったようである。また西宮では、他地域にくらべ若干疎通状況がよかった。質問では、当日いた場所をいくつでも選択してもらっており、当該地域にいた人の疎通状況を表に示した。信頼性は、当該地域にいた人といなかった人の差をカイ自乗検定で検定したもので、神戸や西宮市内にいた人はそうでなかった人とはたしかに疎通状況が異なっていることを示している。

表2 地域別疎通状況
(Tab.2 Connectivity by area)

当日居た場所	全て通じた	一部通じた	1つも通じない	信頼性(χ^2)
神戸市内	6.1	51.3	42.6	***(>.001)
西宮市内	13.8	55.8	30.4	*(>.05)
芦屋市内	8.0	61.4	30.7	-
宝塚市内	10.5	64.9	24.6	-
淡路島	8.3	50.0	41.6	-

地域別の疎通状況をよりくわしくみると、とくに神戸市内で電源を入れても無音の状態を経験した人が多いことが分かった。これは携帯電話網側でも障害があったことをうかがわせる。その原因は、第一に神戸市長田区での基地局の障害の影響が考えられるが、第二に神戸市内に携帯電話が集中し、携帯電話側でも激しい輻輳が発生した影響が考えられる。

表3 「電源を入れても無音で使えなかった」人の割合(***;p<.001,**;p<.01,*;p<.05)

(Tab.3 Ratio of telephone line with no reaction)

神戸市内	西宮市内	芦屋市内	宝塚市内	淡路島	全体
20.2 ***	7.8 **	7.2 *	11.6	11.1	11.4

3.3 固定電話・公衆電話との比較

では、住宅の固定電話や公衆電話と比較すると携帯電話はどの程度つながりやすかった

のであろうか。われわれは今回の調査とは別に神戸市の住民699人を対象にアンケート調査を行っている。それによると、自宅から電話をした人は33.9%、自宅の電話は通じなかったので公衆電話から電話した人が24.9%、自宅の電話が物理的に使用不能だったので公衆電話から電話した人が7.2%、公衆電話をかけようとしたが壊れていたり混んでいて使えなかった人が9.6%、電話しようとしなかった人が18.9%であった。この中で「自宅から電話した」と答えた人と公衆電話から電話した人に、どのくらい通じたかを聞くと、表4のようであった。「一つも通じなかった」という人に注目すると、固定電話より携帯電話が多少通じやすかったことがわかる。自宅の電話が通じず、公衆電話に流れた人がさらに全体の24.9%もいたことを考えると、たしかに携帯電話は多少かかりやすかったといえる。しかし公衆電話では「一つも通じなかった」人が11.3%しかおらず、携帯電話よりも圧倒的に通じやすかった。

表4 固定電話との比較

(Tab.4 Comparison of connectability with home and public telephone)

	携帯電話	固定電話	公衆電話
1.電話をかけて、すべて相手に通じた	8.9	10.1	27.0
2.電話をかけたが、一部しか通じなかった	55.0	40.9	59.9
3.電話をかけたが、一つも通じなかった	36.1	47.3	11.3

4. 通話頻度

通話頻度は、当日及び2週間後ともに平常時よりも高くなっている。注目すべきは、災害当日で5回以上通話した人が45%もいるのに対して通話が0の人も35.7%もあり、たくさ

表5 通話頻度

(Tab.5 Frequency of calling) (%)

	通常時	2週間後	当日	当日通話回数の分布 (%)	
1. 1日に5回以上	35.3	47.1	45.3	1-3	26.4
2. 1日に数回	41.9	38.1	16.2	4-6	23.9
3. 1日に1回	4.0	3.5	2.8	7-14	24.6
4. 週に数回	13.7	8.1	0→35.7	15-24	16.5
5. 週に1回	0.9	0.9		25-34	4.8
6. 月に数回	3.4	1.2		35-74	3.0
7. 月に1回以下	0.9	1.1		75-	0.8

当日平均7.0回

ん通話した人とまったく通話しなかった人に2極分化していることである。かけなかった人の中には、かけても通じなかった人と電話どころではなかった人が含まれる。

5. 評価

5.1 評価の2極分化

地震当日携帯電話がどれだけ役に立ったかを通常時と比較すると、たいへん役だったとする人が増えている一方で、通常時にはほとんどいない「まったく役に立たなかった」とする人が「たいへん役に立った」とする人と同程度おり、評価は2極分化している。自由回答でも回答は2極分化しており、大変役だったと感謝している人もいれば、逆に役に立たずに激怒している人もいる。

表6 携帯電話に対する評価 (%) 右は使っていない人を除いた数字
(Tab.6 Valuation of Cellular telephone)

	大変 役立った	かなり 役立った	多少 役立った	あまり役立 たなかった	全く役立 たなかった	使って いない
地震以前の通常時	27.5 27.8	41.9 42.4	25.3 25.6	3.5 3.5	0.6 0.6	1.2
地震当日	31.1 34.6	11.7 13.0	7.4 8.3	12.9 14.4	26.7 29.7	10.3
地震から2週間後	33.7 34.1	34.3 34.7	21.1 21.4	7.3 7.3	2.4 2.4	1.3

(自由回答から)

・災害の時、一番頼りにしていた携帯電話が使用できず、大変失望しました。

(電気ガス熱供給水道業・50代)

・ぜんぜんつながらない！なんかあった時、くその役にもたたない！！！！！！！！

ふだん使えば料金は高いだけ！地震の時は安くてもつながらんかったらいいしょや！

(建設業・20代)

・自宅有線電話も同じですが、地震後2～3日は全ての回線（有線2、携帯1）が使えず、N T Tに対してして大いに不信感を持った。特に携帯は緊急時にこそ役立つものと思っていたが、完全に裏切られた

(製造業・40代)

・携帯電話って最高！！

(卸売り小売業・30代)

・今まではあまり必要とは思ってませんでしたので、使用もあまりしませんでした。（通話料が高いと思ってますので） 今回の震災では、自宅及び会社でも、電話が使用不能で、私の携帯電話のみが使用でき、とても心強く思いました。

(サービス業・50代)

・当日私の家は全壊、家の中に4名が入ったままの状態であり、一人の力では助けだすことが無理、生存者の確認をし、110番へ救助の依頼をしたところ、1回目（6：00）は香川県警が出た。わたしたちのエリアは兵庫県警であるが、電波上そこにつながったも

のと考えられます。2回目（7：00）には徳島県警が出られた。そこで第1回目のことを言ったのですが、もう一度同じことを報告し、さらに兵庫県警へ連絡を入れるといわれ、とりあえず電話を切って救出の応援がくるのを待った。その頃やっと近くの方々が救助にきてくれた。この時に（警察？）だれかわからないが、110番通報で現場にこられたようですが、それがどこからの方かわかりません。この時に本当に携帯電話に助けていただいたと感じました。（サービス業・40代）

5.2 評価と疎通状況の関係

表7のように疎通状況の良かった人は評価が高く、逆に悪かった人は低くなっており、評価と疎通状況は密接な関係がある。上に述べたように地震当日の通話頻度は通常より頻繁でかつ2極分化していることとあわせて考えると次のように考えられる。すなわち、

- (1)震災時は通常時よりも高い通信ニーズが発生する
- (2)相手や時刻により輻輳の程度が異なり疎通状況に差がある
- (3)つながった人は普段より多く通話するがつながらない人は通話できない
- (4)つながった人は極めて高い評価・つながらない人は極めて低い評価へと2分するということになる。

表7 評価と疎通状況の関係 (%)

(Tab.7 Relation of valuation and connectability)

	大変 役だった	かなり 役だった	多少役 だった	あまり役立 たなかった	全く役立 たなかった
全て通じた	64.6	22.9	0	6.3	6.3
一部通じた	48.5	17.9	12.4	15.8	5.5
全く通じない	5.9	3.2	2.7	11.7	88.3

6. その他の問題点

今回最も大きな問題は輻輳による通話不能だったが、そのほかにもいくつかの問題点がある。

6.1 バッテリーの問題

携帯電話は充電式なので停電時でも利用できるが、充電は家庭の一般電源によるので、停電が長引くと電気がなくなり使えなくなる。当日困ったこととして、充電ができなくなり使えなくなったと答えたのは11.1%だった。しかし自由回答を見ると、充電不能で困った人はもっと多かったようである。というのは、11.1%とは当日放電しきった人数で、翌日以

表 8 当日困ったこと (%)

(Tab.8 Troubles on the day)

携帯電話の電源を入れても無音で使えなかった。	14.2
発信しても、込み合っている旨のアナウンスや話中音の時間が多く、通じにくかった。	70.5
停電で携帯電話のバッテリーが充電できず使えなくなった	11.1
地震で携帯電話の端末が壊れて使えなかった	0.2
家がめちゃくちゃになり携帯電話が行方不明になって使えなかった	1.9
持っている携帯電話は災害時優先電話だが、かかりにくかった	7.3
119番に電話したら「公衆電話からかけ直してくれ」といわれた	2.3
その他（具体的に： ）	16.7

降使えなくなった人もいること、放電を恐れて利用をセーブした人がいること、あるいは避難所で充電させてもらえず苦労した人もいる。また充電機が持ち出せず困った人もいた。NTTドコモでも地震三日目から乾電池ケース（7500個）や乾電池（9万本）を配布したが、それでも問題が解決したわけではなかった。

（自由回答から）

・停電のため（約10日間）、充電することが出来ず大変困りました。

（製造業・30代）

・停電で充電できないため、バッテリー残量が気になり、使用を制限した。

（公務・30代）

・避難所の電源が使用に使えず、子供の友人宅へバッテリーの充電を依頼せねばならず、不便であった。

（製造業・40代）

6.2 災害時優先電話の問題

防災機関など重要加入電話については、NTTドコモは携帯電話についても災害時優先電話を指定して、輻輳時にもかかりやすいようにしている。しかし相手がNTTの固定網になると、NTT網に入った時点で優先の扱いが消えてしまう、という問題がある。事業者をまたがった通信で、他社に入ると優先扱いが消えてしまうという問題は、実は1993年の釧路沖地震のときにも発生し、その問題性を著者らは指摘してきたところである。その状況は今もかわっていないのである。そこで今回アンケートで直接尋ねたところ、7.3%の人が優先電話だがかかりにくかったとしている。しかしこの数字はあまり信用できない。そもそもこれほど災害時優先電話はないし、所有者の職種も建設業や運輸業といった防災機関以外がほとんどであった。おそらく災害時優先電話を、「自分に取っては災害時のた

めの電話」と意味を取り違えていたものと思われる。

6.3 119番の問題

自由回答でも119番につながらなくて困ったという批判がかなりみられた。つながらない原因は3つ考えられる。第1に輻輳でつながらなかったこと、第2に119番の交換台が受付能力を越える通報で話中だったこと、第3に地域の携帯電話からの通報は受け付けないというシステム上の問題によるもの。ここで問題になるのは第3の原因である。携帯電話は通常、各県に1つの固定網とのアクセスポイントをもっている。しかしその一方で、消防は各市町村ごとに組織されており、119番の受付台も市町村ごとにある。そのまま接続すると他地域の通報がアクセスポイントのある自治体の消防にかかってしまうので、119番は携帯電話ではかけられないことになる。それでも、NTTドコモでは現在全国の2/3の都道府県に代表消防台を設置しそこから一部の自治体消防と専用線を結び、一部で通報可能となっている。今回の被災地域では、神戸市だけは通報可能であった。しかしアンケートでは、2.3%の人が119番に電話したが公衆電話からかけ直してくれと言われており、119番が消防に接続できない問題性があらためて浮き彫りになった。

(自由回答から)

- ・119番がつながらなかった。(保険業・50代)
- ・私は、家も無事で携帯電話も持っていたので、特に連絡、情報等に困りませんでしたが、ただ119番がつながらないのはとても不便でした。(公務・20代)
- ・近所にけが人がでて、すぐに119に連絡が取れた。(建設業・40代)

7. 災害時の利用

今回の災害時には人々は携帯電話をどのように利用し、どのように役立った(役立てようとした)のであろうか。平常時との利用の変化を探った。

7.1 相手・内容

第一に通話相手の変化がある。当日を中心として災害時には親戚との通話が急増している。これは固定電話でもこれまでの災害の度に現れる変化である。第二に内容では、当日は自分や家族の安否を伝える通話が圧倒的に多い。通信事業者はよく「見舞い呼の殺到による輻輳」などという表現を使うが、「見舞い呼」のメインは「親戚との安否確認の通話」であるといえる。したがって輻輳を軽減する手段の一つとして、「親戚との安否確認」をマスコミやボイスメールなどによってスムーズに行い、「見舞い呼」そのものを減少させることが考えられる。

表 9 通話相手の変化 (%)
(Tab.9 Change of destination)

	通常時	当日	2 週間後
1.親戚	5.9	53.1	22.5
2.家族	47.7	41.4	43.2
3.友人・知人	43.5	53.6	44.9
4.仕事関係の人（自社の）	63.1	53.1	58.1
5.仕事関係の人（取引先等自社外の	59.9	32.6	51.2
6.119番・110番	0.6	2.4	0.3
7.市役所等公共機関	3.2	3.6	5.0
8.その他（具体的に：	2.3	1.9	1.6

表 10 当日の通話内容 (%)
(Tab.10 Contents of calling on the day)

1.自分や家族の安否	83.3
2.家や自動車などの被害状況	43.8
3.必要な指示・依頼	46.0
4.近況報告	32.4
5.避難の相談	9.5
6.地震の体験談	16.7
7.余震に関する情報	14.3
8.生活に必要な物資について	28.3
9.けが・火事・ガス洩れ等に関する救援要請	5.5
10.その他（具体的に：)	6.9

7.2 機能

携帯電話にはどのような機能があり、それは平常時と災害時ではどのように変化するのか。因子分析の手法を使って平常時の災害時携帯電話から得られる満足の因子を析出し、それを比較した。なお方法はマスコミュニケーションの「利用と満足」研究を、電話研究に応用したものである。もちろん竹内(1976)もいうように、たとえば本人には気晴らしの満足と自覚されても実際には逃避による逆機能であったりして、知覚された満足は必ずしも機能とはいえない。しかし知覚された満足は携帯電話がどのような役割をはたしたかを推定する手がかりとはなりうる。通常時の固定電話の機能（利用と満足）については川浦(1989)、中村(1992)、Dimmick(1994)らの研究があるが、災害時のしかも携帯電話について

は、まだ研究例はない。

具体的方法としてはまず、Dimmick(1994)やRoos(1993)らの研究を参考にしながら、携帯電話から得られるであろう満足度を15項目設定した。それぞれについて「大変役に立った」から「全く役立たなかった」まで4つの選択肢を用意し、それぞれに1から4までの得点を与え、それに対してバリマックス回転を用いた因子分析を行った。

その結果、携帯電話から得られる満足には、通常時・災害時もほぼ同様に①仕事②私的用事③外部とのアクセシビリティ確保④自己充足的利用の4因子が析出された。これまでの研究では、固定電話の因子は①道具性②自己充足性③安心の3つが析出されてきたが、今回もそれと似ている。というのは、今までの研究では家庭の電話利用を念頭に置いていたため、仕事に関しては質問項目が少なかったからである。注目されるのは、固定電話では安心の因子が携帯電話ではアクセシビリティの因子にかわっていることである。これはいつでも連絡がつくというアクセシビリティ確保の機能が、携帯電話では拡大されていると理解できる。

因子ごとに得られた満足の得点を合算し平均を出したところ、第一に全体に災害時は通常時より満足が低かった。これは、災害時は疎通が制限されたためと考えられる。第二に、通常時、災害時ともに携帯性の因子の満足が最も高かった。ここから、疎通状況が悪かったために十分とは言えないが、携帯性という携帯電話特有の機能が災害時にも一応は発揮された、と結論できるだろう。

なお、構造的変化としては「通常の電話のかわりとして」が災害時には自己充足の因子からアクセシビリティの因子に移動すること、「あいさつや近況報告のため」が、自己満足の構造（災害2週間後）

- (1) 仕事因子 1. 仕事上の注文の受発注のため 2. 仕事上の指示や問い合わせのため
3. 仕事のスケジュール調整のため 4. 仕事上の緊急連絡手段確保のため
- (2) 私的用事因子 5. 私的なことに関する指示や問い合わせのため 6. 私的なことに関するスケジュール調整のため 7. あいさつや近況報告のため
- (3) アクセシビリティ確保因子 8. 病気や事故などいざという時の備えとして
9. 工事現場など電話が無い所での連絡に 10. 移動しやすくなるために
11. 他人がいつでも連絡がとれるため 12. 通常の電話のかわりとして
- (4) 自己充足的利用因子 13. プライバシーを守るため 14. 一種のステータス・シンボルとして 15. おしゃべりのために

充足から私的用事の因子に移動したことがある。「通常の電話のかわりとして」がアクセシビリティに移動したのは、通常時は若者などが遊び用として使っている人が「通常電話のかわりとして」役立ったと答えたのに対して、災害時では避難先に移動してもいつで

も連絡がとれるという人が同じ項目に回答したためと考えられる。一方、「挨拶や近況報告」が自己充足から私的用事に移動したのは、災害時には近況報告が被災や避難状況の報告となり、避難や援助物資の調達といった私的用事に密接に関わるためと考えられる。

表 1 1 因子別満足（大変役だった＋多少役だった人の％）平均値
(Tab.11 Gratification of using cellular phone)

	通常時	災害 2 週間後
仕事	79.7	58.9
私的用事	70.8	54.2
アクセシビリティ	86.2	70.8
自己充足	28.5	16.9

8. 今後の課題

最後に、以上の研究からわかった今後の課題を簡単にまとめておこう。

第一にハード面の対策がある。とくに今回の調査でも問題となったのはバッテリー問題である。連続使用時間の長期化、乾電池ケースの配布などこれまでの努力を押し進めるほかに、回答者からは停電時でも充電できる充電ステーションの設置や、営業時間に店頭に来られない人のために充電機や乾電池ケースを通信販売する、などのアイデアも出された。

第二に制度面の対策がある。今回も、約 2％の利用者が 119 番に電話したが接続を断られた現象があり、119 番との接続問題は早急に解決されるべき問題であることが確認された。あるいは、災害時優先電話が他社間でも無効にならない対策も必要であろう。

そして第三にソフト面の対策がある。これは、具体的に言えば、利用者への PR の問題である。災害時の携帯電話の評価は 2 極分化しているが、つながらなかった人の不満は非常に大きかった。その一方で、今回の災害を期に災害用に携帯電話に加入する人もいる。事業者は加入者に対して災害時にはつながりにくいことがある点を率直に認めると同時に、通話相手によってはつながり易さに差ができるという点を、積極的に PR するべきである。これは利用者にとって役立つ情報であると同時に、利用者の不満を軽減することにもつながる。とくに災害時は被災地から被災地外に連絡を取り、そこから各所に中継して安否を伝えるという方式の有効性が今回の調査でも明らかにされた。加入時のパンフレットや月々の請求書等を利用した、息の長い PR 活動が工夫されるべきではないだろうか。

第四に、これはハード面・制度面・ソフト面にわたる課題だが、ボイスメールの活用による災害時の通信ニーズ代替の可能性がある。先に明らかになったように、災害当日に急増するのは親族らとの安否確認の情報ニーズだが、安否をコンピュータに音声として蓄積し、そのデータを被災地外のセンターに分散させることによって通信の集中を避け、スム

ーズに安否確認を行おうとするものだ。このシステムがボイスメールで、イメージとしては、公衆的な留守番電話のサービスである。今回の震災でも固定電話を使ったシステムが小規模ながら運用され、一定の成果を挙げている。

携帯電話やP H Sといった移動体通信ではすでにボイスメール・システムが広く利用されている。携帯電話では会議中や電源を切っているときや圏外に居て連絡がつかないことが多いので、ネットワーク側で留守番電話のサービス（すなわちボイスメール）が用意され、二、三割の加入者がこれに加入しているという。今後普及が予想されるP H Sの場合はサービスエリアが狭いためこのサービスはより普及するだろう。N T T固定網でも今回の災害を教訓にこうしたシステムの確立にとりくみはじめた。安否情報の伝達には新聞、放送、パソコン通信など様々なメディアが考えられるが、どれも一長一短がある。そうした中で、他メディアと協力しながら、ボイスメールが安否情報伝達の一翼を担えるよう期待したい。

参考

因子負荷行列 （平常時）

	平均	因子パターン				
		I	II	III	IV	共通性
2.仕事上の指示や問い合わせのため	3.43	.899	-.043	-.053	.089	.821
4.仕事上の緊急連絡手段確保のため	3.62	.834	-.062	-.044	.005	.701
3.仕事のスケジュール調整のため	3.03	.832	.058	.203	.087	.744
1.仕事上の注文の受発注のため	2.76	.718	.169	-.039	.087	.554
14.一種のステータス・シンボルとして	1.66	.017	.788	.091	.077	.635
15.おしゃべりのために	1.45	-.083	.776	.109	-.037	.622
13.プライバシーを守るため	2.01	-.039	.712	.120	.210	.567
12.通常の電話のかわりとして	2.68	.161	.631	.105	.191	.472
7.あいさつや近況報告のため	1.89	.120	.630	.381	.129	.573
5.私的なことに関する指示や問い合わせのため	2.99	.003	.211	.889	.113	.848
6.私的なことに関するスケジュール調整のため	2.79	.017	.269	.880	.112	.860
10.移動しやすくなるために	3.49	.034	.114	.050	.772	.612
11.他人がいつでも連絡がとれるため	3.33	.068	.291	.064	.720	.612
9.工事現場など電話が無い所での連絡に	3.45	.403	-.017	.072	.510	.428
8.病気や事故などいざという時の備えとして	3.38	.007	.077	.372	.459	.355
固有値	2.930	2.782	1.953	1.739	9.403	
寄与率(%)	19.5	18.5	13.0	11.6	62.7	

因子負荷行列（地震2週間後）	因子パターン					
	平均	I	II	III	IV	共通性
2.仕事上の指示や問い合わせのため	3.02	.910	.098	.032	.061	.842
3.仕事のスケジュール調整のため	2.86	.848	.167	.036	.248	.809
4.仕事上の緊急連絡手段確保のため	3.20	.822	.201	-.032	.100	.726
1.仕事上の注文の受発注のため	2.46	.783	.150	.154	-.019	.659
10.移動しやすくなるために	3.21	.143	.825	.070	.113	.718
11.他人がいつでも連絡がとれるため	3.17	.134	.762	.120	.233	.667
9.工事現場など電話が無い所での連絡に	3.03	.430	.587	.147	-.053	.554
8.病気や事故などいざという時の備えとして	2.78	.114	.510	.226	.282	.403
12.通常の電話のかわりとして	2.68	.143	.510	.262	.324	.453
14.一種のステータス・シンボルとして	1.51	.090	.122	.860	.089	.770
15.おしゃべりのために	1.43	.003	.107	.845	.148	.748
13.プライバシーを守るため	1.84	.037	.268	.686	.218	.591
5.私的なことに関する指示や問い合わせのため	2.80	.039	.220	.114	.889	.853
6.私的なことに関するスケジュール調整のため	2.60	.127	.215	.168	.868	.845
7.あいさつや近況報告のため	2.18	.164	.141	.422	.545	.521
固有値	3.144	2.448	2.331	2.247	10.16	
寄与率（%）	21.0	16.3	15.5	15.0	67.7	

注

(1)この調査はN T T 移動通信網株式会社との共同調査の形で行われた。

文献

川浦康至(1989)「電話行動に関する心理学的研究」『昭和63年度情報通信学会年報』, pp81-91.

John W. Dimmick, Jaspreet Sikand, Scott J. Patterson, (1994) The Gratifications of the Household Telephone: Sociability, Instrumentality, and Reassurance, *Communication Research*, Vol.21 No.5, October 1994, 643-663.

中村功(1992)「電話の日常化と現代の人間関係」『情報通信学会誌』35号, pp78-91.

Roos, J.P. (1993), 300000 yuppies ? Mobile telephones in Finland, *Telecommunications Policy*, Vol.17, Iss.6, pp446-458.

竹内郁郎(1976)「利用と満足研究」の現状『現代社会学』3巻1号, 講談社, pp86-113

$$N = 683$$

問1 ふだんあなたはどのくらいの頻度で携帯電話を利用（発信・受信）しますか。あてはまる番号に一つだけ○をつけてください。

- | | |
|------------|------|
| 1. 1日に5回以上 | 35.3 |
| 2. 1日に数回 | 41.9 |
| 3. 1日に1回 | 4.0 |
| 4. 週に数回 | 13.7 |
| 5. 週に1回 | 0.9 |
| 6. 月に数回 | 3.4 |
| 7. 月に1回以下 | 0.9 |

1. 仕事のために利用することがほとんどだ	39.6
2. 仕事にも私用にも両方利用している	49.0
3. 私用で利用することがほとんどだ	11.5

1.親戚	5.9
2.家族	47.7
3.友人・知人	43.5
4.仕事関係の人（自社の）	63.1
5.仕事関係の人（取引先等自社外の）	59.9
6.119番・110番	0.6
7.市役所等公共機関	3.2
8.その他（具体的に：　　）	2.3

	はい	いいえ
1.使わないときは電源を切って発信専用になっていることが多い	27.0	
2.自動車の中で使うことが多い	70.3	
3.携帯電話は通話料が高いので長電話は避けている	73.5	
4.自分の携帯電話の番号はごく限られた人しか知らない	68.7	
5.携帯電話からの発信相手の数は通常の電話よりかなり少ない	67.1	
6.ポケットベルも併用している	33.0	
7.携帯電話は音質が悪いので有線の電話を使いがちである	24.7	
8.人前で携帯電話を使うとき恥ずかしいことがある	47.0	
9.はじめは仕事目的で使い始めたが次第に私用でも使うようになった	49.5	
10.携帯電話なしの生活はもう考えられない	58.2	
11.料金が高いので発信より受信に使うことが多い	40.4	
12.外出中も近くに公衆電話があればそちらを利用することが多い	42.1	

問5 ふだん、携帯電話はあなたにとって、どのようなことにどれくらい役立ちますか。それぞれについてあてはまるものに一つづつ○をつけて下さい。そのような使い方をしない場合は「全く役立たない」に○をつけてください。

	大 変 役た につ	多 少 役た につ	あ た ま り な 役い	全 く た 役な 立
1.仕事上の注文の受発注のため	36.5	27.3	12.0	24.2
2.仕事上の指示や問い合わせのため	66.0	20.4	4.2	9.4
3.仕事のスケジュール調整のため	44.6	32.5	9.8	13.2
4.仕事上の緊急連絡手段確保のため	76.8	14.8	1.8	6.5
5.私的なことに関する指示や問い合わせのため	35.0	40.0	14.0	11.0
6.私的なことに関するスケジュール調整のため	29.0	37.6	16.8	16.5
7.あいさつや近況報告のため	7.5	17.8	31.0	43.7
8.病気や事故などいざという時の備えとして	59.8	25.0	8.4	6.8
9.工事現場など電話が無い所での連絡に	70.6	15.2	3.1	11.1
10.移動しやすくなるために	63.7	26.6	4.6	5.1
11.他人がいつでも連絡がとれるため	56.5	27.2	8.8	7.5
12.通常の電話のかわりとして	27.2	32.5	21.7	18.6
13.プライバシーを守るため	11.5	17.4	31.4	39.7
14.一種のステータス・シンボルとして	3.9	13.9	26.6	55.5
15.おしゃべりのために	2.8	8.1	20.4	68.6

次に地震当日のことについてうかがいます。

問6 あなたは地震当日どこにいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。

- 1.神戸市内 45.0
- 2.西宮市内 24.5
- 3.芦屋市内 14.2
- 4.宝塚市内 8.8
- 5.淡路島島内 2.6
- 6.以上の地域にはいなかった 6.3 →問18へ

問7 地震であなたやご家族はけがをしましたか。あてはまるもの1つだけに○をつけて下さい。

- 1.家族にけが人が出た 9.6
- 2.自分自身けがをした 5.6
- 3.家族でけがをしたものはいない 84.8

問8 お宅は地震で被害にあいましたか。

- 1.全壊した 14.0
- 2.半壊した 21.9
- 3.一部破損した 43.1
- 4.無事だった 21.0

問9 地震でお宅の一般の電話は壊れましたか。

- 1.壊れた 21.6
- 2.壊れなかった 78.4

問10 地震当夜あなたはどこかに避難しましたか。1つだけ○をつけてください。

- 1.避難所に避難した 10.3
- 2.親戚・知り合いの家に避難した 14.4
- 3.その他に避難した 9.2
- 4.避難しなかった 66.2

問11 あなたは地震当日、携帯電話で電話をかけ（発信し）ましたか。あてはまるものに1つだけ○をつけてください。

- | | | | |
|--------------------------|------|------|--------|
| | | | (かけた人) |
| 1.携帯電話から電話をかけて、すべて相手に通じた | 7.8 | 8.9 | |
| 2.携帯電話からかけたが、一部しか通じなかった | 48.0 | 55.0 | |
| 3.携帯電話からかけたが、一つも通じなかった | 31.5 | 36.1 | |
| 4.携帯電話は持っていたがかけなかった | 6.4 | - | |
| 5.当日携帯電話を持っていなかった | 6.4 | - | |

付問（問11で「電話をかけたが、一部しか通じなかった」と答えた人だけお答え下さい）
当日の電話は何回かけて1回つながる程度かかりにくかったですか。

平均13.5	回かけて1回つながる程度	1-3	11.3	15-24	13.9
		4-6	28.8	25-34	6.3
		7-14	34.1	35-74	3.3
				75-	2.3

（再び全員にお聞きします）

問12 地震当日あなたの持っている携帯電話にどこからか電話がかかってきましたか。あてはまるものに1つだけ○をつけて下さい。

- 1.電話がかかってきた 49.1
- 2.かかってこなかった 40.5
- 3.携帯電話を持っていなかった 5.6
- 4.携帯電話は持っていたが電源を切っていた 4.8

付問（携帯電話に電話がかかってきた人だけお答え下さい）その電話をかけてきた相手の中に「携帯電話に電話したがなかなか通じなかった」と言っていた人はいましたか。

- 1.「携帯電話に電話したがなかなか通じなかった」と言っていた人がいた 81.2
- 2.携帯電話については「なかなか通じなかった」と言っている人はいなかった 18.8

（再び全員にお聞きします）

問13 地震当日、あなたはおよそ何回ぐらい携帯電話で話しをしましたか。（受信・発信あわせて）大体で結構ですので（ ）内に数字をお答え下さい。携帯電話を使わなかった人は「0」とお答えのうえ、問16へお進み下さい。

当日およそ	7.0	回ぐらい携帯電話で話した	0	35.7	15-24	10.7
			1-3	17.0	25-34	3.1
			4-6	15.3	35-74	2.0
			7-14	15.8	75-	0.5
			(平均) (0回の人は問16へ)			

n=613

問14 (当日携帯電話をかけたか受けた人だけお答え下さい) 地震当日あなたは携帯電話でだれと話しましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。

1.親戚	53.1
2.家族	41.4
3.友人・知人	53.6
4.仕事関係の人(自社の)	53.1
5.仕事関係の人(取引先等自社外の)	32.6
6.119番・110番	2.4
7.市役所等公共機関	3.6
8.その他(具体的に:)	1.9

問15 (当日携帯電話をかけたか受けた人だけお答え下さい) 当日の電話ではどんなことを話しましたか、あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。

1.自分や家族の安否	83.3
2.家や自動車などの被害状況	43.8
3.必要な指示・依頼	46.0
4.近況報告	32.4
5.避難の相談	9.5
6.地震の体験談	16.7
7.余震に関する情報	14.3
8.生活に必要な物資について	28.3
9.けが・火事・ガス洩れ等に関する救援要請	5.5
10.その他(具体的に:)	6.9

(再び全員にお聞きします)

問16 地震当日、あなたの携帯電話に関して何か困ったことはありませんでしたか。次の中からあてはまる番号にいくつでも○をつけてください。

1.携帯電話の電源を入れても無音で使えなかった。	14.2
2.発信しても、込み合っている旨のアナウンスや話中音の時間が多く、通じにくかった。	70.5
3.停電で携帯電話のバッテリーが充電できず使えなくなった	11.1
4.地震で携帯電話の端末が壊れて使えなかった	0.2
5.家がめちゃくちゃになり携帯電話が行方不明になって使えなかった	1.9
6.持っている携帯電話は災害時優先電話だが、かかりにくかった	7.3
7.119番に電話したら「公衆電話からかけ直してくれ」といわれた	2.3
8.その他(具体的に:)	16.7

問17 では地震当日、携帯電話があってよかったことはありませんでしたか。次の中であてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。

1.一般の電話より携帯電話のほうがよく通じて助かった。	32.8
2.公衆電話が込み合っていたので携帯電話があって助かった。	33.8
3.避難で移動するときも自分の居場所が不明にならずに助かった	17.5
4.情報が途絶する中で携帯電話があって安心感が得られた。	23.4
5.携帯電話があって仕事上の混乱が軽減された	20.5
6.その他(具体的に:)	8.0

つぎに地震から約2週間後のことについてうかがいます。

問18 地震からおよそ2週間後、あなたはどのくらいの頻度で携帯電話を利用（発信・受信）しましたか。あてはまる番号に一つだけ○をつけてください。

- | | |
|------------|------|
| 1. 1日に5回以上 | 47.1 |
| 2. 1日に数回 | 38.1 |
| 3. 1日に1回 | 3.5 |
| 4. 週に数回 | 8.1 |
| 5. 週に1回 | 0.9 |
| 6. 月に数回 | 1.2 |
| 7. 月に1回以下 | 1.1 |

問19 地震からおよそ2週間後、携帯電話のつながり具合はどうでしたか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

- | | |
|-----------------------|------|
| 1. 通常同様にかければ全てつながった | 40.3 |
| 2. たまにつながらないことがあった | 41.2 |
| 3. かなり頻繁につながらないことがあった | 18.6 |

問20 地震からおよそ2週間後、あなたはどのような目的で携帯電話を利用しましたか。あてはまる番号に一つだけ○をつけて下さい。

- | | |
|-------------------------|------|
| 1. 仕事のために利用することがほとんどだった | 29.7 |
| 2. 仕事にも私用にも両方利用した | 55.6 |
| 3. 私用で利用することがほとんどだった | 14.6 |

問21 地震からおよそ2週間後あなたは携帯電話でだれと話すことが多かったですか。あてはまる番号にいくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|---------------------|------|
| 1. 親戚 | 22.5 |
| 2. 家族 | 43.2 |
| 3. 友人・知人 | 44.9 |
| 4. 仕事関係の人（自社の） | 58.1 |
| 5. 仕事関係の人（取引先等自社外の） | 51.2 |
| 6. 119番・110番 | 0.3 |
| 7. 市役所等公共機関 | 5.0 |
| 8. その他（具体的に：　　） | 1.6 |

問22 地震からおよそ2週間後の時期、携帯電話に関して困ったことはありませんでしたか。次の中からあてはまる番号にいくつでも○をつけてください。

- | | |
|---|------|
| 1. 携帯電話の電源を入れても無音で使えなかった。 | 3.5 |
| 2. 発信しても、込み合っている旨のアナウンスや話中音の時間が多く、通じにくかった | 45.5 |
| 3. 停電で携帯電話のバッテリーが充電できず使えなくなった | 2.9 |
| 4. 地震で携帯電話の端末が壊れて使えなかった | 1.2 |
| 5. 家がめちゃくちゃになり携帯電話が行方不明になって使えなかった | 0.1 |
| 6. 持っている携帯電話は災害時優先電話だが、かかりにくかった | 5.3 |
| 7. その他（具体的に：　　） | 13.8 |

問23 地震からおよそ2週間後の時期、携帯電話があつてよかったことはありましたか。次の中であてはまるものにいくつでも○をつけて下さい

1. 一般の電話より携帯電話のほうがよく通じて助かった。 22.4
2. 公衆電話が込み合っていたので携帯電話があつてよかった。 36.5
3. 避難で移動するときも自分の居場所が不明にならずに助かった 22.3
4. 情報が途絶する中で携帯電話があつて安心感が得られた。 21.4
5. 携帯電話があつて仕事上の混乱が軽減された 37.5
6. 携帯電話のおかげで以前より仕事が増えた 3.7
7. その他（具体的に） 8.8

問24 地震からおよそ2週間後、携帯電話はあなたにとって、どのようなことにどれくらい役立ちましたか。それぞれについてあてはまるものに一つづつ○をつけて下さい。そのような使い方をしかった場合は「全く役立たなかった」に○をつけてください。

	大 変 役 に た	多 少 役 に た	あ た り な か た	全 く 役 に た
1. 仕事上の注文の受発注のため	29.6	20.8	15.8	33.8
2. 仕事上の指示や問い合わせのため	47.6	25.4	8.7	18.3
3. 仕事のスケジュール調整のため	39.1	28.4	12.2	20.4
4. 仕事上の緊急連絡手段確保のため	55.0	22.8	9.5	12.6
5. 私的なことに関する指示や問い合わせのため	31.2	34.2	18.5	16.1
6. 私的なことに関するスケジュール調整のため	25.0	32.7	19.1	23.1
7. あいさつや近況報告のため	15.0	24.5	24.4	36.1
8. 病気や事故などいざという時の備えとして	37.4	25.4	14.7	22.5
9. 工事現場など電話が無い所での連絡に	52.0	19.3	8.6	20.1
10. 移動しやすくなるために	50.9	30.2	7.9	11.1
11. 他人がいつでも連絡がとれるため	51.8	26.6	8.8	12.8
12. 通常の電話のかわりとして	30.8	29.6	16.1	23.5
13. プライバシーを守るため	10.6	13.5	25.7	50.2
14. 一種のステータス・シンボルとして	3.4	10.8	18.9	66.8
15. おしゃべりのために	2.3	10.0	16.7	71.0

問25 全体として携帯電話はどのくらい役に立ちましたか。地震以前の通常時、地震当日、地震から2週間後にわけてお答え下さい。

	大変 役立った	かなり 役立った	多少 役立った	あまり役立 たなかった	全く役立 たなかった	使って いない
地震以前の通常時	27.5	41.9	25.3	3.5	0.6	1.2
地震当日	31.1	11.7	7.4	12.9	26.7	10.3
地震から2週間後	33.7	34.3	21.1	7.3	2.4	1.3

問26 あなたは今後も携帯電話を利用したいですか。

1. できればもっと利用したい 20.5
2. 今まで通り利用したい 77.3
3. あまり利用したくない 2.3

問 2 7 ところで、あなたが携帯電話を使い始めたのはいつ頃でしたか。

		83:0.5	87:1.1	90:8.9	93:18.0
1 9		年ごろから	84:0.3	88:0.6	91:6.4
			85:1.4	89:2.0	92:13.2
					94:44.5
					95:3.2

問 2 8 あなたが携帯電話を使い始めた動機は何ですか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|--------------------------|------|
| 1.仕事場に電話がないので | 13.8 |
| 2.移動が多く連絡が取りにくいので | 77.5 |
| 3.出張が多いので | 15.1 |
| 4.公衆電話をよく使うのでそのかわりとして | 14.6 |
| 5.自分専用の電話が欲しかったので | 13.2 |
| 6.ポケットベルで呼び出されることが多かったので | 30.5 |
| 7.値段が下がったので | 15.4 |
| 8.なんとなく | 4.5 |
| 9.会社に持たされたので | 7.8 |
| 10.自宅に電話を引くかわりとして | 1.8 |
| 11.安全のため | 6.0 |
| 12.その他(具体的に) | 10.8 |

問 2 9 現在あなたがお使いの携帯電話の料金はどなたが負担していますか。

- | | |
|----------------|------|
| 1.会社等の法人 | 44.5 |
| 2.自分個人 | 53.4 |
| 3.家族 | 2.1 |
| 4.その他(具体的に :) | 0 |

問 3 0 あなたのお使いの携帯電話はデジタルですかアナログですか。

- | | |
|--------|------|
| 1.デジタル | 49.2 |
| 2.アナログ | 50.8 |

問 3 1 つぎの項目であなたにあてはまる方に一つづつ○をつけて下さい。

- | | | |
|--------------------------|------|-------|
| | 1.はい | 2.いいえ |
| 1.私は電話でおしゃべりするのが好きな方だ | 26.6 | |
| 2.移動することが多い仕事をしている | 78.3 | |
| 3.夜間、外出していることが多い | 32.9 | |
| 4.携帯電話を持つ前からポケットベルを持っていた | 60.2 | |
| 5.仕事で車を使っている | 76.3 | |
| 6.私は流行には敏感な方だ | 31.9 | |
| 7.私の生活は一般の人と比べて忙しい方だと思う | 68.5 | |

問3 2 次の中であなた自身が好んでよくする、あるいは趣味にしていることがあれば
いくつでも○をつけて下さい。

1. 旅行	45.8	10. 劇画・マンガを読むこと	10.0
2. パチンコ	17.6	11. 映画や劇を見に行くこと	14.2
3. カラオケ	17.3	12. 写真・ビデオを見ること	15.5
4. マージャン	11.3	13. 釣り・キャンプなどのアウトドアスポーツをすること	31.2
5. テレビゲーム	9.1	14. ゴルフをすること	43.0
6. スナック・バーでの飲酒	24.9	15. ドライブをすること	42.3
7. コンサートに行くこと	7.6	16. スポーツの試合を見に行くこと	12.9
8. パソコンをいじること	15.5	17. テレビ番組のビデオ録画	12.0
9. 小説など文学作品の読書	17.3	18. 映画カード・切手などの収集	4.8

最後にあなたご自身についてうかがいます。

問1 あなたの性別は

1. 男 2. 女
91.0 9.0

問2 あなたの年齢は

1. 20才未満 0.1
2. 20-29才 10.9
3. 30-39才 23.7
4. 40-49才 33.0
5. 50-59才 22.4
6. 60-69才 8.7
7. 70才以上 1.2

問3 あなたは現在、結婚していますか。

1. 結婚している 78.5
2. 結婚していない 21.5

問4 現在同居している家族はあなたを含めて何人ですか。(1人暮らしは「1」と記入)

人

- 1:9.6 6:4.9
2:19.3 7:2.1
3:23.0 8:0.6
4:29.9
5:10.6

問5 あなたの職業は次のどれにあたりますか。あてはまるものに一つだけ○をつけてください。

1.職人・熟練作業者	8.0
2.販売従事者	9.5
3.事務従事者	4.9
4.経営・管理的職業	37.9
5.事務従事者	-
6.専門的・技術的職業	22.3
7.サービスの職業	12.2
8.専門的・技術的職業	-
9.生産工程従事者	0.4
10.農・林・漁業従事者	0.4
11.主婦（パート・アルバイト）	0.9
12.専業主婦	0.6
13.学生	0.7
14.無職	1.0

問6 （職業をお持ちの方だけお答えください）あなたの職業の職種は何ですか。つぎの中からひとつだけ選び○をつけて下さい。

1.建設業	21.7	7.サービス業	20.1
2.電気・ガス・熱供給・水道業	6.3	8.農・林・漁業	0.3
3.不動産業	2.8	9.鉱業	0.2
4.運輸業	9.7	10.金融業	0.9
5.卸売り・小売業	18.2	11.保険業	2.1
6.製造業	12.5	12.飲食店	1.3
		13.公務	4.0

問7 （職業をお持ちの方だけお答え下さい）あなたは次のうちどれにあてはまりますか。1つだけ選んで○をつけて下さい。

1.自営業主	55.5
2.雇用者	40.5
3.家族従業者	3.9

「阪神・淡路大震災」と初動情報

Disaster Information on "the Great Hanshin-Awaji Earthquake in Japan"
at the initial stage

中森 広道

Hiromichi Nakamori

廣井 脩

Osamu Hiroi

はじめに

本稿は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の初動情報について検証するものである。

大きな災害の場合、被災地内の防災関係機関は物理的な被害や職員自体の被災により、著しくその機能が低下することから、どうしても被災地外の支援、応援が必要となってくる。その場合に、被災地の状況をいち早く把握するための初動情報が不可欠となってくるが、阪神・淡路大震災では、この初動情報が十分に得られなかったということが問題として指摘された。その原因は何であろうか。ここでは、被災地外において、発災直後、どのような情報が伝わったかという点について、多くの人が情報源とする地震発生直後の東京で放送された全国向けのテレビ放送の内容を中心に検討したいと思う。テレビ放送の問題点は多々あるが、本稿では、放第1に震度などの気象庁情報がいつ伝えられたか、第2に被災地の中で神戸の情報がいつごろから、どのように入ったかに主眼を置き、みていくこととする。

1. テレビの初動情報

ここでは、東京のNHK、日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日について見ていくことにする。放送された情報の内容についてはさまざまな問題があるが、本稿では発災からだいたい3時間の放送の中で、神戸を中心とした被災地の震度、被害の情報がいつ、どのように流されたかの概要を見ていくことにする。

阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震が発生した平成7年1月17日午前5時46分には、NHK以外の放送局はすでに放送を開始しており民間放送4局は共に生放送による情報番組を放送中であった。

神戸市中央区中山手通の神戸海洋気象台に地震波が到達したのが5時46分52秒、震度1を記録した東京都千代田区大手町の気象庁に地震波が到達したのは5時48分2秒だったが、これはP波の到達した時間であり、S波、すなわち人体に感じるほどの揺れが東京に到達したと思われる時間は5時49分頃だろうと推定される。そして番組中、揺れを感じたと明言しているのは港区赤坂にあるTBSが放送していた「あなたにオン

タイム」だけである。つまり、ほとんどの放送局は体感ではなく、気象庁経由の情報で地震発生を知った形で放送したことになる。

(1) NHK

NHKは、大阪と東京がそれぞれ放送を開始している。本稿は、全国向けの放送を対象としているが、ここでは、地震の揺れの体感によって放送を始めた大阪と地震情報によって放送を始めた東京との違いを見ていく上で、大阪が全中（全国中継）に切り替わる5時55分までを比較しながら述べていこうと思う。

NHK総合テレビは当時、5時50分からの「気象情報」で放送を開始し、6時から「NHKニュース おはよう日本」に引き継がれるという番組編成で、地震発生時には東京も大阪もまだ放送を開始していなかった。

5時47分、大阪市中央区にあるNHK大阪放送局も強い揺れを感じ、ただちに放送開始の準備を始めた。当時、NHK近畿ブロック（三重県を除く近畿地方）各局に、「スキップバックレコーダー（SBR）」と呼ばれる、揺れを感じると10秒前にさかのぼって映像を記録する装置が備えつけられていた。後に話題となる神戸放送局の映像も、この装置による記録であるが、大阪放送局のスキップバックレコーダーにも地震の様子が記録されている。

5時49分6秒、大阪管中（管区中継、三重県を除く近畿地方向け）でアナウンサーの顔出しによる放送を開始し、画面の左上には時刻も明示されていた。5時50分40秒、震度情報の第1報を伝え、この時すでに「神戸 震度6」が伝えられている。全国のどこよりも早い「神戸震度6」の報道であった。後に詳述するが、この時点で神戸の震度が6ということがわかっていたのは、震度を計測した神戸海洋気象台とNHK（厳密に言えば神戸放送局と大阪放送局）だけであった。大阪管区気象台にも東京の気象庁本庁にも神戸で震度6が計測されたことは伝わっていなかったのである。そして、5時52分20秒には、大阪管区気象台担当の全ての津波予報区（11区～15区、三重県を除く近畿地方、山口県を除く中国地方及び四国地方の沿岸）に「津波の心配はない」という情報を流している。5時51分31秒に、東京から全中（全国中継）のためのQF信号（全国一斉に同じ放送を行うための信号）が届き、一瞬、東京の画面（震度表示図：岐阜、四日市が震度4、熊谷が震度1）が入るが、すぐに大阪の放送に戻している。余震による揺れが時折感じられるなか、スキップバックレコーダーによる大阪放送局内の地震発生時の映像を紹介しながら、5時55分まで情報を伝え、東京からの放送となった。

一方、東京都渋谷区にあるNHK放送センターでは、5時50分、通常番組の気象情報のタイトルにかおせて地震情報をアナウンスで伝え、5時51分31秒、全中（全国中継）で、総合テレビとラジオ第1放送の同時放送となった。放送を始めた段階では、まず「東海地方に強い揺れ」と表示とアナウンスがあり、震度表示図にも、岐阜、四日市の震度4、熊谷の震度1、山口の震度3が表示されている。その直後、京都と彦根の震度5が表示、アナウンスされる。そして5時55分、総合テレビ、衛星第2、ラジオ第2、FMによる緊急放送となった。ここまでは、震度表示図を映しながら、今までわ

かっている各地の震度や地震時の注意事項を繰り返しアナウンスしている。そして6時となり、通常であれば「おはよう日本」の時間であるが、タイトル表示をしないで引き続き地震情報を伝えた。

この段階で、東京からも「神戸震度6」と口頭で伝えているが、震度表示図には「神戸震度6」は表示されていない。6時1分、大阪放送局からの中継となり、ここでも神戸震度6と津波なしを伝えている。また、ここで「震源は淡路島、震源の深さ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2」という情報を伝えている。

6時4分、再び東京からの放送となり、神戸市灘区にいたアナウンサーからの電話リポートが入る。ここでは、「このアナウンサーの家では停電になっているものの棚が倒れるようなことはなかった、火の手もあがっていない」と報告している。6時7分、今度は、神戸市中央区のNHK神戸放送局にいた記者からの電話リポートが入っている。この記者は、神戸放送局のスキップバックレコーダーが記録した映像に映っていた記者であるが、この時点では神戸放送局のスキップバックレコーダーの映像は放送されておらず、「書棚やテレビが倒れ、電話の受話器がはずれた」等のスキップバックレコーダーの映像に映し出された状況を口頭で説明している。一方は、神戸市内でも被害が軽微な地点の報告で、もう一方は被害の大きな地点の報告であったが、これが、神戸の状況を伝える情報の第1報であった。その直後、気象庁から公式の神戸の震度が伝わっていないことから、「震度6はありません」と神戸震度6情報を取り消している。そして、6時15分、気象庁から「神戸震度6」情報が入り、震度表示図にも神戸の震度が加えられ、「神戸の震度6が確認されました」と伝えている。

6時18分から4分間及び6時32分から10分間に、近畿ブロックの被害について大阪放送局から放送、6時42分からは広島放送局より中国地方の状況が伝えられた後、6時44分、神戸市中央区に住むアナウンサーから電話の報告が入り、「火災が7か所であがっている」と伝え、神戸の具体的な被害情報が初めて伝えられた。6時46分からは、名古屋放送局から東海・北陸地方の状況が伝えられた。

7時から「NHKニュース おはよう日本」のタイトルが入り、7時1分、神戸放送局のスキップバックレコーダーの映像が放送された。近畿ブロックでは、6時50分にすでにローカルで神戸放送局のスキップバックレコーダーの映像が放送されていたが、全国に伝えられたのは、この時間が初めてであった。

7時3分、淡路島一宮町で10数軒が倒壊したこと、神戸市東灘区でガス漏れが発生したこと、神戸市須磨区、垂水区のマンションが倒壊したなどの情報が伝えられた後、7時5分に神戸の屋外の映像が初めて放映され、アナウンスで、JR須磨駅と芦屋駅で列車が脱線の情報や市民からの情報で阪神高速道路の効果橋が落下している情報が伝えられた。そして、7時23分に、神戸放送局前から記者を立たせての生中継が行われ、このあたりから神戸など被害の甚大な地域の映像が次々に放映されるようになってくる。NHKの場合、7時前半半で、この地震でかなりの被害が出ているという情報を放送している。ヘリコプターで被災地が初めて映し出されるのは8時14分であった。

（２）民間放送テレビ

では、民間放送の各局はどのような放送をしていたのだろうか。

まず、東京都千代田区にある日本テレビは、気象情報を中心とした情報番組「朝一番天気」を放送中であった。５時４９分、テロップによる地震速報が入り「５時４６分、東海地方で強い揺れ」と報じ、５時５３分、「震度５ 京都 震度４ 岐阜、福井、敦賀・・・」とテロップによる震度情報が伝えられた。５時５７分、震度表示図が出て、京都、彦根、豊岡が震度５と表示された。

５時５９分から、情報番組「ジパング朝６」となり、６時４分、「確実な情報ではない」と断った上で、「神戸 震度６」を伝えている。しかし、それからしばらくは震度表示図上の神戸の震度は表示されないままであった。６時１１分、大阪市北区の読売テレビからの中継が入るが、局内の様子や大阪市内の火災の情報が伝えられた。６時１４分、震源地が淡路島で震源の深さが２０キロという情報が伝えられた。６時２１分、「気象庁によると神戸が震度６の可能性がある」と伝え、６時２５分、正式に「神戸震度６」と伝えている。しかし、震度表示図に神戸震度６が入るのは６時５０分であった。その間、６時３３分に「淡路島でも震度６」と伝えている。

６時４６分、神戸で「民家が炎上、ブロック塀の倒壊、民家が傾く」という情報が伝えられ、これが日本テレビ系列の神戸関係の情報第１報となった。７時から「ズームイン！朝」が始まり、尼崎からの電話報告が入り、７時１０分には「芦屋市で家屋倒壊が起こり生き埋めになっている」との情報がいった。７時３１分、「西宮で家屋が倒壊、３００～４００人が避難した」の情報、そして７時３６分、神戸にあるカメラにより火災の状況が映し出された。これが神戸の初めての映像であるが、字幕スーパーで「神戸市内」表示されるだけだったので、詳細なものはわからなかった。

比較的詳細な映像はヘリコプターによるもので、８時５７分に初めて放送された。

TBSは、報道番組「あなたにオンタイム」を放送中であった。５時５１分、アナウンサーが「ニュースの途中で地震を感じました」と述べた後、「北陸、東海地方で強い地震がありました」と伝え、５時５２分、「岐阜、四日市で震度４、山口で震度３」と震度の第１報を伝えた。５時５９分、震度表示図とともに、京都、彦根、豊岡は震度５など各地の震度と津波の心配がないと伝えられ、６時５分には、震源地が淡路島ということが伝えられた。

６時１８分、大阪MBSのスタジオからスタジオ内のセットが壊れた映像や階段にひびが入った状況が伝えられ、「大阪は震度４と発表されたが、それ以上に感じられた」とコメントした。

６時２０分に東京のスタジオに戻り、「神戸震度６」が初めて伝えられた。６時２６分、西宮の消防本部の話として、少なくとも西宮市内の３か所で火災や家の倒壊がある、という情報を伝えている。また６時３１分に「家の倒壊も数多くある模様」、６時４１分「芦屋の方ではそこら中から煙が出ている模様」、６時４４分に未確認情報として「阪神高速道路が落下」、６時４５分に「ポートアイランドで浸水被害」が出ていると伝え、このあたりから次々と被災地の情報が入るようになった。またここで、「報道部員を呼び出しているが、戸が壊れて出られない」「外の被害は取材中だが、かなりひど

い被害が出ていると考えられる」との状況報告をしている。

その後6時50分から、情報番組「ザ・フレッシュ」となり、引き続き地震の情報が伝えられた。時間がたつにつれて、さまざまな情報が入り始め、7時42分には「地震に関する報道特別番組をお送りしています」と伝えている。8時5分ヘリコプターによる映像が入り、まず淡路島の状況が放送された。神戸の映像は8時19分、須磨区上空からのもので、これが、神戸の初めての映像であった。

東京都新宿区のフジテレビでは、情報番組「めざまし天気」が放送中であった。5時49分、テロップによる地震速報「東海地方で強い揺れ」が入り、パーソナリティがコメントした。5時52分、各地の震度のテロップが入り、「震度5 京都、彦根、豊岡」等の情報が伝えられた。5時55分からの情報番組「めざましテレビ」でも引き続き地震の情報が伝えられた。6時14分、「震源地：淡路島、震源の深さ20キロ、地震の規模：マグニチュード7.2」の情報が伝えられる。6時23分、「神戸震度6」の情報が入る。

6時33分、大阪市北区関西テレビのスタジオと結び、大阪市内の火災のニュースが伝えられ、6時44分には、神戸市須磨区で木造家屋が倒壊したとの情報が、6時47分には灘区で民家が炎上中との情報が伝えられた。これが神戸に関する情報の第1報である。

7時8分、神戸市須磨区に住む関西テレビのアナウンサーが電話で、被害の様子をレポートした。その後、7時12分には阪神高速道路の落下、7時16分には、六甲アイランドの被害が伝えられるなど、だんだんと被害の情報が入ってきた。そして、神戸の映像はやはりヘリコプターによるもので、放映されたのは8時48分であった。

港区にあるテレビ朝日は、報道番組「朝イチN天CNN」を放送していた。5時49分にテロップによる地震速報で、「東海地方に強い揺れ」が伝えられ、それを見たアナウンサーがコメントしている。CMをはさんで、5時52分、「北陸地方、東海地方、近畿地方、中国地方、四国地方で強い揺れ」とテロップの地震速報が出て、5時53分「震度5 豊岡、京都、彦根」以下各地の震度が伝えられた。5時56分には震度分布図が表示された。

6時からの情報番組「やじうま6」では、冒頭、震度と「津波なし」が放送され、6時9分、「震源地：淡路島、震源の深さ20キロ、地震の規模：マグニチュード7.2」が伝えられた。そして、6時27分、「神戸震度6」が放送された。その直後、京都でガラスが割れたとの報告が入った。6時30分からの報道番組「ANNニュースフレッシュ」で、大阪市大淀区の朝日放送から1分間、地震関係のニュースが伝えられた。6時45分から「新やじうまワイド」となり、6時48分、神戸市ポートアイランドに住む番組のコメンテーターから電話リポートがあり、ポートアイランドの様子や三宮方面に火の手が上がっている、という情報が入った。これが、神戸関係の初の情報である。7時11分、朝日放送職員の情報で、東灘区一帯12か所から火が出て、うち5か所が激しく燃えて、煙が200～300メートルに達している、と東京のスタジオで原稿を伝えている。7時21分、同じ職員が電話で直接情報を伝えている。7時45分、三宮デビルが倒壊、神戸ワシントンホテル近くの8階建てビルが崩壊、などの情報が伝えら

れる。

8時からのワイドショー「スーパーモーニング」では、大阪と結んで情報のやりとりがあり、8時6分に、「神戸とは連絡が取りにくく、情報の確認ができない」とのコメントを伝えている。8時20分、ヘリコプターからの映像が送られ、被害状況が放映された。

2. 初動情報の問題とその要因

(1) 「神戸震度6」が遅れた理由

以上、簡単に地震発生直後のテレビ報道を見てきたが、ここで問題として指摘できる第1点が「神戸震度6」情報がいつ流されたか、ということである。

神戸の震度が報道された時間をあらためてまとめると、NHKが、大阪放送局発の近畿ブロックで5時50分。全国向けでは、不確定で6時、確定したのが6時15分。日本テレビは未確認情報として6時4分、確定が6時25分。TBSが6時20分、フジテレビが6時23分、テレビ朝日が6時27分であった。

表1. 「神戸 震度6」が伝えられた時間

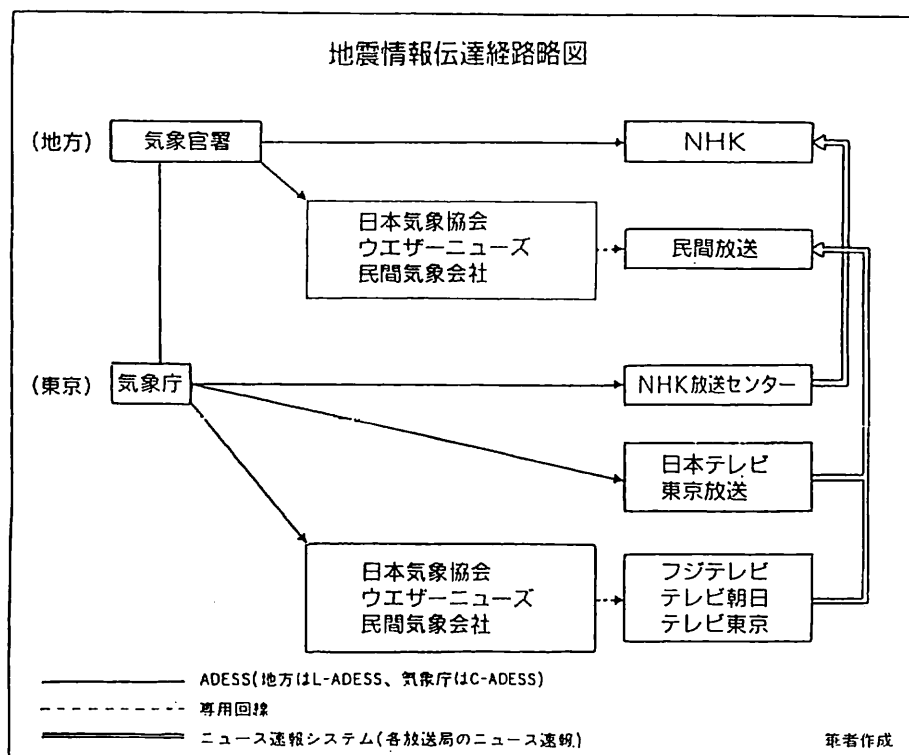
NHK（全国）	6：00（不確定）
	6：15（確定）
（大阪）	5：50
日本テレビ	6：04（未確認）
	6：25（確定）
TBS	6：20
フジテレビ	6：23
テレビ朝日	6：27

ほとんどの放送局で正式に神戸の震度が6と伝えられるのは、地震発生から約30分たってからで、それまでは京都、豊岡、彦根の震度5をこの地震の震度の最高値として報道していた。では、なぜこのようなことが起こったのだろうか。

まず、震度速報のシステムから説明することにする。気象庁の観測点が発表する震度はもともと体感によるものであったが、気象庁は震度の機械計測を試みて「計測震度計」を開発し、1991年から計測震度計の導入が始まり、1993年までに全国の気象官署はすべて震度が機械計測となった。

全国の気象官署の震度計測結果は、「アデス」（“ADESS” 気象資料自動編集・中継装置）という専用回線で、全国6か所の中核となる気象台（札幌管区、仙台管区、東京管区、大阪管区、福岡管区、沖縄）に自動的に送られ、そこから気象庁本庁に送られる。神戸の場合、神戸海洋気象台の計測記録が大阪管区気象台に送られ、そこから気象庁に情報が送られる。

次に、これらの震度の計測結果が放送局にどのように送られるかということであるが、東京の場合、NHK放送センターとTBS、日本テレビは、アデスの端末があるのでアデスによって送られ、それ以外の放送局は民間気象会社を経由して伝えられる。フジテレビが日本気象協会の「マイコス」“M I C O S (Meteorological Information Comprehensive Online Service)、テレビ朝日とテレビ東京がウエザーニュースの「クエーク・ファスト」(Quake Fast)である。ただし、民間気象会社を経由しても、民間気象会社と放送局は専用回線で結ばれているのでアデスとの時間差はないといわれている(図1)。



兵庫県南部地震の場合、神戸海洋気象台の計測震度計は、震度6を記録。その観測結果は、アデスによって大阪管区気象台に送られ、大阪管区気象台から東京・気象庁に送られることになっていた。ところが、神戸の震度情報は、トラブルによって大阪に伝わらず、そのため東京にも伝わらなかったというわけである。トラブルと書いたのは原因がいまだに明確ではない。神戸海洋気象台の計測震度計は故障していなかったのが、原因として考えられるのがアデスのトラブルであるが、アデスを管理しているNTTによれば、アデスの回線に異常はなかったということであった。

いずれにしても、神戸の計測震度計の結果が大阪に伝わらず、異常に気付いた神戸海

洋気象台が、6時3分から6分ごろに大阪管区気象台にあらためて神戸の震度を無線で送ったのである。そして、大阪管区気象台から東京・気象庁に連絡し、神戸の震度が公式に確定したのであった。したがって、気象庁からの「アデス情報」に依存していた各放送局はそれだけ「神戸震度6」情報が遅れたのである。

しかし、NHKだけが神戸の震度をいち早く入手している。これは、NHK神戸放送局にいた当直の記者が地震の揺れがおさまってすぐに神戸海洋気象台に電話して神戸の震度を聞き、この結果を大阪放送局に連絡したということである。しかも、アデスによる神戸の情報が伝わっていなかったため、結果的にNHKがどこよりも早く「神戸震度6」を入手したということになったのである。

ところが、NHKの放送が東京からの全国放送になってから、このNHKのスクープとも言える「神戸震度6」情報の影が薄くなってしまった。これは、気象庁からのアデスによる正式データが入っていなかったため扱いが慎重になった。そのため、アデスで神戸の震度情報が入るまで、神戸の震度は明示されなかったのである。

（2）神戸の被害情報の遅れ

地震直後の報道から指摘できるもうひとつの問題点は、神戸の情報がなかなか伝わらなかったということであった。ほとんどの局が、電話による情報収集から始まっているが、全国向けのテレビ報道を比較した場合、民間放送よりもNHKのほうが神戸の情報を早く伝え、映像もNHKのほうが早かった。

この要因となったのは、放送局の設置状況にあると考えられる。阪神・淡路大震災の被災地は、大阪の広域放送と神戸の県域放送の両方のエリアにある。NHKは、基本的に都道府県単位に放送局が設置され、各放送局も原則として都道府県庁所在地にあるため大阪と神戸に放送局があるが、民間放送のテレビの場合、大阪に本社のある民間放送毎日放送（TBS系）、朝日放送（テレビ朝日系）、関西テレビ放送（フジテレビ系）、読売テレビ放送（日本テレビ系）、テレビ大阪（テレビ東京系）はそれぞれ全国のネットワークに加盟しているが、神戸にあるサンテレビジョンは全国ネットワークに加盟していない。またラジオについてみても、神戸にあるラジオ関西（AM神戸）は全国ネットに加盟していないのである。要するに、神戸にある民間放送は全国に向けて情報の発信ができなかったわけである。全国に向けて情報を送出することができたのは、テレビの場合、NHKと大阪の民間放送5社であった。

近畿圏の放送は、NHKも民間放送も放送送出の体制という面ではよく似ていると言える。NHKの場合、近畿地方の各府県に放送局があり神戸にも放送局がある。しかし、大半の放送は、大阪から大阪管中の近畿ブロック（三重県を除く近畿地方）向けの放送が行われている。つまり、神戸などの近畿地方各局は取材を行い、その素材を大阪に送って、大阪から放送するという形である。神戸などの放送局の大きな役割は、取材を行いその素材を大阪に送ることである。一方、大阪の民間放送は、神戸に支社・支局をおいている。そこで、取材されたものが大阪の本社に送られて、大阪から放送されるという形になっている。ただ、NHKと民間放送の大きな違いは、NHKは放送局であり、民間放送は支社・支局ということである。NHKの場合、神戸からの放送送出は可能であ

るが、民間放送はできない。そして、職員の数も、機材の数もNHKの方がはるかに多いのである。ところが、民間放送の支社、支局においては、ほとんど宿直などの体制をとっておらず、人員や機材も十分ではない。しかも早朝である上に甚大な被害であったため、ほとんどの職員がすぐに出勤できない状態で、活動ができない状況であった。それに比べ、NHK神戸放送局の場合、人員、機材ともに比較的恵まれた状況にあった。しかも、当直の記者もいた上に、スキップバックレコーダーが備えてあるなど、初動情報を送る体制がある程度できていたわけである。

ただし、神戸以外の地域、例えば阪神間の都市には情報を発信するための出先機関がない。そのため、これらの地域では情報の発信が神戸以上に難しかったのである。

NHKにしても民間放送にしても、放送局の設置の基本となるものは放送法第2条の規定に基づいた郵政省の放送普及計画である。この計画のもと、電波の割当や放送局の設置が行われ、国内放送に関する放送の区分ごとの放送対象地域が定められている。現在行われている放送は、地上系放送と衛星系放送と大別され、そのうち地上系放送は、中波放送（AM）、短波放送（SW）、超短波放送（FM）の3つに分かれるラジオ放送と、テレビジョン放送（以下、テレビ放送と略す）とがある。ラジオの中波放送とテレビ放送は、放送の区分において県域放送と広域放送とに分けられる。県域放送というのは、文字通り1つの都道府県を対象とした放送であり、広域放送は複数の都府県を対象として放送するものである。放送普及基本計画では3つの広域放送が定義されており、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京及び神奈川を併せた地域を関東広域圏、岐阜、愛知及び三重を併せた地域を中京広域圏、そして、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良及び和歌山を併せた地域を近畿広域圏となっている。そして、それぞれの広域放送の本社は、東京、名古屋、大阪に置かれている。この基本的な放送局の設置体制が、非常時において詳細な情報発信を遅らせてしまった要因となったのである。

3. 問題点とその背景についての考察

（1）少ない観測点

総じていえることは、阪神・淡路大震災の被災地では、情報の発信が難しく、それが初動情報を遅らせた要因となったということである。この情報の発信についての問題点が生じた背景をみていきたいと思う。

その1つとして、状況把握の拠り所になる震度を計測する観測点が少なかったということがいえるだろう。震度は気象庁の観測点で計測されたものが発表される。気象庁の観測点は、気象台や測候所といった気象官署と、津波地震早期検知網の観測点と大きく2つに分けられる。

1872年、現在の函館海洋気象台の前身である函館気象測量所が開設されて、これが日本で最初の気象観測所となった。その後各所に気象観測所が増えていくが、これらの観測所は、国が運営するもの、地方自治体が運営するもの、民間が運営するものなどまちまちであった。そして、1939年、いろいろな形で設けられた全国各所にある気象観測所が全て国に移管され、これが今日の気象官署の原形となった。震度計測をして

いる気象官署は現在、全国で156あり、三重県を除く近畿地方の気象官署は、大阪、彦根、京都、舞鶴、奈良、神戸、姫路、洲本、豊岡、和歌山、潮岬の11か所にある。

一方、津波地震早期検知網の観測点は全国で149点設置されている。この津波地震早期検知網は、1993年7月12日の北海道南西沖地震における、津波の甚大な被害から津波予報の迅速化が求められ、平成5年度の補正予算で急遽整備された観測網であり、各観測点に計測震度計が設けられ、そのデータが専用回線で津波予報を発表する中枢（札幌管区、仙台管区、東京管区、大阪管区、福岡管区、沖縄の各気象台）に伝えられることになっている。阪神・淡路大震災の被災地周辺にある津波地震早期検知網の観測点は兵庫県内は加西、美方、和歌山県の高野山、南部川、奈良県の平群等である。

しかし、これらの気象官署と津波地震早期検知網の観測点は、その設置の前提が、必ずしも震度計測を目的としたものではなかった。気象官署は、そのほとんどがもともと気象観測を目的として設けられたものであり、地震観測を主な目的として場所を選定するなどということはほとんどなかったようである。また、津波地震早期検知網の観測点も、津波を起こす地震を観測しやすい地点に設置されたものであった。つまり、計測震度計が設置されている観測点は、必ずしも、震度計測を目的として設定されたものではなかったのである。

気象官署と津波地震早期検知網を合わせて302の観測点が、阪神・淡路大震災の発災当時にあったわけであるが、阪神・淡路大震災の被災地域、大阪府、兵庫県の阪神間、神戸、播磨、淡路などを合わせても、観測点は、大阪、神戸、洲本、姫路、加西等、わずかしかなかった。まして、津波地震早期検知網の観測点の震度は、阪神・淡路大震災の発災当時は速報されないため、事実上、地震直後には、大阪、神戸、洲本、姫路の震度しかわからず、被害の甚大な芦屋、西宮、伊丹、宝塚等の阪神間の都市の震度はわからなかったのである。

（2）速報できない「震度7」と観測「点」の認識

今回の阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震は、被災地において、一部「震度7」と認定されたところがあり、これは、気象庁の観測史上初めてのことであった。しかし、もともと「震度7」は計測震度計では計測できず、したがって「震度7」の速報はできなかったのである。この認識は、一般ではほとんどされていなかった。

震度の歴史をひもとけば、1884年、「微、弱、強、烈」の4階級による震度計測が全国的に行われるようになり、1898年からは「微震（感覚なし）、微震、弱震の弱き方、弱震、強震の弱き方、強震、烈震」の7階級に細分化されて、以降、1908年に「微震（感覚なし）」が「無感覚」に変わり1936年に、「無感、微震、軽震、弱震、中震、強震、烈震」と呼称が変わったものの、約50年間は7階級による震度計測であった。しかし、1948年の福井地震（マグニチュード7.1）による被害から、翌1949年、新たに「激震（震度7）」が加わり、震度は0～7までの8階級となった。今回の地震で震度7の地域が認定されたというのは、この1949年に「震度7」の階級ができてから初めてという意味であって「歴史始まって以来初めての大揺れ」という意味ではない。

さて、現在は前述の通り、震度は機械計測を原則としているが、計測震度計は「震度7」が測定できず「震度6」が最高の計測値となる。というのも「震度7」は、おおむね200メートル四方において倒壊家屋が30%以上に及んだ地域を目測で判定して結果を出すことになっていたからである。いわば「震度7」は、震度ではなく被害度とでも言うべき値である。しかし、このことはあまり知られていなかった。

そして、もう1つの震度の問題点は、発表される震度は、あくまでも「点」の計測結果ということがどれだけ知られていたか、ということである。

「神戸 震度6」というのは、「神戸市全体が震度6」という意味でなく、「神戸市中央区中山手通の神戸海洋気象台の計測震度計が震度6」という意味である。したがって、神戸市内でも違う震度の地域は当然あるわけである。ところが、ほとんどの観測点の測定値は市町村名で発表されるため、受け取る側にとっては、明示された市町村全体が同じ震度というイメージとなってしまう。その典型的な問題が生じたのは大阪であった。大阪では震度4と発表されていたが、これも「大阪市中央区大手前的大阪管区気象台の計測震度計が震度4」という意味であった。実際には大阪市内もしくは府内では物理的に大きな被害が出たところもあったが、「大阪 震度4」という発表からはそのイメージが得られなかったのである。

このような、震度の意味がどの程度周知されていたかが、初動段階における状況判断に影響を与えたといえよう。

(3) 情報が届かない事態の対応

この震災の問題点として、「神戸 震度6」が遅れたことを先に述べたが、このような震度が届かなかったトラブルは、実は今回が初めてではない。近年では、1993年1月の釧路沖地震の際の広尾測候所の震度が伝わらなかったり、同年7月の北海道南西沖地震では、函館海洋気象台の震度情報が入らなかったり、江差測候所の計測震度計が4を記録した段階でアデスが断線したため江差の震度5が伝わらなかったり、1994年10月の北海道東方沖地震では、根室測候所の震度がやはり断線により伝わらなかった。つまり、地震直後、震度が伝わらないということは、とくに珍しいことではなかった。ただし、この震災ではアデスが断線していないとされており、アデスがつながっていないながら情報が来なかったという初めてのケースであったという。

しかし、いずれにしても、神戸に観測点があることはわかっていることであり、観測点から震度情報が入ってこないという事態の場合、逆に、その観測点で何かが起きたのではないかと考えることも必要である。どんなに頑強なシステムを築いても、機械や回線に絶対にトラブルが生じないということはないのである。そういう事態も考慮し、情報が入らない場合の対応も考えなければならないだろう。

(本文中の放送時間は、筆者所有のビデオテープから計測したものである)

参考文献

○読売新聞大阪本社編『阪神大震災』、1995年、読売新聞社

○中森広道「コミュニティ放送とこれからの災害情報」『ソシオロジクス』第15号、

- 1993年，日本大学大学院社会学研究会
- 中森広道「災害時の各放送局は報道機関というより防災機関という認識を持つべき」
『AURA』109号，1995年，フジテレビ編成局
- 中森広道「点と面」『東京消防』1995年6月号，1995年，東京消防協会

阪神・淡路大震災とラジオ放送

Radio Broadcasting in The Great Hanshin-Awaji Earthquake in Japan

川端 信正

Nobumasa Kawabata

廣井 脩

Osamu Hiroi

1995年1月17日未明に発生した兵庫県南部地震は、死者が6千人を越え、一般に「阪神・淡路大震災」の名で呼ばれる大きな災害となった。この阪神淡路大震災の際、放送メディアのうち、ラジオがどのような役割を演じ、被災者の指針として、いかに機能したか概観する。

この報告では、兵庫県南部地震が発生した1月17日、午前5時46分からおよそ2時間に阪神地区のラジオがどのような放送を行ったかを考察した。地震発生から2時間に限定したのは、災害発生初期に流されたラジオの情報がどのようなものであったか、被災地域住民に安全行動指針がいかに提供されたか、そしてそれらの情報は役立つものであったかを分析するためである。ラジオ放送の初動は、被災地域の住民の安全を導くことが出来るか否か、きわめて重要だからである。

本調査では、全国放送のNHK、神戸に本社を置くAM神戸、そして大阪に本社があるMBS毎日放送、ABC朝日放送、OBCラジオ大阪を取り上げ分析した。

1. 日本の放送メディアがはじめて体験した「大震災」

本論に入る前に、災害報道と放送の関わりについて述べておきたい。

この100年余を振り返ると、日本で100人以上の死者を出した地震災害は、濃尾地震（1891年）から福井地震（1948年）までの間に14回を数える。しかし、福井地震以後は、死者が100人をこえる地震は少なく、チリ地震津波（1960年）、日本海中部地震（1983年）、北海道南西沖地震（1993年）の3回だけであった。

*川端信正（静岡放送報道制作局）

*廣井 脩（東京大学社会情報研究所）

キーワード：阪神・淡路大震災、兵庫県南部地震、ラジオ放送、震度情報、生活情報、災害報道

日本列島は、福井地震以後、約40年の間、大規模な地震災害が発生しない、いわゆる「地学的平和時代」が続いたのである。しかし、この静穏な時代は1993年あたりから崩れ、釧路沖地震、北海道南西沖地震、北海道東方沖地震、三陸はるか沖地震と被害地震が相次いだ。そして、これらに続いて、兵庫県南部地震が発生した。

この兵庫県南部地震は、近年の地震災害をはるかに上回り、阪神・淡路大震災と呼称されることになった。「大震災」の呼称は関東大震災以来のものであった。

振り返ると、わが国は、福井地震以後の地学的平和時代に、大きく高度成長を遂げて発展した。この地学的平和時代に出現した超高層建築物、高速道路、新幹線など現代日本の諸施設が、兵庫県南部地震では「初の試練」を受けた。

兵庫県南部地震は、わが国の放送メディアにとっても、同様に、「初の試練」「初の震災体験」であった。

日本における地震災害放送を振り返ってみよう。

1923年関東大震災当時、日本にはまだ放送が存在しなかった。1948年の福井地震はNHKのみ存在した時代で、まだ民間放送はなかった。やがて民間放送がスタートし、現在の放送形態となって以後、地震災害放送は新潟地震（1964年）あたりから行われるようになった。新潟地震では、東京との通信回線が途絶えるという悪条件のなか、NHK新潟放送局によって安否情報の放送などが行われた。以後地震災害ごとに、災害放送が行われて来たものの、「震災」と呼ばれる大きな地震災害に、放送が直面するケースはこれまでなかった。阪神・淡路大震災は日本の放送が直面した初めての大震災であった。

放送メディアが災害放送を行う際、放送局舎が被災地の中か、それとも被災地の外であるかが大きなポイントとなる。放送局舎が被災するかどうかにかかわらず、局舎が被災地域内か、地域外であるかによって、放送の体制は大きく異なる。それは災害放送の成否を大きく左右するものである。被災地のまっただ中に放送局舎が存在するならば、放送諸施設が被害を受けることが考えられ、被害の損傷度やスタッフの被災度が、震災放送の成否を大きく決定づけることになる。一方、被災地外に放送局舎が存在する時は、生中継や取材のため、スタッフが被災地へ出勤する、いわゆる被災地への出勤型となる。これは、従来からしばしば行われて来た大事件、大事故報道の延長線として放送体制が組まれるものである。

こうした視点で分けした時、阪神・淡路大震災は、「被災地まっただ中型」と「被災地への出勤型」の両方が、阪神地区の放送メディアに存在した。つまり、「被災地まっただ中型」は、AM神戸やサンテレビなど神戸に本社を置くラジオ、テレビ局、「被災地への出勤型」はMBS、ABC、OBCなど大阪に本社を置く各社であった。もっとも、大阪に本社を置く放送各社にとっても、社員の一部が神戸などの被災地に居住するケースが多数存在した。そうした意味では、大阪に本社を置く放送局も、一部は「被災地まっただ中型」であり、放送体制の確保に困難をきわめたという現実があった。しかし在神戸の放送局が受けた放送設備の損傷というハンディはなかった。

2. 第一報はいかに報じられたか

地震の第一報はどのように伝えられたか。NHKラジオは、地震発生まもなく、定時番組を中断して、

「東海地方と北陸地方で地震による強い揺れを感じた。きょう午前5時45分ごろ、東海地方と北陸地方で地震による強い揺れを感じた」

と速報した。テレビ、ラジオの同時放送であった。コメントには「東海地方と北陸地方で強い揺れ」とある。第一報は東海の地名を最初にあげており、「もしや東海地震が」と疑ったことが、コメントから察せられる。大きな揺れに直面して、危険性が指摘されている東海地震の発生かと考えるのは無理からぬことである。

また、NHKは初期のコメントで「仮に震源が海底だと津波の恐れがある。海岸地方では念のため津波に警戒を」と津波に注意を喚起しており、北海道南西沖地震の教訓が生きている。

次に、まもなく各地の震度が判り始める。この段階のコメントで、NHKは

「各地の震度が入った。震度4、5が出ている。京都、彦根で震度5。震度4が四日市、津、岐阜、敦賀、舞鶴、上野、大阪、和歌山、姫路、徳島、高松、岡山、津山、鳥取、福井――」

と伝えている。震度5が京都と彦根とあることから、もっとも大きな揺れは京都付近と推測したのであろう、後に京都放送局からのレポートが登場することになる。

神戸が震度6であったという情報はいつごろ伝えられたのだろうか。MBSラジオは6時7分、「震度6が出ている。神戸で震度6」と伝えた。

NHKは6時を回った段階で「神戸は震度6という情報が入っている」と放送したもの、まもなく「神戸の震度6は誤りで、一番大きい震度は5である」と訂正した。しかし6時30分前、「神戸は震度6」と再度訂正するなど、二転三転の震度情報であった。テレビ、ラジオの同時放送であることから、おそらくテレビ画面の表示とアナウンス原稿の食い違いが招いた間違いであろう。

OBCラジオ大阪が神戸の震度6を報じたのは6時35分ごろのころ、スタジオの内田キャスターと神戸の自宅にいる奥田記者とのやりとりの最中であった。

「(内田) いま情報が入ってきました。先ほど、京都、彦根、豊岡、これが近畿では一番揺れて震度5と言ったんですけれど、神戸が一番です。」

(奥田) あ、6というふうに…

(内田) 6ですね。

(奥田) マグニチュードでいけば、7. いくつというふうに…

(内田) 7. 2ですね。

(奥田) 7. 2ですか、神戸ということですね。

やりとりをしているうちに、神戸の震度が6であったことが明確に伝わらなくなってしまった。スタジオで震度とマグニチュードをはっきり使い分けていない。また、電話レポートの奥田記者も震度とマグニチュードを混同してしまったようだ。「神戸震度6」の情報が入ったのに正確に伝わらない。情報錯綜の状況下だけに、電話レポートにかぶ

せて情報を入れる際は、スタジオ側が主導権を取って伝えることが大切であろう。せっかくの震度6情報がうまく伝わらなかった。

AM神戸は6時43分ごろ、「6時18分気象庁発表、神戸震度6」を報じている。

淡路島にある洲本の震度は各社とも8時すぎまで報じられなかった。ただMBSが7時37分ごろ、報道スタジオからのニュースで「震度6を記録した震源地の淡路島では、一宮町でー」と、突然、淡路島が震度6であったとの表現が出てくる。しかし洲本の地名は登場せず、淡路島震度6の根拠は不明である。洲本震度6の公式情報は、MBSでは午前8時からの番組「ありがとう浜村淳です」のはじめの部分で、「震度6が、さきほどまでは神戸だけだったが、淡路島の洲本も震度6とわかった」と報じた。NHKも8時の時報後、洲本の震度6を報じた。

震度情報に関して、ABCに注目すべきスタジオの会話が登場する。余震を報じた7時52分のスタジオの会話。

「さきほどの余震は、奈良で震度4、岡山で震度2なのに、神戸の震度情報がないのは変だ。本震の時も、ひょっとすると通信回線に問題があるのではないかな」

とのスタジオの会話である。鋭い指摘であった。まさに最激震の神戸や洲本は、通信回線断などの障害があって震度の観測結果が伝わらなかったのであった。各地の震度を地図に落として行ったとき、震度が大きく現れるべきはずの真ん中に、ぽっかりと空白が出来た。その空白域である神戸、洲本の震度がないのは、決して揺れなかったからではなく、揺れが強すぎて観測不能、もしくは通信途絶ではないかと、疑ってみるべきであった。公表された震度情報に頼りすぎ、いち早く最激震地を推測出来なかったのは残念であった。

第1報に関して、もうひとつ重要な指摘をしたい。

午前6時半すぎのMBSである。いつもはスタジオにいる川村キャスターが交通渋滞に巻き込まれてスタジオに到着できず、途中の武庫川市内から電話リポートで放送に参加した。その中で「阪神高速道路が落ちた」と伝聞による情報を伝えている。さまざまな断片的情報が飛び交い、収拾がつかない中、スタジオのスタッフはこの言葉を聞き逃してしまった。スタジオが、こともなげに「落ちました?」と相づちを打つだけに終わってしまったのは悔やまれる。災害放送に際して、いかに冷静沈着な状況把握と分析を行うか、混乱の中で送り手に課せられた課題である。そうした意味では、川村キャスターは、車からのレポートで、かなり適切に状況を伝えている。たとえば「震源地は淡路島というが、芦屋が一番ひどい地域の東の端のようだ。芦屋は家がずいぶんつぶれているところがある。古い家がつぶれている」と、ひどい被災地の東縁、そして非耐震的な古い木造家屋に被害が多発している、と分析し、レポートを送っている。

第1報が難しかったのは震源地まっただ中のAM神戸であった。地震発生と同時に強い揺れで放送機器が故障し、13分5秒間電波がとまったAM神戸は、午前6時の時報と同時に放送を再開した。

その放送再開後の第1声は

「スタジオがただいまの地震で壊れています。音声が途切れています。地震のためオンエアが途絶えています。情報が入り次第お伝えします」

というものであった。ラジオメディアは音声だけを放送素材としている。スタジオの慌ておりは痛いほどよくわかる。しかし、ラジオは、音声が電波に乗ればそれでいい。放送再開と同時に、被災地域住民に向けて安全行動指針が放送出来なかっただろうか。たとえば、

「大きな揺れはおさまりました。お互いの身の安全を図ったあとは、避難行動に移りましょう。火元は消しましたか。室内に家具などが散乱していませんか。照明器具や戸棚のコップが割れて床に転がっていると危険です。スリッパを履くなどしてけがをしないようにしましょう。大きな地震の後には余震が多数発生するものです。余震は本震より小さいのが一般的ですが、さきほどの大きな揺れで倒れそうになっている家具や落ちそうになっている瓦などは、小さな揺れでも危険があります。行動する時にはヘルメットをかぶるか、座布団で頭にかぶりましょう」

などだろうか。東京、静岡などしばしば地震に見舞われる地域では、このような放送文案がスタジオに常備されている。AM神戸は、放送の中で「余震が終わった時、スタジオの中に、建物の中にいるのと外に出るのとどちらが安全か判断がつかないのです。あの時は、どうしていいのか、何をしたいのか、わからない状態で・・・」と語っている。近畿地方では、地震がないといわれて来ただけに、放送メディアの対応も戸惑いの連続だったのであろう。

一方、OBCは地震発生直後から「ただいま地震が起きています。ラジオをお聞きのみなさん、すぐ火を消して下さい」と呼びかけ、「ガスの元栓をしめて下さい。ドアを開けはらって下さい。慌てて外に出ないで」「車を停めてエンジンを切って」と具体的な行動をアドバイスしているのは、被災地向け放送として適切であった。

AM神戸も「スタジオは壁が崩れ、本棚が倒れ、机の上のものが散乱した状態となっています。すこしガス臭い気配もしますが、どうぞ、みなさん落ちついてガスの元栓などを確認なさって」とガス、火の元など注意事項を放送しているが、被災地まっただ中の放送局だけに、さらにつっこんで、さまざまな安全行動指針が放送出来なかっただろうか。また、AM神戸は社屋から見えるあたりの情景をレポートし、「たくさんの方が外に出ています。マンションのブロック塀が倒れて住民が不安げ」と伝えているが、これも、さらにつっこんで被災地内の描写に徹するとよかった。

次に、NHKの地震発生初期の放送をみよう。

NHKは、もっぱら震度情報の伝達に重点が置かれているように思われる。震度情報が大切な情報であることはもちろんだが、被災地住民にとって、本震直後の混乱期には適切な行動指針が必要であらう。大揺れがおさまった。ひっきりなしに余震に襲われる。あたりがどのような状況にあるのか、まだつかめない。目の前には家屋の倒壊などがある。そうした被災地まっただ中の人々に冷静な行動をとってもらう、さまざまな行動指針が放送されていいのではなかろうか。少なくとも、震度6を記録する地震であったなら、まして大都市で震度6を記録したならば、地震発生から早い段階で、住民に対して適切な行動を導く指針を放送したいものである。

強い地震の揺れに襲われた時、地震発生当初は、当然のことながら自分の回りのことしかわからない。やがて揺れがおさまって、わが身の安全が確保出来たことがわかった

時、近くにいる人はどうなったか、あたりはどうか、視野がやや広がり、回りの様子が目していく。状況がのみこめると視野はさらに広がる。時間とともに状況把握の視野は徐々に広がっていく。この状況把握の広がり段階に合わせて、放送は適切な行動指針を提供すべきである。

それは、たとえば、次のような放送文案はいかなものか。

（地震発生時）「大きな揺れです。机やベッドの下にもぐるなど、わが身の安全を図りましょう。頭を保護しましょう。近くに座布団があったらかぶりましょう」

（揺れが小さくなった時、もしくは、おさまった時）「大きな揺れはおさまったようです。身の安全を確保したまま、あたりの様子を観察しましょう。火の元は大丈夫ですか。家族のみなさんはどうしていますか。危険なものが倒れていませんか。外に出るドアは開くでしょうか。しばらくの間、余震があります。さきほどの大きな揺れで倒れている家具などに十分気をつけましょう」

（避難など行動に移る段階で）「室内に割れたガラスが散乱していませんか。ガスが漏れたり、電気の線が切れて垂れ下がったりしていませんか。照明器具が落下していませんか。家具が転倒していませんか。避難行動に移る際には、回りの様子をしっかり確認しながら、けがをしないよう気をつけましょう。ガラスなど危険なものを踏まないよう、スリッパをはいて行動しましょう。手袋があったら手を保護しましょう。防災頭巾やヘルメットがあったら、かぶって頭を保護しましょう。ない時は座布団でも代用出来ます。階段を踏み外すことのないよう気をつけましょう。避難する時には電気のブレーカーを切ることを忘れずに。ガスの元栓も切ってください」

3. 被害情報はいかに伝えられたか

具体的な被害情報は、いつごろから伝えられただろうか。時間経過を追って各社の放送内容一覧をまとめた。

各社の放送内容を大まかにわけると次のようになる。

地震発生の午前5時46分から6時までは、もっぱら地震発生の事実と大まかな震度情報の伝達である。そして6時を回ると、さらに詳しい震度情報に加えて、実家の神戸に帰っていたアナウンサーなどから電話レポートが入る。ただ、これらの情報は当初「棚から物が落ちなかった。ガラスも割れなかった」など、さして被害がないとの印象を与えるものがあつた。レポート出来る人は被害の少ない人という、当然の事実を忘れないようにしたいものである。

深刻な被害を思わせる情報は、まず、AM神戸6時14分の「長田の人から電話があつた。5本の火柱が上がっている」あたりからであろう。AM神戸が、情報不足を補う手段として、「AM神戸の職員で、情報のある人は局まで電話を」と、放送で呼びかけているのはよかった。また、ABCは6時25分「神戸方面に電話が通じない」と放送。神戸の被害の深刻さを予告するような情報となった。

MBSの6時30分、前述の川村キャスターによる「阪神高速落ちました」が大被害報告の幕開けであつた。続いてNHKは「淡路病院にけが人3人、救急車10台あまり

が出動」と報じる。しかしNHKは全国放送ということもあって、いぜん広島や名古屋、京都から「停電なし。死者、重傷者の報告なし」など、無被害地区との情報が混在し、阪神地区の被害の深刻さをつかむには、なお時間がかかる結果となった。

そして、神戸、西宮、淡路島などに被害が集中していることが判明するのは、7時からであった。

被災まっただ中のAM神戸は、午前7時、長田に差し向けたラジオカーから現地レポートが入る。NHKも7時のニュースで、「神戸放送局では、縦横の激しい揺れがしばらく続き、停電した。書棚やテレビ棚などがほとんど倒れた」と伝えたのに続き、「町の様子を見てきた職員の話によると、神戸の六甲山麓の住宅街にいくつもの火の手が見られたという。東灘、灘、中央区など市内のいたるところでガス漏れが発生、数カ所で火災が起きているという。淡路島の北淡町では住宅が10数軒倒壊し、中に人が生き埋めになっている模様」と報じ、被害が阪神、淡路地域に集中していることを報じた。

MBSでは、7時8分、川村キャスターがようやくスタジオにたどり着き、「外へ出たら古い家は全部つぶれていた」と語っている。また、淡路島のやや詳しい情報が電波に乗るのは、MBSでは7時10分をまわったのこと。ABCが阪神高速道路の橋桁が落ち、けが人がいると報じたのは7時15分のことであった。このころになると「須磨区で7階建てのマンションが傾き、火災発生」（MBS）や「神戸で住宅多数が倒壊、中に人が閉じこめられている模様。淡路島で倒壊20数軒。神戸市民情報によれば、高層住宅の倒壊で多数のけが人」（NHK）、「山の手で4カ所火災」（ABC）、「長田の火災現場では、時折り小さな爆発が起きている。200メートルぐらいの地区が火に包まれている」（AM神戸のラジオカー報告）など被害の深刻さが一段と増して来る。

AM神戸が、被災地に出動させたラジオカーの存在意義は、被災地まっただ中の放送局だけに大きい。7時26分、AM神戸・三枝記者は、目の前で、家の下敷きになった息子を、延焼する炎の中に残して見殺しにせざるをえなかった住民のインタビューを現場中継。その内容は、地震災害のむごさを伝えるものであった。

この現場レポート以後、AM神戸は、ラジオカー・チームが被災者の救助活動などを伝え、ある時は、ラジオ中継器を肩にかけて徒歩で移動し、丁目番地などのデータを中心にした「SOS放送」を断続的に行った。AM神戸では、そうした中継の際、被災者にマイクを突きつけることは避けたという。

以上概観したラジオ各社の放送内容をまとめると、地震発生の午前5時46分から6時までは、大きな地震があったことだけしかわからず、情報がきわめて少ない「未情報期」。そして6時から7時までは、被害が出たことがわかり始め、断片的ながら徐々に情報が入り始める「情報黎明期」。そして7時以降は、被災地域が相次いで判明していく「被災情報増大期」であったといえよう。このように時間経過を追って情報を考察する時、「未情報期」の段階で、激震地域の住民にいかに関心ある情報を提供し、落ちついた行動をとってもらい、身の安全を図ってもらうか、ラジオ放送の使命はここにあるのではないだろうか。

大規模な地震災害に臨んだ時、放送に課せられた使命は、大きく次の2つに分けられよう。1は「被災地状況の速報・詳報」、そして2は「被災地住民への安全行動指針・

生活情報の提供」である。その1の「被災地状況の速報・詳報」は、被災地がどのような状況になっているか、おもに被災地外の地域に知らせることである。また被災地内の住民にとって災害の全体像を知らせることである。それは従来からマスメディアが行っている大事件、大事故のニュース報道と同質のものである。被災状況を正確に伝え、問題点を浮き彫りにし、国内、世界に伝えることに使命があるのはいうまでもない。次に2の「被災地住民への安全行動指針・生活情報の提供」は、被災者が必要とする、地震災害発生直後から避難に至る間の、安全行動指針や救援、復旧、復興と長期にわたって必要とする被災者生活情報などを提供することである。

テレビとラジオには、それぞれ異なる特性がある。テレビは映像を通して被災状況を視覚に訴えることが出来る利点がある反面、災害による停電が起きると視聴出来ない。また、移動しながらの視聴も難しいという欠点がある。一方、ラジオは避難の際に携帯して、移動しながら情報を入手出来るという長所がある。災害情報の送り手は、こうしたテレビとラジオの特性を考慮することが必要である。こうした、それぞれのメディアの持つ特性を生かす時、ラジオは地震発生当初、つまり「未情報期」に住民の安全行動指針をいかに適切に提供できるかがポイントといえよう。とりわけ、局舎が被災地まったただ中型のラジオ局にあって、もっとも重要な時期は、この「未情報期」であるといえよう。

1995年	NH K	M B S	A B C	O B C	A M神戸
1月17日 午前 5時46分	=====	=====地震発生=====	発生=====	=====	=====
	東海・北陸に強い揺れ	5:50 (東京発番組で地震発生第1報) 「地震があった 東京のスタジオで 震度1」	(放送一時断)	「ただいま地震が 起きています。ラ ジオをお開きのみ なさんすぐ火を消 して下さい」 「ガスの元栓をし めて下さい。ドア を開けはらって下 さい。慌てて外に でないで---」 (放送中断)	5時46分55秒 放送停止(13分 05秒放送中断)
	各地の震度	5:52 東海から関西にか けて大きな地震	(まもなく放送再 開)「いま激しい 揺れがありました 火を消して下さい」	「地震はおさまっ たようです。被害 はありませんでし たか。海岸地方は 津波情報に注意を」 「車を運転中の人 車を停めてエンジ ンを切ってー」	
	東海、近畿、中国、 四国地方にかけて広 い範囲で地震があっ た	5:54 京都、彦根で震度 5	豊岡、京都、彦根 で震度5 ニュースの用意が 出来ていないので 歌謡曲を1曲	5:55 (定時番組)「世 の光」	
6時00分		6:00 津波の心配はない 6:01 (MBS発の放送 に切り替え) 近畿、四国、中国 で強い地震 震度5は京都、豊 岡、彦根	(曲の途中でニュー ス) 各地の震度、震源 地は淡路島	6:00 (ニュース) 近畿地方を中心に 地震 京都震度5	6:00 (放送再開) スタジオが地震で 壊れている。音声 がとぎれている。 情報が入り次第伝 える
	神戸は震度6という 情報が入っている	6:06 (東京発の放送に 戻る) 関西を中心に地震	火を消すこと 慌てて外に飛び出 さないこと	6:05 (定時番組のリク エスト曲放送) (再び地震ニュー ス) (地震時のスタジ オでの様子掛け合 いで語る 火に注 意再三繰り返す)	スタジオで壁が崩 れ本棚が倒れてい る。少しガス臭い
	大阪放送局の地震直 後の様子	6:07 震度6が出ている 神戸で震度6	6:10 ABC周辺の様子 高速道路などの被 害情報はまだない		ラジオ関西の外に は大勢の人が出て いる。ブロック塀 も壊れている
	神戸震度6 (神戸の実家にいた アナウンサーの報告) 棚から物が落ちる ようなことはなかつ た ガラスも割れなかつ た 住民は落ちつい ている				長田方面で火柱が あがっている

6時30分	神戸放送局の記者が報告 激しい揺れ 混乱しているようで火災や停電の情報は無い 神戸震度6は誤り震度5が一番大きい震度(神戸の震度は言わず) 再度訂正 神戸は震度6 (京都から報告) (大阪コンビニの映像) 6:30 各地の震度 近畿の交通機関に影響出ている 彦根でお年寄りが転んでけが (奈良から報告) 落下物で男性けが 大阪市内の様子 古いブロックやモルタル壁に被害 淡路病院にけが人3人救急車10台ほどが出動 (広島からレポート) (名古屋からレポート) 6:50 (京都からレポート) 停電はない死者重傷者の報告はない	(高知からレポート) 高知は震度4だった 6:18 梅田周辺を回った報告 6:25 神戸震度6 大阪市内の数カ所で火災 橋陥没 神戸方面に電話通じない 宝塚も道路陥没で十三大橋は渡れない 停電で信号機はダメ 6:30 (おはよう川村竜一始まる) (キャスター川村スタジオに間に合わず携帯電話で報告) 「阪神高速落ちました」と報告 スタジオ「落ちました?」(と応答するもスタジオは反応なし) 6:40 私鉄、JRとまる新幹線も (尼崎からレポート) 送電線が燃えている 6:46 近畿の高速道路すべて通行止め 6:50 火災の情報入る 大阪市内で少なくとも火災6件	豊岡、京都震度5 高速道路通行止め スタジオに来る途中の様子報告 社内の様子報告 震源地淡路島 高速道路、鉄道情報 (地震時の注意スタジオからさかんに呼びかけ) 6:36 (ニュース) 神戸で震度6 鉄道、高速道路情報	6:10 地震情報が入った 京都、彦根で震度5 6:14 長田の人から電話あり。5本の火柱があがっている 6:17 AM神戸の職員で情報のある人は局まで電話を 震源地は淡路のようだ 6:43ごろ 気象庁発表の情報入る。震源地は淡路島、神戸震度6
-------	---	--	--	---

7時00分	6:55 新幹線ストップ 高速道路通行止め	(豊中の病院から レポート) 停電のため自家発 電 外はひっきり なしにサイレン		6:53 (地震談義)	
	7:00 近畿地方中心に強い 地震(洲本の震度は いぜんなし)神戸放 送局では激しい揺れ 六甲山麓の住宅地に 火の手 東灘、灘区 などでガス漏れや火 災 淡路島北淡町な どで10数棟倒壊生 き埋めもある模様だ が詳細判明せず	6:57 火災炎上中が4件 ガス漏れ11件 (大阪市内のみ)	7:05ごろ 池田市で畳屋倒壊 なかに人がいると の情報 ポートア 일랜드で電気水 道とまる (西宮神社に電話 で聞く)古い建物 がかなり倒壊	7:00 (社内の様子報告) (大阪市内の記者 が自宅からレポ ート)	7:00前 ラジオカーの現 地レポート長田 から
	7:15 近畿地方は淡路島な どで建物倒壊けが人 出た模様 人が下敷 きになっていないか 警察が搜索 神戸で 住宅多数が倒壊し中 に人が閉じこめられ ている模様 西宮で 阪神高速の橋桁落下 の情報も 淡路島で倒壊20数 軒 神戸の市民情報によ ると高層住宅の倒壊 で多数のけが人が出 た模様	7:08 (川村竜一スタッ ジオに到着) 「外へ出たら古い 家は全部つぶれて いた 須磨区では7階建 てマンションが傾 き火災発生の情報 が入った 西宮市消防局には 建物に下敷きの情 報が殺到 神戸市 消防局によると市 内全域で火災発生 消防車は全車出動 中、未確認だが死 亡者も 阪急三宮 で脱線事故のよう だが詳細不明	7:10ごろ (神戸・北区から レポート)部屋が めちゃくちゃ 瓦 落ち外壁ダメに 7:15 阪神高速で橋桁落 ちたとの情報 け が人も 神戸市では数カ所 で火災 民家の倒 壊や道路に亀裂 ポートアイランド から見ると山の手 に4カ所火災 7:20 (西宮からレポ ート)西宮市役所方 面に大きな煙 古 い民家中心にガス 漏れ コンビニで は缶類散乱	大阪市内で火災1 件 ガス漏れ13 件 大阪市内でかなり 火災が発生してい る 神戸で高速道路の 橋桁は外れている 芦屋では住民が避 難 7:19 (境港からレポ ート)	7:18 長田、兵庫区内 7:21 (ラジオカー中 継)長田の火災 現場は時折り小 さな爆発が、2 00メートルぐ らいの地区が火 に包まれている

神戸の高台から見ると市内7カ所ぐらいから火の手 須磨では7階建てマンションが倒れた 神戸放送局では書棚がほとんど倒れた 淡路島の病院でけが人を手当て 淡路島では道路に亀裂、落石 淡路島では消防や警察に電話が繋がらず救助に手がつけられず (神戸放送局から報告) 見てきた町中の様子—木造住宅倒壊、コンビニに列 神戸放送局にこれまでにいった情報まとめ 7:40 神戸で震度6など近畿地方を中心に強い地震(洲本の震度はなし) (7時38分の余震も神戸の震度は入らず) (神戸に実家にいるアナウンサーの報告) 本震直後に火柱が7つ、いまは白い煙、別に黒煙 室内は棚のものが散乱した、たんすが倒れた 倒壊した家は見当たらないが屋根瓦が落ちている、断水、ガス停止	7:26 (六甲アイランド在住のアナウンサー電話報告) 停電、電話もダメ。ガス漏れで火は使えない 火災発生 住民は避難中 芦屋市内で20軒が倒壊の原稿を読み川村キャスター「もつと多い」三宮でビル倒壊 7:35 須磨区4カ所、東灘区3カ所で火災 ほかに家屋倒壊多数 震度6の淡路島で10軒以上の民家が倒壊 1人が死亡 ほかに生き埋め多数 7:38 いま余震が- 北淡町で新たに20-30軒の家屋倒壊判明 ポートアイランドで浸水	7:27ごろ 西宮周辺は大変なことに 家がかなり倒壊 電柱も軒並み倒壊 家がべしゃんこに 7:35 橋が陥没し観光バス宙づりという話 7:41 芦屋市内で家屋倒壊少なくとも20軒 2カ所で出火 救急車の出動相次ぐ 市民の目撃によると三宮でビルのガラス割れ路上に散乱	7:28 (ニュース) 芦屋市内で少なくとも20件の家屋倒壊生き埋めも 池田市で畳屋が全壊1人が閉じこめられている 7:42 (天王寺から記者レポート) (西宮から記者レポート) 近くに家屋倒壊がある	木造住宅ばかりなので延焼は避けられない 消防車は来っていない 7:26 息子が炎にまかれた人のインタビュー ラジオ関西の東側でも何本か火の手 兵庫区の古い民家もななり倒壊 阪神高速の橋脚は鉄筋がむき出しに 消防車を見かけない
---	---	---	--	---

8時00分	神戸、洲本震度6 (洲本の震度がようやく入る) 淡路島の各地で住宅倒壊 1人死亡多数が下敷きの模様 一宮町でお年寄り死亡10軒が倒壊し生き埋めの人を救出中 8:05 阪神高速は数カ所にわたり高架が落下し車50台が落下 多数のけが人 芦屋で数10棟の住宅が倒れ大勢が下敷きの模様、数カ所で火災 電話不通で救助求め市民が消防署を訪れる 池田市で木造2階建て住宅倒壊1人閉じこめられる	(「ありがとう浜村淳です」始まる) 淡路島の洲本の震度が6と判明した 阪神高速崩壊で2人死亡 神戸市中心部でかなりの木造住宅が倒壊 生き埋め通報100件以上 阪急伊丹駅半壊 六甲町で大きな火災 淡路島と神戸で地震による死者4人を確認 神戸市内中心部で火災10件 死傷者も 神戸市内で生き埋め100件以上 芦屋市の家屋倒壊100軒以上 政府に非常対策本部設置へ 国土庁長官を被災地派遣 新幹線も5カ所橋桁落ちる 神戸大病院で2人死亡 50人以上が治療	7:52 さきほどの余震 奈良で震度4、岡山で震度2なのに神戸の震度情報がないのは変だ 本震の時もひよっとすると通信回線に問題があるのではないか 淡路島で家屋倒壊10軒以上1人が死亡多数生き埋めの情報が兵庫県警に入った 阪神高速倒壊現場からレポート (以上8時まで)	芦屋市内で30戸以上が倒壊、かなりの人が閉じこめられている模様 大阪市内で火災12件 (以上8時まで)	8:10 阪神高速神戸線の橋脚はコンクリート柱が大きく破損 (この時点ではまだ東灘区の阪神高速倒壊情報はまだ入っていない)
--------------	---	---	--	---	--

1995年1月17日ラジオ放送全文（抄）

1. NHKラジオ第一放送

（岸田アナ）時刻はまもなく5時45分。「人生読本」。日本語の魅力はアクセントにあり。静岡大学文学部専任講師、国立国語研究所地方研究員山口幸洋さんの話。（略）・・・新聞を見てもやたらに・・・（番組中断）

（男性アナ）・・・三重の上野で震度4、埼玉の熊谷で震度1という情報。東海地方、近畿地方、中国地方、四国地方にかけてのかなり広い範囲で地震による強い揺れを感じた。この地方ではところによって震度4、あるいはそれ以上の揺れがあった模様。さらに震・・・

（男性アナ）ここで地震の情報。東海地方と北陸地方で強い揺れを感じた。東海地方と北陸地方で地震による強い揺れを感じた。きょう午前5時45分ごろ、東海地方と北陸地方で地震による強い揺れを感じた。この地方ではところにより震度4、あるいはそれ以上の揺れがあった模様。震源地や各地の震度などについては、現在気象庁で調べているが、仮に震源に海底だと津波の恐れがある。海岸地方では念のため津波に警戒を。

各地の震度が入った。震度4、震度5が出ている。京都、彦根で震度5。震度4は四日市、津、岐阜、敦賀、舞鶴、上野、大阪、和歌山、姫路、徳島、高松、岡山、津山、鳥取、福井、震度3が尾鷲、伊良湖、飯田。そのほか震度4が新たに入った。呉、福山、多度津、高知、高松、岡山、境港、鳥取。震度5は豊岡、京都、彦根。関西、中国地方を中心に強い揺れがあった。（地震情報繰り返し）そのほか震度3は萩、山口、広島、松山、室戸岬、松江、尾鷲、潮岬。このほかここには入っていないが、東海、北陸でも揺れを感じた。

けさ5時46分ごろ、東海地方から近畿地方、中国地方、四国地方にかけての広い範囲で地震による強い揺れを感じた。ただいまの地震で揺れが強かった地域のみなさんに伝える。火の点検を。そしてあわてて外に出ないように落ちついた行動を。車を運転している人は十分注意を。けさ5時46分ごろ、東海地方から近畿地方、中国地方、四国地方にかけての広い範囲で地震による強い揺れを感じた。

では、この後はテレビと同時に伝える。

（男性アナ）津波の恐れがある。海岸地域では念のため津波に警戒を。まず火の始末を。地震で道路の一部が壊れたり道路に障害物が落ちているかもしれない。車を運転中のドライバーは十分注意を。またほかの地域の人、地震の詳しい状況がわかるまで、しばらくは揺れの強かった地域へ電話をかけないように。電話が殺到すると防災や緊急通報など重要な電話が通じなくなることがある。

地震情報を伝えている。5時46分ごろ、東海、近畿、中国、四国地方にかけての広い範囲で地震による強い揺れを感じた。京都、彦根、豊岡の震度5をはじめ、震度4以上の強い地震が広い範囲で起こっている。まだ震源についての情報が入らないが、海底だと津波のそれがある。

海岸地域の方は海のそばに近づかないよう。また朝方のこれからいろいろ動き出す時

間で、外へは飛び出さないで。また火の始末はくれぐれも注意。5時46分ごろのこと、今から15分ほど前、四国、中国、近畿、東海、かなり広い範囲で震度5以上の、震度5から4の強い地震が起きた。繰り返えしお伝えする。震源地、各地、まだ情報は詳しいことは入って来ていない。震源地などについての情報は入って来ていないが、震源が海底だと津波の恐れがある。海岸地域では念のため津波に警戒を。あと1分ほどで6時になるところだが、15分ほど前の5時46分ごろ、東海、近畿、中国、四国地方にかけての広い範囲で地震による強い揺れを感じた。震源が海底だと津波の恐れがある。海岸地域では念のため津波に注意を。地震で道路の一部が壊れたり道路に障害物が落ちているかもしれない。車を運転中のドライバーは十分注意を。またほかの地域の方、地震の詳しい状況がわかるまで、しばらくは揺れが強かった地域へ電話をかけないように。電話が殺到すると防災や緊急通報など重要な電話が通じなくなることがある。地震情報をお伝えしている。5時46分ごろのこと。東海、近畿、中国、四国地方にかけての広い範囲で地震による強い揺れを感じた。京都、彦根、豊岡の震度5をはじめ、震度4以上の強い地震が広い範囲で起こっている。まだ震源についての情報が入らないが、海底だと津波の恐れがある。海岸地域では念のため津波に警戒を。海岸地域の方は海のそばに近づかないように。また朝方のこれからいろいろ動き出す時間で、外へは飛び出さないで。また火の始末はくれぐれも注意を。5時46分ごろのこと。今から15分ほど前、四国、中国、近畿、東海、かなり広い範囲で震度5以上の、震度5から4の強い地震が起きた。繰り返えす。震源地、各地、まだ情報は詳しいことは入っていない。震源地などについては情報は入っていないが、震源が海底だと津波の恐れがある。海岸地域では念のため津波に警戒を。あと1分ほどで6時になるところだが、15分ほど前の5時46分ごろ、東海、近畿、中国、四国地方にかけての広い範囲で地震による強い揺れを感じた。震源が海底だと津波の恐れがある。海岸地域では念のため津波に注意を。また、地震で道路の一部が壊れたり道路に障害物が落ちているかもしれない。揺れが強かった地域では電話はさし控えて。電話が殺到すると防災、緊急通報など重要な電話が通じなくなることがある。時刻はまもなく、いまちょうど6時になった。時刻は午前6時になったが、このまま地震情報を続ける。大阪つながりましたか、まだですね。おはよう日本の時間だが、引き続き地震の情報を伝える。今朝5時46分ごろのこと。近畿地方を中心とした広い範囲で地震があった。震度6というところがある。画面の表示には出ていないが、震度6神戸。震度5が京都、彦根、豊岡、震度4は福井、敦賀、上野、津、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、高松、多度津、徳島。画面の表示には出ていないが、震度6神戸という情報が入っている。5時46分ごろ、震度6の神戸をはじめ、かなり強い地震が起きた。……呼びたいと思うが、まだ大阪放送局つなからないようだ。準備できましたか。それでは地震直後の大阪の映像も入っている。大阪どうぞ。

（男性アナ）ごらんいただいているのは、NHK大阪放送局の地震直後の映像。5時45分過ぎのこと。床から突き上げるような感じがあり、大きな揺れを感じた。机の上に置いてあるものなどが若干落ちた。ごらんいただいているのは、5時45分過ぎ、NHK大阪放送局の地震直後の映像。大阪のスタジオから伝える。午前5時45分ごろ、近畿地方に強い……。

(男性アナ) ただいま地震のニュースをテレビと同時にお伝えしている。

(男性アナ) 各地の震度、私の手元に入っているのは、震度6が神戸。それから震度5が彦根、豊岡、震度4が奈良。震源地などは現在気象台で調べている。津波に関する情報も入っている。津波の恐れはないという情報、大阪管区気象台は、和歌山県と大阪湾の沿岸、岡山県と広島県の沿岸、それから京都府から鳥根県の日本海沿岸、四国の瀬戸内海沿岸、四国の太平洋沿岸に津波の恐れはないと午前5時51分に発表した。いましがた、また軽い余震と思われる地震をこのスタジオで感じた。NHK大阪放送局の4階のスタジオです。ごらんいただいている映像は、大阪報道部の映像、地震直後の映像。床から突き上げるような感じがあり、左右に大きく揺れた。報道部の天井に取りつけられているカメラで地震直後の大阪放送局の中の様子を見てもらった。震源地は、現在、大阪管区気象台で調べているが、仮に震源が海底だと津波の恐れがあるので、海岸地域は念のため警戒してほしい。しかし、先ほど大阪管区気象台は、和歌山県と大阪湾の沿岸、それから岡山県の広島県の沿岸、京都府から鳥根県の日本海沿岸、四国の瀬戸内海沿岸、それから四国の太平洋沿岸に津波の恐れはないと発表した。大阪管区気象台の観測によると、震源地は淡路島。震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されている。

(男性アナ) ただいま地震のニュースをテレビと同時に伝えている。

(男性アナ) 地震直後のNHK大阪放送局の報道部の中の様子をごらんいただいている。この報道部は4階にある。午前5時45分過ぎ、いまからおよそ20分ほど前のこと。床から突き上げるような感じがあり、左右に大きく揺れた。大きな音もした。NHK大阪放送局の地震直後の映像をごらんいただいた。以上、大阪からお伝えした。では東京どうぞ。

(男性アナ) いま大阪から伝えたように、大阪管区気象台は、和歌山県と大阪湾の沿岸、そして岡山県と広島県の沿岸、京都府から鳥根県の日本海沿岸、四国の瀬戸内海沿岸、四国の太平洋沿岸では、いずれも津波の心配はないと発表している。震源は淡路島、深さ20キロのところ。地震の規模はマグニチュード7.2という情報。そのほか愛知県と三重県の沿岸、能登半島の輪島から福井県の沿岸にかけても津波の心配はない。5時46分ごろ、近畿地方を中心にかなり広い範囲で震度6、5、4のかなり強い地震が起きたが、この地震による津波はない。津波の心配はない。それでは続いて神戸がつなかったようだ。震度6を記録した神戸を呼びかける。神戸どうぞ。

(住田) アナウンサーの住田です。私は、神戸の灘区の実家にいたが、私の手元の時計で5時47分から8分の間だったが、いきなりガタガタと下から突き上げるような揺れが起き、窓ガラスなどがガタガタと揺れた。およそ40秒以上はこの揺れが続いたと思う。一斉に家族も飛び起きた。いままた、軽い余震があった。それ以後、およそ2分おきぐらいに余震がきている。まわりの状況だが、棚から物が落ちるといった状況はない。ガラスが割れるというような状況はこの近辺では起きていない。窓から外を見ると、地震と同時に停電になった。現在真っ暗で、懐中電灯とか、電池のつくもので、みんな明かりをとっているという状況。そして近所で声を掛け合い、大丈夫ですかというふうに声を掛け合って、いま棚から落ちたものを片づけているという状況。大きな本

棚があって、これはとても1人では動かせるような本棚ではない、幅が両手を広げたぐらいだが、それが30センチほどぐっと前にせり出した、という状況。ただ、それが倒れてしまうというような状況ではなかった。現在、窓から外を見ると、一斉に近所の住宅は停電。ただし、サイレンを鳴らして走る車などはない。火の手が上がっているというようなこともない。比較的落ち着いて声を掛け合って近所の人たちは行動している。ただ、関西でこれほど大きな地震というのは、近所の人話を聞いても、これほど大きな地震というのはなかった、ということで、とうとう関西にこういう大きな地震が起きてしまったと、声を掛け合っている状況。東京はどうか。聞こえていますか。

(男性アナ) はい。たまたま、いま神戸の自宅にいた「おはよう日本」の住田アナウンサーのレポートが届いた。続いて神戸の関記者を呼んでみたいと思う。神戸放送局の関さん。神戸の関さん、つながりませんか。

(関) 関ですが。

(男性アナ) 関さんですか。

(関) 関です。

(男性アナ) いまあなたはどこにいますか。

(関) 私はいま神戸中央区にあるNHK神戸放送局の3階にある放送部、報道フロアに、泊まりで勤務している。

(男性アナ) 地震直後の状況はどうだったのでしょうか。

(関) 突然、横とも縦ともわからないような激しい揺れが来て、正直言って、私も初めて経験したが、揺れている途中電気が消えて、それと同時に、まわりにある書棚とかテレビがある棚とか、ほとんどが倒れた。電話もすべて受話器がはずれる状態で、警報音が鳴り響いて…すごい状態となりました。

(男性アナ) いま各地から被害報告は放送局には届いていませんか。

(関) まだです。混乱しているようで、火災とか、停電とか、そういう情報はない。いま私が3階のフロアから外を見たかぎりでは、外は真っ暗ですので……。

(男性アナ) まだ太陽が昇っていない。

(関) 太陽が昇っていないのもそうだが、この時間でも街灯とか普段は見えるはずなんです。

(男性アナ) 信号も消えていますか。

(関) ちょっとここからは見えない。ただ、ふだんと比べると暗いので、おそらく、かなり停電とか被害が出ているのではないかと思う。神戸は地震があまりないので、そういった意味でも被害が非常に心配される。

(男性アナ) 神戸放送局の関記者と電話で結んで話した。5時46分ごろのこと、近畿地方を中心にかなり広い範囲で強い地震が起きた。各地の震度をもう一度確認。震度6が神戸。震度5が京都、彦根、豊岡。震度4が津、敦賀、福井、上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島。この地震による津波の心配はない。大阪管区气象台ではこの地震による津波の心配はない。先ほど来から神戸の震度6というふうに申し上げておりましたが、画面に表示が出ておりません。その画面の表示が正しいようです。震度5が、震度としては最高のものです。震度6の神戸は、

こちらの手元に届いた情報と画面と表示に食い違いがありましたが、震度6はありません。失礼いたしました。この地震による津波の心配はないと大阪管区気象台は発表しています。震源は淡路島、深さ20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2という発表。それでは再び大阪を呼んでみよう。大阪の宮田さん、大阪どうぞ。

(宮田) それでは大阪からお伝えする。ごらんいただいているのは、NHKの大阪放送局のすぐ南側を走っている阪神高速道路、東大阪線。ごらんいただく範囲内では地震の混乱などを感じることはいない。

(男性アナ) ただいま地震のニュースをテレビと同時に伝えしている。

(男性アナ) 大阪市消防局から入った連絡によると、午前6時ごろ、大阪住之江区内で火災が発生。まだ詳しいことはわかっていない。地震による火災かどうかとも確認されていない。大阪府警察本部によると、いまのところこの地震による被害の連絡は入っていない。ごらんいただいているのは、NHK大阪の屋上に取りつけられているカメラ。すぐ南側を走る阪神高速道路の東大阪線をとらえている。

この映像は地震直後、NHK大阪放送局報道部4階の天井に取りつけられているカメラの映像。

(男性アナ) ただいま地震のニュースをテレビと同時に伝えている。

(男性アナ) 午前5時45分ごろのこと、いまから25分ほど前のこと。床から突き上げるような激しい揺れを感じた。そして左右に激しく揺れた。しかし、机の上などに置かれている物は、不安定な物が若干落ちる程度で、大きく混乱するというようなことはなかった。私は、いま4階のテレビのスタジオにいる。このスタジオの中を見回しても、なにか物が落ちていたというような状況ではない。ほぼ平静さを取り戻している。地震直後にも何度か余震と思われる揺れを感じたけれども、その余震も現在は感ずることが出来ない。また地震の影響が入って来た。この地震の影響で、近畿地方のすべての高速道路は通行止めになっている。地震の影響で阪神高速道路など近畿地方のすべての高速道路は通行止めになっている。先ほどごらんいただいた映像では車は動いていたが、あの上を走っている高速道路の部分では通行止めになっているようだ。地震の影響で阪神高速道路など近畿地方のすべての高速道路は現在通行止めになっている。大阪市消防局に入った連絡によると、午前6時ごろ大阪住之江区内で火災が発生しているが、詳しいことはわかっていない。ごらんいただいているのは、近畿地方を中心とした各地の震度。大阪では震度4を記録している。京都で震度5。そのほか震度3から4の揺れを感じた。以上、大阪のスタジオから伝えた。東京どうぞ。

(男性アナ) 大阪近辺、すべての近畿地方の高速道路は通行止め。これから町が動き出すと思うが、どうぞこれから地震直後の行動などは慎重にしてほしい。また、地震の揺れの大きかった地域への電話などは差し控えるように。電話が殺到すると消防や病院などの緊急連絡ができなくなる。どうぞ電話などは控えて。もう一度各地の震度を繰り返して伝える。今朝5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲で地震があった。震度5は京都、彦根、豊岡。そして震度4が福井、敦賀、津。そのほか伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、四国高知、広島、呉、福山、鳥取でも震度4を記録した。5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲

で震度4から5の強い地震があった。この地震による津波の心配はない。そしていま、先ほど大阪からも情報があったように、大阪の住之江区で火災が発生しているというが、まだ詳しい情報はわかっていない。そして大阪府警察本部によると、いまのところ被害の状況は、そのほか入っていないという。阪神高速道路をはじめ近畿地方の高速道路はすべて通行止めとなっている。情報を確認したうえで出かけてほしい。近畿地方では高速道路はすべて通行止めとなっている。5時46分ごろの地震の震源は淡路島、深さ20キロのところ。地震の規模を示すマグニチュードは7.2。津波の心配はない。5時46分ごろの近畿地方を中心に広い範囲で起きた地震の震度を繰り返す。京都、彦根、豊岡で震度5。福井、敦賀、津、伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、高知、呉、福山、鳥取で震度4を記録。この地震による津波の心配はない。震源地は淡路島、震源の深さは20キロ、また震源の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されている。先ほども神戸市にいる住田アナウンサーからレポートがあったが、地震の揺れは40秒以上続いたという。住田アナウンサーによると、自宅の窓ガラスなどがかなりガタガタと音をたてたという。また両手を広げたぐらいの大きさの本棚が30センチぐらいせり出したという。情報がまた入った。震度6、神戸が確認された。冒頭画面に表示が出ていないが、5時46分ごろの地震で神戸の震度は6と確認された。繰り返す。震度6が神戸、震度5は京都、彦根、豊岡。

（男性アナ）ただいま地震のニュースをテレビと同時に伝えている。

（男性アナ）5時46分ごろ近畿地方を中心に起きた地震は津波の心配はない。震源地は淡路島、震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されているが、津波の心配はない。5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。各地の震度を繰り返す。震度6が神戸。震度5は京都、彦根、豊岡。そのほか震度4はかなり広い範囲にまたがっている、福井、敦賀、津、伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、高知、呉、福山、鳥取、境、奈良。震度3は山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田、諏訪、金沢、潮岬、松江、米子、室戸岬、松山、広島、西郷、輪島、名古屋。震源は淡路島、震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定。5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。京都がつながりましたか。京都、富本アナウンサー、お願いします。

（富本）今朝5時45分ごろ、京都市内で強い地震を感じた。京都が震度5、舞鶴が震度4と観測されている。突き上げるような感じで強い横揺れを感じた。戸棚に入っているガラスのものなどが一部転がり落ちるという状況も見られた。現在のところ、京都市内で火災などの報告はない。京都市内は特に地震の影響は見られない。これは5時45分ごろ、ちょうど地震が発生したときのNHK京都放送局の状況。地震が発生した当時、最初に地響きのような音がして窓かガクガクと音をたてた。そして、すぐにぐらっという強い揺れがあり、次いで建物の全体が大きく揺れ出した。揺れはその後10秒ほど続いたが、机の上にあった物や棚の上の物が落ちるなどの大きな被害はなかった。現在、京都の名神高速道路の入り口は閉鎖され、高速道路は通行止めとなっている。亀岡消防署の話によると、亀岡市吉川町穴川で民家の前の塀が倒れて府道旧372号線をふさい

でいるという。地元の人か通る旧道で大きな影響はないという。そのほかの被害はいまのところ亀岡には入っていない。京都市内、5時45分ごろ強い地震を感じた。以上、京都です。

(男性アナ) 京都放送局の富本アナウンサーに伝えてもらった。きょう午前5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど近畿地方を中心に広い範囲で強い地震が起きた。再び大阪の宮田さん。

(宮田) 大阪から伝える。地震から30分以上たち、大阪放送局では平静さを取り戻している。スタジオの中を見回すけれども、地震の影響などは現在のところない。物が落ちているというような状況ではない。5時46分ごろ大阪では激しい揺れを感じた。その地震直後のNHK大阪放送局の報道部の中の様子。天井に取りつけられたカメラで撮った。激しく上下左右に揺れた。しかし、棚から何か物が落ちるというような状況ではなかった。不安定に置かれていたものが落ちる程度の揺れだった。大阪では震度4を観測した。5時45分過ぎNHK大阪放送局の地震直後の報道部の様子。この地震による影響が手元に入っているので伝える。この地震で、南海電鉄は全車両の安全点検を行うため、南海本線、高野線の全線とも全面運休になっている。南海電鉄は南海本線、高野線が運休になっている。和歌山県内では交通機関に影響が出ており、JR西日本によると、紀勢線の和歌山・印南間と、和歌山線の和歌山・粉河間で現在運転を見合わせている。それから紀勢線の紀伊田辺・新宮間、和歌山線の粉河・五条間は時速45キロの徐行運転をしている。和歌山市内ではいまのところ電気もついており、道路の信号機も作動している。交通に大きな影響は出ていないという。近畿地方のすべでの高速道路が現在通行止めになっている。大阪城東区にある住宅都市整備公団の団地でも左右に激しくゆさぶられるような強い揺れを感じ、建物の壁の一部がはがれ落ちるなどの被害が出た。住民の中にはあわてて飛び起きる人もあったが、強い揺れはまもなくおさまったために住民は平静を保っている。大阪中央区にあるコンビニエンスストアではすかなり激しい揺れのためにびん類が棚から落ちた。そのコンビニエンスストアの映像が入っている。びん類が棚から落ち、従業員がいま後片付けをしているという。しかし大量に落ちているという状況ではない。不安定に置かれていたものが床に落ちているということで、従業員がそれをいま直している。JR東海道・山陽新幹線は、新大阪駅で地震直後にホームの電気が消え、現在停電しているという。詳しい状況はまだわかっていないが、JR西日本では現在新幹線の運転を見合わせている。大阪市内でも停電になっているところがある。市営地下鉄の谷町線、これはNHKの大阪放送局から歩いて5分ほどのところにある駅だが、谷町4丁目の駅では、午前6時20分現在、停電のために真っ暗になっているという。電車が動いているかどうかはまだ確認されていない。大阪市消防局によると、午前6時ごろ、大阪住之江区内で火災が発生している。大津市内でも警察がパトロールカーを出して市内を循環して異常がないか警戒にあたっているという。以上、大阪から伝えた。

(男性アナ) お伝えしているように、午前5時46分ごろ近畿地方を中心に強い地震が起きた。震度の画面をもう一度。震度6が神戸。そのほか京都、彦根、豊岡で震度5を記録。震度4がかなり広い範囲にまたがっている。赤い×印がついている場所が震源

地。淡路島、震源地は淡路島、震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定。この地震による津波の心配はない。東海道・山陽新幹線は、現在、線路の点検のために始発からすべての列車の運行を見合わせている。JRによると、このうち名古屋や静岡始発の上り列車のみはまもなく運転できる見込みだという。この時間は、おはよう日本の時間だが、5時46分ごろに起きた地震の情報を伝えた。ひとまず各地の放送局から伝える。（ローカルニュース）

（男性アナ）近畿地方を中心に広い範囲で起きた地震のニュースをテレビと同時に伝えた。きょう午前5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。各地の震度は次のとおり。震度6が神戸、震度5が京都、彦根、豊岡。震度4が福井、敦賀、津、伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、高知、呉、福山、鳥取、境、奈良。震度3が、山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田、諏訪、金沢、松江、米子、室戸岬、松山、広島、西郷、輪島、名古屋。気象庁の観測によると、震源地は淡路島で、震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されている。この地震による津波の心配はない。（地震情報繰り返し）なお、FM放送はこのあと6時30分から以前発表してあった番組を伝える。時刻は6時半。このあとテレビと同時にまた伝えることにする。

（男性アナ）……神戸、震度5が京都、彦根、豊岡。震度4が福井、敦賀、津、伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、高知、呉、福山、鳥取、境、奈良。震度3が山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田、諏訪、金沢、潮岬、松江、米子、室戸岬、松山、広島、西郷、輪島、名古屋となっている。神戸で震度6を観測するなど、近畿地方を中心に午前5時46分ごろ強い地震があった。ちょうど淡路島のところに赤い×印がついているが、震源地は淡路島。震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定。この地震による津波の心配はない。先ほど情報が入った。近畿地方では、交通機関に影響が始めている。南海電鉄やJRの紀勢線で全面運休や運転の見合せ、また近畿地方ではすべての高速道路が通行止めになっている。名神高速道路では滋賀県の彦根インターチェンジから西が通行止め、中国自動車道は通行止めとなっている。大阪のスタジオが準備できているようだ。伝えてもらおう。宮田アナウンサーお願いします。

（宮田）大阪から伝える。午前5時46分ごろ、近畿地方で強い地震を感じた。震源地は淡路島で震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定。津波の心配はない。先ほど気象台から入った情報によると、紀伊半島から四国にかけての太平洋沿岸では多少の海面の変動があっても、被害に結びつくような津波の心配はないという。怪我人の情報が入っている。滋賀県の彦根市消防本部によると、彦根市堀町でお年寄りの女性が揺れに驚いて外に出たところ転んだ、このため頭などを打って病院に運ばれたという。交通関係は、大阪の東海道・山陽新幹線、新大阪駅では、地震直後、ホームの電気が消え、現在も停電している。まだ詳しい状況は入ってきていないが、JR西日本では現在、新幹線の運転を見合わせている。また地震の影響で、阪神高速道路など近畿地方のすべての高速道路で通行止めになっている。これは現在の新大阪駅の様

子。この映像では停電は回復しているようにも思うが…、（男性アナ）ただいまラジオ第1放送とFM放送は地震のニュースをテレビと同時に伝えている。

（男性アナ）この地震で和歌山県内では交通機関に影響が出ている。JR西日本によると、紀勢線の和歌山－印南間、山線の和歌山－粉河間で現在運転を見合わせている。また紀勢線の紀伊田辺－新宮間、和歌山線の粉河－五条間は時速45キロの徐行運転をしている。それから去年の九月に開港した関西国際空港の情報、この地震で関西国際空港でも強い揺れを感じた。地震が発生した当時、上空に到着した旅客機1機が一時待機し、そのあと着陸したという。上空で旅客機1機が待機し、地震がおさまったあと着陸したという。その後、滑走路などに離着陸には支障がないとわかり、現在は通常どおり運航が行われている。高速道路の状況は、滋賀県的高速道路交通警察隊によると、滋賀県内の名神高速道路のすべてのインターチェンジを現在閉鎖している。インターチェンジを閉鎖して、事故や壊れた場所がないかどうかパトロールカーを出して現在調べているという。したがって、高速道路に入ることはできない。日本道路公団和歌山管理事務所によると、阪和自動車道、これは大阪と和歌山を結ぶ高速道路だが、阪和自動車道と近畿自動車道はともに全面的に通行止め。続いて京都のスタジオから。京都どうぞ。

（男性アナ）京都市内でも震度5の強い揺れを感じた。地震発生当時の様子を映したビデオをごらんいただく。この映像は、JR京都駅前ホテルにたまたま泊まっていたNHK職員が家庭用ビデオで撮影したもの。その話によると、京都タワーのホテルの7階では横に強い揺れがあり、ミシミシと建物がきしむような音がしたという。ホテルの周辺は上から落ちてきたと思われるガラスがごらんのように散乱しており、ホテルの人がその破片を拾い集めていたという。これは京都駅前の地震発生当時の様子。

（男性アナ）ただいまラジオ第1放送とFM放送では地震のニュースをテレビと同時に伝えている。

（男性アナ）京都市内は、現在のところ、特に大きな被害は出ているように見うけられない。NTT京都支店によると、大勢の人が現在、電話を使っているために電話はかかりにくくなっている状態だという。いま入った情報。京都市内のお寺や神社にも被害が出ているという。このうち京都市右京区の広隆寺では聖徳太子像など3体の仏像が倒れ一部が壊れたというが、詳しいことはまだわかっていない。京都市内、特に大きな地震の影響はいまのところ見られない。火災などの発生は現在のところないという状況。名神高速道路など京都関係の入口は現在閉鎖されている。以上京都です。

（男性アナ）ただいまラジオ第1放送とFM放送は地震のニュースをテレビと同時に伝えている。

（男性アナ）大津市内では、地震のために安全装置が働き、現在、市内全域でガスが止まっているという。大津市内では安全装置が働いて…、

（男性アナ）ただいま大阪放送局から伝えている。

（男性アナ）市内全域でガスが止まっているという。安全が確認されしだいガスの供給ができるというが、十分注意してほしい。大津市内では安全装置が働いて市内全域で現在ガスが止まっているという。南海電鉄は全車両の安全点検を行うため、現在、南海本線と南海高野線の全線とも全面運休になっている。滋賀県の彦根市と近江八幡市にか

けて走っている近江鉄道も現在走っているすべての列車に徐行運転を指示したというのが、いまのところ異常はないという情報。奈良放送局の準備ができた。奈良放送局から伝える。

(男性アナ) 奈良市では、午前6時前に就寝中激しい揺れで、私、就寝中、激しい揺れで目を覚ました。その後、余震が3回ぐらい感じた。現在入っている情報を伝える。関西電力奈良営業所によると、この地震で現在天理市内で3世帯ほどが停電しているというが、広範囲にわたる停電はないという。大阪ガス奈良支社によると、この地震によるガス漏れなどは現在ないという。震度4を記録した奈良市では24歳の男性が柵から落ちてきた皿が頭に当たって怪我をし、救急車で病院に運ばれ手当てをうけている。奈良県内のJRと近鉄の全線は現在運転を見合わせているという。以上。

(男性アナ) 奈良から伝えた。その後、断片的に大阪放送局に情報が入ってきている。大阪市内のコンビニエンスストアでは、かなり激しい揺れのためにびん類が柵から落ちて従業員がいま後片づけに追われているという情報。和歌山市内では13階建てのビルに縦に亀裂が入ってタイルなどが落ちるといふ被害が出ている。電気関係では、関西電力大津支社に入ったところによると、大津市下坂本地区で停電があった模様。現在、関西電力でパトロール車を出して調査している。関西電力の奈良営業所によると、地震で天理市内で停電しているところがあるが、広範囲にわたる停電にはなっていないという。私の隣りに佐藤アナウンサーが、この地震の直後に駆けつけてくれた。市内の様子などを見て、このNHK大阪放送局に出局した。大阪市内の様子を伝えてもらう。

(佐藤) 私の自宅は豊中市にあるが、マイカーで出局した。町は全体として大きな混乱はない。町の中は一部停電している箇所があり、そこは信号機が止まっている。警察官が出て交通規制をしているので大きな混乱はない。古いブロック塀や、それからモルタルの壁が一部落ちて倒れ、道路に散乱している。そこは道路のほうにいろいろな破片が散乱しているので、車が大きく迂回して通行している。古い家屋の瓦の一部が落ちていところもある。放置自転車がほとんど倒れている。ビルなどは大きな混乱はない。町全体としては非常に落ち着いているが、やはり大きな地震だったので、ほとんどの方が目を覚まして、パジャマ姿の上に大きなコートを羽織って外に出ている。一部新御堂筋も通ってきたが、淀川の大橋については、十三から梅田へ通じる176号線の大橋は規制しているが、新御堂筋の道路は通行が可能。全体として町は平静を保っている。

(男性アナ) いまスタジオで少し揺れを感じた。怪我人の情報がまた入ってきた。震源に近い兵庫県淡路島の洲本市にある兵庫県立淡路病院では、現在、地震によると見られる怪我入3人が手当てをうけている。救急車10台ほどが出動して怪我人の搬送に向かっているという。彦根市内でも怪我人が出ているという情報。滋賀県の彦根市でお年寄りの女性が揺れに驚いて外に出たところ、転倒して頭などを打って病院に運ばれたという。以上、大阪のスタジオから伝えた。

(男性アナ) 大阪の日の出は7時3分。まだ外は暗い。外に出ると思わぬものか落ちている可能性もある、行動はくれぐれも慎重に。

5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど近畿地方を中心に広い範囲で地震が起きた。この地震で、広島県内では呉、福山が震度4。広島が震度3だった。ここで広島

新井アナウンサーを呼んでみよう。

（新井）広島スタジオ。現在、広島局に入っている中国地方関係の情報。震度4の岡山市内では、午前5時46分ごろ、ガタガタという音をたてて大きな揺れを感じた。この地震の直後、岡山市京町ではブロック塀にひびが入ったりブロックがずれるなどの被害が出た。岡山市浜のコンビニエンスストアの店員の話によると、長さ1メートルぐらいの化粧品コーナーのシャンプー、ムースなどの化粧品30個ほどが床に散らばったという。岡山市消防局によると、午前6時現在、この地震で岡山市内では水道管が何か所かで破裂したという連絡が入っている。ごらんの映像は広島市内のコンビニエンスストアの映像だが、このコンビニエンスストアでは被害はいまのところ出ていないという。現在ごらんいただいているのは広島市内のコンビニエンスストアの映像。広島県福山市水道局に入った連絡によると、この地震のため福山市東深津町のアパートで水道管が壊れて水が吹き出しているという。道路関係、日本道路公団は、地震による被害が出ていないか点検するため、山陽自動車道の岡山県内の倉敷インターチェンジと備前インターチェンジの間、それに米子自動車道の全線で全面通行止めにして調べている。列車は、JR西日本広島支社によると、山陽線は広島県の福山と糸崎の間の上下線で列車を止めて線路の点検を行っている。ごらんの映像は広島駅の映像。JR西日本米子支社によると、この地震の影響により、JR山陰線は鳥取県の東山公園と赤崎の間で現在列車が15キロの徐行運転をしている。島根県内の列車は現在平常運転している。広島県警察本部や広島市消防局には、いまのところ地震による被害の情報は入っていない。山口県警察本部によると、この地震による怪我人や火災などの被害の情報は入っていない。以上、広島スタジオから伝えた。

（男性アナ）広島も夜が明けるまであと30分ほどかかる。外に出るとガラスの破片などが落ちている可能性がある。くれぐれも注意を。では、震度6を記録した神戸放送局の入江記者と電話がつながっている。入江さん。

（入江）私は神戸の中央区駕籠池通というところにいる。神戸市を見おろす高台にあたる。窓から瀬戸内も合せて神戸のほぼ全景が見渡せるが、火の手がおおよそ7か所前後上がっているのがよく見える。神戸市内と大阪方面にかけて、大阪方面の方向にだいたい4か所ぐらい、そして神戸の三宮から東側のところに3か所ぐらい、火の手が上がっているのがはっきり見える。そのうち比較的近いところは神戸中央区にある神戸労災病院からまっすぐ南におりた平野部だが、オレンジ色の炎が赤々と燃えていて、そのまわりに黒々とした煙が立ち込めているのがはっきりとわかる。煙はまっすぐ上にあがっており、現在、風はそれほどないと思われる。私のいまいるのは8階建てのマンション、4階の部屋から電話しているが、かなり強い揺れを感じて、食器棚などを見たら全部落ちた。壁も一部ひび割れて壁紙がはがれてしまったところも発見した。時計が落ちて止まっているのを見たら、針は6時前あたりをさしていた。

（男性アナ）とまったままですか。

（入江）とまったままです。

（男性アナ）停電、電気はどうでしょうか。

（入江）いまのところ停電はしており、復旧していない。

(男性アナ) してない。

(入江) はい。マンションの各部屋から住民の方が、先ほどまで不安そうに出てきて、電話も、どうも電気を使った電話のほうは使えない状態の家が多いようで、私どもの家のほうにも電話を貸してくれないかと、緊急の用ですというご婦入の方もいた。

(男性アナ) はい、わかりました。いまもお伝えしたが、電話がかかりにくくなっている。緊急の連絡用などに必要ですので電話の利用は見合わせてほしい。では続いては名古屋のサスカアナウンサーです。サスカさんどうぞ。

(サスカ) NHK名古屋放送局放送部でも横揺れが1分近く続いた。揺れは徐々に大きくなったが、物が落ちたり倒れたりすることはなかった。それでは東海、北陸の情報を伝える。この映像はNHK福井放送局屋上カメラの地震時の映像。午前5時46分ごろ地震があり、福井県内でも福井と敦賀でそれぞれ震度4を記録した。この映像はNHK福井放送局の屋上カメラがとらえた地震時の福井市内の様子。福井放送局でも、下を突き上げるような揺れが1分ほど続き、放送センターの中にある机の上の缶や鉛筆などが倒れた。また、関西電力などによると、福井県レイナン地区にある15基の原子力発電所のほとんどは運転を続けながら現在、原子炉内など点検を続けているが、いまのところ地震による影響は確認していないという。また、この地震のため北陸自動車道は福井県の丸岡インターチェンジから石川県の加賀インターチェンジまでの間が地震の影響を調べるため点検作業をしている。午前5時55分から通行止めになっています。福井県警察本部によると、現在、2台のパトカーを出動させ点検にあたっている。福井県内の私鉄、京福電鉄、福井鉄道ともに始発からダイヤどおりに運転している。しかし、地震の被害を確認するため、2つの私鉄ともに速度を落として運転をしている。この映像はNHK福井放送局屋上カメラの地震が起きたときの映像。それからNHK津放送局の屋上カメラがとらえた映像を現在ごらんいただいている。NHK津放送局の屋上カメラの映像をごらんいただいている。三重県内の情報、上野市消防本部に入った連絡によると、伊賀町東川で自宅で就寝中の男性が倒れた。スピーカーで頭を打って怪我をしている。

(男性アナ) サスカさんありかとうございました。繰り返します。(地震情報・各地の震度・交通機関・高速道路情報繰り返し) どうぞ、このあとだんだん日か昇っていくに従って被害の状況もわかってくると思う、ご注意ください。この時間は予定を変更し地震情報をお伝えした。

(男性アナ) 時刻は6時50分になった。地震のニュースを続ける。きょう午前5時46分ごろ神戸で震度6を観測するなど近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。各地の震度は次のとおり。震度6が神戸。震度5が京都、彦根、豊岡。震度4が福井、敦賀、津、伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、高知、呉、福山、鳥取、境、奈良。震度3が山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田、諏訪、金沢、潮岬、松江、米子、室戸岬、松山、広島、西郷、輪島、名古屋、大分。震度2が大分、佐賀、三島、浜松、高山、伏木、河口湖、宇和島、宿毛、松本、御前崎、静岡、甲府、長野、横浜、佐賀、熊本、人吉、日田。震度1が下関、福岡、熊谷、東京、水戸、軽井沢、網代、浜田、新潟、足摺、宇都宮、前橋、小名浜、鹿児島、

平戸、延岡。この地震による津波の心配はない。気象庁の観測によると、震源地は淡路島で、震源の深さは20キロ、地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されている。では、神戸放送局の福沢アナウンサーに電話がつながっているの、聞くことにする。福沢さん。（福沢）京都です。京都の地震直後の状況をお伝えする。私は地震発生当時、京都市北区の自宅にいた。4階建てのマンションがミシミシという感じで大きく横に揺れた。建物全体が揺れた感じ。その後、揺れは10秒ほど続き、机の上のもの、あるいは本棚の上のものが落ちるといったことはなかった。そしてこの京都放送局に出てくるまでに、京都市の北部、北区、あるいは上京区、このあたりを通ってきたが、街灯や住宅の電灯もついており、このエリアで停電があったということはない。そして京都には神社仏閣が多いが、その中の一つの情報、京都市の右京区の広隆寺では聖徳太子像など3体の仏像が倒れて一部が壊れたというが、詳しいことはまだわかっていない。宮内庁京都事務所によると、京都御所など皇室関係の施設にはこれまでのところ、建物などに被害が出ていないという。それから消防の出動なども相次いでいるが、頭や手足などに割れたガラスやたんすなどで怪我をしたという緊急の出動があるというが、いまのところ亡くなった方、あるいは大怪我をした方などはないという。京都ではそのあと小さな余震等も、私の感じるところでは1回、あるいは2回身体に感じる地震があったが、その後は大きな揺れは感じていない。各交通機関も一応ふだんどおりのダイヤで運行している。いまのところ京都ではこんな状況。

（男性アナ）神戸で火事の情報があつたけれども、京都のほうは現在のところ火事という心配、そういう情報は入っていませんか。

（福沢）火事についての情報は、まだ各地からの電話が錯綜しており、いまはつかみにくい。京都市内では伏見区と西京区のマンションなどで2件火災が発生しているという情報。これは火災が発生したのか、あるいは出動の要請ということで、なにか火災の警報が鳴っているとの出動したのか、まだ確認はとれていない。一応、消防が出動しているという情報はいくつか入っている。しかし、これが火災なのかどうか、はっきり確認はとれていない。

（男性アナ）震度5の京都放送局、福沢アナウンサーに電話で話してもらった。東京からの情報だが、東海道・山陽新幹線は現在、京都と岡山の間で停電のため列車が全面的にストップしている。JRでは、名古屋、浜松、三島始発の上り列車のみとりあえず運転を始めているが、今後、後続の列車も運転できるかどうかはまだわからないという。東海道・山陽新幹線は、現在、京都と岡山の間で停電のため列車が全面的にストップしている。

時刻6時55分になるところです。

（女性アナ）6時55分になった。（気象情報=略）6時58分になった。交通関係の情報。東海道・山陽新幹線は現在、京都と岡山の間で停電のため列車が全面的にストップしている。JRでは名古屋、浜松、三島始発の上りの列車のみとりあえず運転を始めているが、今後、後続の列車も運転できるかどうかはまだわからないという。東海道・山陽新幹線は現在、京都と岡山の間で停電のため列車が全面的にストップ。

（道路交通情報）地震に伴う高速道路の通行止め箇所からお伝えする。地震のため通

行止めが続いているのは、名神高速道路の滋賀県・彦根インターから西宮を通り、中国自動車道、兵庫県・佐用インターまで上下線が通行止め。このほか山陽自動車道、近畿自動車道、西名阪自動車道、阪和自動車道、舞鶴自動車道、米子自動車道、それに四国の高松自動車道、松山自動車道、そして北陸自動車道の丸岡と小松の間などが通行止め。

（女性アナ）まもなく7時になります。

（男性アナ）1月17日、火曜日、7時のNHKニュースです。今朝5時46分ごろ近畿地方を中心に強い地震があった。この時間はこのニュースを中心にお伝えする。きょう午前5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。各地の震度は次のとおり。震度6が神戸。震度5が京都、彦根、豊岡。震度4が福井、敦賀、津、伊賀上野、四日市、岐阜、舞鶴、姫路、大阪、和歌山、津山、岡山、多度津、高松、徳島、高知、呉、福山、鳥取、境、奈良、それから兵庫県の美方町と加西市、和歌山県の高野町と南部川村、徳島県の相生町、香川県の坂出市、滋賀県の高賀町。震度3が山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田、諏訪、金沢、潮岬、松江、米子、室戸岬、松山、広島、西郷、輪島、名古屋。震度2が大分、佐賀、三島、浜松、高山、伏木、河口湖、宇和島、宿毛、松本、御前崎、静岡、甲府、長野、横浜、熊本、日田、宮崎、都城、軽井沢、高田、下関、人吉。震度1が福岡、熊谷、東京、水戸、網代、浜田、新潟、足摺、宇都宮、前橋、小名浜、鹿児島、平戸、延岡、館山、千葉、秩父、阿蘇山。この地震による津波の心配はない。気象庁の観測によると、震源地は淡路島で、震源の深さは20キロ、また地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されている。神戸市中央区にあるNHK神戸放送局では、縦横の激しい揺れがしばらく続き、停電した。3階にある放送部のフロアでは書棚やテレビ棚などがほとんど倒れた。停電はまもなく復旧したが、放送局の周辺はまだ停電している模様。またNHK神戸放送局にくる途中、町の様子を見てきた職員の話によると、神戸の六甲山の麓の住宅街にいくつもの火の手が見られたという。また信号も作動しておらず、道路は各所で地割れが起きている。神戸市消防局によると、神戸市の東灘区や灘区、それに中央区など、市内のいたるところでガス漏れが発生、数か所で火災が起きているという。次は交通の情報、東海道・山陽新幹線は、現在、京都と岡山の間で停電のため列車が全面的にストップしている。JRでは、名古屋、浜松、三島始発の上り列車のみとあえず運転を始めているが、今後、後続の列車も運転できるかどうかはまだわからないという。この地震で、関西国際空港も強い揺れを感じ、発生当時、上空で到着した旅客機1機が一時待機して着陸した。その後、滑走路など離着陸には支障がないことがわかり、現在通常どおり運航が行われている。大阪市交通局では、地震の直後から地下鉄のすべての路線を止め、現在線路の点検作業を行っている。大阪市交通局によると、地震直後に一部の駅のホームで停電したが、ホームの停電はしだいに復旧してきているという。しかし、線路内はいまも停電が続いている。兵庫県淡路島の洲本市にある兵庫県立淡路病院では、現在、地震によるとみられる怪我人3人が手当てをうけているほか、救急車が10台ほど出動して怪我人の搬送に向かっているという。さらに警察と消防に入った連絡によると、兵庫県淡路島の北淡町野島地区と一宮町郡家地区では、住宅が合わせて10数軒倒壊して、中に人が生き埋めになっている模様だが、詳しい状況はまだわかっていない。

ひとまず地震のニュースを終わり次のニュース。(ほかのニュース)

きょう午前5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど近畿地方を中心に広い範囲で地震があった。各地で被害が出ている模様だが、詳しいことはまだわかっていない。きょう午前5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。7時10分になります。(ローカルニュース) (天気予報)

(男性アナ) 時刻は7時15分を過ぎた。

NHK大阪のニュースセンターから地震に関する情報をお伝えする。きょう午前5時46分ごろ近畿地方を中心に地震があった。各地の震度は次のとおり。震度6が神戸。震度5が京都、彦根、豊岡。震度4が大阪、舞鶴、姫路、和歌山、福井、敦賀、津、徳島、高松、奈良。震度3が潮岬、尾鷲などとなっている。震源地は淡路島で、震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定されている。大阪管区气象台によると、この地震による津波の心配はない。紀伊半島から四国にかけての太平洋沿岸、それに大阪湾周辺では多少海面の変動があっても、被害に結びつくような津波の心配はない。震源地は淡路島で、震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定されている。大阪管区气象台によると、近畿地方で震度6を記録したのは、明治42年の8月14日に滋賀県と岐阜県の県境付近で起きたマグニチュード6.8の地震によって、彦根で震度6を記録して以来、86年ぶりのこと。この地震で近畿地方では淡路島などで住宅が壊れ怪我人が出ている模様。この地震で近畿地方では淡路島などで住宅が壊れ怪我人が出ている模様。またJRや私鉄、地下鉄が運転を見合せ、高速道路も通行止めとなるなど、交通機関に大きな影響が出ている。警察と消防に入った連絡では、兵庫県淡路島の北淡町野島地区と一宮町郡家地区で住宅が合わせて数棟倒壊した。警察や付近の住民が、人が下敷きになっていないかどうかと捜索を始めているが、詳しい状況はまだわかっていない。NHK大阪のニュースセンターから地震に関する情報をお伝えしている。神戸市消防局によると、神戸市の東灘区や灘区、それに中央区など、市内のいたるところでガスが漏れて、旅行代理店の入った5階建ての生協の建物が倒壊したのをはじめ、周辺の本造住宅が多数倒壊しており、建物の中に人が閉じ込められている模様。また市内各地で道路がひび割れを起こしているなど、交通が混乱している。神戸電鉄広報課の松本アキラさん(40歳)によると、神戸電鉄は午前5時47分から運転を見合わせているという。また市民からの連絡によると、兵庫県西宮市の阪神高速道路の高架橋が落下して、走っていた車が下敷きになっているという情報もある。市民からの連絡によると、兵庫県西宮市の阪神高速道路の高架橋が落下して、走っていた車が下敷きになっているという情報もある。近畿地方の高速道路は点検のためすべて通行止めになっている。一方、交通機関では、JRの東海道・山陽新幹線が運転を見合わせているほか、在来線も多く区間で運転を見合わせている。また阪急電鉄や南海電鉄などの私鉄、それに大阪市営の地下鉄でも運転を見合せ点検を行っている。堅田警察署によると、琵琶湖の西側を走る有料道路の湖西道路は点検の結果、異常が認められなかったことから、午前6時50分から車が走れるようになっている。NHK大阪のニュースセンターから地震に関する情報をお伝えしている。今朝の地震の影響で関西国際空港の連絡橋の上で南海電車が足止めをくっている。今朝の地震の影響で関西

際空港の連絡橋の上で南海電車が足止めになっている。今朝の地震の影響で、関西国際空港の空港連絡橋の上で空港を午前5時45分発難波行きの南海電鉄の急行電車が乗客4人を乗せたまま待機している。止まったままになっている。NHK職員から入った連絡によると、神戸市須磨区の東須磨では7階建てのマンションが斜めに倒れ、NHK神戸放送局にこれまでに市民などから寄せられた情報では、神戸西部の垂水区で高層住宅が倒れて多数の怪我人が出ている模様。住宅数軒から火の手が上がっているという。

一方、大津市企業局によると、きょう午前6時過ぎ、大津市島の関で、地震で倒れたものによって、外にある散水用の水道の蛇口がはずれたという連絡があり、市の職員が復旧に向かっている。また、神戸市中央区加納町の交差点では、道路に亀裂が入りおよそ20センチほどの段差ができていているという。震源に近い兵庫県の淡路島にある淡路広域消防本部によると、午前6時半現在で淡路では家の倒壊が20軒あまり、火災も数件起きているという。警察と消防に入った連絡によると、兵庫県淡路島の北淡町野島地区と一宮地区郡家地区では住宅が合わせて10数軒倒壊して、中に人が生き埋めになっている模様。詳しい状況はまだわかっていない。NHK神戸放送局にこれまでに市民などから寄せられた情報によると、神戸市西部の垂水区では高層の住宅が倒れて多数の怪我人が出ている模様。神戸市の実家にいたNHK広島放送局の入江アナウンサーによると、神戸の高台のマンションから見ると、市内では7か所ぐらいから火の手が上がっているという。NHK職員から入った連絡では、神戸市須磨区の東須磨では、7階建てのマンションが斜めに倒れ、住宅数軒から火の手が上がっているという。神戸市中央区にあるNHK神戸放送局では縦横の激しい揺れがしばらく続いて停電した。3階にある放送部のフロアでは書棚やテレビ棚などがほとんど倒れた。局内の停電はまもなく復旧したが、放送局の周辺はまだ停電している模様。兵庫県豊岡市内では、ゆさゆさという大きな揺れを感じたが、豊岡市内にあるNHK豊岡通信部では棚から物が落ちるといった被害は出ていない。いまのところ豊岡警察署や消防署に被害の報告は豊岡では入っていないという。一方、大阪のJR東海道・山陽新幹線新大阪駅では、地震直後にホームの電気が消えて、現在も停電しているという。詳しい状況はまだわかっていないが、JR西日本では、現在、新幹線の運転を見合わせている。NHK大阪のニュースセンターから地震情報をお伝えしている。この地震の影響で、阪神高速道路など近畿地方のすべての高速道路で通行止めになっている。大阪のJR東海道・山陽新幹線新大阪駅では、地震直後にホームの電気が消え、現在も停電している。今朝の地震の影響で、関西国際空港では、地震発生の直後、午前6時に着陸予定だった日本アジア航空のジャカルタ発のEG222便が、222便が4分間空港上空で着陸を見合わせ、空中待機した。航空機はその後6時13分に着陸した。この地震による運行への影響はなく平常どおりとなっている。関西国際空港はいまのところ平常どおりとなっている。建設省奈良国道事務所が管轄する国道では、現在、被害などの情報は入っていないものの、警戒態勢に入りパトロールを続けているという。NHK大阪のニュースセンターから地震に関する情報をお伝えしている。大阪市営地下鉄の谷町線の谷町4丁目の駅では、午前6時20分現在、停電のため真っ暗になっている。いま兵庫県の情報が入った。震源地の淡路島にある兵庫県立淡路病院では5人が、国立明石病院岩屋分院では6人が、それぞれ怪我をして手当てをう

けている。淡路島にある兵庫県立淡路病院では5人が、国立明石病院岩屋分院では6人がそれぞれ怪我をして手当てをうけている。怪我人の多くは地震で上から落ちてきたもので頭を打ったということ。このほかにも救急車が合わせて10数台出動して怪我人の搬送にあたっている。また淡路島にある各警察署に入った連絡によると、淡路島の各地で道路に亀裂が入ったり落石が起きたりしている。このうち南淡町灘地区の県道洲本南淡線では道路脇の壁から落石防護用のネットを破って落石が起き道路をふさいだために不通になっている。南淡町灘地区の県道洲本南淡線は現在不通になっている。また緑町広田地区でも国道28号線に亀裂が入ったため現在片側通行になっている。長崎県佐世保市の浜田トシミツさんからNHK長崎放送局に入った話によると、兵庫県の淡路島を震源とした地震で、兵庫県西宮市宮西町の須田さんが浜田マサトシさんに連絡してきた話によると、怪我人が出ているというが、警察や消防に電話がかからず救助に手がつけられない状態だという。それでは神戸放送局から関記者がお伝えする。神戸放送局の関記者…。ただいま神戸が出ません。震度6を記録した神戸からお伝えする。NHK神戸放送局の関記者、出ますか。ではNHK大阪のニュースセンターから地震情報を続ける。きょう午前5時46分ごろ近畿地方を中心に地震があった。各地の震度は次のとおり。震度6が神戸。震度5が京都、彦根、豊岡。震度5が大阪、舞鶴、姫路、和歌山、福井、敦賀、津、徳島、高松、奈良。震度3が潮岬、尾鷲などとなっている。震源地は淡路島で、震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定されている。大阪管区气象台によると、この地震による津波の心配はない。紀伊半島から四国にかけての太平洋沿岸、それに大阪湾周辺では、多少の海面の変動があっても、被害に結びつくような津波の心配はない。震源地は淡路島で、震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定されている。大阪管区气象台によると、近畿地方で震度6を記録したのは、明治42年8月14日に滋賀県と岐阜県の県境付近で起きたマグニチュード6.8の地震によって彦根で震度6を記録して以来、86年ぶりのこと。この地震で、阪神高速道路、第2神明道路、中国自動車道路などの自動車専用道路は、道路が陥没したり、橋桁がひび割れたりするなどして、通行止めになっており、現在パトロールなどをして被害情報について確認を急いでいる。関西の鉄道関係では、午前7時現在、JR東海道・山陽新幹線が名古屋・福山間で運転を見合わせているほか、JRの在来線も東海道線などかなり広い範囲で運転を中止し、線路の点検を行っている。いまのところ運転再開のメドはたっていないという。それではNHK神戸放送局から伝えてもらう。関記者、関さん。NHK神戸の関さん。神戸が出ません。NHK大阪のニュースセンターから情報を続ける。いまのところ近鉄は午前7時前から最徐行で運転を再開した。一方、京阪は現在は止まっているが、まもなく運転を再開するという。交通関係の情報。私鉄ですが、近鉄は午前7時前から最徐行で運転を再開した。一方、京阪は現在は止まっているが、まもなく運転を再開するという。このほか大阪市営の地下鉄は全線が止まったままで運転再開のめどがたっており、このままの状態が続けば通勤の足にも大きな影響が出そう。NHK大阪のニュースセンターから地震情報をお伝えしている。この地震で、近畿地方では淡路島などで住宅が壊れ怪我人が出ている模様。またJRや私鉄、地下鉄が運転を見合わせ、高速道路も通行止めとなるなど、交通機関に大き

な影響が出ている。警察と消防に入った連絡では、兵庫県淡路島の北淡町野島地区と一宮町郡家地区で住宅が合わせて数棟倒壊した。警察や付近の住民が、人が下敷きになっていないかどうか捜索をはじめているが、詳しい状況はまだわかっていない。また兵庫県淡路島の洲本市にある兵庫県立淡路病院では、現在、地震によるとみられる怪我人3人が手当てをうけているほか、救急車が10台ほど出動して怪我人の搬送に向かっているという。またNHK神戸放送局にこれまでにいった情報によると、神戸西部の垂水区ではかなり高い住宅が倒れ多数の怪我人が出ているという情報もある。さらに奈良市、和歌山市、彦根市でも、お年寄りが転倒したりして合わせて3人が怪我をしている。また大阪市消防局によると、大阪住吉区内と住之江区内で火災が起きているという。一方、大津赤十字病院によると、大津市柳川の57歳の女性が、棚の上のテレビが落ちてきて頭に軽い怪我をし、また大津市皇子が丘の70歳の女性が筆筒が倒れてきて腰に軽い怪我をしたということで、現在手当てをうけている。きょう午前5時46分ごろ近畿地方を中心に地震があった。NHK大阪のニュースセンターから地震情報をお伝えしている。（各地の震度繰り返し）それではNHK神戸放送局から伝えてもらう。関記者、NHK神戸関さん。

（マシモ）NHK神戸放送局にいるアナウンサーのマシモです。

（男性アナ）マシモさん、伝えてください。

（マシモ）私は地震が起きたとき自宅で寝ていた。自宅のマンションは5階に住んでいるが、非常に強い横の揺れを感じた。家にある筆筒とか茶筆筒、そういったものがすべて倒れた。また、蛍光灯、天井につける蛍光灯も、2つある蛍光灯のうちの1つが落ちた。そこからほとんど歩いてこの神戸放送局までおおよそ3キロほどきたわけだが、その途中、信号はすべて停電によってついていない状態。車で移動されている方もかなりたくさん見られたけれども、交差点などでは混乱が起きている。また、住宅が、木造住宅を中心に倒壊、壊れている様子がわかった。着の身、着のままで、寝巻のまま外に飛び出してきた人たちが、寒そうに倒壊した住宅を心配そうにながめている姿なども見られた。またコンビニエンスストアなどで、懐中電灯とか、パンなどを買い求める人たちの姿も数多くある。もっともこうした店内もほとんど陳列されていた商品は下に落ちており、かなり混乱が続いている。現在、神戸放送局に入っている情報をまとめてお伝えする。阪神高速道路、第2神明道路、中国自動車道路などの自動車専用道路は、道路が陥没したり、橋桁がひび割れるなどして通行止めになっており、現在パトロールなどをして被害情報について確認を急いでいる。神戸電鉄広報課の松本アキラさん（40歳）によると、神戸電鉄は午前5時47分から運転を見合わせているという。またきょう未明に起きた大きな揺れを伴う地震で、神戸市東灘区では、旅行代理店が入った5階建ての生協の建物が倒壊したのをはじめ、周辺の木造住宅が多数倒壊、建物の中に人が閉じ込められている模様。また市内各地で道路がひび割れるなどして交通が混乱している。神戸市消防局によると、神戸市の東灘区や灘区、それに中央区など、市内のいたるところでガス漏れが発生し、午前6時半現在で、淡路では家の倒壊が20軒あまり、火災も数件起きているという。また、この地震で神戸市では多くの地域が停電して交通信号が消えて車がのろのろ運転を続けている。また市民からの連絡によると、兵庫県西宮市

の阪神高速道路の高架橋が落下して走っていた車が下敷きになっている模様。兵庫県警察本部に入った連絡によると、阪神高速の西宮大橋では橋桁の一つが壊れているという。橋桁の一つが壊れているという。阪神高速の西宮大橋では橋桁の一つが壊れているという。以上、神戸放送局から、神戸放送局に現在入っている情報をまとめてお伝えした。

（男性アナ）NHK神戸からマシモアナウンサーに伝えてもらった。それではNHK大阪のニュースセンターから地震情報を続ける。兵庫県以外の近畿地方の各府県の状況についてお伝えする。大阪市消防局によると、午前7時15分現在、大阪市内では生野区、住吉区などで10件の火事が起きている。またガス漏れの報告が11件入っている。堺の消防本部に入った連絡では、高石市東羽衣5丁目で火災が発生しているほか、堺市草部のマンザキ団地ではガス漏れと見られるガスの匂いがしているという住民からの通報が寄せられている。大阪府警察本部によると、大阪府内ではいまのところこの地震による被害の連絡は入っていないが、引き続いてパトロールをして被害状況の調査にあたっている。この地震の影響で大阪市内の淀川にかかる十三大橋で幅20センチ程度のひび割れが入り、国道176号線は現場で現在通行止めになっている。大阪中央区にあるコンコビニエンスストアでは、かなり激しい揺れのため、びん類が棚から落ちて従業員が後片づけに追われている。

また和歌山市内の7階建てのマンションではビルが揺れるような強い揺れが続いたあと、エレベーターが一時ストップした。大阪市消防局によると、午前6時ごろ、大阪住之江区内で火災が発生しているが、詳しい状況はわかっていない。大阪守口市付近の国道1号……、いままたかなりの揺れが起こっている。現在、NHKの大阪ニュースセンターからお伝えしているが、余震とみられるかなりの横揺れがいま起こったところ。大阪守口市付近の国道1号線でタクシーを運転していた人の話によると、いきなり左右に大きく揺れ、前のマンションの電気が全部消えた、そして一瞬何が起きたのかわからなかった、と話している。先ほどNHK大阪ニュースセンターでもかなり強い横揺れを感じたが、この地震についての情報は入りしだいお伝えする。NHK大阪ニュースセンターから地震に関する情報をお伝えしている。大阪中央区にある38階建てのツインビルの地下1階に宿直をしていた管理人の話によると、仮眠をしていたけれども、大きな揺れを感じて飛び起きたという。時刻はまもなく7時40分になる。

（男性アナ）時刻は7時40分になった。東京の131スタジオです。大阪から地震関係のニュースをお伝えしてきたが、きょう午前5時46分ごろ、神戸で震度6を観測するなど近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。各地の震度は次のとおり。震度6が神戸。震度5が京都、彦根、兵庫県の豊岡。震度4が福井、津、姫路、岐阜、大阪、和歌山、岡山、高松、徳島、高知、鳥取、奈良など。震度3が山口、飯田、諏訪、名古屋など。震度2が河口湖、松本、御前崎、静岡、甲府、長野、横浜、軽井沢など。震度1が熊谷、東京、水戸、網代、新潟、宇都宮、前橋、小名浜、館山、千葉、秩父などとなっている。この地震による津波の心配はない。気象庁の観測によると、震源地は淡路島で、震源の深さは20キロ、また地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定されている。

（天気予報）（道路交通情報）

(男性アナ) 地震の情報をお伝えする。午前7時38分ごろ近畿地方でまた地震があった。震度は、奈良が震度4。震度3が彦根、京都、津、大阪、舞鶴、豊岡、兵庫県の豊岡となっている。震度2が尾鷲、四日市、岐阜、敦賀、飯田。そして岡山です。震度1が潮岬、和歌山、徳島、高松、姫路、鳥取、福井、諏訪となっている。7時38分ごろ近畿地方でまた余震とみられる地震があった。念のため津波に注意してほしい。

(交通情報) (空のダイヤ)

時刻は7時49分になる。

(男性アナ) それではここで地震の情報。神戸市の実家にいた広島放送局の入江ケンイチアナウンサーに電話がつながっている。入江さん。いま神戸のどのあたりにいる？

(入江) 神戸の中心部から山の手のほうに向かってちょうど車で10分ぐらい上がったところ、7階建てのマンションの4階から外を窓ガラスを通して見ている。ここからは神戸の瀬戸内海まで町が非常によく見えるが、火の手が6時過ぎ、最初の地震があった直後の6時過ぎには7つほど火柱か上がっていたが、いまは炎は一切見えない。白い煙になっている。白い煙がたなびいている。ただ、先ほど6時40分ぐらいに、それとは別に黒い煙が別の場所から上がっているの、これはまた新たな火災が発生したのかもしれない。火のほうは見えないが、黒々とした、白い煙とはまったく違った煙が上に向かって、いまわりと強い感じで吹き上がっている。

(男性アナ) 淡路島の方面は見えませんか。

(入江) 淡路島まではちょっと見えない。このあたりはまだ停電が続いている。神戸労災病院がすぐ近くにあるが、そちらの病室の方をみると、先ほどまで非常用の電源で廊下だけに明かりがついていたが、いまはそれも消えている。全室とも真っ暗で、まだ中の様子はうかがうことが出来ない。地震直後は食器棚とか、冷蔵庫の扉か踊り、中の物がすべて床に落ちてしまう状況。ガラスなどの破片がまだ散乱している。水道の水も、マンションのせいかどうかははっきりわからないが、水道の水も出ない状況。

(男性アナ) 入江さんのいる家は大丈夫？

(入江) 私の母がちょうど地震のとき寝ていたが、簀笥が倒れ、母の肩の上に簀笥が倒れてきたが、外傷はないので、ちょっと肩が痛いぐらいですんでいる。

(男性アナ) よかった。

(入江) まわりの木造住宅の屋根を見ると、倒壊の家は、私の見える範囲では見当たらないが、屋根瓦がずり落ちて、めちゃくちゃに壊れて、屋根瓦が一部なくなっている屋根がある。それから雨戸がはがれ落ちて下に落ちてしまっているという家もある。それから私のマンションを、先ほど出て外壁を見たら、タイル張りになっているが、そのタイルが何カ所も壊れてはがれ落ちているところが目立っている。揺れは最初、縦にブルブルとあって、そのあとの横揺れが大変ひどい揺れで、かなりの間続いて、それから現在にいたるまで何度も余震が断続的に続いているといった状況。現在、揺れはないけれども。

(男性アナ) 先ほど7時38分ごろの余震はどうだった？

(入江) このときも揺れを感じた。ただ、その最初の大きな揺れほどの揺れではなかった。その後何回も続いた余震と同程度の揺れに私自身は感じた。(男性アナ) まだ停電

が続いている？

(入江) そうだ。

(男性アナ) 断水、水道の水も出ないのか。

(入江) 止まっている。ガスも止まっていると思われる。これはちょっと火をつけることは危険だ。

(男性アナ) 神戸市の実家にいた広島放送局の入江ケンイチアナウンサーに聞いてみた。淡路島の状況が入ってきているのでお伝えする。淡路島の警察や消防に入った連絡によると、この地震で震源地となっている淡路島の各地で住宅が倒壊して1人が死亡したほか、多数の人が下敷きになっている模様です。このうち、淡路島の一宮町尾崎地区では住宅が崩壊してお年寄りの女性が下敷きになって死亡した。また隣の一宮町郡家地区ではおよそ10軒の住宅が倒壊して、現在、警察や近所の人々が下敷きになっていると見られる人の救出にあたっている。このほか北淡町の富島地区と野島地区でも住宅が倒壊して下敷きになっている人が多数出ている模様だが、詳しい状況はまだわかっていない。

地震があったとき住宅で寝ていた淡路島の淡路町役場職員のヒガシネ・ヨシヒロさん(41歳)は当時の様子について、上下左右の強い揺れで飛び起きた。本棚や筆筒が倒れ、揺れがおさまってから見ると、冷蔵庫がふだんの位置から1メートルも動いていたと話しており、その後役場に出てくる途中も屋根の瓦が落ちている家があちこちで見られたという。淡路島の状況をお伝えした。きょう午前5時46分ごろ神戸で震度6を観測するなど近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。また先ほど午前7時38分ごろ、近畿地方でまた余震とみられる地震があって、奈良で震度4。大阪、京都、彦根、津、舞鶴、豊岡で震度3などとなっている。(天気予報) いま情報が入った。先ほど7時38分、近畿地方を中心に余震とみられる地震があった。この地震による津波の心配はない。気象庁の観測によると、震源地は淡路島で、震源の深さは20キロ、震源の規模を示すマグニチュードは4.9と推定されている。7時38分ごろ、近畿地方を中心に、今回の地震の余震と見られる地震があった。この地震による津波の心配はない。震源地は再び淡路島で震源の深さは20キロ、マグニチュードは4.9と推定されている。

(天気予報続き) (交通情報)

(男性アナ) 時刻は8時になった。

2. MBS毎日放送

5時30分 「榎さんのおはようさん」番組スタート(TBSからのネット番組)

5時50分 (榎本) いま5時50分だが、ディレクターが「榎さん気付いてますか」って、めまいかと思ったら地震ですってね。震度は1と、東京のこのTBSのスタジオの震度計に出ているが。

=CM=

5時52分 途中ですが地震情報。

(ニュースデスク) 地震、先ほど大きな揺れがこの辺でもあったが、これは東海から

関西地方にかけて大きな地震があったもの。震度5の強震が記録されている所がある。震度5の強震は京都から彦根。それから震度4の中震が岐阜、四日市、和歌山、姫路、福井、伊賀上野、津、敦賀、大阪。震度3の弱震が山口となっている。5時49分ごろ、東海地方から関西地方にかけて大きな地震があった。この地震による津波が起きるかどうかはまだわかっていないが、情報が入り次第お伝えする。

(榎本) 震度5の京都、彦根、MBSラジオをお聞きの方びっくりなさったでしょう。それからCBCラジオをお聞きの方、岐阜、四日市で震度4。火の元を充分注意してください。5時45分です。(中略)

(6時の時報) 10分前に地震があった。東京のスタジオから紹介すると、彦根が震度5、京都も震度5、豊岡も5、広島4、福山4、岡山、姫路4、神戸4、名古屋3、四日市4。震源は淡路島で震源の深さが20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定されている。なお津波の心配はない。6時1分です。

(MBSからの放送に切り替わる)

(MBS報道スタジオ増田アナ) ここで毎日ニュースをお伝えする。けさ5時48分ごろ、近畿・四国・中国地方で強い地震があった。震度5の強震が京都、豊岡、彦根。震度4の中震が大阪、和歌山、姫路、徳島、高知などとなっている。大阪北区にある毎日放送のスタジオでもかなりの揺れを感じた。現在のところ、津波が発生するかどうかはわからないが、海岸の近くにいる方は今後の津波情報にご注意ください。(地震情報繰り返し、政治ニュースも) ただいま入った情報によると、大阪管区气象台によると、津波注意報を伝える。5時50分発表で、11区、12区、13区、14区、15区津波のおそれはないということ。

(気象協会杉山輝吉) けさ5時46分ごろ近畿、東海、四国方面を中心に広い範囲で強い地震があった。震源の位置は北緯34.6度、東経135度ちょうど。震源の深さは20キロ。マグニチュードは7.2。震度5が豊岡、彦根、京都、震度4は津、敦賀、福井、岐阜、その他近畿各地も大阪、舞鶴あたりが含まれている。詳しい情報がまだ入っていないが、ガスの元栓、あるいは火の元など、いまいちど点検を(中略)

(6時6分TBSに戻る)

(榎本) 東京のスタジオです。地震があった。関西を中心にして5時49分ごろ・・・(各地の震度、震源地など) なお全国ネット「榎さんのおはようさん」、地元放送局の方、地震情報をそのつとどうぞ、番組の途中でも結構。お入れください。東京からは通常の流れて番組をお送りさせていただいてます。6時7分をまわった。(中略)

(榎本) さきほどからお伝えしている地震だが、震度6のところが神戸、出ている。震度6神戸、それから震度5の強震が豊岡、彦根、京都。なお6時18分ごろ、また九州地方を中心に地震があった。山口、大分、萩で震度3。人吉、都城、熊本で震度2となっている。詳しい情報はまだ入っていない。(中略)(再び各地の震度など)(6時30分「榎さんのおはようさん」終了)

6時30分 (MBSスタジオ・「おはよう川村竜一です」スタート)

(豊島美雪) おはようございます。豊島美雪です。けさ5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。揺れでお目覚めの方、あるいはおかたづけをなさっ

ている方いらっしゃると思いますが、お怪我などなさっていないでしょうか。この地震、神戸のほうでかなり強い揺れだったようで、川村さんが道路事情でまだスタジオに到着していません。いま、車の中からの電話がつながっているようです。

（川村）（車から）いま、武庫川の橋を渡ったところで、西大島交差点、国道2号線。ここは信号機もついているけれど、芦屋のわが家を出ようという時は、街全部停電で信号機が止まって、（語気を強め）阪神高速は落ちました。

（豊島）落ちました？

（川村）（車から）わたしの芦屋の向かいの家はつぶれて、うちの前の道路は全部つぶれています。道路の隆起と陥没が甚だしく芦屋市内で全然身動きがとれなかった。尼崎に入ってくるところで、2号線も順調に信号通り動いているので、安全にとりあえず事故しないようそりらに向かっている。かなり遅れると思うけれど、スタジオには到着できると思う。この電話ずっと生かしておくので、きょうは地震速報でいきましょう。たいへん大きな地震です。僕は自分の家が完全につぶれるかと思った。武庫川で火事がものすご・・・（電話が切れる）

（豊島）まずは火の元、いま火を使っていなくとも、元栓をしめることをお願いします。

わたしもビルの3階、4階あたりの窓ガラスが全壊して地面に落ちてくる様子を見た。頭上の方も十分気をつけて行動してください。

（報道スタジオ三上アナ）けさ5時46分ごろ近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。揺れは40秒以上続いた。その5分後にも身体に感じる余震があった。気象庁によると震度6が神戸、震度5が豊岡、京都、彦根・・・（以下各地の震度）。阪神高速道路など通行止め。震源地は淡路島。一部地域では停電が。新大阪駅も停電との情報が、新幹線は運転を見合わせ。停電のため信号機が点灯していないところも、交通機関を利用の人は注意して走行を。川村さんの話にあったような、大きな事故とか火災、そういう情報はまだ入っていないが、入次第伝える。

（車から、川村）国道2号線、順調に尼崎市内、東に向かっている。信号機も作動している、ここは道路は断絶していない。震源地は淡路島というが、芦屋が一番ひどい地域の東の端のようだ。芦屋は家がずいぶんつぶれているところがある。古い家がつぶれている。地震がどかーんと下から突き上げて、その後で、大男に襟首もたれた身体を揺さぶられたみたいな、左右に3-4回ガンガン、突発的に突き飛ばされたみたいな様子だった。全然立っていられなかった、家の中のものは全部ひっくりかえった。

（豊島）わたしの住まいはマンションの上の方、身体が横に移動するように滑った。

（川村）つい先日は「地震が頻発しているとか・・・」

（豊島）北海道、東北あたりで。

（川村）地震は天災でしかたがないが、その後、人災で被害を大きくしないよう、パニックに備えようといってたけれど。でもこの地震は相当だった。心臓が口から飛び出そうなくらいびっくりして恐かった。大人はお年寄りや子どもを守る立場だけれど、自分がパニックにならないように。これ以上ひどいことにならないように。

（豊島）電話は回線がおかしくなっているようだから、連絡の取り合いは慌てないで、

もうすこし落ちついてからにしたほうがいい。

（川村）先日NTTとの話で、災害発生地へ外からかける電話は控えてほしいということだった。公共的な通話が優先だと。でも寝起き地震の一報が入ると、みんな心配してお互いに電話をかけ合うことになるだろう。芦屋は完全に停電したので電話だけが頼りになる。その電話が不通になっていて不安が募る。でもここは一番、ぐっと辛抱して落ちついてほしい。

（豊島）パトカーがすぐに巡回しているようなので、そちらにまかせたほうがいい。

（川村）自分の回りを見渡して、出来る限り大人の冷静さでもって、最悪のことをしないように。ゆったりと、出来にくいけれど、ここ一番落ちついて、これ以上被害がひどくならないように、みなさんお気をつけください。

（大阪空港・田丸アナ）兵庫県の川西市の自宅からタクシーで大阪空港に来た。ちょうど家を出た時に地震を感じた。かなり突き上げられるような揺れが40秒ほど続いた。遠くの山には稲妻を感じられた。稲妻はかなり広い範囲で感じられた。空港では自宅がどうなっているか、安否はどうか、確認のための電話に長い列が出来ている。わたしもこすしてしゃべっていると、早く代われと後からいわれる。早く切らなくてはいけない。体験したことがないので、だれも混乱しているような状況だ。

（豊島）いまスタジオでも余震を感じた。毎日放送の9階から放送している。それほど大きな余震ではないのかもしれないが、階が上なので、揺れはきつく感じる。

（川村）神崎川の橋の上だ。橋は大丈夫かと心配する。大阪市内の方は比較的道路は安定している。橋も順調に渡れた。阪神高速の神戸線は西宮戎で落ちている。

（豊島）落ちている？

（川村）大人が5人ぐらいで抱えなければならないコンクリートと鉄製の大きな支柱がつぶれて、上から落ちている。ちょうどその下にトラックがあった。テレビで見たサンフランシスコの地震のように。これから先、相当の被害が・・・（電話切れる）

（豊島）交通機関に乱れが出ている。会社にいかなければとか、商売はとか、いろいろあるでしょうが、まずは御身大切に、自分の身のまわりから固めてほしい。

（報道スタジオ・三上アナ）（各地の震度など）JRや私鉄でも始発から新幹線、在来線がストップ。消防局からの被害状況によれば、現在火災が6件、ガス漏れが13件。

（略）

（豊島）これまでをまとめると、震源地に近い神戸、芦屋の方には家屋の倒壊があった。西宮戎では阪神高速が崩れ落ちている。伊丹空港は機能していない。電話に列が出来ている。各地で水漏れが起きている。信号機がところどころ停電している。ビルなど大きな建物の上層階から窓ガラスが割れて落下している。ガス漏れも多いので、外でタバコを吸うようなことはしばらく控えてほしい。

（川村）いま十三を抜けている。あと10分以内でスタジオに着く。（中略）ほくは仕事に向かうという、ある種の使命感があるから押さえているが、女房はおびえていた。家に残して一人で出かけて来るのは気がかりだった。

（豊島）マンションは隣とつきあいがないから。この際、隣近所で声を掛け合って大丈夫ですかという、ひとまとまりにならないと怖い。（略）毎日放送もレコード室のレ

コードが全部飛び散って、放送資料が足の踏み場がないくらいに広がって、大きな棚まで移動している。

（川村）きょうの放送はあと1時間、地震のことにしましょう。出来るだけ正確な情報を。ラジオを生命線としてみなさん聞いていると思うから、なんべん繰り返してもいいから、地震に関する情報を8時までやるべきだと思います。もうすぐ毎日放送に着きます。

（報道スタジオ）余震が続いている。これまで大阪などで身体に感じる地震が数回あった。揺れはおさまってきているが、余震には引き続き注意を。落ちついて行動を。ガス臭かったらマッチを擦ったり、照明スイッチをつけたり消したりしないよう、火花で引火する危険がある。現在火災が7件発生している。うち炎上中のものが4件。住之江区、西区、西淀川区など。ガス漏れは13件。信号機が止まっている地域がかなりある。自家用車などでの移動は出来るだけさけてほしい。

（豊島）日本道路公団によると、近畿地方の高速道路は全面通行止め。各地からのレポートによれば、各所で陥没が起こったり通常の運行は出来ない。空港の機能もストップ。

（川村）こうなったら、これ以上悪くならないように落ちつきましょう。冷静にして。誰かを守ってあげる側に自分がまわるのだという気持ちをもって、わが身と家族の安全を最優先に。みんな心臓がドキドキしていると思うが、ゆっくりあたりを見渡して、どう行動すると一番適切か、気をつけて動いてほしい。いたずらにパニックにならないように。もうこれで夜が明けたから大丈夫。落ちついて。

午前7時の時報

（各地の震度、震源地、地震概況など）

（報道スタジオ・三上アナ）西宮市内でもかなり広い範囲で火災や建物の倒壊被害が出ている模様。西宮警察署裏で建物の下敷きになって救出出来ない人が出ているとの情報。大阪・出入橋付近の道路は陥没しているという。大阪空港では2階ロビーに出発予定の300人の乗客が待機中。航空機は点検中で離陸のめどはたっていない。この地震について、京都大学尾池和夫教授は「震源が淡路島の陸地なら、地表に断層が見られるなど大きな地震だろう。今後もかなり大きな余震が続くことが予想され、注意が必要」と話している。

（7時8分川村竜一スタジオに入る）

（川村）ごめんなさい、遅くなりました。毎日放送のエレベーターがストップしており、階段を上がって来た。（中略）大阪は、近畿は、瀬戸内は大丈夫だと言っていたのが、全然そんなことはない、はっきりわかった。あれだけ揺られて、真っ暗になった途端に、すごく恐かった。外へ出たら目の前の家は、古い家で全部つぶれていた。110番や119番しようにも電話は不通。

（報道スタジオ・三上アナ）神戸市須磨区で、7階建てマンションが傾いて火災が発生との情報も入って来た。淡路島の北淡町野島地区で、家が倒れて人が生き埋めになっているということだ。十三大橋でも、一部で20センチほどの段差が出来、通行止めになっている。西宮市消防局によると、建物の下敷きになっているとの情報が殺到し、炎

上中の火災も数件起きている。ポートアイランドでは床上浸水。神戸市消防局によると、市内全域で火災が発生。消防車は全車両出動中。建物の倒壊でけが人も出ている模様。消防局で未確認ながら死亡者が出ているとの情報も入っている。

（報道スタジオ・西アナ）新幹線は新大阪-福山間が点検のため運休、大阪地区、福知山地区が全線ストップ。阪急電鉄は三宮付近で脱線事故のようだが詳細は未報。京阪神の私鉄は点検のため軒並みストップ。

（豊島）六甲アイランドの美藤アナと電話がつながった。

（川村）美藤さん・・・（電話切れ通話出来ず）

（中略）ただいまニュースが入った。大阪大学のキャンパスが炎上中だという。青木アナからの情報。

7時26分

（川村）六甲アイランドの美藤さん

（六甲アイランド・美藤アナ）六甲アイランドは電話も電気も全く来ていない。六甲アイランドの中で、ガスが漏れており火を使うと爆発の危険があるという。火を使わない、マッチを擦らないように気をつけてほしい。六甲アイランドを出て、魚崎浜の公衆電話からだ。10円玉だけはかかるようになっている。火災があちこちで起きている。六甲アイランドの中は水道管が破裂して水浸しになっているところ、30メートルおきくらいに道路が隆起している箇所がある。小磯美術館の下の階段も完全に崩れている。マンションの人たちが甲陽中学の方に避難して集まっている。寝間着のまま、着の身着のままという感じで。（略）

（川村）芦屋市内全域で、少なくとも20軒の家屋が倒壊し・・・（ニュース原稿を読みながら）20軒じゃ全然すまない。ほくが通って来た道すがらでも20軒以上あった。生き埋めになっている人がいるとの情報もあるほか、すくなくとも2箇所で出火したということ。各地でけが人が出ている模様で、救急車の出動も相次いでいるという。神戸市や西宮市内の広い範囲で停電や断水が発生し、ガス漏れがあるという情報も。（鉄道、高速道路などの状況）神戸市の市民の目撃によると、三宮周辺で一部のビルが倒壊、アスファルトに亀裂が入り、ビルや商店のガラスが割れて道路に散り、足の踏み場もない状態だという。（略）

いま時刻は7時35分30秒。（略）

（報道スタジオ・三上アナ）大阪地区以外の電車の状況は・・・（略）。神戸市須磨区で4箇所、東灘区で3箇所火災が起きているほか、家屋の倒壊が多数あるという。確認しているだけで、以上の箇所ということ。震度6を記録した震源地の淡路島では、一宮町で10軒以上の家屋が倒壊し、老女1人が死亡した。このほか多数が、現在も生き埋めになっているという状況。ただいま余震を感じています、揺れています。

（豊島）かなり強い。

（川村）はい、7時38分45秒。

（報道スタジオ・三上アナ）阪神高速池田線は、中之島と福島の間で高架の連結部分がずれて、大きな段差が出来ているほか、全線にわたって照明灯が倒れるなどの被害が出ている。（淡路島の状況、ガスが自動停止した家庭への対応の説明など）さきほどニュー

スを読み出したところで、大阪で余震を感じた。毎日放送の震度計で震度4を記録した。

(川村) 幸い朝になった。あまり恐くないという気持ちになってください。

(報道スタジオ・西アナ) 7時38分ごろ近畿地方に余震があった。各地の震度は、奈良で震度4の中震、京都で震度3の弱震・・(各地の震度) 阪急電鉄の神戸線三宮駅近く3個所で電車が脱線しけが人が2人出ているという。

(川村) うちの中でも、食器棚やタンスの前は危険、倒れてくる恐れがある。(略)

(気象協会から気象情報、余震に対する注意事項)

(報道スタジオ・三上アナ) (中略) 大阪市消防局によると、大阪市内で現在までに12件の火災が発生し、9件はすでに鎮火したが、西区や大正区の3件で現在も延焼中。

(中略) 淡路島の北淡町、新たに20軒から30軒の家屋が倒壊していることがわかった。生き埋めの人が出ている模様。芦屋警察署によると、芦屋市内で30戸以上が倒壊し、かなりの人数が現在も閉じこめられている模様。兵庫県警によるとポートアイランドでは地震後海水が浸水し、県警本部の建物も30センチほど浸水した。現在は5センチほどに水は引いたが、県警本部内では停電が続いている。交通機関が麻痺しているためポートアイランドは現在孤立状態となっているという。(略) 大阪管区气象台によると、けさの地震は昭和23年の福井地震以来の規模だという。

(川村) けさの「おはよう川村竜一です」は毎日放送の地震対応基準にのっとって、コマーシャルを一切流さず地震速報として放送している。毎日放送ラジオは、この後も生放送で地震に対応し、午前中は放送を続けていくことになると思う。ラジオがいま一番情報が早くて正確だと思うので、このまま毎日放送ラジオを聴いてほしい。

(7時57分ごろ) (道路交通情報-日本道路交通情報センターから近畿各地の高速道路は全面通行止め、不要不急の運転は控えるよう呼びかけ。

(紳士服、自家用車のCM2本が流れる)

(川村) いま流れたCMは放送のシステム上、強制的に組み込んであったので流れたもの。了解してほしい。いま7時59分になった。隣のスタジオで「ありがとう」の準備。浜村さんが無事着いたかどうか、浜村さん。

(浜村) おはようございます。

(8時の時報)

「ありがとう浜村淳です」(番組始まる) なるべくいつも通りの放送を行うが、地震情報を優先する旨の断り。浜村個人の地震体験や過去の近畿地方の地震の歴史を語る。

(報道スタジオ・三上アナ) (地震のニュース繰り返し伝える) 震度6が、さきほどまでは神戸だけだったが、淡路島の洲本も震度6とわかった。(各地の震度) 一番大きかった余震は7時38分ごろで、震源地は同じく淡路島、震源の深さは同じ20キロ、マグニチュードは4.9だった。(略) 新幹線は名古屋-広島間でストップ、JR在来線は大阪、京都、神戸地区全線がストップ。JR三宮-明石間で脱線、阪急電鉄は三宮、門戸厄神、宝塚南口の3個所で脱線。関西国際空港は平常ダイヤ。淡路島の広域消防本部によると、淡路島の中で40人ぐらいが病院で手当を受けているという。(中略)

(報道スタジオ・三上アナ) 阪神高速の一部が車数十台とともに下の国道に倒壊したと伝えたが、この高速道路落下で2人が死亡したと確認された。伊丹市長が7時25分自衛隊に出動を要請したという。神戸市中央区の繁華街で5階建ての雑居ビル2棟が完全に倒壊し、神戸市中心部ではかなりの数の木造住宅が倒壊、閉じこめられている人も多くいるものとみられる。京都市伏見区の世界文化遺産に登録されたばかりの醍醐寺でも、国宝の五重塔、金堂などでしっくい剥がれるなどかなりの被害。神戸市内では建物、家屋倒壊で、生き埋め通報が100件以上、消防局に寄せられている。阪急の西宮北口―門戸厄神間で国道171号線の道路の高架が線路に落下。阪急伊丹駅は半倒壊状態、かなり崩れているという情報が、いま入って来た。大阪の淀川区では、爆発火災が起き4人がけが。神戸市灘区六甲町では大きな火災が起き、住民が近くの六甲小学校に避難。伊丹市では家の倒壊などで人が生き埋めという情報が4件、火災も5件発生。

(略)

(報道スタジオ・三上アナ) (阪神高速の倒壊、南海電車の空港連絡橋上での立ち往生、建物倒壊、死者などのニュース繰り返し) 地震による死者は、淡路島と神戸市内などで4人が確認された。高速道路、地下鉄などは全面ストップ。いま入ったところで、神戸市消防局によれば、市内中心部で火災が10件発生、死傷者も出ている模様。建物倒壊による生き埋めは神戸市内で100件以上にのぼり、かなりの死者が出ている模様。芦屋警察署によれば、芦屋市内での死者2人が確認された。ほかにも数人死亡している模様。家屋の倒壊は100軒以上にのぼるといふ。五十嵐官房長官は、けさ政府として非常対策本部を設置すると述べ、対応を急ぐ考えを明らかにした。政府は近畿地方の地震に関して、非常災害対策本部を設置する。きょう中に、小沢国土庁長官を現地に派遣する方針だといふ。新幹線は大きな被害が出ており、復旧のめどは立っていない。新大阪と西明石の間で橋げたが5箇所落ちている。神戸大学付属病院によると、午前9時現在、2人が死亡、50人以上がけがで治療を受けているという。(中略) 関西地方の大規模な地震としては、1300人以上の死者を出した1946年の南海道沖地震以来ということになる。(略) わたしが到着したのは5時半。その20分後ぐらいに。毎日放送は大阪市北区の茶屋町にあるが、13、14階建てのビルの6階ということもあるためか、机に手をつかないと立ってられない状態の揺れ、はじめは机の下のもぐった。社内はかなりものすごいことになった。天井が剥がれて落ちているところも多く、廊下はそれをまたぎながら歩く有り様。(中略)

こちらは報道スタジオ。大阪毎日放送、1179キロヘルツ、大阪・北区茶屋町の毎日放送から、これら番組の内容を変更して報道特別番組をお送りします。けさ6時前に発生した大地震についての特別番組をこれから始めます。いろいろな被害状況が入ってきているが、新しいものが入り次第、途中でどんどん差し挟んでいきたいと思う。

(中略)

(報道スタジオ・西アナ) いま入った情報。(中略) 此花区では45歳の男性が倒れた煙突の下敷きになり死亡。被害の大きかった淡路島は、洲本市消防本部によると、管内で家屋30軒が、少なくとも25人が建物の下敷きになり、10人が救出されたが、1人が死亡した。淡路島の一宮町役場によると、町内で50軒から100軒が家屋が倒壊

したというが、確認はとれていない。(中略)

(報道スタジオ・三上アナ) 注意事項をいろいろ伝えていくので、1179キロヘルツ毎日放送で地震情報を聴いてほしい。(略) 電話もパンク状態、停電のところもまだ残っている。情報を収集するのが難しい人たちがいると思う。携帯ラジオを持っている人はぜひラジオで情報をつかんでほしい。(神戸などの被害概要)

(報道スタジオ・西アナ) いま気象庁から情報が入った。神戸で震度6、烈震を観測。統計が残っている1926年以降でははじめて。(津波の恐れなし、電話がつながりにくいので、消防・救急を優先するよう呼びかけ)

(報道スタジオ・三上アナ) 西宮市段上町で家屋が倒壊し、40歳の女性1人が死亡。明石市でも3人が死亡したという情報がある。

(報道スタジオ・西アナ) 新しい情報、神戸市東灘消防署によると、東灘区で建物数十軒が倒壊し、100人近くが下敷きになっているという。灘区で木造の建物が壊滅状態で100軒が倒壊し、そのうち50軒に下敷きになった人がいるという。長田消防署によると、長田区では火災がわかっているだけで10件、家屋の倒壊は数え切れないほどだということで、確認がとれていない。少なくとも数十人が死亡しているという。

(報道スタジオ・三上アナ) どんどん数字が大きくなっていく。繰り返しニュースを伝える。毎日放送では番組を兼行して地震の報道特別番組をお送りする。

(報道スタジオ・西アナ) 続々と情報が入っている。神戸海上保安部によると、神戸港の岸壁は2メートルほど海中に沈下するなど崩れている。フェリーなど船舶は接岸出来ない状態だという。岸壁に野積みされていたコンテナ20数個が海に落ちたという情報。

神戸市の労災病院からの連絡。9時半現在、病院に収容された1人が死亡、けが人は重傷5人を含め30人ほどが収容されているという。(略)

3. ABC朝日放送

5時45分 曲(湯島の白梅)

(1コーラス途中で放送一時断)

(まもなく放送再開)

(毛利=女性キャスター=) (あわてて) ラジオを聴いていらっしゃる方、いま激しい揺れがあった。くわしい情報が入ったらすぐにお伝えする。火は消して落ちついて次の情報を待ってほしい。火を使っていると危ないので火は消してください。こちらの方で出来るだけ早く次の情報が入るように手を尽くしているので、出来るだけ落ちついてしばらく待ってほしい。レコードの方はかけられるのでしょうか。とりあえず様子を見ながらレコードの方は、次の曲あまりふさわしくないので坂上二郎の「学校の先生」に変え

てもらえますか。この曲をかけながら次の情報が入り次第お伝えしたいと思う。朝の支度でいろいろと火を使っていると思うので、そのへんだけは十分気をつけてほしい。いまスタジオの方も一瞬びっくりしたけれども、もういつも通りの用意に戻っており、レコードの方も順番を変えてかける。みなさんの方も十分お気をつけて。坂上二郎の「学校の先生」を聴いてください。

曲（学校の先生）

地震の一番新しい情報、震度がわかったのでとりあえずお知らせ。A B C地震速報。震度5が豊岡、京都、彦根。震度4が福井、敦賀、岐阜、四日市、堺、鳥取、舞鶴、津山、呉、福山、岡山、姫路、大阪、和歌山、多度津、高松、高知、徳島。震度3が輪島、金沢、富山、諏訪、飯田、伊良湖、尾鷲、西郷、松江、米子、萩、広島、潮岬、山口、松山、室戸岬。震度2が伏木、高山、松本、甲府、河口湖、浜松、御前崎、静岡、三島、佐賀、大分、宇和島、宿毛。こうした地震速報が入っている。大阪は震度4。ついさきほど5時46分ごろに地震があり、とりあえず記録として地震速報が入って来ている。新しいニュースは入りましたか。まもなくニュース、地震に関する情報が入ると思う。原稿が出来次第アナウンサーに伝えてもらう。とりあえずこちらに入った震度2から5になっているが、震度をお伝えした。原稿の用意が出来ていないようなので、とりあえず先週の合い言葉を書いてもらったはがきから5千円のプレゼントの発表。「先生」とかいてもらったはがきが1168通あった。このなかから貝塚市の岸田ジュンコさんに今朝の5千円。今週のプレゼントは徳島県の豊中イチゴ。さきほど5時46分ごろ地震があつて、一番激しく揺れたのが、豊岡、京都、彦根の震度5。大阪とか姫路や岡山、鳥取、舞鶴、津山が震度4となっている。激しい揺れだったが、みなさんの家のまわりは大丈夫でしょうか。情報が新しく入り次第ニュースをお伝えするが、まだこちらの方も混乱しているようで、まだニュースの用意は出来ないようなので、もう一度曲をかける。小林幸子で「雪椿」

（1コーラスで曲終了）歌の途中だが、ここでニュース。（提供スポンサー名朗読）阿部アナウンサーです。

（阿部アナ）5時46分ごろ地震があつた。震度5が豊岡、京都、彦根。震度4が福井、敦賀、岐阜、上野、津。それから震度4が四日市、サカイミナト、鳥取、舞鶴、津山、呉、福山、岡山、姫路、大阪、和歌山、奈良、多度津、高松、高知、徳島。震度3が輪島、金沢、富山、諏訪、名古屋、飯田、伊良湖、尾鷲、西郷、松江。震度3が米子、萩、広島、潮岬、山口、松山、室戸岬。震度2が伏木、長野、高山、松本、甲府、河口湖、浜松、御前崎、静岡。震度2が三島、横浜、佐賀、大分、宇和島、宿毛。なお震源地は淡路島。震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定される。なお、この地震による津波の心配はない。（震度くりかえし）今後も地震情報にご注意ください。（続いて社会党、基礎年金番号制度のニュース）（地震のニュースくりかえし）ひとまずこの時間のニュースでした。

=CM=

大阪もこの付近でどのような影響があつたか調べてみたら、エレベーターが止まって、向かいのホテルプラザもエレベーターが止まって、明かりが消えているところもあるよ

うだ。壁にひびが入ったり、ABCの下のロビーのガラスが割れたりとか、そういった被害が出ているみたい。家のまわりは大丈夫でしょうか。ガラスを踏んだりとかけがないように気をつけて。ドアはひずむと外に出られなくなることもあるみたいだ。もし激しい揺れの時に火を消すことと、外へあわてて飛び出すのもあまりよくないことだが、外に出なければいけない時にドアが開かなることもあるみたいだ、くれぐれも気をつけて。地震の新しい情報が入り次第伝えます。（きょうの近畿地方の天気）時刻は6時9分
=CM=

6時10分になっています。地震の周辺の影響で、大阪市内朝日放送の周辺は信号がみな消えている。いまABCラジオに着いた人の話によれば、下の道路は信号がわからないのでかなり危ない状態になっているという。まだ外は暗くてはっきりとは見えないし、信号が消えているということなので十分注意を。まだ高速道路とかの情報は入っていないが、ABCラジオの近くの商店街の通りもかなり看板が倒れたりとか、ガラスが割れたりとか、被害が出ているようだ。では「おはようレポート」。高知もかなり激しく揺れたと思うが、RBC高知放送の中谷アナウンサー。電話が繋がらない（呼びかけるが繋がらず）もう一度かけなおしている。繰り返し伝えているように、けさ5時46分ごろ地震があった。朝の支度をしている人やまだ寝ていた人もいたと思うが、ずいぶんびっくりしたと思う。豊岡、京都、彦根が震度5。震度4は福井、敦賀、岐阜、上野、津、四日市、堺、鳥取、舞鶴、津山、呉、福山、岡山、姫路、大阪、和歌山、奈良、多度津。電話が繋がった。

（高知放送・中谷アナ）高知も震度4だった。津波の心配がないのでほっとしたところだ。（高知からカレンダーの話題）

=CM=

6時17分です。

=CM=

6時18分です。タチハラケイスケさんです。

（タチハラ）ホテルプラザにとまっていた。東京で宮城県沖地震を経験した。それと比べて見た。いま梅田近辺をまわって来た。信号が消えている。大きな交差点には警察官が出ているが、互いに譲り合って運転しなければ。余震が来るかもしれないので携帯ラジオと懐中電灯、すぐに頭にかおれる毛布類。ろうそくなどはいま携帯してこちらにやって来た。非常口の確保も。火の元の点検。気をつけてほしい。

（毛利キャスター）ありがとうございました。たまたまプラザに泊まっていたので聞いた。（各地の震度くりかえし）地震の震源地が淡路島。ずいぶん近いところで、この激しい揺れも納得出来る。この後は天気予報。気象協会杉山さん。

（杉山）ビル15階なのでごったがえしている。このあとも落ちついて行動してほしい。スタジオで先ほど出た情報以外には、こちらには入っていない。（以下天気状況）

=CM=

6時25分です。阿部アナウンサーがスタジオに入って来た。

（阿部）さきほども伝えた内容だが整理して見よう。けさ5時46分ごろ地震があった。震度6が神戸。震度5が豊岡、京都、彦根。震度4が福井、敦賀、岐阜、上野、津、

四日市、サカイ、鳥取、舞鶴、津山、呉、福山、岡山、姫路、大阪、和歌山、奈良、多度津、高松、高知、徳島。震度3が輪島、金沢、富山、諏訪、名古屋、飯田、伊良湖、尾鷲、西郷、松江、米子、萩、広島、潮岬、山口、松山、室戸岬。震度2が伏木、長野、高山、松本、甲府、河口湖、浜松、御前崎、静岡、三島、横浜、佐賀、大分、宇和島、宿毛。震源地は淡路島。震源の深さはおよそ20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定される。なおこの地震による津波の心配はない。この地震の影響だろうか、大阪市内で数カ所で火災が発生している模様。市内各所で信号機が止まっている。橋が陥没するなどの被害が出ている。今後とも地震の情報に注意してほしい。火事の場合など、新しいニュースが入らないのでわからない。神戸市方面には電話が通じないし、宝塚の一部とも電話が通じない。（アナウンサー 報道局での地震時の感想、壁は一瞬にひび割れ、テレビは落ちてくる。書類も落ちた。）電話が入っている。

（村井電話レポート）いま出社する途中だが、枚方大橋の上で車がパンクしたと思うくらいにくるまが横に揺れた。その後車からみんな降りて見たら地震だった。現在十三に在る阪神高速道路は完全に全面通行止め、パトカーが走り回っており、十三大橋の手前で道路が陥没して十三大橋を渡れない。会社の近くまで来たんだが、全く動けない状態。この付近は全部停電している。水道管の破裂や道路の段差が至るところに出来ており、車は走っているが信号機は全部消えている。公衆電話から電話しているが、電話ボックスが真っ暗で番号を探すのに大変だった。電話も30分くらいダイヤルを回して、ようやくつながった。電車は動いていない。（スタジオからいったん電話を切ってほしいとの呼びかけあり）電話を切るとかからない、つなげたままにして待つ。

=CM=

（次の番組「おはようパーソナリティ」のテーマ曲スタート）

「おはようパーソナリティ」ドウジョウヨウゾウ、タカノアサオです。地震のお見舞いを申し上げます。さきほど、神戸震度6。京都震度5の強い地震があった。大阪は震度4だった。わたしはデスクの下に潜り込んだ。とても震度4とは思えないような揺れが30秒ぐらい続いたかもしれない、村井ニュースデスクが電話をかけてきて途中になっている。続きを聞く。

（村井電話レポート）京都の長岡京から大阪に向かっていたのだが、枚方大橋を経由して阪神高速に乗るつもりだった。枚方大橋の上でパンクだと思って運転手がドアを開けて見たが、ほかの車もみな、そうで地震だとわかった。阪神高速に向かったが、すでに全面通行止め。すぐに表示が出た。そこで堤防沿いに下の道を走り、十三の方に入ったが、途中から堤防の下が水浸しになっていた。水道管が破裂したのか、堤防の水が吹き上げて来たのかわからない。十三までやって来たら、道路が至るところで水浸しになっている。水道管の破裂だと思う。パトカーがいて、十三大橋の手前が陥没してさがってしまっているので通行出来ない。堤防沿いをさらに走ったが、そこら中が陥没しており水道管が破裂している。停電で真っ暗だ。夜明けですこし明るくなって来たがまだ暗い。公衆電話を探して、手探りで十三の近くの公衆電話からかけている。車はほとんど大阪側に入れない。いま目の前で信号がついた。あたりの停電も復旧して来た。北野高校前でバス停の電気がついた。2号線から大阪市内に入る道は大渋滞で動かない。いま公衆

電話も電気がついた。そこら中で道路がぼこぼこになっている。段差になっている。176号線のところだ。十三バイパスは大阪市内からの車は走っている。

(6時33分?のアナウンスマシン) 電話が混んでいて、何度かけてもテープが回ってしまいかららない。

(スタジオ) (各地の震度繰り返し 震度6は神戸のみ 洲本の震度情報はいぜんなし)

神戸に連絡を取ろうと思っているが電話が繋がらない。アサオちゃんの実家に電話が繋がったが家の中の被害も大きかった。

=CM=

スタッフもおおわらわ。電話受け係りの女性から連絡が入り、地下鉄がとまっているので到着出来ない。(地震時の社内の様子アドリブで語る)

(6時40分のアナウンスマシン) 私鉄状況が入った。阪急は全線とまっている。阪急、南海、地下鉄、新幹線東海道・山陽とも、JR在来線ともにとまっている。いまちょっと揺れている。余震だ。ほぼ50分ぐらいになるが、これで4-5回余震が続いている。あちこちで道路に亀裂が入ったり、水道管が割れたりして、水浸しになっているところがあるようなので、気をつけてほしい。尼崎から保坂カズヒロアナウンサーから電話が入った。

(保坂アナ電話リポート) 尼崎の産業道路沿いの公衆電話からかけている。自宅は電気をつなぐ電話を使っているが、コンセントを使う電話は全く繋がらない状態だ。信号もついている部分はあるが、山手幹線や産業道路沿いはいまようやく復旧した。しかしブロックによってはまだ停電中もある。住民は不安がって外に出ている。公衆電話を探しながら、家族や会社に電話を入れている。わたしは地震の時睡眠中だった。CDラックやテレビの台はみな倒れてしまった。いま公衆電話の前の送電線が燃えている。火の粉が落ちている。消防車はまだ来ていない。

(阿部アナ) 新しいニュース。鉄道ではJR、阪急、南海などが現在ストップしている。JR西日本はけさの始発から関西地区の全線をストップさせ点検中。東海道・山陽新幹線は運転をストップしている。大阪市内数カ所で火災が発生しているもよう。各地で信号機がとまり、橋が陥没するなどの被害が出ている。さきほどもグラツときた。

(地震時の社内の様子) 会社の中でこれくらいだから、ホテルやマンションの高層階にいた人は大変だっただろう。余震が続いているので火の元だけは点検してほしい。外を出歩かないほうがいいと思う。(8時45分のアナウンスマシン) 懐中電灯とラジオと頭を守るような頭巾かヘルメットを身近に置いたほうがいい。情報源のラジオは置いたほうがいい。

=CM=

6時46分。お出かけインフォメーション。

(交通センター松本) 近畿地方の高速道路はすべて通行止めになっている。名神高速西宮と京都東の間をはじめ近畿道、西名阪道、阪和道、関西空港道、中国道はいずれも通行止め。阪神高速道路も大阪の各路線、神戸線いずれも通行止め、阪神高速は全線通行止め。一般道路でも一部信号機が消えているところがある。交通センターも一人で勤

務している。放送室のドアもこじ開けた。書類は全部ぐしゃぐしゃになっている。高速道路が通行止めで、車は一般道に行っているが渋滞状況が入っていない。信号の点灯していないところもあるが場所がはっきりしていない。新御堂筋の南行きなどはかなり渋滞している。（鉄道状況繰り返し）

=CM=

（6時50分のアナウンスマシン）出かける人はぜひトランジスタラジオを持ってほしい。携行品は頭を守る物を持ってほしい。火事の様子が入って来た。

（報道センター阿部アナ）6時45分現在、大阪市内で少なくとも6件の火災が起きている。西区、西淀川区では炎上中ということだ。淀川区の十三大橋で陥没が起きており、通行止めとなっている。

（アキレス腱切り入院中のクスアトアナ病院から電話リポート）豊中の病院。ナースステーションの棚から薬品が落ちて看護婦が掃除中。病院の棟と棟をつなぐジョイント部分がだめになっている。地震の揺れでベッドがずるようにして動いた。電気は自家発電の部分だけが点灯している。病室は真っ暗だ。外でははっきりなしにサイレンが鳴っている。

=CM=

時刻は6時53分をまわった。（震度情報の繰り返し。震度6はいぜん神戸のみ）神戸は震度6の烈震だった。（烈震の説明あり）（6時55分のアナウンスマシン）（交通機関の情報繰り返し）

=CM=

6時57分をまわった。7時になったらいつものように聴視者から電話、ファクシミリをほしい。きょうは地震の情報を伝えてほしい。新しい火災の情報が入った。

（阿部アナ）延上中が4件。西住之江で2棟200平方メートル、西区新町のビル7号館、西淀川区サッシ工場、北区ホンジョウで住宅。そのほかガス漏れが11件ある。

みなさんのお宅のまわりの状況を知らせてほしい。

（全日空ハヤマさん）（伊丹の状況を電話で報告、関空情報も）

7時3分 朝日新聞ニュース （震度6は神戸のみ）

（柴田アナ）尼崎消防署にいる。自宅の前の消防署からレポートしている。現状がなだつかめていない。

（阿部アナ）池田市で畳屋が倒壊し、中に人が残されているとの情報がある。神戸から入った情報では、ポートアイランドでは電気や水道がとまっている。

（西宮神社吉井さん電話）古い建物が多い。戦前に焼け残った建物があって、それらがかなり倒壊している。

（京都・今里さん）京都の様子。京都駅からレポート。（7時10分のアナウンスマシン）

近鉄はいったんとめたものの運転再開中。

=CM=

（天気予報）

=CM=

(神戸市北区・緒方アナ) 神戸市北区の様子。部屋めちゃくちゃ。屋根瓦が落ちたり外壁がだめになったり被害を受けている。(7時15分のアナウンスマシン)

(阿部アナ) 阪神高速尼崎-西宮の間で橋桁が落ちているとの情報が入った。けが人も出ているということで確認を急いでいる。地震各地の震度など(震度6はいぜん神戸のみ)。地震による火災炎上中4件。神戸市では数カ所から火災が発生しているほか、民家の倒壊や道路に亀裂が起きるなどしている。震源地の淡路島ではその後も余震が続いており、欠航したフェリーもある。池田市で畳屋が倒壊、中に人が残されているとの情報がある。神戸のポートアイランドでは電気、水道がとまっている。ポートアイランドから見たところ、山の手で火事が4箇所見えるとの情報が届いている。

(スタジオ) (鉄道不通箇所繰り返し伝える)

=CM=

(7時20分のアナウンスマシン)

(交通情報マスモトさん) 高速道路すべて通行止め。一般道176号線十三大橋通行止め。ほか一般道渋滞状況。

(村井ニュースデスク) 信号ついているところと消えているところある。注意を。古いビルの窓ガラスが割れている。

(阪急西宮北口・阿部アナ) 人は平静を取り戻している。電車はとまっている。駅の上からは火災の発生は見えない。西宮市役所の方はかなり大きな煙が立ちこめているのがわかる。古い家屋を中心にガス漏れをしているところがあるようだ。コンビニはジュースなど缶類が散乱している。一般家庭の電気はついている様子はない。

(7時25分のアナウンスマシン)

=CM=

(スポーツの話題)

(朝日新聞ニュース) 地震のニュース繰り返し(各地の震度では震度6は神戸のみ)その他のニュース。

=CM=

(長沢ニュースデスク) 六甲を越えて迂回し、西宮へ下りてきた。西宮近辺は大変なことになっている。2号線より北のあたりは家がかなり倒壊している。塀が倒れている。電信柱が軒並み倒れている。ナンゴウ町あたりだ。10軒や20軒でなく、家がべしゃんこになっている。(7時35分のアナウンスマシン) 大橋のあたりで、橋が陥没して観光バスが宙づりになっていると、近所の人がいっていた。阪神高速尼崎と西宮間の高架が落ちているという、これかもしれない。

(豊中から芦沢アナ) 176号線豊中市内桜塚から。自宅での体験談。救急車、消防車が右往左往している。いま余震。かなり突き上げる揺れ。人々は普段の通勤の様子。

(7時40分のアナウンスマシン)

(スタジオ) きょうは外に出ない方がいい。会社は休みませんか。会社とかなんとか、出勤という状況ではない。命かけてまで外に出ることない。

=CM=

7時41分。

(阿部アナ) 芦屋市内全域で、少なくとも20軒の家屋が倒壊し、生き埋めになっているとの情報があるほか、少なくとも2箇所で出火したという。この他、窓ガラスが割れるなどしてけが人が出ている模様で、救急車の出勤も相次いでいるという。神戸市や西宮市内の広い範囲で、停電や断水が発生している他、ガス漏れがあるという情報。J R西日本は、きょうの始発から東海道・山陽新幹線の運転をストップしているほか、関西地区の全線の運転をストップしている。名神など近畿地方の高速道路は全面通行止めとなった。阪神高速尼崎-西宮の間で、橋桁が落ちているとの情報が入っている。けが人も出ているということでいま確認中。神戸市の住民の目撃によると、市の中心部三宮周辺で一部のビルが倒壊、アスファルトに亀裂が入り、ビルや商店のガラスが割れて道路に散り、足の踏み場もない状態だという。大阪市の十三大橋南詰で176号線に段差が出来て、十三-中津間が通行止め。大阪市中央区のコスモ証券ビルは、地震のため堺筋側の窓ガラスがほとんど割れ、破片が道路に散乱。池田市栄本町の畳屋さんが倒壊し、中に人が残されているとの情報。神戸から入った情報によると、ポートアイランドでは電気、水道が止まっている。4回突き上げる揺れで、食器棚や本棚がいっせいに倒れという。ポートアイランドから見たところ、山の手で火事が4カ所見えるという。大阪市内で現在炎上中4件との情報。住之江区西住之江2丁目の2棟200平方メートル、西区新町1丁目テンショウビル7号館、西淀川区竹島、東洋サッシの工場。それから北区本庄西2丁目の住宅とみられている。そのほかガス漏れが11件という情報。7時38分ごろにあった大きな余震は、奈良で震度4。京都、彦根、大阪などで震度3だった。

(CM)

(ドウジョウ) 先ほどから何回も伝えているが、高速道路は名神、阪神高速道路ともに全面的に通行止め。一般道がかなり混雑している。電車のほうも南海、京阪、近鉄、地下鉄、J R各線とも全面的に運転を見合わせている。近鉄だけは徐々に各線の様子を見て、運転を復旧すると言っている。関西空港は、連絡橋が7時前までストップしていた。先ほどようやく橋は開通したが、J R、南海ともにまだ運転を再開していない。滑走路、ターミナルビルには異常はないが、遅れながらも運航の見込みだという。関西空港は、おくれながらも運航の見込みだということです。連絡橋は7時過ぎにようやく開通したという。だから車は通れるようになったのかもしれないが、J R、南海がまだ運転をしていないので、それと、高速道路ということは湾岸線も通れないわけだから、連絡橋だけ通っても、向こうにはちょっと行きにくい。

(ドウジョウ) 島田マサルアナウンサーがスタジオに入ってくれた。

どこを通ってやってきた？

(島田) 尼崎の塚口に住んでいるが、塚口から十三まで加島を通過して車で来た。ただ十三大橋が十三から梅田、あるいは浪速筋に向かうほうが通行止めだ。梅田から十三に向かうほうは通っていた。島田バイパスは通れる。それから十三大橋の、あそこは4車線あり3車線分が十三から梅田に向かう道路だが、その3車線は通行止め。もう1車線の…。

(ドウジョウ) 反対行きは通れる。

(島田) 通れる。

(ドウジョウ) 梅田から十三に行くのは十三大橋が通れる？

(島田) 通れる。

(ドウジョウ) 十三から、梅田に行くほうの3車線が通れない。

(島田) だから、徒歩と自転車と車は梅田から十三に向けては十三大橋が通れる。

(ドウジョウ) 梅田から十三に向かうほうね。

(島田) そうです。

(ドウジョウ) 反対方向は行けない。

(島田) 車が油漏れして、処理にいま手間取っているようで。

(ドウジョウ) 道路が陥没しているという情報だった。

(島田) 陥没は、先ほどアベノリユキアナウンサーから、段差という話があったけれども、つなぎ目のところがずれているような感じ。それがちょうど南側だ。中津浜の合流地点でちょっとずれがあった。それで通れないのだと思う。淀川の河川敷のグラウンドが、かなりひびが入っていた。

(ドウジョウ) 地割れがしているということ？

(島田) グラウンドと、それから十三に面しているほうの淀川沿いの道路、これはかなりの地割れだ。

(ドウジョウ) ああ、そうですか。淀川の河川敷が地割れを起こしている。それで水道管が破裂して水浸しになったりという情報をさっき村井ニュースデスクか伝えてくれた。いずれにしても、十三大橋は梅田から十三に向かうほうの1車線だけは通れる、十三から梅田に向かう3車線が通れないとこういうだ。

(ドウジョウ) 高槻の情報をナカムラユウジアナウンサーが電話で伝えてくれる。ナカムラさん、よく電話つながりましたね。

(ナカムラ) こちらが電話がかけられるようになったのか7時を回ってからだ。ただ、うちはマンションの4階で生活しているが、このマンションでは電気、水道がだめな状態が続いているので、テレビなどで情報を得ることができない。水に困る家庭がずいぶん多いようで、先ほどもマンションの管理棟のほうから拡声器を持って車で巡回して、水は管理棟のほうにあるので、そちらのほうまで取りにきてくださいと呼びかけをしている。マンションのひび割れは、このへんではあまりなかったが、4階部分という揺れの大きさを初めて体験した。妻と一緒に寝ていて、もう抱き合うしかなかった。ほんとに足が動かなかったというすごい状況だった。賞状や絵のたぐいを全部上にかけておいたが、全部下に落ちて、ガラスが床に散乱している。2メートルほどの高さの冷蔵庫が壁にぴったりつく状況で置いてあった。これが前に30～40センチずれ込んでしまうほどの揺れだった。地面に立っている家とはまた違う4階の揺れを初めて体験した。

(ドウジョウ) けがはなかった？

(ナカムラ) うちのほうでは幸い大丈夫だったが、外に出てみると、あちこちで救急車の走るサイレンが、いまだにしている。あるいは、近所の家でも小さくガラスの破片なんかをはき集めるような掃除の音が聞こえているので、細かいけがなどにみなさんも注意していただきたい。(ドウジョウ) 余震が続いている、気をつけほしい。高槻からナカムラアナのリポートだった。

(CM)

(高野) 時刻は7時52分にまもなく。天気予報です。

(ドウジョウ) 先ほどの余震の情報、村井マモルニュースデスクが伝えてくれる。

(村井) 7時38分頃地震があった。私も立っていて、すぐに机といすに手をかけたが、しばらく続いた。震度4が奈良。震度3が津、豊岡、舞鶴、京都、彦根。震度3が大阪。震度2が敦賀、岐阜、飯田、尾鷲、四日市、岡山。震度1が福井、姫路、和歌山、潮岬、高松、徳島。(震度繰り返し)

(ドウジョウ) さっきの余震は、神戸はそんなに揺れていない。

(村井) きょうはひょっとすると、最初の地震の時にも神戸の情報がくれた。これはどうもひょっとすると通信回線に問題あるかもしれない。いま言う範囲なら、神戸もあって当然。岡山で震度2を記録しているし、それを考えると、きょう私も第一報から気をつけていたが、最初がやはり神戸の烈震だ。これが入ってこなかった。

(ドウジョウ) 一番強かったのに。

(村井) どうもちょっと、これはわからないが、いまの震源地がやはり淡路島だ。当然神戸の震度が出るはずだが、見ているかぎり出ていない。震源地が淡路島、震源の深さおよそ20キロ。地震の規模はマグニチュード4.9と推定されている。いまさらに入ってきた情報だが、震源地に当たる淡路島で、10軒以上の家屋が倒壊して、女性1人が死亡した。兵庫県警の情報だが、淡路島で10軒以上の家屋が倒壊し女性1人が死亡した。また、多数の人が生き埋めになっている模様だという情報も入ってきている。

(ドウジョウ) 淡路島のどのあたり？

(村井) 場所はまだわからない。それから、六甲ライナーだが、神戸の六甲ライナー・六甲大橋の南詰で橋げたが落ち、六甲ライナーは通行ができなくなっている。大阪市内の火災だが、7時47分現在、火災が12件あったが、大正区の泉尾と西区の南堀江など3カ所がまだ燃えているという。長沢ニュースデスクが、いま朝日放送のほうに向かっているが、西宮本町5丁目の道路で、道路の陥没があり、タンクローリーがその陥没の中に落ちて、さらにその上に軽自動車斜めになっているという。道路の陥没のところが、くすぶっているという情報も入ってきている。

(ドウジョウ) 村井さん、ちょっと待って。いま長沢さんから電話が入ったので、そちらのほうを先に聞きます。長沢さん。阪神高速道路の高架の落下地点ですか。

(長沢) そうです。ちょうど落下地点から40-50メートルのところの公衆電話からかけているが、要するに阪神高速道路がそのまま神戸方面のほうはひっかかっているが、大阪方面がブツンと切れた状態で落ちてしまっている。

(ドウジョウ) 要するに、高速道路の高架の部分が片側だけ落ちているんですね。

(長沢) はい。

(ドウジョウ) サンフランシスコの地震のときにあったような落ち方。

(長沢) ああいう感じで落ちているんです。これは上下線とも落ちている。東行き、西行きともにそろった形でドスンと落ちている。その阪神高速道路の下に、落ちたところにちょうどタンクローリーが挟まれており、これが火を出している。ただし、これはほとんど燃え尽きかかっているような状態だ。

(ドウジョウ) その落ちた下にタンクローリーかいたんですか。

(長沢) そういうことですな。

(ドウジョウ) それで、そのクンクローリーが燃えてたわけ。長沢それで燃えだしたということですね。ですから、ちょうど43号線の上を阪神高速道路が走ってますよね。

(ドウジョウ) これは場所はどのへんなんです？

4. OBCラジオ大阪

(通常番組)

(5時47分)

(キクチ) 時刻は5時47分をまわった。OBC「さんさんリクエスト火曜日」は、キクチミチコの担当でお送りしている。この番組では、みなさんからのリクエストをお待ちしているが、1万3140円、これはラジオ大阪の周波数にちなみ、1万3140円をひとりに毎月プレゼントしている。ハガキを出さないと、とにかく当たらないので、ハガキを待っている。宛て先は郵便番号552-01ラジオ大阪OBC「さんさんリクエスト火曜日」の係でお持ちしている。それでは次のリクエストですが……。

(水野) ただいま…。

(キクチ) 「能登はやさしや土ー」…。

(水野) ただいま地震が起きています。ラジオお聞きのみなさんすぐ火を消してください。

(キクチ) 七尾からいただいている。七尾の消印が入っているが、さっきも東京都とか神奈川とか、遠いところ…。(音声中断)

(水野) ガスの元栓を締めてください。ドアを開けはらってください。慌てて外に出ないで、室内で丈夫なもののそばに身を寄せてください。車を運転している方は、高速道路でもどこでも道路の左側に車を寄せて、とめて、エンジンを切ってください。繰り返します。ただいま地震が起きています。ラジオをお聞きのみなさん、すぐに火を消してください。ガスの元栓を締めてください。ドアを開けはらってください。慌てて外に出ないで、室内でしょうぶなもののそばに身を寄せてください。車を運転している方は、高速道路でもどこでも道路の左側に車を寄せてとめ、エンジンを切ってください。

(キクチ) …。様子はみごとです。旅館もホテルも数多く、宿泊の心配は不要です、というハガキいただいた。昔は能登親不知と言われたところは観光名所になったということだが、私は能登半島が好きで、学生時代にも能登半島を一周したし。ずっと奥のほうに行くと、七尾から穴水とか終点は輪島。輪島まで行くと、電車の表示が片方がない。どんつきだなあという感じがしみじみとするところだが、輪島の朝市なんかも行っただけ。住んでいる方は冬は大変だろうけれど、観光客にとっては、あれがまたなかなかいい。どんよりとした鈍色(にびいろ)の空。何となく演歌の世界だ。

その点、私の出身地の徳島なんかは演歌になりにくいですが、やっぱり「能登はいらんかえ」とか、いろいろ能登を題材にした演歌も、それから、松本清張さんのゼロの焦点」なんかも、やっぱり芸術作品になりうる土地柄だろう。

(音声中断)

(水野) 繰り返しお伝えする。地震はおさまったようだ。みなさん被害はありませんでしたでしょうか。詳しい情報が入り次第、またお伝えすることにする。なお、海岸沿いの方、津波情報にご注意ください。繰り返し。地震はおさまったようだ。被害はありませんでしたか。詳しい情報が入り次第、またお伝えする。海岸沿いの方、津波情報にご注意ください。

(音楽)

(水野) ただいま地震が発生した。

ラジオをお聞きのみなさん、すぐに火を消してください。ガスの元栓を締めてください。ガスを開け放って、ドアを開け放ってください。慌てて外に出ないで室内で丈夫なもののそばに身を寄せてください。車を運転している方、高速道路でもどこでも道路の左側に車を寄せてとめ、エンジンを切ってください。まだ余震が続いているようです。ラジオをお聞きのみなさん、すぐに火を消してください。ガスの元栓を締めてください。ドアを開け放ってください。慌てて外に出ないで、室内で丈夫なもののそばに身を寄せてください。車を運転している方、高速道路でもどこでも道路の左側に車を寄せてとめ、エンジンを切ってください。繰り返します。地震が発生しました。まだ余震が続いているようです。すぐに火を消してガスの元栓を締めてください。それから、ドアを開け放ってください。慌てて外に出ないで室内で丈夫なもののそばに身を寄せてください。車を運転している方は、高速道路でもどこでも道路の左側に車を寄せてとめ、エンジンを切ってください。なお詳しい情報が入り次第、お伝えします。それから、海岸沿いの方、津波情報には十分にご注意ください。海岸沿いの方は、津波情報に十分ご注意ください。

(音楽)

(キクチ) 石川県七尾市からのリクエスト「しぐれ酒」金田たつえさんで聞いていただきました。時刻はまもなく5時55分になるが、このあと「世の光」そして、6時からニュースと天気予報と続き、「OBCさんさんリクエスト」は6時5分から再びパート2でお届けする。

(昔楽)

(村上) おはようございます。

「世の光」の時間です。お元気でしょうか。

村上ノブミチです。私の知っている牧師さんからこういう話を聞いたことがある。・・・(「世の光」内容略)・・・今朝の「世の光」いかかでしたか。あなたからのお便りをお待ちしている。宛て先は郵便番号530-91大阪中央郵便局私書箱1329番、「世の光」です。また「世の光」では希望の人にもれなく新約聖書をプレゼントしている。「聖書希望」と書いて申し込んでほしい。宛て先は同じく郵便番号503-91大阪中央郵便局私書箱1329番「世の光」です。

(CM)

(水野) 6時になった。サンケイ新聞ニュースと天気予報。まず、先ほど午前5時47分頃、近畿地方を中心とします大きな地震が発生した。この時間、このニュース、地震のニュースをまとめてお伝えする。なお、まだ余震が起きる可能性もあるので、どう

ぞ地震に対する心構えのほうは必ずお願いします。まず、きょう午前5時47分ごろ地震が発生した。近畿地方を中心とする地震が発生した。各地の震度をお伝えする。京都が震度5の強震、姫路、舞鶴、高松、岡山、岐阜、四日市、上野。それから、福井、敦賀、津、和歌山が震度4の中震。そのほか飯田、震度3の弱震、山口も震度3の弱震。それから伊良湖、富山も震度3の弱震。かなり広い範囲にわたって地震が観測されている。津波ですが、和歌山県と大阪湾の沿岸、岡山県と広島県の沿岸、山陰地方の日本海沿岸、四国の瀬戸内海沿岸、四国の太平洋沿岸、いずれも津波の来襲するおそれはないと発表されている。近畿関係津波のおそれはないというふうに発表されている。なお、ラジオをお聞きのみなさん、火災を防止するために火を消してください。それから、ガスの元栓を締めてください。ドアを開け放ってください。慌てて外に出ないで、室内でじょうぶなもののそばに身を寄せてください。それから、車を運転されている方、高速道路でもどこでも道路の左側に車を寄せてとめて、エンジンを切ってください。なお、詳しい情報が入り次第お伝えしますが、これまでの発表によると、和歌山県と大阪湾の沿岸、岡山県と広島県の沿岸、山陰地方の日本海沿岸、四国の瀬戸内海沿岸、四国の太平洋沿岸、いずれも津波の来襲するおそれはないというふうに発表されている。繰り返す、きょう午前5時47分ごろに発生した地震のニュースをお伝えする。まず震度、京都が震度5の強震、大阪震度4の中震、姫路、舞鶴、高松、岡山、岐阜、四日市、上野が震度4の中震です。そのほか福井、敦賀、三重県の津、こちら震度4の中震。それから、飯田、山口、伊良湖、富山、三島、失礼、三島は震度2の軽震。繰り返すと、飯田、山口、伊良湖、富山が震度3の弱震。それから、大分、三島、震度2の軽震。この地震はかなり広い範囲にわたり、関東地方でも地震が観測されている。金沢では震度3の弱震、諏訪震度3の弱震。いま入った情報では、彦根が震度5の強震となっている。それから、津山、震度4の中震、多度津、震度4の中震、鳥取も震度4の中震。徳島も震度4の中震。それから、軽井沢、水戸は震度1の微震となっている。名古屋が震度3の弱震。情報が錯乱しているが、各地の震度をお伝えしている。なお、津波の心配はおそれはないというふうに現在のところ発表されている。それから、奈良がいま入った。震度4の中震です。奈良が震度4の中震となっている。これまでにお伝えしたように、京都と彦根が震度5の強震を記録している。それから、大阪をはじめとして、奈良、姫路、舞鶴、高松、岡山など、それから岐阜、四日市、上野も震度4の中震。そのほか徳島、鳥取も震度4の中震。さらに名古屋は震度3の弱震となっている。地震関係のニュースは、このあと入りしだいお伝えする。なお、海岸沿いの方、このあと出される津波情報に注意を。それでは、ここで空模様（天気予報）

なお、地震情報はこのあと入りしだいお伝えする。ラジオはこのままつけっぱなしにしておいて。それから、火をお使いの方、火は消してください。まだ余震の危険性がある。それから、ガスの元栓を締めて。ドアは開け放って。慌てて外に出ないで、室内でじょうぶなもののそばに身を寄せられるように準備を。車を運転している方、高速道路でもどこでも地震が発生したら、道路の左側に車を寄せて停め、エンジンを切って。詳しい情報が入りしだいお伝えする。

以上、サンケイ新聞ニュースと天気予報でした。時刻はまもなく6時5分になる。

(CM)

(6時5分)

(キクチ) 時刻は6時5分をまわった。5時10分からお送りしている「OBCさんさんリクエスト」今朝火曜日はキクチミチコの担当。この番組はみなさんからのリクエストをもとに選曲。どんなジャンルの曲でも結構、リクエストカードの宛て先は、郵便番号552-01うジオ大阪「OBCさんさんリクエスト」火曜日の係で。みなさんからほんとにいろいろなおハガキをいただいている。「キクチさんおはようございます。春蝶さんや八方さん、きん枝さんと賑やかに放送していらっしゃったのに、ひとりではちょっと寂しいと思います。スタートのときは少しぎこちなかったのに、近頃はだいぶ慣れてきましたね」ということで、ほんとに慣れてきたのかな。少しはましになったかもしれないが、やっぱり早口になっちゃいけないとか、こんなネタではどうかなとか、いろいろ心配しなからしゃべっている。「私は人間ウォッチングが大好きです。市松人形の土田早苗さんのお話がとても興味深く聞きました。でも、私も個展に行きます。頑張ってるね」というお便り、市松人形の写真まで切り抜いて張ってくれた。ぜひ、個展が近づいたらお知らせするので、きてほしい。それから、港区の山口フジコさんは、「キクチさん、おはようございます。いまは仕事に出ていませんので、布団の中でラジオのイヤホンをして聞いています。ラジオの方は早朝からお仕事をしてられるのに、布団の中で聞くのは失礼と思いながら、布団の中ですいません」と謝ってもらった。いいですよ。もう、でも起きているかな。6時5分をまわったものね。泉南郡岬町の岸本ケイコさんも「ベッドの中で聞きながら、早く起きなくては、早く起きなくてはと焦りながら時間は過ぎるばかり」という、そうですね。朝寒いし、いま頃起きづらい、ほんとに。でも、お布団の中であろうが、ベッドの中であろうが、聞いていただいて、こうやって、ハガキを書いていただくというのは、私もひとりしやべりを初めての体験だが、励みになる。2人、3人でしゃべっていると、べつにハガキがあってもなくてもそんなに気にはならないが、ひとりでおしゃべりしていると、やっぱりみなさんのおハガキ、何を書いていただいているのかなとか、どんな反響かなというのが励みになる。これからよろしく、おハガキをお待ち。

さあ、6時台1曲目、堺市のカフモトヒサコさんからいただいたハガキ。「茶道の家元の初釜が7日、8日と催され、お手伝いとお相伴をさせていただき、濃い茶、おうすでの一服は最高の幸せでございました」ほんとに初春らしいおハガキ。リクエスト曲は沢田知可子さんで「幸せになろう」

(音楽)

(水野) ここで地震関係のニュース。きょう午前5時46分頃地震があった。震源地は淡路島で震源の深さはおよそ20キロ。地震の規模マグニチュードは7.2と推定されます。各地の震度です。豊岡、彦根、京都が震度5の強震。津、敦賀、福井、上野、四日市、岐阜、呉、高知、福山、鳥取、多度津、津山、徳島、岡山、高松、大阪、舞鶴、姫路、和歌山が震度4の中震。そのほか各地にわたって揺れが観測されている。この地震による津波の心配はない。京都府から島根県の日本海沿岸では津波の心配はない。瀬戸内海沿岸では津波の心配はない。そのほか和歌山県から広島県の沿岸と四国の沿岸。

京都府から島根県の日本海沿岸でも津波の心配はないという。紀伊半島から四国の太平洋沿岸でも多少の海面の変動があっても被害に結びつくような津波の心配はない。以上、地震関係のニュースをお伝えした。現在、近畿地方のすべての高速道路が通行止めとなっている。近畿地方のすべての高速道路は通行止めとなっている。地震情報でした。

(キクチ) お正月気分は一段落とはいっても、まだまだ年の初め、ことしの目標はどんなことに決めたとか、ことしはこれで行こうとか、いろいろみなさんおハガキを見ていたらあるんですが、大阪府枚方市香里ヶ丘の赤岩エイコさんのおハガキ。「キクチさんはことしは何か目標を持たれましたか？私はことし中にベビーを産みたいと思っています。いまは2歳と10カ月の娘がいますので、次は男の子が欲しいなと思っています」

(音声中断)

(内田) ラジオ大阪のBスタジオです。ラジオ大阪のBスタジオです。「とっておきはつつつワイド」の内田オサムと、それから……。

(赤瀬) 赤瀬ミホですが、

(内田) 番組の準備をしております、5時45分頃に、今朝の5時45分頃、正式に言いますと、5時46分ということで、いま情報が入ってきた。

大きな地震がありました。震源地が淡路島で、震源の深さ約20キロ、地震の規模マグニチュード7.2と推定されているということですが、ちょうどミホちゃんね……。

(赤瀬) はい。

(内田) 僕はファックスでいろいろニュース原稿をコピーしてたりするときに……。

(赤瀬) 準備しているときに……。 (内田) 報道のところですね……。

(赤瀬) ええ。 (内田) ダダッと突き上げるような揺れがあって、報道に大きな機械がある。それかダーッと倒れてきた。あと、テレビとか、そういう大きなものも…、全部落ちて。それからドアもバンと開いたり大変な状況で、その後、余震もちょっとあった……。まだ、ちょっと気をゆるめないでいただきたい。でも、近畿地方で大きな地震というのは、めったになかった。

(赤瀬) 私も慣れてない、びっくりした。

(内田) それから、冬場で、火を使われて、火の気があるところも多いんじゃないか、そのへんくれぐれも注意していただきたい。震度ですけれど、いま入ってきているところをちょっとピックアップしてお伝えしたい。

一番近畿関係で震度が大きな数字出ているのが豊岡の5ですね。それから、彦根が5、それから京都が5と出ております。そのほか、津が4とか敦賀が4とか福井が4とか出ております。大阪も震度4あったという。

(赤瀬) かなりひどかったから。

(内田) いろいろ情報が入っているので、いろんな情報を入りしだいどんどんお伝えしていきたいと思う。近畿地の方、すべての高速道路現在通行止めとなっております。車を運転されている方で、このあと、また地震がきたときには、ぜひにすぐに車を左側のほうにすっととめていただきたいと思います。ミホちゃんはどういう状況の中で地震にきょう遭ったんですか。

(赤瀬) 私は高速道路をおりたところだったんですけども、いきなり、なんかゴーツ

という音がしたので、電車の上ね、走っている環状線の電車の音かな、と思いましたら、急に車を半分持ち上げられたみたいになって、おしりが、ふあふあとなったんですよ。運転手さんが「ごめんなさい、パンクしました」といったのです。「パンクしましたから、左端にとめます」といったんですが、とめてもまだふわふわしていたので、おかしいなと思ったら、たまたま隣に日興タクシーの、三谷ディレクターの車が来て、「ああ、地震だね」と言って、2人でとまっていたんですけれども。

(内田) 先ほど救急車の音とか、消防車の音なんかも…、サイレンが響きわたっていて、火事とかそういうのもちょっと心配なんですけど…。今度地震がまたきたときのためにということで、みなさんどういことを注意していただきたいかという、まず、すぐに火を消して。火を使っている方は。それから、ガスの元栓を締めて。ドアはすぐに逃げられるように開けっ放しにして。ドアを開けてください。どこか開けておかないと、閉じ込められて大変なことになる。

(内田) ドアは必ず開けておいて。慌てて外に出ないで、室内でじょうぶなもののそばに身を寄せて。タンスの上なんかいろんなものを積んでいたりする方が多いと思う。

うちもそうですけれども、そういうのがグッと落ちてきたりするので、気をつけてほしい。いまニュースが入ってきた。簡単なまとめということで…今朝5時46分頃、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。今朝5時46分頃近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。気象庁によると、震度5の強震は、豊岡、京都、彦根、震度4の中震が福井、敦賀、岐阜、鳥取、岡山、大阪、和歌山、高松、徳島などとなっている。いまもちょっと揺れた。まだ余震が続いているようだから、気をつけて。それから、震度3は、金沢、富山、松江、山口などとなっている。ですから、東海、近畿、中国、四国、このへん絡んでおるんでしょうかね。津波ですけれども、津波の心配はないということです。津波の心配はないという。とにかく、このあとまたドドッと揺れてくると本当に心配だが、強い地震があった。震源地は淡路島。北緯34.6度、東経135度。淡路島で震源の深さが20キロ。地震の規模は7.2と推定されている。この間、ニュースを見ていたら、東京のほうで、体に感じないような地震が、非常に1月になって増えているということで、北海道のほうで、去年の暮れに大きな地震があったが…、だんだんとおりてきているな、という気がしていた…。

なるほど。関西、近畿、大阪はあんまり地震がないから大丈夫かなみたいな気持ちが心の隅にあるじゃない。

(赤瀬) でも、ほんとに忘れた頃にやってくるというか、突然来る、地震というのは。

(内田) 会社の中もひどい状況で。書類が乱れたりとか。ロッカーなんかの中もバーンと出たりして、とにかく大きな報道の機械が倒れてきたから。天井まであるぐらいの、重さとしては70-80キロあるんじゃないか。あれがどーっと壁際から倒れてきたし、テレビも上からドドッと落ちてきた。下のエレベーターは当然動いていなかったでしょう。上にあがってこようとする。

(赤瀬) エレベーターもとまったし、こちらのほう全部ビルが管理しているから。手動じゃなくて、自動で全部ロックが閉まったみたいだったんで、管理人の方というのか、カギ持ってきてくれて。

(内田) ラジオ大阪の放送しているスタジオが弁天町オーク200ハープ館という8階建ての4階部分なんですが、4階でもかなり揺れたから、この高層ビルにいる人などは大変な揺れだったんじゃないかと思う。今朝5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。震度5の強震が豊岡、京都、彦根で、震度4の中震が福井、敦賀、岐阜、鳥取、岡山、大阪、和歌山、高松、徳島などとなっている。それから、高速道路は先ほど言ったが…、すべての高速道路、現在通行止めとなっている。現在、近畿地方のすべての高速道路は通行止めとなっている。心配されるのが路面がちょっと凍結していて、そこで地震にあって、ちょっとスリップして、大きな事故になっていなければならないということだが、いろんな情報がこれから入ってくると思うので、入りしだいお伝えしたいと思う。電車のほうもちょっと入ってきた。これは南海。南海線、高野線全線地震による線路点検のため運転を見合わせている。これはまだ早い時間だったので、列車が動いているときに地震に遭ったら脱線ということも十分に考えられて…。ラッシュに地震があったら大変な騒ぎになっていたかもしれないが、まだ、発生が早かったんでよかったのかもしれないが、南海線、高野線全線地震による線路点検のため運転を見合わせている。これは6時現在で、いまファックス情報が入ってきている。高速道路はすべて通行止め。近畿地方のすべての高速道路はすべて通行止めとなっている。5時46分頃近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。震源地は淡路島で震源の深さが約20キロ。地震の規模マグニチュードは7.2と推定されている。大きな地震のときはだいたい6とか7とか、8とかというところだが、7.2という、大変強い規模の地震だった。豊岡が5、彦根が5、京都が5、大阪が4だった。舞鶴も4、姫路も4、和歌山も4ということだ。とにかく、大変な揺れで、みなさんびっくりして飛び起きていらっしゃる方も多いと思う。さっき家に心配で電話したんだが、うちは兵庫県の三田だが、やっぱりかなり強い地震があって、いまそれぞれの部屋からこたつのところに集まって身をひそめているということだ。

(赤瀬) ほんとに火の元には注意してほしい。

(内田) どういうことに注意したらいいかということをもう一回繰り返してお伝えする。地震が発生したとき、みなさん頭に入っているかもしれないが、いま冬場で火を扱っている。ストーブの火をつけてたりとかいう方が多いと思う。火をすぐに消してほしい。火事で被害が大きくなるというのが非常に地震の場合多いから、すぐに火を使っている方は火を消してほしい。それから、ガス爆発というのも大変怖いから、ガスの元栓を締めて。火を消してください。ガスの元栓を締めてください。それから、ドアですが、閉じ込められちゃいけないから、どこか必ず開くようにドアを開けておいてください。必ずドアを開けっ放しにしておいてください。それから、揺れたな、と思って、すぐに慌てて外に出ないで。室内で丈夫なもののそばに身を寄せて。大きな地震になると、地割れとかも考えられるし、また、かえって外のほうが大きなものが倒れてきたりという心配もあるので、慌てて外に出ないで、一応ドアを開けっ放しにしておいて、出られる状況はつくって置いて、そして、室内で丈夫なもののそばに身を寄せて。これから、まだ余震があるかもしれない。我々がスタジオに入ってしゃべりだしたのが6時15分くらいだったと思うが、そのあとでも、ミホちゃんもちょっと顔がひきつっていたけれども…

(赤瀬) 少し余震があったので。

(内田) 余震があったりしたんで、十分このへん頭に入れておいて。それから、車を運転されている方はすぐに車をとめて、揺れがおさまったならば、左のほうに車を寄せて。

(赤瀬) 道路の左側に。

(内田) 電車のほうですけれども、また入ってきた。J Rです。新大阪駅で停電があった。新大阪駅が停電ということで、いま、またちょっと余震があったようだ。新幹線の運転は見合せている。新大阪駅停電ということで、新幹線が運転を見合わせている。これは当然ということになる。それから、先ほど言ったように、南海、高野線ですが、南海線、高野線全線、地震による線路点検のため運転を見合わせている。こういう情報が続々と入ってくると思うので、このあとダイヤルは1 3 1 4 KHzラジオ大阪に合わせて聞いていただければと思う。現在、近畿地方の高速道路は通行止め。交通関係をちょっとまとめて言うておく。

(内田) 5時46分頃に近畿地方を中心に大きな地震があって、この影響で、現在近畿地方のすべての高速道路は通行止めとなっている。それから、入ってきている限りということで、そのほかいろいろな交通関係から電車のほうも連絡が入ってくると思うが、南海線、高野線が全線地震による線路点検のため運転を見合わせている。それから、新幹線、新大阪駅で停電があった。新大阪駅が停電になり、新幹線の運転は見合わせている。スタジオに入ってから2回ほど揺れているが、5時46分頃にほんとに大きな地震があった。みなさんのところは大丈夫でしょうか。救急車、消防車のサイレンの音も先ほど響きわたったりもしていた。いまちょっとまた静かになっているが。これからいろんな情報が入ってくると思うが、大きな被害にならなければいいと思うが、今朝5時46分頃大きな地震があった。震源地は淡路島で震源の深さか約20キロ。地震の規模、これマグニチュードというが7.2と推定されている。豊岡と彦根と京都が近畿地方では一番揺れたようで震度が5。それから、大阪が震度4。震度4といっても、かなりすごい。それから、当然電話がかかりにくくなっていると思うので、しばらく待っていただきたい。いろいろ心配すると思うので、いろいろ電話をしたいと思う。ちょっとかかりづらい状況。しばらく待って電話をしていただきたいと思う。だけど震度4ということでもあれだけ揺れるわけでしょう。だから、北海道の地震なんて、震度やっぱり6とか、7とかということで、これはやっぱり怖い。

(赤瀬) 車に乗っていて、地震を感じたのは初めてだが……。だいたい外にいたときで、地震であまり感じなかった。あれだけ感じたので、かなり、びっくりされたと思うけど。

(内田) 自動車がやっぱり浮き上がるような感じになった。持ち上げられた感じで、ほんとに地震とは信じられなかったんで。

(内田) 運転手さんはどういう感じでした？

(赤瀬) 運転手さんは、ハンドルをとられたみたいな形になり、もうパンクだと思ったみたい。「すいません」といって。運転手さんもドライバー歴がなりあるけれど、「初めてでした」と言っていた。運転していて、こんなに地震を感じたのは。

(内田) また余震が来ている。また、ドドドッと、それほど大きな地震ではないが。

(内田) しばらくみなさん、本当に大きな地震ということで心構えをしておいてほしい。

(赤瀬) 食事の支度とかあると思うが、火の元はもうきょうは…、

(内田) いや、もう食事の支度どころじゃない、きょうは。すぐに火を使っている方は火を消して。それから、ガスの元栓を締めて。ドアは出られなくなると大変ですから。

(内田) どこか必ず開けておいてください。泥棒が入ってくるとか、そんなこと、この際、考えないで。(笑)

(赤瀬) 洋服をたくさん着て、ドアを開けておいて。

(内田) 泥棒なんかもやってられないと思うから。とにかくドア、どこか開けた状態にしておいて。外に出られるようにしておいて。といっても、すぐに慌てて外に地震が来たからといって出ないでください。大きな頼りになる、家の中の丈夫なもの、そばに立って……。じっとしていただければと思う。室内でしようぶなもの、そばに身を寄せてほしい。

(赤瀬) ラジオで情報をお伝えするので、ラジオを聞いて。

(内田) きょう5時46分頃大きな地震があった。きょうの5時46分頃地震があった。いまスタジオに水野アナウンサーが入ってきたので、また、何か新しい情報があったと思う。水野さんに伝えてもらいたい。

(水野) いま入った情報…。高速道路は近畿地方はすべて通行止め。京阪電車、阪急電車も全線運転を見合わせている。先ほど南海もそう。おそらく、もちろん地震のために線路の点検とか、そういうものがあるので、ほとんどすべての交通機関はとまっているんじゃないかと思う。

(内田) これはもう動かさないほうがいい。

(水野) もう近畿地方としては初めての大揺れだから。

(内田) 私も水野さんも、実は東京出身、関東出身と。水野さんは横浜だが。関東出身ということで、関東の人間はそこそこ慣れているが……。

(水野) しかし、びっくりした。

(内田) それでもびっくりした。

(赤瀬) 何をされていたんですか？

(水野) ちょうど6時のニュースの下読みをした。私のほぼ後ろ、右手後方の大きな縦型のテープレコーダー、これば何十キロとあるわけだが、人間の……。

(内田) 60-70キロあるんじゃないかと思うけれど。

(水野) あれが、僕の真横に倒れてきて。もし、真後ろにいたら、もろにおしつぶされていたんじゃないか。

(内田) 水野さんが地震の情報を入れなさいいけないというんで、スタジオのほうにバツと走っていった、その数秒後に大きな報道の機械が、何十キロもあるというやつが倒れてきたから、直撃くらったら、ほんとに水野さんも大けがをるところだったが、私、ちょうどファックスをコピーしていた。私はへなへなっと、下にうずくまっちゃいましたけれど、水野さんはやっぱりニュースを伝えなさいいけないんで、私は一応7時

からの番組ということで、まだスタジオに入らなくていいんじゃないかという、そのへんの甘さがありまして…、

（水野）やっぱり腰が抜けるというのは、ほんとにこういうことなのでしょう。

（赤瀬）私はタクシーに乗ってまして、どうしたんだと思ったら、水野さんの地震情報が流れてきたんで……。ラジオを聞いていて、すぐに情報が入ったのでありがたかったが。

（内田）とにかく水野さんもいま報道のほうに張りついて、デスクといろいろ情報が入ってきたら、ニュースをまとめて……。

（水野）どんどん入れていく。

（内田）どんどん入れていただくことになってますので、ぜひ、ラジオはそのまま、この地震情報をずっと聞いていただきたいと思う。それから、ラジオ大阪、奥田記者から、兵庫県芦屋に住んでいるが、兵庫県芦屋のほうからレポートをしてくれるという、ちょっと奥田さんと呼んでみたい。

（赤瀬）つながりましたでしょうか。

（内田）ちょっと奥田さんと呼んでみたいと思う。奥田さん？

（奥田）おはようございます。

（内田）どういう状況ですか。

（奥田）ものすごい揺れ。私、48になりますが、関西で生活していて、これだけすごい揺れは初めての経験。私はマンションの8階に住んでいるが、家の中は食器類が飛び出し、もう足の踏み場もない。それで、すぐに外を見たら、真っ暗。遠くに関西新空港、大阪湾を臨むような地形になっており、目の前を湾岸高速、大阪湾、大阪平野、生駒山の山頂が見えるが、真っ暗、一部非常用照明の装置がついているところだと思うが、その一部を除いて真っ暗。電気はどこもついてない。湾岸高速道路は、いつもだと、きれいにオレンジのナトリウム灯がついているが、それも全部消えて、車は1台も通っていない。目の前に小学校があるが、2、3階部分、たぶん非常用電源だと思うが、一部で電気がついている。あとは真っ暗。いまこの時間になり、陽が上がりかけてきた。ちょっと空が明るくなってきたので、町は徐々に輪郭をあらわしてきた。おそらく倒壊した建物もあるのではないかと想像する。ベランダへ出てみると、ベランダに置いてあったものは当然ひっくり返っている。ガスクさい。漏れの危険性があるので、2次火災がちょっと心配。うかつに火を使わないよう、注意したほうがいい。もし、地下をはっているガス管が引火ということになると、昔あった天六のガス爆発、ああいうことも考えられる。

（内田）いま情報が入ってきた。先ほど、京都、彦根、豊岡、これが近畿では一番揺れて震度5と言ったが、神戸が一番です。

（奥田）あの、6というふうに…。

（内田）6ですね。（奥田）マグニチュードでいけば、7.いくつというふうに…、

（内田）7.2ですね。

（奥田）7.2ですか、神戸ということですね。

（内田）はい。揺れ方としてはどんなふう感じた？

（奥田）突き上げられるような揺れ方、ちょうど私熟睡していた。一瞬のうちに目が

あいたが、どういう揺れ方かと言うと、横へですね、ベッドを思いっきりグラグラッ、要するに揺さぶられたというような、そういうことが一番正確な表現じゃないか。

(内田) わかりました。奥田さん、6時36分から、東京の文化放送とちょっとネットということで…。

(奥田) はい。ああ、ご苦労さま。

(内田) 一報入ってきたので…、

どうも奥田さんありがとう。ラジオ大阪の奥田記者からレポートを入れてもらった。

(音楽)

(男性アナ) 「ニュースしほりたて」おはようございます。世界と日本、世の中の動きがフレッシュにわかる「ニュースしほりたて」 世の中の動きがフレッシュにわかるニュースしほりたて。

(野村) 1月17日火曜日の夜明けは大変な近畿地方の地震で始まった。野村クニマルです。(ゼンバ) ゼンバミホコです。

(野村) では、ニュースからお伝えする。今朝午前5時46分頃、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。気象庁によると、震度5の強震が豊岡、京都、彦根。震度6。前後しますが、震度6が神戸、そして、震度5の強震が豊岡、京都、彦根。震度4の中震が、福井、敦賀、岐阜、鳥取、岡山、大阪、和歌山、高松、徳島などとなっている。また、震度3は金沢、富山、松江、山口。気象庁ではこの地震による津波の心配はないということ。今朝午前5時46分頃、近畿地方を中心に強い地震があった。広い範囲で強い地震があった。気象庁によると、震度6の烈震が神戸。震度5の強震は豊岡、京都、彦根で、震度4の中震が福井、敦賀、岐阜、鳥取、岡山、大阪、和歌山、高松、徳島。震度3が金沢、富山、松江、山口などとなっている。気象庁ではこの地震による津波の心配はないという。なお震源地は淡路島で、震源の深さは20キロ。地震の規模を示すマグニチュードは7.2と推定される。

(ゼンバ) ただいま入った情報で、近畿地方のこの強い地震のため、JR西日本はきょうの始発から、東海道・山陽新幹線の運転をストップしている。東海道・山陽新幹線は、きょう始発から運転をストップしている。また、関西地区のJRの全線は、点検中で運転を見合わせているという。

JRの東海道・山陽新幹線、関西地区の全線は運転を現在見合わせている状態。

(野村) この地震による点検作業で現在通行止め的高速道路は、名神高速の彦根～西宮、北陸自動車道の丸岡～小松間。山陽自動車道、高松自動車道の一部が現在点検作業で通行止め。名神高速の彦根～西宮、北陸自動車道の丸岡～小松。山陽・高松自動車道の一部が現在点検作業で通行止め。後ほど震度6の烈震を記録した神戸などをつないでお伝えする。

(ゼンバ) (地震関係以外のニュース)

(野村) 「ニュースがぶりより」は、近畿地方を襲った5時46分の地震のニュースを中心にお伝えする。今回のこの地震は、何度もお伝えしているとおり、震源地が淡路島で震源の深さ20キロ、非常に震源が浅くなった。地震の規模がマグニチュード7.2と推定されるということで、近畿地方としてはほんとに久びさの大きな地震というこ

と言えらると思う。各地の震度は、震度6の烈震が神戸、震度6が神戸。震度5が京都、彦根、豊岡。震度5が京都、彦根、豊岡。4が岐阜、四日市、上野、福井、敦賀、津、和歌山、姫路、舞鶴、大阪、高松、岡山、徳島。現在、震度4をお伝えしている。津山、多度津、鳥取、福山、高知、堺、呉、奈良。震度3が山口、萩、尾鷲、伊良湖、富山、飯田。現在震度3。諏訪、金沢、潮岬、松江、室戸岬、松山、広島、西郷、輪島、名古屋などとなっている。震度1クラスになると、関東地方にまで震度は広がっている。かなり広範囲な地震ということが言えらると思う。さて震度6の烈度を記録した神戸だが、神戸のホテル・神戸に先ほど聞いたところ、非常にかなり揺れたということで、棚からかなり物が落ちたと。それから、お客さんは、各階のお客さんが1階のフロアへ集合してもらったと。そのほか、ガラス窓がかなり破れているのではないかと。それから、停電もあり真っ暗な状態である。現在客がロビーに避難をしており、箇所によっては水漏れも起こっているという状況。では大坂のOBCラジオ大阪水野アナウンサーに聞いて見たいと思う。近畿地方では、ほんとにこれだけの大規模な地震というのは久びさ。

(水野) そうですね。若い人たちにとっては、おそらく初めての体験といっても……。 (略)

(男性アナ) 火曜日のコメンテータは、ノンフィクションライターの塩田潮さん。おはようございます。塩田さん、出身地が高知？

(塩田) ええ。

(男性アナ) 高知、ちょっと今回震度からすると、少し震度6、あるいは震度5の烈震、強震に比べると、高知はそれほどでもないという状況だが……。しかし、近畿圏を中心に、これほど大きな地震というのは記憶ありますか。

(塩田) 私が2歳か3歳の頃に南海大地震というのがあったそうだが、親などからよくその話を聞いたけれど、この地震と比べてどっちが大きいかというのはよくわからないけれど。

(男性アナ) いま現在、昨年暮れの北海道の地震と、それから、年が明け、関東では伊豆諸島を中心に、震度3クラスの地震があって、北のほうからだんだんと震源地が南のほうに下がってきたと。いま現在この放送をしているのは、東京の文化放送だが、一番関東に住む人が非常に不気味に感じていたのが東海地震なり、東京直下型地震じゃないかと思うが……。

(男性アナ) 今度はそれを一足飛びに、今度は名古屋とか近畿圏でも小さい地震は起こっていたが、今回は神戸が震度6で……。

(男性アナ) 淡路島が震源、それも20キロ。このへんは、後ほど地震の専門家のコメントなどももらえたらと思うが、ちょっと地震予知が非常にむずかしいという状況だ。ということで、きょうはこの時間、内容を大幅に変更して、地震のニュースをお伝えしているが、いままで入った情報をもう一度繰り返してお伝えすると、(繰り返し)

先ほど、大阪のOBCラジオ大阪の水野アナウンサーのリポートがあったが、ラジオ大阪でもかなり激しい揺れを感じたということで、先ほどおよそ5-6分前、大阪市内で6件の火災が発生したという情報が入っている。また、大阪の交通関係はかなり乱れている、それから、停電も現在起こっているという状況だそうだ。震度6の烈震を記録

しま神戸のホテル・神戸に聞いてみたら、神戸市内のこのホテル神戸、棚から物が落ちてきて、お客さんが1階のフロアへ集合した。かなりガラス窓が破れているという状況で、現在はお客さんは1階のロビーに避難していると。それから、場所によっては水漏れも起こっているということで、大事なライフライン、水道、電話、電気、このへんが、いま近畿ではちょっと情報が確実なものはつかめないが、今後だんだん夜が明けていくと、かなり混乱した状態が予想されるのではないかと思う。このあとも各放送局から、それぞれ詳しい情報などをお伝えしていく。以上、この1時間、「ニュースしほりたて」でした。

(CM)

(男性アナ)「ニュースしほりたて」をお送りした。

(内田)時刻は6時53分30秒というところ。この前の番組でもずっとふれていたが、地震が震源地が淡路島ということで、北海道のほうで大きな地震が年末にあり、年明けてから、東京のほうで、群発地震というか、身体に感じないような地震が非常に増えているという。そういう情報は入ってきていたが、南のほうにどんどん下がってきた。淡路島が震源地ということで、神戸で烈震というのが、強い揺れで、震度6というのを記録している。それから、豊岡、彦根、京都が震度5。大阪でも震度4ということで、いろんなところで揺れがあり、広範囲だ。

(赤瀬)そうですね、近畿地方全域で。

(内田)スタジオでは、現在、私、紹介しなかった、内田オサムと、それから……

(赤瀬)赤瀬ミホです。

(内田)このあとの「とっておきはつらつワイド」で、また、このまま行くけれども。ニュースの時間だが、その前からやろうということで、スタジオの中に入ってお伝えしている。ちょうど私、番組の準備をしているところだったが、下からドドッと突き上げるような、あまり横揺れはなくて…。

(赤瀬)どちらかといえば下から…。

(内田)バーンと下からくるような揺れだった。すごい揺れだった。いま、また、ちょっときている。

6時台から、我々も地震情報ということでしゃべっているが、その中でも3回から4回ぐらい余震があり、揺れたかどうかすぐわかるようにと、スタジオにコップを持ち込んで、水を入れている。すぐに揺れがあった場合、わかるようにしてある。地震があったときにどうしたらいいか。心得を、みなさんきっちりと頭に入れておいてほしい。地震が発生したら、すぐ火を消してください。すぐに火を消してください。それから、ガスの元栓を締めてください。ガスの元栓を締めてください。それから、ドアを開け放しにしてください。どこか必ず開けておいてください。じゃないと中に閉じ込められますので。と言いなから、スタジオの周りを見渡すと閉めた状況。ちょっとミホちゃんどこか1ヶ所開けておいて。これじゃ、地震があったとき、我々も閉じ込められちゃうので、1カ所どこか。慌てて外に出ないでください。慌てて外に出ないでください。大きな地震になると、地割れとか、映画で見たことがあるかもしれませんが、そういう心配もなきにしもあらず。なにかとんでもない大きな木とか、建物とか、そういうものが倒れて

くる危険性もあるので、揺れたということで、すぐに慌てて外に出ないでいただきたい
と思います。室内で丈夫なもののそばに身を寄せてください。それから、交通関係は、
これだけの大きな地震だからほとんどとまっている状態。J Rの山陽新幹線はとまっ
ている。J Rの関西地区全線も点検などがあると思うので、とまっている。私鉄もすべ
とまっている。地下鉄も先ほど情報が入ってきて、とまっている状態。高速道路も現在
近畿地区で全線通行止め。5時46分頃、強い地震があった。京阪もそう、私鉄はすべ
通行止め、全線運転見合せという状況。（各地の震度繰り返し）

ミホちゃんはずっと関西で育ってきた……。

（赤瀬）そうなんです。

（内田）今回のこの大きな地震というのは、当然初めての経験でしょう？

（赤瀬）初めてです。でも、私どうなんでしょう。まだ、車でゆっくり走っていたの
で、揺れというよりは、ふわふわという状態でしか感じなかった。朝の番組に何けて、
阪神高速をおりて…。おりて、九条のところでおりて…。すぐに地震に遭った。まだス
ピードがゆっくりでしたので、高速道路だったら、もっと怖く感じたと思うんだが。

（内田）地震情報が入り次第、速やかにお伝えするので、このあともラジオ大阪ダイ
ヤルチューニングはそのままにして、1314k Hzに合わせて、ずっとお聞きいただきたい
と思います。地震には十分気をつけて。余震もまだあると思う。気をつけください。

（CM）

「とっておきはつらつワイド」、大変な地震があった。みなさんのところ被害はどう
でしょうか。

今朝5時46分頃、近畿地方を中心に強い地震があった。ちょうど私朝の番組、この
番組に備えて、ニュースのファックスをとったり、ニュースをまとめたりしてたが、報
道の大きな機械が、下からドドッと突き上げるような揺れがあって、水野アナウンサー
がきょうは宿直勤務で、地震があったということで、すぐにスタジオのほうに走っていっ
た直後、報道にある大きな60キロから70キロぐらいある、天井まで届こうかという
大きな機械が、倒れてきた。水野さんはスタジオに向かったあとだったから、よかった
が。それから、テレビは何台かあるが、それも倒れちゃった。ラジオ大阪があるのは、
弁天町の現状線、それから地下鉄中央線の弁天町駅近くのオーク2200ハープ館、8
階建ての、スタジオは4階部分だが、窓がパッと開いた。これは、そういうシステムに
なったんでしょうか。揺れてしばらくしてパッとドアが開くようになっている。地震が
あったときは、どこか窓が開かないといけないようだが…、まだまだ惨たんたるラジオ
大阪の社内…、すごい。カセットテープが落ちてたり、もうすごい。散乱している。う
ず高く積まれていた、テープなどが散乱。それから、目覚まし時計がめちやめちや。み
なさんの引き出しが全部開きっぱなしになっている。（これまでの情報まとめ）

さて、みなさんのところはどんな被害が出ているのか、どんな状態だったのかという
ことなんです。O B Cの報道部吉村記者に電話をつないでみる。吉村さんのところは
大阪市内だったと思うが、様子を聞いてみたい。吉村さん

（吉村）大阪市内の東住吉区に住んでいるが、交通機関、最寄りの駅は、近鉄南大坂
線の北田辺駅だが……。私も寝ている最中だったが、さすがにこの揺れで起きた。家の

周辺だが、地震がちょっとおさまる6時過ぎ、朝早い車が動きだしている音とか、通勤に出かける人の音がほぼ平静に戻ってきたなという感じがして、私も会社に出動しないといけなと、とりあえず駅へ行ってみた。そうしたら、駅の周辺は公衆電話に人が群がっている。電話がかかりづらい状況だ。それと電車が運行を停止している。しかたなく家や会社に緊急電話を入れる人で公衆電話に群がっている。

(内田) 吉村さん、電話はどこから？家からですか？

(吉村) そうです。家からはすぐかかりました。地震直後にすぐ報道部へかけたが、すんなりかかった。まだ早い段階だったから…。せっかく改札まで来たのに、しょうかないと家へ引き返す人の姿も見えた。うちの近所の銀行は、店内で警報ブザーがずっと鳴りっぱなしになっているみたい。

(内田) ラジオ大阪でもしばらく鳴っていた。警報をとめるのにどうしたらいいかと大騒ぎしてたんです……。

(吉村) うちは猫を飼っているが、地震の瞬間は、猫もびっくり仰天したみたいで、もう右往左往、どうしたらいいんだみたいな、そんな感じがあった。

(内田) 何か大きなものが倒れているとか、そういう状況はない？

(吉村) 外観的な変化はなにもない。

(内田) 最近の建物はやっぱり頑丈にできている。

(吉村) うちもちょっと古い建物、木造だが、揺れはだいぶあったが、ただ、家の中の水屋の食器とか、やっぱりだいぶ飛び出しそうですかね。(一部略)

(内田) 地震の時、寝ていた？

(吉村) はい。僕は木造の2階に寝ているが、これは相当大きいという感じがした。

(内田) あと心配されるのが、火事ですね。救急車とか消防車とか、サイレンの音が聞こえるとか？

(吉村) それもまったくない。ですから、地展があつて、しばらくすれば、何もなかったみたいな、近所の人もべつに家の周辺で話し合っているとか、そういう感じもないし。

(内田) 時間が5時46分ということで、電車とか、ラッシュアワーで脱線したりとか、そういうことがあったら、もうえらいことでしたけれど。もうちょっと時間が過ぎていると、6時、7時台ぐらいになっていると。ちょうど起きかかって、みなさんストーブに火を入れたりとか。朝食の準備で……。

まだ、つける前だと思うんですが、火をつけたりとこともあったんじゃないかと。これから被害がどの程度入ってくるか、かなりあるんじゃないかと思うんですが、若干救われたかなという気はする。揺れのあと、どういう行動を吉村さんはとりました？

(吉村) とりあえず私の場合は、いま時間何時だろうと時計をちょっと見た。

(内田) やっぱり、そのへんは報道部の記者。

(吉村) それと、すぐラジオのスイッチを入れた。ちょっと報道のほうに電話入れて。うちの家の者は、水をためようと…。水の出はだいぶ悪い。水洗トイレへ行ったが、水がすぐすんなりずっと流れなかった。それと先ほど言いました近鉄の南大阪線は、6時50分ぐらいから運転再開の情報が入り、駅の改札を入れはじめた。ちょうど7時ぐらいに電車の通過する音も聞こえた。ダイヤどおりにはいかないと思うが、動きだした。

家の近辺で気づいたことというのはそんなところで。

（内田）どうもご苦労さま。また、何かあれば、お願いしたい。大阪消防局のまとめによると、現在、大阪市内では住之江区内で火災1件。13件のガス漏れが通報されているそうだ。やはりガス漏れがあった。また、神戸市内でもガス漏れが多数通報されている。神戸市灘区に住むOBC社員秋山さんから報告によると、神戸市灘区のあるところでは、現在、停電中という。室内は家具などがほとんど倒れているという。市内の電話も不通になっているということで、近所で火災が発生しているという。（サイレンの音）サイレンの音が聞こえている。（震源地、各地の震度繰り返し）いま消防局の司令室の音が聞こえてきているが……。〔消防＝7時18分現在1件発生しております。1件発生しております〕（内田）やっぱり、1件ですかね。（消防＝生野区、住古区、浪速区、住之江区、西区、西淀川区、北区、淀川区、福島区、大正区、以上の10行政区で火災が発生）

（内田）どんどんとやっぱり火災が入っている。ラジオを聞いている人に、この消防局からの、ラジオ大阪報道部にすぐ入るようになってきているが、緊急通報という形で、ああいう形で入ってくる……。かなりのところで火災が発生している。スタジオに水野アナウンサーが入ってきた。新しい情報が入ったと思う。伝えてもらいたいと思う。

（水野）先ほどの奥田さんからのですか…、追加だが、いま電話が入った。実は阪神高速湾岸線の芦屋付近で、芦屋ランプから神戸のほうへ数百メートル行ったところだそうだが、いま明るくなったので、外を見たら、湾岸線の橋げたが外れていると。

（内田）ええっ？……。

（水野）落ちているのではないけれど、外れているという情報が入った。（内田）外れている。

（水野）ですから、これは湾岸線は当分復旧に時間がかかるんじゃないかと思う。

（内田）わかりました。湾岸線の橋げたがちょっと外れかかっているということで、やっぱりかなりの揺れですよ。

（赤瀬）外を見てますと、車のほうがかなり動きはじめているが、余震があるかもしれないので、くれぐれもラジオを聞いていてください。お願いいたします。

（内田）車を運転されてる方で、地震があったときは、速やかにとめて、速やかですね。急ブレーキというのはまたちょっと怖いですが…。速やかにとめてですね、そして、左のほうにとめてください。車を運転で、地震というのも怖いですから。（一部略）「とっておきはつつつワイド」の時間だが、きょうは内容を変えて地震情報を中心に、どんどんと地震情報が入れば、お伝えしていきたいと思う。吉村さんの話では、近鉄は動きだしたということだが、まだ、報道部のほうにはきっちりした情報は入っていない。JRの新幹線、山陽新幹線、それからJRの近畿地区は、全線運転を見合わせている。私鉄も、近鉄はちょっと動きだしたということだが、南海、京阪、阪急、阪神そのほかいろいろあるが、全面運行を見合わせている。5時46分頃に近畿地方を中心に地震があった。近畿でこれだけの強い地震というのは初めて。

（内田）私、近畿に来て20年ちょっとになるが、生まれは東京だから、若いころは何回か、地震の経験はあるが、それでもこれだけ大きな地震というのは2回目ぐらいだ。

慌ててしまうんです、人間で、すごく。もう何回も言っているが、火はとめてください。それから、ガスの元栓を締めてください。きっちりと締めてください。ドアは出られなくなるといけなから、必ずどこかは開けっぱなしにしておいてください。それから、慌てて外に出ないで、室内で丈夫なものかげに身を寄せてください。室内で丈夫なもの陰に身をひそめてください。と言っても、大きながっちりしたタンスだからと思って、大丈夫だと思って、身をひそめると、上からドドッとくる。なんかよくタンスの上に乗せたりする。上のものはおろしておいたほうがいい。「お父さん、冬物」と書いたようなものが、バツと落ちてくる危険性もありますので。上に何があるか、確かめてから、じょうぶなもののそばに身をひそめてほしいと思います。また水野さんがスタジオに入ってきた。

（水野）先ほどの奥田さんからの追加だが、芦屋市の浜川に住んでいるが、だんだん明るくなって外を見ると、一般道が浮き上がった状態、各所で。水道管の破裂、学校の校庭にも亀裂が入っていて…。それで、周辺の住民は学校などへ避難をしているということで。先ほどの情報を繰り返してお伝えすると、阪神高速の湾岸線、芦屋ランプ付近で橋げたが外れているということで、ご注意ください。それから、近鉄は、先ほど広報から連絡が入り、全線一応運転は見合わせているが、点検が済み次第、徐々に運転を再開するという情報。ただ、その時間が現場各所によって違うので、動きだすところもあれば、まだ当分というところもあると思う。（一部略）

（内田）時刻は7時19分30秒。「とっておきはつらつワイド」、いつもと内容を変えてお送りしている。境港の石川さんに電話をつないで聞いてみたい。

（内田）様子をちょっと教えていただきましょうか。石川さん。いつもだと、「いけいけ情報」ということで魚の話をするところだがきょうは地震があったので、そちらはどんな揺れだった？

（石川）私は場内にいて、コンクリートの中だが、かなり柱も揺れて。まだ外のほう、町のほうは聞いてないが、一時競りが中断して、外に避難する人もいたり、（笑）こちらは震度4だった。（一部略）漁港の様子だが、船のほうは別段異常なし。岸壁が壊れるとかそういったことはまだ入っていない。（略）

（CM）

（内田）今朝5時46分頃、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。一番揺れたのが神戸の震度6、大阪は震度4だった。

（交通関係＝交通センター）交通センター。名神高速道路が西宮と彦根の間で通行止め。中国道やそのほかは近畿圏内、中国道や近畿道、西名阪道、阪和道など、近畿圏内ですべて通行止め。阪神高速道路は大阪側、神戸側すべて止まっている。一般道路では通れないところ、十三大橋、こちらが陥没のため通行止め。そのほかでも信号が消えているところもある、交通がまひしている。高速道路が通行止めとなっている影響で、下の道、一般道路の渋滞が長くなっている。中央環状線は摂津市の一津屋からおよそ10キロの渋滞。新御堂筋は南行きが新大塚駅付近から断続的に桃山台を越えて渋滞。国道26号線も西成区内の花園先頭で5キロほどの渋滞。国道1号線など、ほかの幹線道路もかなり長い渋滞となっている。

(内田) 西内さんは交通センタターにいるときに揺れた？

(西内) いえ、私は家にいるとき。私は平野区。朝の支度をしていた。25号線沿いなので、家がトラックとか大きいのが通ったときに揺れる。はじめ、それかなと思った。かなり長いし、もう怖くて怖くて、食器類も外に出していた分は割れた。

(内田) 時刻は7時28分を回ったところ。

(赤瀬) サンケイ新聞ニュース。水野アナウンサーお願いします。

(水野) だいぶ落ちついてきて、いまのところ大きな余震がない。まとめてお伝えすると、今朝6時前、近畿地方を中心に神戸で震度6の烈震を記録するなど、広い範囲で地震があった。(各地の震度繰返し) 兵庫県芦屋市内全域で少なくとも20件の家屋が倒壊し生き埋めになっているという情報もある。少なくとも2カ所で出火したという。このほか窓ガラスが割れるなどして各地でけが人が出ている模様で、救急車の出動も相次いでいるという。さらに神戸市や西宮市内の広い範囲で停電や断水が発生、ガス漏れがあるという情報もある。(交通機関略) 先ほど芦屋からも伝えた湾岸線で橋げたが外れているという情報がある。いま入った情報で、神戸市の住民の目撃によると、市の中心部三宮周辺で一部のビルが倒壊、アスファルトに亀裂が入って、ビルや商店のガラスが割れて、道路に散って足の踏み場もない状態だという。十三大橋南詰めで、国道176号に段差ができ、十三と中津の間が通行止めとなっている。大阪市中央区のコスモ証券ビルは地震のため、堺筋側の窓ガラスがほとんど割れて破片が道路に散乱しているという。大阪市消防局のまとめによると、現在、大阪市内で火災が10件発生しており13件のガス漏れが通報されている。神戸市内でもガス漏れが多数通報されているという。三陸のはるか沖地震でもそうだったが、大きな地震があつて、そのあと余震がまたかなり大きなものが来る。だから火の元には十分にご注意を。それから、電話は、ご心配の方がいるかもわからないが、できるだけ控えてほしいと思う。緊急電話などもあるので、できるだけ電話はお控えほしい。

(CM)

(内田) 気象協会の林さん。気象協会のほうはどうだった。

(林) めちゃめちゃです。ここは17階建ての15階にある。地上65メートルの高さ。すごい揺れです。とにかく、もう柱に抱きついていてるだけ。コンピュクやテレビが棚から落ちて、ロッカーは倒れ、とにかく正常にまだ戻っていない、現在も。OA機器は半分しか動いていない。いま正常ではない。おそらく配線どこかで切れているのか、接触が悪くなっているのか、とにかく業務ができない。放送ラインはいまのところ大丈夫だが。おそらくこの合同庁舎の中、まだ出勤してきている人はいないが、中を見たらもう大変な状況。高層ビルは地震のときには揺れるようにつくってある。これ、揺れないとつぶれるわけです。

(内田) そのへんの話はある程度頭に入っていて、安全につくられていると思いながらも、すごい揺れになるから。

(林) たとえば、コンピュータもふだんから固定しているところはいいが、うちは固定していないから。ですから棚の上に乗っているやつがすべて落ちて、大きなテレビが落ちて、ほかの機械にも当たって。とにかくみなさんの家庭でもそうだが、だいじなも

のは固定しておかないと。

(内田) 天気予報もちょっと聞いておきたい。天気はどうか。

(林) (天気予報) それと地震に関して加えると、大阪でおそらく震度4は久しぶりじゃないかと思う。10年ぶりじゃないかと思う。昭和60年の1月の…とにかく正月明けですぐ。震度4というのがある。大阪はほとんど震度1か2で、大阪管区气象台があるところが上町台地ですから、岩盤が強いのでそんなに揺れない。たとえば、私のいま住んでいるところが守口。自宅の近くは、昔は田んぼ、レンコン畑とか地盤の弱いところだから、うちが3階だが、棚からいっぱい落ちて、ガラス物が割れて、一応それぐらいで被害はすんだが、とにかくすごい揺れだ。おそらくここと変わらないぐらい揺れたんじゃないか、地盤の強いところと弱いところがあるから、地盤の強いところに住んでいると大したことはない。

(CM)

(天気)

(CM)

(内田) 7時38分ぐらいだと思うが、また地震があった。ラジオをお聞きのみなさんすぐに火を消してください。すぐに火を消してください。ガスの元栓を締めてください。ドアを開け放しにしてください。開け放してください。閉じ込められるといけなから、ドアを開け放してください。それから、慌てて外に出ないで、室内で丈夫なものそばに身を寄せてください。それから車を運転されている方は、速やかに車をとめて、道路の左端のほうにとめていただければいいと思う。また、かなり大きな地震があり、私はテーブルをガツと握りしめた状態で、態勢を低くしていましゃべっている。また余震があった。まだまだ油断できない。電車はちょっと動き出したところもあるようだが、水野さんがまたスタジオに入ってきた。

(水野) 大阪府からの情報。池田市、大阪の北部、池田市で家屋倒壊という情報。池田市栄本町で、多田畳店です、木造2階建てだが、全壊しているという。3人家族で2人逃げだしているが、1人は閉じ込められている模様という。中から返事があった、生存している模様という。いま倒壊は大阪府からの情報ではこれが初めて。淡路島が震源地で5時46分頃に一発ドカーンときて、そのあと、小刻みにちょっちょつとあったけれども、さっききたのが一番大きかった、余震としては。

お聞きの放送は1314kHzラジオ大阪。ふだんですと、「とっておきはつらつワイド」で、音楽たっぷりに明るい話題を中心に伝えているけれども、きょうは地震で、番組の内容を変更している。

(CM)

(赤瀬) 時刻は7時42分になった。ニッサン・フラッシュジャーナル。

(CM)

(内田) 今朝の5時46分頃に震源地が淡路島という大きな地震があった。(地震情報繰り返し) そのあと、何回か余震があった、7時38分頃、ちょっと前だが、また大きな揺れがあった。火を使っている方はすぐに火を消してください。火災もずいぶんと発生しているようだ。ガスの元栓もきっちりと締めてほしい。

7時5分ぐらいにOBCの吉村記者が、大阪市内の様子ということでレポートを入れてもらったが、吉村さんはいま天王寺にいる。吉村さんにそちらの様子をまたレポートしてほしいと思います。(吉村)いま天王寺です。近鉄線が多少ダイヤが狂いながら動きだした。これも点検のため、1時間ぐらい通常ダイヤよりおくれて、乗ると、ラッシュで満員、ギューギュー詰めの状態。阿倍野、天王寺に着いたが、そこからはJRも地下鉄も南海も動いていない。せっかく阿倍野まで出てきたのに、どうしようということで、もうこの阿倍野ターミナルのへんが人であふれている。JR天王寺駅構内、阿倍野駅。公衆電話も人が列をつくっている。待つ人が多くて。阿倍野のアポロビルに来て、そこから電話している。タクシーもそんなに動いていない。一般車はだいたい動いている。バスを待つ人の列がだいたい増えている。地下鉄の改札、JR駅の改札周辺には相当人があふれている。バス待ちの人も多い。近鉄の百貨店の1階入口のシャッターの上の天井あたりから水がだいたい漏れている。1階の入口のフロアあたりがだいたい水浸しになっている。

(内田) ビルの窓ガラスが割れて散乱しているところもあるなんてことだが、そのへんではどうですか、そういう被害は。

(吉村) そういうのは、あまり見ない。

(内田) やっぱり強いなあ、最近の建物は。

(吉村) 近鉄の阿倍野百貨店は相当高層なビルだが、とくに被害はない。

(内田) 7時38分頃だと思うが、結構強い余震をこちらでは感じたんだが……。吉村さんどうでした？天王寺のほうは。

(吉村) いま、この駅で電話をかけているビルの関係者の方がいるが、「いまちょっと揺れたやろ」と話している。

(内田) ビルの中ではどうですか。なにかいろいろ倒れているとか？

(吉村) べつにない。ただ、電話を探して来た人たちが、横の電話でかけている。

(内田) 鉄道がすぐに動かない方がいいような気がする。

(吉村) 動いても、まだどこかで完全にコンタクトできてないという感じだから

(内田) 動いている途中、人がたくさん、当然乗っている時、地震がもう1回強烈なのが、震度4ぐらいのがきたら脱線しますよ。

(吉村) そのへん、JRも慎重に点検を図っているんじゃないでしょうか。

(吉村) 通勤電車の中の雰囲気は、ほとんどみんな押し黙った状態で、べつに地震のことを話したりという感じじゃない。たまに、僕の耳元で、隣の2人ずれが話していたが、この頃、地球はちょっとおかしいぞ。

(内田) 吉村さんどうもご苦労さま。続いて、西宮にいるOBCタケタニ記者に話を聞く。そちらはどんな状況？

(タケタニ) 西宮の北部だが、夙川のちょうど北あたりに住んでいるが、このへんは被害がすごい。うちはちょうどマンションの6階だが、すごい揺れで、これはほんとに死ぬかなと思った。冷蔵庫はひっくり返っているわ……。もう家の中はむちゃくちゃ。家族が大事なので、とにかく余震というか、次の地震がくれば、ほんとに死んでしまうなと思いました。もちろんエレベーターはとまっているが、着の身着のままです。

出しました、家族を。私も出て、もちろんまだ真っ暗。会社に連絡しようとしたんですが、電話はすべてだめ。車がなんとか動く状態でしたので、近くまで、安全なところまで避難はした。余震はこないだろうと、一旦また家に戻ったが。

(内田) 安全なところというのは公園？

(タケタニ) そうです。それで、いま電話しているのがちょうど阪急の夙川駅前から、公衆電話からかけている。家屋の倒壊が、この夙川駅の北、ほんの40～50メートルのところで、家がまったくぺしゃんこにつぶれている。

(内田) ペンしゃんこになっている、家が。

(タケタニ) 下敷きになっていると思う。

(内田) 地震が急にきたから。ほんとに下敷きになっている可能性が高い。

(タケタニ) このあたり、火の手というか、煙が上がっているところもあるので、救急車等、消防車、いち早く駆けつけてくれないと、かなり殺気だった様子。私もいまここで電話しているが、後ろに待っている方が、早くどけろという感じでせつづく。(内田) 何人ぐらい並んでいる？

(タケタニ) 3人ぐらい並んでいるが、早くどけという感じだ。

(タケタニ) まさか、これが放送に向けて、記者というのが、わかってもらえてないから。

(赤瀬) 流れているというのがわからない。

(内田) 子どもさんは、タケタニさんのところはいくつ？

(タケタニ) 小学校の6年生とまだ幼稚園だ。

(内田) どんな感じだった？子どもさんは。

(タケタニ) 子どもは震え上がって、お父さん、怖いよ、という感じだった。後ろにずっと並んでいるから、気を遣わなければいけない。緊急の電話かもしれないから。

(内田) タケタニ記者にレポートをしてもらった。

(CM)

(内田) 今朝5時46分ごろ、近畿地方を中心に広い範囲で強い地震があった。神戸で烈震。震度6。大阪は震度4。震源地は淡路島。マグニチュードは7.2と推定されている。いつもの番組内容と変えて、きょうは「とっておきはつらつワイド」地震関係のニュースをまとめ伝えている。水野アナウンサーがスタジオに入ってきてくれた。

(水野) 先ほど伝えた池田市で家屋倒壊、3人家族で住んでおり2人は逃げ出して助かったと、もうひとり生き埋めになっているということだった。生き埋めというが、中に生存していたということだが、これは男性を無事救出したという情報がいま入ってきた。よかった。(拍手)

(水野) いま続々と情報が入っている。先ほどの余震だが、7時38分ごろ地震があった。震源地は淡路島で……。

(水野) 震源の深さは20キロ、マグニチュードは4.9と推定されている。奈良が震度4の中震。大阪でも震度3の弱震。同じく3は、京都、彦根、舞鶴、豊岡、津となっている。

(内田) 3と4と比較すると、

(赤瀬) 4 のほうばかりひどかった。

(内田) 4 のほうが、さっきのが3 だったら、最初のは5 か、6 ぐらいに私感じた。

(水野) 私も地震の経験上から言って、これは大阪は4 ということはないんじゃないかと。5 はいっているんじゃないかなと思ったが、発表では、最初の地震は4 となっていた。

(水野) 内田さんと同じように地震をたくさん経験しているだけで、だいたい推定でいくつぐらいがわかるけれども、あれは4 以上のものがあったんじゃないかと思う。

(内田) だから、5 とか、6 という、やっぱり神戸の震度6 というのは、強烈だ。

(水野) 続々と、順不同になるが、先ほどタケタニ記者がお伝えした兵庫県だが、芦屋警察署などによると、芦屋市内で30 戸以上が倒壊、かなりの人数が閉じ込められている模様という。鉄道関係は、阪急電鉄によると、神戸市の阪急神戸線、三宮駅近くなど3カ所で電車が脱線、けが人2 人が出たという。地震による停電のため、現在、南海電鉄の急行電車、関西国際空港と大阪府泉佐野市を結ぶ空港連絡橋の上で立ち往生しているという。この電車には乗客4 人が乗っているという。大阪市では火災12 件が発生しているという情報が消防局から入ってきた。この数字は当然どんどん伸びていくと思う。大阪管区气象台によると、先ほど起きた地震は昭和23 年の福井地震のマグニチュード7.1 以来の規模だということ。

(内田) 水野アナウンサーに、いま入ってきたというような形で、新しい情報をまとめて入れてもらったが、さっき震度3 とか震度4 とかという話をしたが、これは決まりがある。だいたい、どれぐらいの揺れを感じたらならば、震度いくつにするというのはあるが、震度3 というのが弱震になる。家が揺れて、家屋が揺れて、戸や障子がガクガクと揺れて、電灯のような吊り下げものが相当揺れて、器内の水面の動くのがわかる程度の地震。だからコップに水入れたら、それが少し揺れるのがわかる程度の地震。これが震度3 だそう。これよりは、さっきちょっと揺れたかなという感じがした。震度4、これ中震ですか、5 時46 分にあったのが震度4、大阪の地震です。神戸は6 もあったんですか、震度4 というのが中震。家の揺れが激しく、すわりの悪い花びんなどは倒れ、器内の水は溢れ出ると。ここまでくると震度4 になるそうです。また、歩いている人にも感じられ、多くの人は戸外に飛び出す程度の地震と。これが、震度4。では、震度6 というのはどうなっちゃうのかという……。

(赤瀬) 神戸ですね。

(内田) 神戸が震度6 の烈震だったが、家屋の倒壊が30 % 以下で、家がやっぱり倒れちゃう。ただ、30 % 以下で、山崩れが起き、地割れを生じ、多くの人々が立っていることかできない程度の地震。これが震度6。震度7 までしか震度表というのではない。

(内田) 震度表でも一番高いのが震度7。震度7 になると激震になるのだが、家屋の倒壊が30 % 以上に及んで、山崩れ、地割れ、断層などの生じると。6 と7 とそれほど差がないのだが、これは相当な神戸のほうは揺れがあって、このとおり家屋が倒壊したりしているということだ。午前5 時46 分ごろ、近畿地方を中心に地震があった。さっきも、ちょっと揺れたのかなあ。

(赤瀬) 少しだが。

(内田) 少し揺れた。また余震がちょっとあったかもしれない。震源地が淡路島、震源の深さが約20キロ。5時46分にあった地震のほうだが、淡路島で、震源の深さが20キロ、マグニチュード7.2という話をしたんだが、2回目にあった大きな揺れです。あっ、また下からきてますね。ググッと揺れてるけれども、まだ揺れてますか。

(赤瀬) はい。

(内田) さっきも水野さん入れてくれましたけど、やはり余震のほうも震源が淡路島だそう。震源の深さも20キロというから、同じところが震源地になっているようだ。電車なども動いているところがちょっと出ているというが、ちょっと脱線などが入ったりして…

(内田) あまり無理にこれを動かさないような気がします。また、大きな揺れがあったときはすぐ火をとめてください。それからガスの元栓を締めてください。それから、ドアは開けてください。どこか必ず開けてください。我々のスタジオも一つドアを開けている状態です。それから、慌てて外に出ないで、室内で丈夫なもののそばに身を寄せてください。それから、車を運転させているかたは、速やかにとめて、道路の左端のほうにとめていただければいい。だけど、震度3ぐらいだと、外を歩いていても感じないですかね。

(赤瀬) 外を歩いているかたがたくさんいると思うのだが。

(内田) 地震の情報入り次第お伝えする。

(CM)

(赤瀬) 時刻は

5. AM神戸

5時30分 「おはようラジオあさ一番」

(能崎まゆみ)

つづいては、お目覚め体操・朝一番です。今日は肩の運動にチャレンジしていただきます。仰向けになってスタンバイ、お願いします。準備はよろしいですか。担当はライフスポーツKTV専属の野村健一郎さんです。(途中略)・・・はい、それじゃあ右手からいきます。ゆっくり右手だけを持ち上げて天井です。通過して頭の上に伸ばします。はい、今度は持ち上げてきて・・・

〔5時46分〕地震発生で5時46分55秒放送停止(正確には電波が音声に乗らない無変調状態) 13分05秒間放送中断

(午前6時00分) 時報(6時の時報電波に乗る)

(藤原正美アナ=女性) シャベりましょうか。はい。AM神戸のスタジオです。スタジオが現在ただいまの地震でこわれております。音声かとぎれております。情報が入り次第お伝えいたします。こちらはAM神戸558(ゴウゴウエイト)です。ただいまの地震のためオンエアが途絶えております。情報が入り次第お伝えしてまいります。こち

らはAM神戸558です。スタジオのものがすべて倒れておりまして、オンエアが出来にくい状態となっておりますが情報が入り次第お伝えしてまいります。どうぞみなさんも落ちついて火の元を点検なさって、こちらはAM神戸558です。ただいまの地震の影響でオンエアが、放送が届きにくくなっております。情報が入り次第お伝えしてまいります。どうぞみなさん落ちついてください。こちらはAM神戸558です。神戸で発生しました大きな地震のため、ただいま放送が中断されております。情報が入り次第お伝えしてまいります。こちらはAM神戸558です。（しばらく間をおいて）こちらはAM神戸558です。ただいまの地震で放送が出来にくくなっておりますが情報が入り次第必ずお伝えします。どうぞみなさま落ちついて行動なさってください。こちらはAM神戸558です。こちらはAM神戸558です。神戸の須磨のスタジオは壁が崩れ、本棚が倒れ、机の上のものが散乱した状態となっております。すこしガス臭い気配もしますが、どうぞみなさま落ちついてガスの元栓などを確認なさって、火の元も確認なさって落ちついて行動なさってください。情報が入り次第お伝えしてまいります。こちらはAM神戸558です。神戸須磨で起きた大きな地震がありましたので回線、電話回線などが途絶えておりまして、ただいま情報が入りにくい様子となっております。情報が入り次第お伝えしてまいります。（BGM音楽）こちらはAM神戸558です。神戸市須磨区にありますラジオ関西の外に出ますとたくさんの方が外に出てこられています。

（パーソナリティ谷＝男性）えー、いま、ほくも外から帰って来たんですけど、えーえー、AM神戸のまわりのマンションのブロックも崩れまして、住民の方々が不安げにいまここに出てきておられました。でもまだ真っ暗というような状況で、マンションのちょっと崩れかけました部屋に閉じこめられた方もおられるようですが、脱出の方法が、適当な方法が見当たらないということで、とりあえずは部屋の中におられる、こんな方もおられるようです。とにかくいまAM神戸の中はですね、壁も崩れまして、建物もほとんどが倒れ、2階、3階ですか、からの天井から水も漏れてまいりましたが、放送は一応いま出来る状態に復旧したということです。情報が入り次第詳しくお伝えしたいと思います。

（藤原）外に出ましたが壁が崩れた砂埃が舞い上がってしまっていて夜明け前ですので電気が全部消えているという状態です。真っ暗な中で不安げな住民のみなさんが外に出ていらっしゃるという状況ですが

（谷）火の元が気になるのですが、ガス臭いもスタジオの方まで来ていますが火の元をみなさん、くれぐれもまず気をつけていただきたいと思います。被害がどのあたりまで広がっているのかまだ詳しい情報が入って来ていません。JRの方はどうも動いているような感じですが、詳しい情報が入り次第お伝えします。（音楽）

（藤原）こちらは558ラジオ神戸です。地震の情報が入り次第お伝えします。神戸市須磨区のAM神戸、ラジオ関西の前はたくさんの方が避難しています。もしも、いま電話がつながったようですか。こちらはAM神戸558です。電話回線もつながりにくい状態となっています。外は砂煙が上がってたくさんの方が寝間着姿のままで毛布をかぶりながら避難しています。いま三上アナウンサーの情報によると、マンションの10階から外を見ると長田方面で火柱があがっているということです。こちらはAM神戸

558です。神戸でたいへん大きな地震がありました。もしも電話がつながりました。

(谷) 三上さんに電話がつながったようです。

(6時10分)

(三上) もしも。(藤原) もしも。

(谷) つながっていませんか。(藤原) 電話の回線もすこしつながりにくい状態となっています。

(谷) もしも、三上さん。ちょっとつながっていないようです。

(藤原) ただいま地震速報がありました。津波の心配はありません。神戸で起きた地震による津波の心配はない。地震情報が入り次第伝えていく。こちらはAM神戸558。地震の状況でスタジオ内がすこし混乱しているが、外には塀が倒れたり、マンションの1階駐車場になっているところが、1階がつぶれて車がペチャンコになっている状態というところもある。住民の方は寝間着姿でみなさん外の方に避難されているだ。

(6時13分)

(谷) いま地震情報が入って来たが、きょうの地震は発生が午前5時47分、姫路で震度4の中震、大阪も震度4の中震、京都が震度5の強震、京都が震度5の強震、和歌山が震度4の中震、名古屋で震度3の弱震、彦根で震度5の強震、

(6時14分)

(藤原) さきほど神戸市長田区タキタニ町の三上シンヤさんから電話があつて、三上さんは10階のマンションに住んでいるが、窓を見ると南側に5本ぐらいの火柱があがっているという。ただ砂煙がだいぶ上がっており、見えにくい状態になっているという。

(音楽=BGM=) 午前5時47分頃大きな地震があつた。この地震の津波の心配はありません。5時47分の地震の津波はありません。心配はありません。(音楽=BGM=)

(男性) もしも三上さん

(女性) もしも、まだ電話がつながらないようです。(音楽=BGM=)

(女性) いま神戸市西区の吉田ヒロコアナウンサーから情報が入った。神戸市西区のあたりでは揺れがあつたが本棚から本が落ちる程度、現在停電はしているが揺れは本棚から本が落ちる程度だったということだが、とにかく落ちついて行動してほしい。(音楽=BGM=) さきほど5時47分に地震があつた。各地の震度をお願いします。

(男性) 5時47分を中心に、これ地震情報が入って来ているのは、東は東京から福岡まで震度は震度が記録されたようです。とくに激しかったのが京都が震度5の強震、彦根も震度5の強震、和歌山が震度4、姫路も震度4、大阪も震度4の中震、名古屋で震度3の弱震、福岡は震度1、東京も震度1ということで、かなり広範囲の地震だったようだ。

(女性) 日本海側、福井でも震度4の中震、津でも震度4の中震となっている。

(男性) 徳島も震度4

の中震。今回の地震による津波の心配はありません。神戸市西区に住んでいる吉田ヒデコさんからの情報によると、神戸市の西区では揺れはあつたが棚から物が落ちる程度の揺れだったということだが、いま停電しているという。とにかく落ちついた行動をお願いします。

(女性) 神戸市長田区タキタニ町の三上シンヤさんからも情報が入った。マンション10階のから南側を見るとナガタ町付近で5本ぐらいの火柱はが上がっているという。砂煙が舞って見えにくい状態にはなっているが、火事も起きているようなのでどうぞ十分にご注意ください。(音楽=BGM=)

(6時17分)

(男性) いま続々と情報が入って来ている。まとめ次第お伝えする。なおAM神戸の職員の方で情報がある方は局の方まで電話をお願いします。ただいま国道2号線は須磨の社屋前から見ると車が渋滞してとまったままの状態となっている。

(女性) まだ日の出の時間ではないので暗い状況。不安はあるかと思うがみなさん落ちついて行動してください。まもなく明るくなって来ると思う。みなさん落ちついて行動してください。AM神戸5558、情報が入り次第お伝えしていく。(音楽=BGM=)

(6時18分)

ただいまいつもレポーターでお馴染みの旭堂南海さんから情報をもらった。東大阪市の住んでいるが、マンション5階から見限り市内で火柱は立っていないという。しかし大阪もかなりの揺れがあったということだ。大阪は震度4の中震だった。(音楽=BGM=)

(6時20分)

(藤原) 5時47分ごろ地震があった。この地震で津波の心配はない。放送中だった能崎まゆみさんです。(能崎まゆみ) ちょうど放送している最中に、体操の時だが、大きく揺れ、はじめはさほど大きな揺れにならないだろうと安心していましたが、だんだん横揺れがひどくなって座っていることが出来ない状態だった。大きな机の下に隠れてこのスタジオの中は大きな落ちてくるものはないので、そんな心配はなかったが、かなり大きな揺れで局の中を見回しても壁が全部崩れ落ちている状態で棚はひっくり返し、住民の方も足をガラスで切ってけがをしていると聞いた。

(女性) スタジオのなかはまだ土埃の匂いが充満しているが

(男性) いまAM神戸の岩崎アナウンサーが駆けつけてくれた。

(岩崎) いまちょっと報道から原稿が来たので。けさ午前5時46分ごろ近畿地方を中心に広い範囲で地震があった。気象庁によると、震度5の強震が豊岡、京都、彦根。震度4の中震が福井、敦賀、岐阜、鳥取、岡山、大阪、和歌山、高松、徳島などとなっている。また震度3は金沢、富山

(女性) すいません、こちらの方でお願いします。

(岩崎) スタジオ、だいぶ混乱していて、申し訳ありません。けさ午前5時46分ごろ近畿地方を中心に広い範囲で地震があった。気象庁によると、震度5の強震が豊岡、京都、彦根で、震度4の中震が福井、敦賀、岐阜、鳥取、岡山、大阪、和歌山、高松、徳島などとなっている。また震度3は金沢、富山、松江、山口などとなっている。気象庁ではこの地震による津波の心配はないといっている。わたし熟睡していたが、ドーンというので目がさめ、最初に来てから2-3回余震があった。その間、家を見ていたが、すわりの悪い本棚が全部ひっくりかえって小さなテレビが棚の上から落ちてといった状況だった。わたしが住んでいるのは須磨のAM神戸の北側の団地だが、団地はそんな被

害はないが、停電して断水し電話も通じない。まったく連絡がとれない状態。飛び出して近所の方に様子を聞いたら冷蔵庫の扉が開いたとかいった被害で、火災とかそういった情報は入っていなかった。車で出てきたが、朝の6時という、もう少し車が走っていると思うのだが、あまり走っていない状態。須磨の近辺ではビルがつぶれた状態があった。土塀とか煉瓦の塀などは全部倒れている。

(男性) 道路は歩ける状態？

(岩崎) 大きな舗装道路は大丈夫。震源が淡路のようだが。明石海峡大橋の工事中のあたりが震源のようだ。

(男性) 須磨は震源の近くということになる。2号線は局のすぐ南で車がとまっているようだが。

(岩崎) 信号が全部とまっているので、全部徐行しているからだと思う。ちょうど阪神高速が見えるが、車は流れることは流れている。強制流出になっているかもしれない。

(男性) けさ5時46分～47分にかけて近畿地方を中心に強い地震が発生した。震源地は明石海峡付近、震源は淡路島の北端だという。淡路島の北端ということだから、いま明石海峡大橋の工事が行われている、そのあたりとみられる。震度情報だが、京都、彦根あたりが震度5の強震。震度4の中震が大阪、姫路、和歌山といったところ。

(女性) 震度4の中震は福井、敦賀、岐阜、鳥取、大阪、和歌山、高松、徳島などとなっている。震度3は金沢、富山、松江、山口などとなっている。気象庁では、この地震による津の心配はないという。

(岩崎) 神戸市の垂水区に住んでいる国広アナウンサーから電話で情報が入り、垂水というところちょうど目の前が明石海峡で震源地と思われるところだが、7階のマンションで上から見たところ真っ暗でなにも見えない。懐中電灯を持ってうろうろしている様子がわかる。家の中の本棚はすべて倒れてめちゃくちゃな状態だという。いままた余震があった。

(男性) またすこし揺れているようだ。まだ余震の心配もあるので、みなさん落ちついて行動をお願いします。環状線のモモダニにいる社員から連絡が入った。地下鉄の環状線はいま自家発電で動いているが、このままいくと、あと少しで電気が消えるという。

(岩崎) このあたり少し見て来る。

(男性) いま藤原さんが帰って来た。

(藤原) 社屋の回りを見て来た。駐車場の先にガソリスタンドがあるが、高さが5～6メートルの塀が斜めに傾いていた。その前にある家の5～6メートルあるブロック塀が半分以上崩れ落ちている状態。みなさんは毛布など、寝間着姿で道路に出てひと所に集まっている。

(男性) ブロックとか塀の近くにいるのは危険なようだ。いままた余震で揺れ出した。

(藤原) 外はまだまだ暗い状態。足元にたくさんガラスとかコンクリート塀とかが落ちている。どうぞ足元を十分に確認しながらゆっくりとあるいてほしい。

(男性) 火事などの発生は見なかったか。

(藤原) AM神戸の前の歩道橋から見ると神戸市内を見ると、長田区のあたりがすこし赤くなっている。いま情報が入った。水道筋で民家が倒壊しているという。ブロック

とか倒れやすいものの前には立たないように。

（岩崎）なるべく広い場所に移ってください。足元を確認しながら広い場所に移ってください。現在、地下鉄も環状線も新幹線もすべて、大阪の地下鉄、環状線、新幹線、すべてがとまっている。まもなく明かりも消えようとしている状況。

（谷）自家発電で発電していますがまもなく消えようとしている。

（岩崎）駅員からの情報が入った。今朝の夜明けの時間が7時5分という。外は砂煙、砂埃、土埃の臭いがたちこめており、視界が悪くて。

（谷）今朝5時46分ごろ、近畿地方中心に大きな地震があった。能崎まゆみさんが「おはよう朝一番」の放送中に起きた地震だった。

（能崎）スタジオの中において原稿の整理をして話終えたところだった。はじめ座っていたら軽い揺れがあった。すぐ終わると思ったらだんだん揺れが大きくなって、座っていることが出来ないほどの状態だった。

（谷）僕はちょうど放送の準備の最中で新聞など読んでいた。ちょうどテーブルで新聞を広げて読んでいたら横揺れが始まった。ちょうど立っていた時で、身体が揺れて、「地震かな」と思うまもなく、激しい横揺れになったので、とにかく前にあったテーブルの下に潜り込んだ。両手で四つん這いになって身体を支えていられない、じっと出来ない状態が、どのくらい続いただろう、ものすごく長い時間を感じた。

（能崎）かなり長く感じた。

（谷）1分前後の揺れがあったのではないだろうか、とにかく初めてこんな大きな地震を経験したものだから。

（能崎）わたしも生まれて初めて。

（谷）何をしたらいいかわからなかったので、テーブルの下にいた。その間にも大きな音がドドードー、物が倒れてくる音がとして、土埃がいっぱい舞って「大丈夫か、みなさん、けがはないか」と声を出して、とにかく屋内も社屋も、電気が停電で一時消え、一時途絶えた。

（能崎）放送も全部切れてしまった。

（谷）でも、ラジオ関西の中は比較的スムーズに電気だけは回復した。そして見回したら、壁は落ちているは、ガラスはこわれているは、ロッカーは倒れているは、電話もそのへんに散乱、ということで放送も中断になってしまった。

（能崎）いつも真っ直ぐ並んでいる机がグシャグシャになって。

（谷）斜めになってしまった。

（能崎）このスタジオは比較的大丈夫だったが、ほかのスタジオの前を通るとかなり厚さがあるガラスが、1センチぐらいあるような。

（谷）ガラスにひびが入って割れていた。これが廊下に散乱していた。しばらくして余震が来た。すぐにもう一度大きな揺れが来た。その時はスタッフの一部は電話で情報集めに入った。余震が始まった時は安全なのはスタジオではないかと。スタッフの主なメンバーはこのスタジオに入って来たわけだ。余震が終わった時、スタジオの中に、建物の中にいるのと外に出るのとどちらが安全か判断がつかない。

（能崎）あの時は、どうしていいのか、何をしたいのか、わからない状態で。

(谷) ラジオのスタッフは火の元・ガスを点検した後、いったん外に出た。あれが6時前ぐらいだろうか。もう付近の地元の住民の方々も懐中電灯を手に着の身着のまま、毛布にくるまって外に出てきた。近くの崩れかけたマンションの中から「助けてくれ」という声も聞こえてきた。しかし回りが真っ暗で、どこから脱出していいのか状況がわからない。マンションの近くのブロック壁もヒビが入り倒れている。その後、我々はスタジオに帰って来たら放送が出来る状態になっていたということで、放送をいま続けている。とにかく詳しい情報が入り次第伝えます。AM神戸、情報を収集してもらいたいと思う。

(能崎) AM神戸の壁は厚さが10センチあるが、これが崩れてしまった。崩れなかったところも全部ヒビが入ってしまった。

(谷) 震源地は淡路の北端部、いま工事をしている明石海峡の海峡大橋付近ではないかと言われている。このあたりが一番揺れがきつかったように思われる。地震情報が入った。6時18分、気象庁地震火山部発表の情報。きょう午前5時46分ごろ地震があり、震源地は淡路島、震源の深さは20キロ、地震の規模はマグニチュード7.2と推定されている。各地の震度は次の通り。震度6の烈震が神戸、震度5の強震が京都、彦根、豊岡。震度4の中震は岐阜、四日市、上野、福井、敦賀、和歌山、姫路、舞鶴、大阪、高松、岡山、徳島、津山、多度津、鳥取、福山、高知、境、呉、奈良。震度3の弱震が山口、萩、尾鷲、富山、飯田、諏訪、金沢、潮岬、松江、室戸岬、松山、広島、輪島、名古屋、震度2の軽震は大分、佐賀、三島、浜松、高山、河口湖、宇和島。以上のようになっている。いまもまた余震が感じられる。

(能崎) 余震が続いている。女性スタッフからだだが、家の中で倒れている物を見る限り東西の揺れが大きかったようだ。東側と西側の物が倒れている。南北に揺れるよりも東側の壁、西側の壁に立てかけてあった物が倒れかかっている。被害が出ているところが多いと」いう。これらは神戸市北区からの情報だった。(交通情報)

(6時45分)

(この後、午前7時前に、神戸市長田区日吉町から、ラジオカーの現地レポート第一回が入る。(略)

(7時18分)

(スタジオから、神戸市長田、兵庫区内での家屋の損壊や地割れなどについて報告が続く)

(7時21分)

(ラジオカーで長田区方面へ出かけた三枝記者とつながる)

(三枝) はいはい、聞こえますか？私はすこし移動して、長田区若松町11丁目の火事現場の目の前にきている。時折、小さな爆発が起きて、10丁目あたりから、順に西へ大きく広がっており、私のすぐ目の前、およそ200メートルぐらいが全部火に包まれている。ただ、消防車は、まったく一台も来ていない。火災です。大火災の状況です。このままいくと、あたりが倒壊した家屋、木造家屋ばかりなので、延焼が避けられない状況だ。

(7時26分)

(このあと、三枝記者は、目の前で、家の下敷きになった息子を延焼の炎の中に残して見殺しにせざるをえなかった住民のインタビューを現場中継)

(三枝) それからすぐ近くにこちらの住民の方で、手に大けがをされているかたがいるが、これどうしてけがされたんですか？

(住民) ガラスで。

(三枝) ガラスが割れて？ けがはそれだけ？

(住民) 手だけやね

(三枝) そうですね。この火事はいつ頃から出た？

(住民) これ、どんなんやろ。地震が揺れだして間なしやからもう、ちょうど10丁目のその角の家から2軒目のその裏の裏から新しいけど、そこら近辺から火の手が上がって、私の家は全焼してしもたけど。

(三枝) 全焼したんですか？ どちらへんですか？

(住民) 10丁目だ。

(三枝) 10丁目ですか。で、家族の方は？

(住民) 息子が一人、もう死んでと思うね。下敷きになって、出されなかった。

(三枝) 息子さん？ 何歳？

(住民) 38歳か。

(三枝) まだ安否がわからない？

(住民) もう焼けたから、もう死んだと思いますわ。もうちょっとね、足が出てるんやけど、あとがでなかった。それに。

(三枝) お父さんは足までつかんで息子さんを引っぱり出そうとしたけれど、なにかの下敷きになったんですか。

(住民) そうそう、その内に火が来たもんやから。

(住民) 目の前で見殺しですわ。だから、この火事さえなければ助かったんやけど。

(三枝) そうですね。とにかく、なんとも表現の出来ない状況が目あたりです。すぐ10メートル先で火は燃えさかっているの、このままていくと、長田の若松町は、きわめて大変な状況になるのではないと思われる。まだきわめて悲惨な状況になると思われる。

(スタジオ) いま入った情報。若松10丁目から11丁目まで燃え広がっているという。このラジオ関西の東側でも何本かの火の手が上がっているのが確認出来る。神戸市兵庫区会下山町あたりもかなり古い民家が軒を連ねているが、このあたりもかなりの家屋が倒壊。来る途中、阪神高速で橋脚の部分のコンクリートがかなりはがれ、中の鉄筋がむき出しになっている。水があふれ出たり、地割れしている、あるいは道路封鎖されているところがある。消防車を見かけない。長田商店街でも火災が発生しているが、まったく見ているだけ、ただ啞然とする状況。

(午前8時10分)

阪神高速神戸伊の橋脚のコンクリート柱が大きく損壊している。(この時点では、東灘区の阪神高速高架が倒壊した情報はまだ入っていない)

1995年阪神・淡路大震災調査報告 - 1 -

発行所	東京大学社会情報研究所
印 刷	平成8年3月18日
発 行	平成8年3月25日
印刷所	三鈴印刷株式会社
